漱石全集
第十七巻

日記及斷片

下巻

日記の端に描かれたるスケッチの一つ

（大正四年十一月湯河原にて）

目次

日記

——明治四十二年九月一日より十月十七日まで——

九月一日二百十[原] 晴風强し。晩に風やむ。雲と月。あすは雨。果して晝から降る。物集御孃さん來る。ホロをあけて出づ。大した事なし、萩の花。湯に入る。森田來る。箱根にて日暮る

○二日夜 汽車中。音烈敷不寐。ボイ寢臺車[原]を作る。京都にて起出づ。天次第に晴る。七時大坂[原]商船待合所に入る。一寸散步。九時小蒸汽にて鐵嶺丸に乘り込む。

商船會社の大河内氏サルーンに案内、烟草、菓子、及び飲料を給せらる。同社の伊庭氏今井文學士の友也。堀の内にて逢へる由。忘れたり。事務長は山形の人色々談話す。余の書物を讀んだ由。滿洲航路が朝鮮航路程に繁榮すればよいと云ふ。此航路に用ふるは皆特別の目的を有する新造船なり。鐵嶺丸の姉妹船開城丸同港にあり。美麗也。

天候佳良。

總裁と一所に行く由を聞いたと三人ながら云ふ。

浪鈍。天鈍。サルーンから出て左舷に出づ。營口丸が烟を吐いて行く。鐵嶺丸漸々近づく。營口丸拔かれまいと思つてわが進路を妨害す。われ同速力で進む。船と船と漸々接近遂につき當る。鐵嶺摺り拔ける時ボートがでんぐり返つて再び落ち來る。長い木が二本折れる。

八時過ボーイ湯を立てゝくれる。船室に返(原)つて寐る。眼が醒めたら十二時過であつた。甲板に出たら暗い所を船丈音を立てゝ通つてゐた。時々北の方で稲妻がさす。其時向ふ側の山が瞬間にはつきり見えた。左舷に出たら十八日の月が高くかゝつて居た。波が少し光つて見えた。マストの上にランターンが淋しくかゝつてゐた。

五時過下等船客の下甲板で騒ぐ音で眼が覺めた。暗い室なのでボイが蠟燭をつけてくれた。髭をそる。船中に二十を少し越えた英國人あり。ブルドツグを引張つて甲板をあるく。それから椅子にしばりつけて置く。

七時過門司着。雨。霏々として降る。石炭を積み込む。

船長に逢ふ。昨日の營口丸との接觸の話をする。營口丸は先へ立つて始終人の航路の妨をしてゐた。此方が追ひ越さうとするとき、すこし舳を開いて吳れゝば譯はなかつたのである。此方は右にも左にも避けられない地位にあつた。是から海事局へ屆けに行く。故意の仕業とすれば重大な事になる云々。

玄海に出る。

夫婦つれの西洋人釜山に行くと云つて去る。クツク社の肥つた男と、英吉利の副領事(犬をつれて)が殘つてゐる。此男は甲板で犬を抱いて寐てゐる。夫から米國の宣敎師が夫婦ゐる。

鐵嶺丸の費用

四十五萬圓。是より上の船では算盤が持てぬ。

一航海八千圓あがらなくては駄目

夕暮對島を見る。夜半玄海を拔けると云ふ。

終日默[原]雲漂ふ。夜に入つて暗し。
部屋を代ふ。
九時入浴。

五日朝　左舷に島嶼[原]を認む。運轉士に問へば太郎島と云ふ。是から朝鮮群島の中へ入るらし。
朝鮮群島の景色は内海と同じなり。島の形色々なり。又其數澤山なり。中々盡きず七時頃より十時に至つてまだ盡きず。岩山に木の付着したるもの
運動甲板には稍寒の風が吹いて善い心持であるが、しばらくすると身體に答[原]へ過ぎる樣になつたので船室に入つて長椅子の上で寐た。十二時十五分前に眼がさめる。甲板に出ると船は鏡の中を行く樣である。群島は依然として左右に羅列してゐる。算へて見たら眼に入るものは凡てゞ五十三あつた。
船長に先刻の船は何時追ひ越しましたかと聞いたらそらあの艫に見えますと云つた。長い島の前をどす黒く烟を吐いて展望を濁しつゝやつてくる。
二時七發島の燈臺を左に見る。是が群島の終りと云ふ。ポンプの練習にて上ががたがた云ふ。火事かと思つて驚ろく。
今日正午の寒暖計七十三度
船大海に入る。水平線と雲の界が判然としてゐる。黒い輪の樣である。空は鈍く曇つてゐる。
夕方になつて日出づ　西の方が斜めに線をひきたる如く飴色になる。其上の雲が襞を疊める如く悉く飴色になる
甲板で船長と談話す。船長曰く是が last voyage なり。瀬戸内の水先案内の試驗を受ける積で東洋汽

船を辭したる所、試驗なき故一時此船にのる。十月に試驗がある故それを受くる積りなりと、南米の航海の話をす。スペインの美人の話をする。亞米利加がよひの時一等運轉手(原)として table に着いたものは自分一人なり。其時歐洲婦人が自分の顏を見てすぐ席を立つて黄色人の隣へ坐るのはやだと云つた事が二遍ある。日本人でもそんな奴があつた。こんな平穩な航海は少ない。

晩餐の席上で前に坐る西洋婦人しきりに耶蘇教の話をし出す。迷惑千萬なり。

食後事務長並びに他の日本乘船客と十時迄談話夫より入浴

六日　朝眼が醒めるとバースから窓の中にジャンクの浮いてゐるのが見える。海はよく晴れて日が照つてゐた。給仕曰くもう少し行く〔と〕一頭角が見えますと。

五時頃大連着。

大きな烟突が見える。檢疫が見える。混雜。佐治氏周旋。ヤマトホテルの馬車に乘る。中村の家に行く妻君病氣。沼田氏來つて色々話す。中村歸らず。ヤマトホテルに行く。入浴　中村來る。後で家に來いといふ。行く。國澤氏を呼ぶ。一所に俱樂部に行く。ジンコーク何とかいふものを飲む。歸る十二時。國澤氏旅館迄送らる。

七日

大連

中央試驗所。

豆油　精製　cooking purpose。olive oil ノ九分ノ一。動物製と同じく digestible。石鹼　鹽水に溶解。

柞蠶。精製絲。絹の半分。
Lottery。　高粱酒。

電氣公園
西公園。射撃場。税關。
南滿鐵道會社。午餐。
河村氏に就き滿鐵事業質問。今夜舞踏會にて食堂を装飾中。雨ふる。車を雇ふて歸る。俣野義郎送り來る。腹工合惡く。談話に困却。ソーファーの上に寐る。醒むれば雨霽る。寐[原]室に食事を取り寄せる。浴を命ず。須田綱雄氏來つて晩食を共にせんと申出でらる。乍殘念謝絶。中村より電話今夜の舞踏會に出席するや否やを問ひ合せ來る。

八日　晴空。立花氏來訪。俣野來。
夜。滿鐵の重役松木、橋本を扇芳亭に呼ぶ余にも來いといふ。胃惡し。謝絶。中村より電話話しに來いと云ふ。八時過行く。法螺を吹く。十二時歸る。
此日午前俣野に連れられて諸方へ見物に行く。
九日　晴。民政所[原]より電話。旅順へ何時來るかと云ふ。
朝食の後讀書室にて橋本氏と談話
十二時散歩。一時午餐。俣野と出づ

従事員養成所。二組の生徒英語支那語。製圖。火夫、車掌。別に支那人の電信技手。（卒業日給四十錢）
バケモノ屋敷。荒涼たり。夫より以上の寄宿舍。清潔。俣野の二階 comfortable
勸工場。古道具屋。町の景色。
扇芳亭。下等料理茶屋。
俣野の家に至る。村井啓太郎氏と三人にて會食。夫より中村方に至り晩餐。田中理事。橋本左五郎。犬を見る。十一時歸る。
パスを貰ふ。

十日　八時半旅順に向ふ。畠。高粱。粟。蕎麥。赤い濁水の澤。中に唐玉黍の蘆の如きあり。部落は二三　樹木の間に石垣。畫趣。山の景色。墓地。大なるは公牧場。
昨夜是公から始めて大連に來た時の事を聞く。殘燒家屋ばかり。今の化物屋敷に陣取る。厠に行く寒さ。
田中君瀛[原]車に乘る。貨車 lantern 搖れて火が消える。外套を着てすくまる。窒息して病人が出る（炭火）。
平野水が二三滴しか飲めず。清野理事シャツを半ダース着る

臭水子。　夏[原]河河子。（海水浴場）
（停車場）營城子
畠に道なし。車の通るを恐れて溝をほる。或は土を盛る。其土を往來から取つてくる。

茫漠たる田畠　どこから耕作にくるか分らず

支那人の二食　十時。七晩。上下の別なし。四人前が一 Set。

和氣生財。和氣致祥。　我有嘉賓
名馳塞北、味壓江南　堆金積玉
客逢孺子休懸榻　發福生財
門到薛公且進餐

十時旅順着。白仁長官馬車を停車場に迎によこす。渡邊祕書と同乘。大和ホテル着。夫から民政署に至り白仁氏に面會。佐藤友熊氏に面會。歸る。小木貞氏大和ホテルに來る。

新市街は廢墟の感あり。宿の前にて蟲しきりに鳴く。港は暗綠にて鏡の如し。古戰場の山を望む。

岡の上に半工事の家處々に立つ。草が立派に切り開いた道の pavement の上に立つ。森閑たり。

旅順の記念碑を汽車中より望む。二百何尺の高さなり。此二十三日に東鄕大將來る。港の入口三百何メートル

午餐。佐藤氏同行戰利品品陳列場。もとの病院。壁の穴。屋根の穴

火矢。土囊。Search light。一人で一齊射擊。鐵條網。手投彈。魚形水雷。壕を渡る時の梯子電柱。

高鷄冠山北砲臺。外壕

外岸側防穹孔

三十七年　サン砲

對溝（九月二日より十月二十一日）。窖道。反對窖道。十月二十七日爆發。十月三十日。外壕へ出る。
機關砲で打たれる。窖道を堀一日四十五サンチが一番也。
窖内の談話　死體の收容。酒の有無。
手投彈を投げる奴が窖内に死んだ人間に火がつく。此下に下[原]骸あり。

砲臺に上る。
二百三高地　　二龍山砲臺
椅子山　　萬龍山新萬龍山西砲臺
ナマコ山　　北砲臺、萬龍山東砲臺
高崎山
松樹山
大古山、小古山
クロパトキン

先づ前山一帶の高地を專領（八月）。
夜民政署長ホテルに招待。署の高等官列席、伊藤、松木兩氏出席。十時頃散會。
十一日　晴。八時二百三メートル。river bed、野菊、brick house 所々。日廻り草。アカシア。浣衣

の衣。アタマの光。耳輪。驢を驅りて地ならし。
百七十四メートルの方激。味方の砲彈でやられる　其意味。鶉飛ぶ。墓。火打石。

坊[原]禦三層。機關砲五六門。ボロに石油を包ンデ投げる。油色。火矢のあと。雙島灣
第一線の苦痛。糧食の夜送。雨。水の中にしやがむ。唇の色なし。ぶる／＼振ふ。馬がづぶ／＼這入る。
六月より十二月迄外に寐る。人間狀態にあらず犬馬也。血だらけ
白玉山。納骨堂。迂曲して登る。

午後海軍港務部に至り海軍中佐河野左金太氏の案內にて港灣のうちを小蒸汽にて乘り廻す。港內港外に
沈沒したる船を引揚中（請負師の不都合）今年十一月迄に完結の積り。
廣瀨中佐の乘つた所。防材の標本。
引揚方は一〇〇キロ位な爆發薬にて船體を section に切り六インチの wire にて結び。六百噸のブイアンシーのある船に水を入れて重くし、其上緩[原]潮に乘じて作事。夫から滿潮と唧筒の力にて上にあげる。
器械水雷の數は此邊に三千許りある。まだいくらでも殘つてゐる。危險。密獵をやる奴が知つてゐるが敎へないのもある。
作業の危險　時々爆發の機をあやまりて死す。又は惡い潛水器の爲に水の壓力に堪えず死ぬ事あり。水中にて水雷爆發の爲に死んだ事もあり。
露西亞の戰利品ブイ錨などが陳んでゐる。あれで約三十萬圓。撈氷船二艘。

佐藤友熊の家に行く。子供に逢ふ明日の朝食の案内

晩に田中理事の招待にて近所の日本料理店にすき燒を食ひに行く。荒凉たる露西亞の半立の家の中に暗闇な道路を行いて草茫々たる空地を横切れば一軒の西洋軒に火を點じて客を迎ふ。中は新らしく疊を敷きあり。酌婦が四人出て來る。

九月十二日　民政長官告別　立派なる邸宅。古加皮酒を飲む。友熊訪問。鶉の御馳走。田中、橋本。

手を分つ古き都や鶉泣く

十一時二十分發一時大連に着く。田中理事の宅に來いと云ふ。行つて library を見る。Steevens の folio の Shakespeare にて Sir Robert Peel の署名あるものを見る其他 edition de luxe 多し。二時半頃ホテルに歸る。相生氏の方より櫻木來る。俣野も同行。埠頭へ來て演說しろといふ。腹痛。入浴。六時頃飯を食はして貰つて出る。事務員養成所へ行つて講話をやる。七時過より八時過一時間餘やる。中村、田中、國澤、の諸君傍聽。歸りに中村方へ行く。田中國澤同席。犬塚を呼ぶ。橋本後れて至る。十二時歸る。

貴樣おれの通辯にならんか。橋本に牧畜をやる望があるならやれ。

明朝七十五十分の汽車で立つ所を明後日の急行にのばす。金が不足したら借りる約束をする。橋本にプログラムを作つて貰ふ。

九月十三日　晴。朝相生氏櫻木氏と至る。今夜埠頭の hall にて講演を承諾す。橋本も承諾。其前總裁

から電話がかゝる。今日出立かと聞く。夕十二時頃迄話して來たからいつ立つか分つてゐる筈だと云つたらボイが又復命して奥さんが聞くんだと云ふ。夕べ中村は妻君におれの事を話さなかつたと見える。或は夫から田中と一所にあれからどこかへ飲みに行つたのかも知れない。

正金にて爲替受取。散歩歸る。腹痛む。立花政樹と今井逢雄來り晝食を食ふ。三時過中村是公來る。俣野義郎至る。是公馬の話を橋本とする。自分の馬に乘つて見ろと云ふ。二人して馬場に行く。余は途中から腹が痛くて引き返す。櫻木氏演說の迎にくる。馬車で相生氏方に至る　是公に逢ふ。天草丸がつく迄こゝに來て居たのなり是公去る。晩餐。直ちに講堂に赴く。橋本君先づ辯ず。余も一時間程嘵舌る。一時間餘。馬車でホテルに歸る。途に是公を訪ふ。不在。

十四日朝ホテルの勘定を拂はんとするに不用と云ふ。是公の家にて細君に別れ。社に至りて重役課長に告別田中君と共に立花を訪問停車場に至る。　express にのる。立派也。十一時發。

山の裾に乏しき蕎麥畑があつて鳩が飛んでゐた。

瓦房店

丈より高き高粱を刈る。水牛の如き豚の如き動物。

牛、河を渡る。高粱を五六頭に引かせて行く

草山に牛馬を飼ふ。仰ぎ見ると、馬が空に見える。

三時半過熊岳城着。トロに乘つて十八町高粱の間を行く。一軒の宿屋に着く。

崖を下ると前が河になる。川は深さ一尺に足らず、五寸幅の厚板を〳〵に渡して渡る。水の幅は十間に足らず。然し河原の廣さは岸より岸へ約三町餘もあるべし。其向ふが高粱の畠なり。此沙の中に小

屋を立てゝ地を堀つたものが溫泉である。遠く左り[原]に屛風を立てた樣な連山が見える（高麗城子）。石山の上に青い草が齒[原]嚙み付いてゐる。角度が非常に急で襞が甚だ鋭ど[原]い。從つて明暗の色が鮮やかに直線で區切られてゐる。河の上流の左岸に楊柳の村があつて水を渡る人が柳の裡に隱れる。牛を追ふて牧童が渡る。犬が渡る。向ふ側に牛が點々として散在す。

夜橋本と玉を突く。生れて始めてなり。寐る。雨が降り出す。

朝湯に入る熱甚し。風呂にて鐵嶺丸の乘客に逢ふ。營口よりの歸りだと云ふ。主婦記念帖を出して賴りに字を求む。小雨晴れず。松山より梨島に行かんとすれど雨具の用意なかりし故やめ。橋本と今一人苗圃の主人（橋本の舊生徒）と通[原]譯として出立す。

鮎が此川上で取れる由。

細雨の河原を濕ほす樣。遠山の濡れる樣子、秋の川を馬の渡る具合。柳の雨を受けたる所。黍畑の穗の色濃く着いたる模樣。

雨漸く晴る。電話かゝりて今から松山に行かぬかと云ふ。停車場迄行く。トロ來らず。いやになつて歸らんとす。保線より電話かゝりて松山より今トロが出たと云ふ。しばらくしてからトロ來る。器械トロで頗る早し。

松山は平たい勾配の緩き山なり。一面に芝が生えて所々に岩が出てゐる。岩には苔が一面に生えてゐる。松の大きさは約三四十年のもの許り也。上に關帝廟あり。土塀の門を這入ると梭の音がする。老翁が麻を織つてゐた。年が七十だと云ふ。松山の下に梨島がある。木の數は二千本といふ。全然林檎也。松山の上から渤海灣が見える。

望小山と云ふ。[原] 裸山がある。上に塔が刻んである。トロの早さ。砲臺に蛇のゐるといふ話。
韓文の家を見る。坭の塀の角に を作る。赤い旗がちら〱見える。丸で玩具也。右の方の門内に
馬が草を食ふ。觀音開き。石甃
來がけに停車場へ來た時から腹が痛んだ。歸りも苦しかつた。再びトロに乘つて停車場に來た時は益苦しかつた。午飯をまだ食はず。三時着。大石橋への汽車は四時二十分也。是から輕便トロに乘つて二十分ばかりで宿に歸つて飯を食ふとすれば時間足らず已を得ず延ばす。夜は九時頃寐る。

十六日　朝天氣。直ちに風呂に入る。宿の風呂は熱し。次の風呂に入る。混浴なり。滿洲の空の美しき事。牛群れて河を渡る。電話の柱に柳の木あり。夫から葉がさす。朝貌が一面に生えてゐる。
午後四時二十分の汽車で立[原]出營口に向ふ。昨夜十一時に就[原]いた客が營口の娼園舘から藝妓二名を呼ぶ。駄辯を弄する事甚だし。客は滿洲鐵道の役員らし。元治元年生れの女をやつた事なし。書生の時はあるでせう抔といふ。
羽鵲。野菊。玉蜀黍を屋根に干す。屋根黄に見える。
支那の田園平均一人が二町を耕す割。
高粱の利川。穀は屋根。壁。薪。アンペラ。笠。
守備隊。交換。馬、車、其他悉く持ち還る。
公學堂。鐵道に必要なる智識を授く。三十二名。八歳以上十六歳以下
右は蓋平の話

蓋平と次の停車場の間鹽多くして畠作れず。山羊の群を見る。

大石橋にて下車營口行は五十分待ち合す。食堂に入る。立派なり。

（夕暮の空赤き所に黒く高く續きたる塀の樣なものが見える。其上を人が馳けて行くよく見ると電柱の頭が出てゐるのであつた。）

夜八時過營口着。清林舘の馬車にて宿につく二十分許かゝる。夜茫漠として廣き道路を行く。清林舘は洋式なれど内部は純然たる日本式也。奇麗な室で奇麗な器物で甚だ快し。湯に入る支那人が脊中を流す。停車場に正金銀行支店中[原]杉原氏及び甘[原]糟氏と橋本の蒙古へ連れて行つた二人出迎ふ。

十七日　朝橋本杉本氏等小寺牧場に行く余は市街を見る。主人が馬車で案内をする。支那町は臭し。看板に金字にて中には大變高きがあり。千圓位費やす由。Ferry boat にて[原]遼河を横ぎる。濁流際限なし。サンパンの帆。三千噸位の船は自由に入る。歸りにはサンパンに乘る。防岸工事。葭を使ふ。結氷の方浚渫出來る。大倉組の豆粕會社を訪ふ。營口、大連の豆荷は大した差違なし。倉田氏に逢ふ。屋根に上りて營口を見る。支那家屋の屋根は往來の如し。回々教の寺だと云ふ。赤く塗つた塔の如きもの見ゆ。牛島氏芝居を見ろと云つて連れて行く。未だ開場でない。Stall は table 椅子。棧敷は　隨分廣し。舞臺は前へ突[原]き出場[原]してゐる。登場、下場の二口あり。芝居の後ろへ牛島君が出ていや女郎屋だと云つて却[原]つてくる。煉[原]瓦の低い長屋の如きもの横斷面が往來に面してゐる。其長屋の兩方の間を這入ると左右が房になつてゐる。其中の一人がまあ御掛けなさいと云つた。夫から本當の女郎町を見る。町の入口は竝[原]んでゐる家は大抵前と同然也。這入つて左の門を這入ると。右に房が三つある。一番は幕が低れてゐる。二番に

は女が三人寐てゐた。其眞中の一人は美くしかつた。小さい足を前へ出して半分倚りかゝつてゐた。其隣の室から絃歌の聲が出る。覗いて見た時に恐くなつた。正面に table があつて、其右に眞黒な大きな顔の支那人が一生懸命を聲を出して拍子木の様なものを左へ持ち右に噬竹の様なものを一本持つて table をたゝく。table の前に十四五の女が立つて歌つてゐる。盲目だか何［だか］異様の面をした奴が懸命に胡弓を摺つてゐた。table の左方には女が三人竝んでゐた。其部屋の前の部屋では眞中に卓を置いて汚い丼を置いて二三人食つてゐる。何事か分らず。

先刻から腹痛十二時半に杉原氏へ行く約束があるのを斷はる。宿へ歸つて寐る。三時頃杉原氏橋本と來る。約束故支度をして倶樂部へ行つて演話をする。くらぶ軍政時代に造りたるもの比較的立派なり。約一時間の後宿に歸りて又寐る。橋本五時過歸る。すぐ立つ。杉原、天春、領事代理送らる。淸林館は甚だ叮嚀親切にて設備の行き屆きたる宿也。夜九時湯崗子着。氣分惡く仕方なし。寂寞たる原野のうちに一點の燈光を認む。是が金湯ホテルである。

蟲聲喞々の間を行く。着。西洋舘なり。裸かの床の上を行く廣間に椅子がある。bar の如き茶や何かを作る處がある。夫を通り越すと左右が部屋である。部屋は一尺許り高い其處へ草履を脱いであがる。余等の部屋は二室より成る。一室には絨氈、table ソファー、椅子あつて、floor と同じ高さなり。一部は一尺許かりの楷段ありて夫れを上ると疊が敷いてある。壁は白く所々汚れたり。夜具眞紅の支那緞子。湯に入る提灯をつけて下女が案内をする。暗い中を一町程行くと別舘があつてある。湯壺は三つある。段を二三尺下りて石でたゝき上げたるものの少し熱し。心持あしき故飯を食はず葛湯を飲んで寐る。便通大いに心地よし。

朝。千山行を見合せて靜養す。橋本以下騾馬を驅り行く。馬驚ろいて乘せず。目隱しをする。漸くのる。鐵砲を肩にさげた支那人が二人立つて見てゐる。滿目蕭々遠い山と近き岡を除いては高粱の渺々として連なるのみしかも宿の周圍は一面の平野なり。三頭の馬を此平野のうちを行くうちに段々高粱の間に隱れた。銃を持つた支那人もまた高粱の間に隱れた。宿のもの曰く乘るときと下りる時は屹度目を隱すがいゝ。危險だからと。

池あり。湯也。此邊に水なし。池の湯に魚あり。奇妙な所なり。

ゆるい草山に馬が點々ゐる。靜。室の周圍に蟲の聲夥し。

午飯より四時頃迄室中閑坐靜甚し。入浴。晩餐に鷄のすき燒を命ず。夜に入る。下女報じて曰く今支那人を提灯をつけて迎に出しました。少時又來り報じて曰く灯が見えます。屋後に出て見ると星の如き光が暗い中に搖れて來た。八時頃橋本等歸る。

十九日　快晴。八時半起床。入浴。甚だ愉快。十一時發奉天に向ふ。草山の頂より岩ザク〳〵出づるあり。高粱百里皆色づく。所々に矮樹あり。豆畠漸く繁し。

(昨日の話。染付模樣をきた海老茶の袴をはいた履を穿いた女がやつてきた。ちと入らつしやい、私だけですからと云ふ聲が聞えた。窓をあけたら曠野の中を黑い影が見えた。何處へ行くにや)

三時奉天着。滿鐵の附屬地に赤煉瓦の構造所々に見ゆ。立派なれども未だ點々の感を免かれず。瀋陽館の馬車にて行くに電鐵の軌道を通る。道廣けれど塵埃甚し。左右は茫々たり。漸くにして町に入る。(其前にラマ塔を見る)。瀋陽館迄二十分かゝる。電話にて佐藤肋骨の都合を聞き合す。よろしと云ふ。直ちに行く。城門を入る。大なるものなり。十五分許にして滿鐵公所に着。門は純然たる日本式次の門は純支

那式。三和土の土[原]を眞直に行くと正房、右は[原]廂房は洋式。左の廂房は支那式[原]は正房のすぐ左りは純日本式也。應接間にて暫時滯留。堀三之助氏に逢ふ。晩食の招待あり。旅宿に歸りて入浴直ちに再赴。七時半。玉突場にて島竹次郎氏に逢ふ。橋本と島氏と玉を突く。食堂にて正餐の饗應あり。應接間にて俳句やら俳人やらの談話あり。十時辭して歸る。

北陵。獅の首、龜の甲、高さ四首[原]、五尺。脊に石碑あり。幅六尺厚二尺。隆恩門。アーチ。其上三層。アーチの上厚壁。四方共壁高さ二丈五尺位。四隅に樓閣あり。正面に殿。左右にも殿。屋根の瓦藥付、茶。玉子色。赤。紅。下は總石。正面の石階左右は段々中央は龍刻大官は其上を通る。隆恩殿。欄干。それに菊生ゆ。

昭陵。太宗文皇帝の陵。滿洲。蒙古。彫石。着色。剝落

石壁の上幅二間半。昭陵の後ろ ⌓ 形。傳つて歩すべし。長さ百六十歩。

三層閣に上る。鳩の糞。下に屋根の野菊を見る。砲彈の迹

正門の前の左に元の儘の場所あり。剝落殆んど粉色を認めがたし。屋根に茨松生ず。

昨夜肋骨蒙古人の家をとく。パノラマの上に傘を伏せたるもの。柳の枝を編みて上にフエルトを蔽ひ。ひもを引けばフエルトが明いて烟が出る。五德の長いものゝなかに馬糞をつめて焚く。蒙古人の馬を御する事。アブミの上に立つて馬を走らす。車を驅る方法。馬を換える方法。

角田氏の農事試驗場の話。土地乾き、有機物少なく。春風吹きすさみて駄目。

午後二時より宮殿拜觀。寶物拜觀。眞珠で龍の鱗をつゞりたる衣服。ダイヤモンドの束の刀。玉の束に珊瑚の珠のぶら下がりたる刀。眞珠入りの甲。金の玉璽。車のついた花瓶等。

次に芝居を看る。左右の入口に入相出將とかいて中央に錦襴の幕を張る。六七人卓を圍む。外國人日本人の婦人等。琵琶をひき歌をうたふ。

二十一日　昨夜和田維四郎一行七八人着隨分な話で持ち切る。騷擾。朝五時瓜い所を起さる。六時撫順に向け出發。九時二十分着。家屋所々に建設中。芝居。病院。學校。其他悉く鍊瓦にて且つ立派なる建築也。

大山坑七百六十尺。九百尺（徑二十一尺）　Cas-works。發電所 2200 v. 11° water-works。タンク。鍊瓦製造。一昨年四月より。一年は殆んど建築。

鍊瓦の構造殆んど variety ありて皆風雅也。太田技師の設計にかゝる。

石炭は夏は營口。冬は大連然し冬は大連も豆が大事也。故に港の必用を感ず。多くの石炭貯藏するのは大變也。

五時の汽車で八時頃奉天着。支那人の食堂にて夕食。露西亞人多し。博堵をやつてゐる奴あり。寢臺車に入る。足りるとか足りぬとかにて大騷ぎなり。ボィがまぐれ當りに下列の向き合つたのを二つ見出してくれる。カーテンを立て切ると暑い。

寐てゐると、四時ですと云つて起しにくる。顔を洗ふ。汽車とまる。向ふ側に露西亞の列車が待つてる

る。又部屋があるとかないとかで大混雑なり。長春の驛長が部屋を取つて置いてくれる（和田維四郎一行と余等の爲に二室つゞき。一等は二三人宛別々なり）。驛長切符を買つてくれる。停車場内の兩換屋曰く露西亞の奴は用心せぬと危險だ。針金で首をしめて連れて行く。此年の四月兩換をしまつて歸る時七八人にやられて斬られた。

プラットフォームにて英人が部屋がないとて怒鳴つてゐる。That is all right. This is abominable 何とか云ふてゐる。

生憎の北京からの連絡日にて乘客雜沓せり。

長春左程寒からず。二十二日也。

九時二十分停留の停車場につく。稍寒の感あり。飲食店に入れば旅客爭つて物を食ふ。ソップを皿に注いで自分で食つてゐる奴あり。

十時過松花江口を通る。大砲を備ふ。渡江沿岸沮洳の地、風光好。

露助の油揚のパンを食ふ。中に米の入りたるものと、肉の入りたるものと、カベツの入りたるものとの三種あり。

汽車中よりハルビンを望む。洋屋層々として規模宏壯に見ゆ。停車場につく。夏秋氏。長春の藤井氏の斡旋にて東洋館につく。つまらぬ宿也。夏秋氏來りて紹介を受く。馬車にて市中を見物せんとするに夏秋氏序に案內せんと云ふ。市街を通りて大きな店に入る。二階にて外套を買ふ。二十二圓なり。腕の長さを詰め脊を少し直す。一時間の後旅宿へ屆ける約束す。夫から公園に行く。奥に芝居をやり、舞踏をやり。酒を呑む場所あり。いづれも粗末なものなり。夫から松花江の石橋を見る。日露戰爭の時之を破壞せんとして成らざりしものといふ。長い橋也。夫から支那人の市街を見る。日本人の飲食［店］あり。

露助が赤い衣服を着て御者になる。馬は必ず二頭。
新市街は大分立派な家がぼつ／＼す。歸ると外套が着。自分の裏にはスペリオーテイローメードとある。
橋本には千八百六十七年十月とある。大笑ひ
相談の末翌朝立つ事に決す。

二十三日　厠に行かんとて厨に出づ冷氣也。朝の内新市街を見んとて馬車に乘る。日滿商會にて夏秋氏に禮を云ふ。東滿鐵道本社及び附屬商業學校及び參謀本部、日本領事舘（持主は戰爭の時通譯で儲けて露西亞人三人、支那人二人の妾を置くといふ）。露西亞士官の住宅。遙かに舊ハルピンを望む。停車場着。九時發。今夜六時長春着の筈。
（露助の子供學校へ行く。）
滿洲の黃土。中央亞細亞より風が吹き來る。深き處は八百尺。滦[原]河の水……渤海灣は五萬年の後埋る。
香に匂へうに堀る山の梅の花。　五平太　300　年以前。

途見の博奕取締り。

薄暮長春着。和田氏の御一行は大和ホテル。ホテル手狹の由につき三義旅舘に行く。道に同行者の車を見失ふ。支那車夫無暗に走る。ある橋の處へ行つて車を停めて何か云ふ。何にも分らず。車を引き返して來る。日本人に逢ふ。旅舘の在所を確めて行くに宿のもの〻尋ねて來るに逢ふ。
宿屋の案内で横町の湯屋へ行く。大坂[原]式なり。日本人が這入つてゐる。内地へ歸つた心持也。按摩が笛

を吹いて通る。
旅館で畫の展覽會を開いてゐる。ある畫工が旅稼ぎに來きものらし。御かみさんが來て芝居がありますから行つて御覧なさいませんかといふ。長春の景氣がわかりますといふ。

二十四日　快心の天氣。朝湯に入る。大重氏至る。藤井氏至る。兩氏の案内にて博奕場を見る。十二三ヶ所あり。大きな家のなかに幾ヶ所もある奴が一ヶ所ある。八釜しき事限りなし。歩して北門より城内に入る。隨分大きな家あり。道普請にて汚なき事夥し。墓地を發堀して餘所に移しつゝあり。大きな棺を七八人で荷つて行く。
芝居小屋二萬五千圓。道具立三千圓。華實病院。（逸見の仕事）
電話滿鐵より都督府に讓る。
電氣は滿鐵營業。（來年一二月頃）小學校（滿鐵事業）。病院も都督部に讓り渡す。
宿の神さんが何〔か〕かいてくれと云ふ。どこから聞いたものか。二帖に一つ宛と云ふ夫婦分れをした時の用心といふ。

黍行けば黍の向ふに入る日かな
草盡きて松に入りけり秋の風

午後八時昌圖で晩食。午前一時過奉天着宿屋迄は一里程ある。馬車にて支那人の鞭の音をきく。

鞭鳴らす頭の上や星月夜

翌日二十五日和田氏の一行先づ在り。未だ安東縣に向つて出發せず。大將玄關で髮結屋を呼んで髮を刈

つてゐる。

朝の内勘定をする。午領事舘に至り小池領事に逢ふ。公所に至り佐藤君に逢つて金を百圓借る。犬塚理事と其妹に逢ふ。歸舘。犬塚理事。鳥技師至る。大坂[原]朝日新聞通信員至る。

外出筆と墨壺を買ふ。七圓に三圓二十錢也。宿で支那人から絽を買ふ。三十一圓を二十九圓に負ける。日本の金で二十一二圓位のものなり。

二十六日　朝七時過安奉線に向つて出發。輕便鐵道にて非常の混雜名狀すべからず。大變な窮屈な處にて我慢す。どうする事も出來ず。しばらくして驛夫來りて別に席を拵らへるといふ。今度は非常にゆつくりす。

再び渾河を渡る。其前沼澤沮洳の地に葭葦茂るを見る。牛馬點々たり

宿で葡萄をくれる。サンドヰツチの午飯。水二本。サイダ六本

石橋子より道漸く山に入る。山に樹あり。迂回大嶺を上る。トンネルの兩側より道を作りつゝあり。山上に天幕を張つてクーリー蠅の如く休息す。始めて淸流を見る。雲山角にあらはる。山角が一寸陰になつてゐる。

火連寨着。

本溪湖。溪流あり。

孟家堡

橋頭にてとまる。孟家堡に置いて來た半分の列車を引きに返[原]る爲也。橋頭にて山を下る。四面皆山。

橋頭南攻の間山水の景色佳。水の色藍の如し。或は洋々として靜なり。山斧で襞を横にへずりたるが如

し。松あれども奇態なし。牛馬所々。鷄頭を澤山畠に植ゑたり。煮て食ふよし。

八時過小河口に着。日新舘に宿る。湯に入る。普請中にて星を望むべし。山間の小驛也。客室皆塞がる。

二十七日　快晴七時半の汽車に乘る。寐ながら山を見る。山に日が當る。さうして木が光る。宿の四方皆草木ありて不愉快なる砂土見えず。鷄鳴を聞く

草河口より通遠堡に至るの間。山の木、形、畠の具合日本に似たり。

　栗を刈る饅頭笠や

鷄冠山に來り。休息。午飯。うどん御手輕酒さかな等の暖簾あり

二時四十分鳳凰城着。一二等列車一臺買切の支那人の一家族下る。

五龍背に溫泉あり。伊藤幸次郎氏下る。溫泉場は汽車からよく見える。淸楚なり。

七時半安東縣につく。月の夜に鴨綠江を見る。狹いと思つたら廣い所は二哩ある由。車を驅りて玄陽舘に赴く。車上通る所悉く日本市街なり。是には意外の感あり。滿洲はまだ是程に發展せず。其代り家屋は皆日本流なり。

鍋燒饂飩が通る。

堀三之助氏に逢ふパスの事に就て聞き合せてくれる。

　翌二十八日朝安東縣派出所主任天谷操氏來訪昨日迄滯在の處用事にて鎭南浦へ直行せりとて名刺を渡す。舊義州へ行くなら案内をするといふ。午後の汽車で出發平壤にて多少ゆつくりする事にする。パスは上等の二週間通用のをくれるが汽車が中等しかないと云ふ。

車を驅つて絹紬を買ひに出る。今日盆だから休みだといふ。出て見ると果して大概は休んでゐる。東益增達といふ所で絹紬を二疋買ふ。十四圓。五圓。外に支那繻子。四尺三圓六十錢を買ふ。關帝の廟に上りて鴨綠江を望み納骨堂に賽錢を上げて歸る。滿鐵の官舍は歐洲式にて他は日本式。洋館迄然り。日本人の建物は粗末にて大抵トタン葺なり。人家は年々殖える。日滿戰爭のときは殆んど人家なかりし由。
始めて日本人の車に乘る。車も清潔にてクツションあり毛の厚い膝掛あり。其代り馬車なし。
十一時半午飯。小蒸汽で鴨綠江を渡る。渡頭の待合所に小城の通知なりとて新義洲の驛長出迎へらる。天谷氏も送つて舟に乘る。堀氏に渡頭で別る。對岸檢疫を受けて驛長室にて休憩。橋本氏のパス面倒にて渡らず遂に平壤迄を買ふ。余は小城よりあらかじめ長官に依賴したる事とて且新聞記者たるの故に上等のパスをもらふ。然し列車には上等なし。中等が一室あり。皮の椅子にて comfortable ナリ。室中只二人。南氏は十二時の滊車にて奉天方面へ向け引き返す。
一度朝鮮に入れば人悉く白し
水青くして平なり。赤土と青松の小きを見る。
　なし「つ」かしき土の臭や松の秋。
蓼の莖赤し
頗る暑し。フラチルを脱ぎたくなる。朝鮮人の子供が緋の袴をはいて遠くを行く、裾開いて西洋婦人の袴の如し。
豚、山羊、馬のむれなくなりて。牛のみになる。それも單獨にほつ／＼見ゆ。
滿洲の如く支那人を使ふ人なし。朝鮮人の使役せらるゝもの一人も見受けず。
始めて稻田を見る。安東縣の米は朝鮮米なり純白にて肥後米に似たり。

肴にかれいと鯛あり。いづれも旨かつた。

六時七分前定州につく。眞丸の赤い月が山の上に出る

九時が來ても十時が來ても平壤につかず。やがて十一時過に漸く着。小城が書生を連れて迎に來てくれる。柳屋の提灯をつけた男が電報で御座いますが、生憎部屋が塞がつてゐますのでと云ふ。旅館は三軒程しかなくつて中村製鐵所長官やら和田維四郎の一行やらでいゝ部屋はないのだといふ。ので小城は鐵道旅館といふのに連れて行くと云ふ。是は旅館の拂底な爲め鐵道に關係あるもの丶宿泊する所として鐵道官舍構内に設けたるものといふ。廣い原の中な構内に這入る官舍が二行[原]程ある。其左側のはづれが旅館である。ボイ一人、朝鮮人一人、至極ノンキで閑靜なものなり。小城と話してゐるうちに十二時になる。入浴、飯を濟ましたら十二時過であつた。

昨日ある驛で車掌が平壤の運輸課から電話でもし宿舍の都合がつかないなら其手數をすると云つて來たので、もし柳屋がいけない樣だつたら御願しますと賴んで置いた。

二十九日　快晴。旅館の周圍は白菜やら花畑やらカボチや[原]やら植ゑてあるがまだ新らしいので趣が乏しい。板塀の外は茫々たる原で此所は近來人に借[ママ]すさうだが一向借り手がない。其向が往來で人車鐵道の樣なものが通る。

朝食のときボイ曰く此邊では朝鮮語を習ふ譯に行きません。朝鮮人の方で日本語を使ひますからと。日清戰爭のときと日露戰爭のとき通譯の必要から起る也。

朝九時過小城の案内にて鐵道構内を一覽。苗圃。栗。アカシヤ。銀杏。落葉松。等なり。年々の經費三千圓といふ。是より所々の停車場に植付ける由。

工夫の家清潔にて comfortable ナリ。局員集會所。玉突二臺。日本間床つき十五疊程。別に夜學をやる所あり。夫の一端に舞臺を作り講談をなす。其次に絨氈を敷きピヤノとオルガンを具ふ。小城の官舍に行く徐念淳の淇水賦を看る。長さ一丈幅一尺五寸餘。字體秀麗名筆なり。寧邊の孔子廟にある木版十枚朱子の字と云ふのを貰ふ。謹嚴方直の字也。

食事。鷄の丸燒。奥。道子さん。

箕子廟を去る二丁の松山のなかで慟哭してゐた。

三時大同門に上る。大同江を望む。腰に天秤を結びつけて水を負ふ。

萬壽山の松。乙密臺の眺望。石垣に蔦。垣半ば崩る。角樓廢頹。

白帽の人樓上にあり。

玄武門。

牡丹臺。箕子廟。を見て（鵲しきりに飛ぶ。松の中）永明寺に下る。浮碧樓に憩ふ。樓下より渚に下り登船直ちに纜を解く。絶壁を削りて大朱字を刻す。清流拜といふのが見えた。

遠く斜陽を受けたる州の向の山が烟る。白帆一つ光る。

絶壁の下朱字を刻する所に日本の職［人］三人喧嘩をしてゐる。一人は半袖のメリヤスに腹掛屈竟の男一人は三尺に肌脫の體共に大坂辯なり。何時迄立つても埒あかず。風雅なる朝鮮人冠を着けて手を引いて其下を通る。實に矛盾の極なり。船を上つて新市街の遊廓を過ぎ繪端書を買ふ。て歸る。正七時なり。

晩に入浴。小城の御孃さんと坊ちやんが遊びにくる。飯を食つてゐると平壤日報社の社主白川正治氏がくる。此人は支那や朝鮮通で所々方々にゐた事がある。沖横川抔の一類ださうだ。戰爭の始まらない前旣に安東縣より北の方に進んでゐたさうだ。此人が色々な額やら古版やらを尋ね出しては小城にやるので小

城がそれをあつめてゐるのであるといふ事が分つた。
酒巖の話を聞いた。
晩に電話が鎭南浦からかゝる。余にやつて來いと云ふ。まあ御免蒙りたいと云ふと是非必要があるといふ事である。小城の奥さんと二三回ちりん〳〵の交換をやる。結局寐て仕舞ふ

三十日　五時頃小便に起きる。ポプラーの上に丸い月が出る。又寐る。橋本は八時發で立つと云ふので起き出した。鎭南浦から又電話がかゝる。とう〳〵十一時半大同江を通ふ蒸汽で行く事になる。
朝小城にたのまれた。春潮といふ人の畫に句を題す。
負ふ草に夕立早く逼るなり
二時五十分平壤發。出立前宮崎氏に乞はれて一貫とか至誠とか云ふ字をかく不敵なものなり。大漠孤烟直長河落日圓の十字もかいた。負ふ草にを小城の細君の所へ持つて行つて暇乞をする。且つ鎭南浦へ行かなかつた御詫をする。停車場に行く。和田さんの一行の澤口氏に逢ふ。逢つたり離れたりするなと云つて笑ふ。汽車が着く。犬塚理事が降りてくる。妹さんも下りてくる。やあと云ふ。妹さんがよく御目にかゝりますと云ふ。肋骨が下りてくる。やあと云ふ。手を出す。もう逢ふまい。と云ふ。汽車へ乘る。驛夫が中等汽車へ荷物を積み込む。上等とつゞいてしきりなきのみか、上等は一部屋毎に區切りたれば特別室と思ひ中等に濟まし込んで居る。見送りの宮崎先生亦泰然たるものであつた。新聞の白川君が三隱のうちの牧隱先生の祈願所にある三十佛の一だと云つて金佛を送らる。しばらくして今日は中等は込むねといふ。此所が中等か、それなら向へ移つてもいゝと云つたら案内の宮崎先生默つてゐる。何故荷物を此所へ入れたのかと聞くと、中等だらうと云ふ事でと云はる。恐れ入つたもの也。黄州で上等に移る。十時過龍山着。

稻垣だと云つて這入つてくる。遠藤横田二君も來る。コレラで大變だよと云ふ。
京城着。車で天津旅館へ行く。道路よし。純粹の日本の開化なり。旅館も純日本式也。
角の十二疊にて心よし
十一時故すぐ寐る。
驛より電話かゝる。驛長室で御休息云々。
萬年筆の墨切れる。
龍山の手前で眼がさめると草の中に灯が點いてゐた。よく見ると朝鮮人の屋根であつた。

[京]九月一日　朝鈴木穆來る。菊池武一來る。色々親切に世話をやいてくれる。大阪朝日の山本光三氏來訪。裏の南山に上る。一時歸る。――南山の松、統監府、眺望北漢山。歸途セウルプレスに山縣氏を訪ふ。午飯の爲め歸りたる由にて不在。本町通りを通りて歸る。山本氏に別る。古道具屋をひやかしたら硯の價値を聞いたら十二圓と云つたのでやめにした。
宿に竹があつた。滿韓を旅行して始めて竹を見る。
午飯後又町を散歩。髮を刈る。朝鮮人がえんやらやと云つて道をならしてゐる。あれは朝鮮人の掛聲かと聞いたら左樣ですと答へた。本町通りと云ふ所を通る。巡査に右へ右へと云つて叱られた。唐物屋へ行つて革鞄と（二十六圓）香水（六圓五十錢）贈りもの及び襟半ダースを買ふ。鈴木に電話をかける。曰く三十分の後來て飯を食つてくれ。山縣五十雄電話にて今夜行つてもよいかときくから不在と斷わる。
車に乘つて鈴木穆方へ赴く坂出君に逢ふ。晩餐。橋本より電話十時二十分で立つ由申し來る。車にて停車場に行く。伊藤幸次郎氏亦釜山に赴く偶然相會す。

鈴木より寫眞帖をもらふ。天皇陛下に獻上したるものゝ由。穆氏明日新築の官舎に引き移る由。夜にて分明ならざれど立派なる建築なり。

朝家にカワリナキカと云ふ電報をかける。午後外より歸ればミナカワリナシゴブジカイツカヘルとの返電あり。山本氏より棕十釜山に着の旨をきく。着京のときは知らせてくれと頼んで別る。

九月二日（原）　十二時二十分の汽車で仁川に之く稲垣、遠藤二氏龍山より同車案内の勞を取る。仁川は（原）京城より調へる日本町あり。去れどもさびれて人通り少なし。大神宮より月尾島と小月尾島を望み。ワリヤッ（原）クの沈没せる所を見る。遠淺にて一里餘も歩して渡るべし。二人砂上を行く影す。壯士芝居の一行車にて自己を廣（原）告してあるく。四つ角にて大聲をあげる。口上を述ぶ。女人あり。よく見ると三等列車にて來れる一團隊なり。

仁川倶樂部の三階に登り夕食。夫から石段をいくつも上り山の脊に出づそれを下りて停車場に至る。惠登津にて下車こゝにて釜山より來る汽車を待ち合はす。中に玄耳先生あるを途中に迎へんが爲なり。四十分ばかり待つ。稲垣氏樣子が分るまいとて一所に下りてくれる。

車中にて玄耳に逢ひ京城に下る。旅館に歸り入浴。矢野義次郎至る。久し振にて葡萄酒を飲む。明日開城を案内せんとて歸る。

十月三日　晴。七時起矢野の來るのを待つ。大將は四五日休暇を取つても案内せんと云ふ。九時十分發。唐辛が山に干してある。松。墓墳佛の頭の如し。誰のやら分らず。稻田。

十一時過開城着。參政課の人出迎ふ。關野氏もこゝを見に來て廟に行くつた由。參政課の家に入つて憩

ふ。
參政課の……
勘定所。洗場。蒸場。乾場。苗場、南をきらふ。
雨斑の孔德聖を訪ひ内房を見る。水鉢の大なるもの。簞笥。
滿月臺。高麗朝の宮殿。松嶽山。(半月の城壁)天文臺。石柱。ばかり。遙かの岩の上に布を晒らす瀑
ある由。礎は都府樓と同じ。

十月四日　鐘路の鐘を見る。普信閣(もと興福寺の境内也)
六物店。二階建をゆるす
景福宮。大院宮の建物。光化門。蔦。靜なものなり。陶山氏通譯。
勸農齋と云ふ董其昌の額ある所に出づ淸楚可喜。後ろに白嶽を望む。
午後尙德宮に之く。内閣と名のつく妙な所を通る。左に折れて祕苑を見る。山あり、谷あり、松あり。
細き流れあり。生れてより以來未だ斯の如き庭園を見たる事なし。
歸りに博物舘を見る。高麗燒が澤山ならんでゐる。札には皆大凡七百年前のものと書いてある。大抵開
城の墳より堀り出したるものゝ由。
其外に畫を陳列せる所あり。畫には中々面白いものあり。二棟なり。離れて陶器、漆器、石器等を陳列
せる所あり。金佛も十數あり。
歸りに菊池武一君の招待にて倶樂部にて會食。久水三郎氏亦列席。久水氏は世界を殆んど步ける人なり。
何とか云ふ所で日本の淫賣婦十名餘の家に至りて歡迎を受けたる由の話あり。シンガボァにて千圓の貯蓄

を奬勵せる事。それから日露戰爭中亞米利加の賤しき女共の寄附金をする話。日本人ばかりを客にする外國人。外國人丈を相手にする外國人の話あり。

十月五日　關帝廟。

閔妃墓　澁川、〇〇、陶山、矢野、道踏田、稻田みのる。楊柳村、村の松、道白し。忽ちポプラー　白壁。横を廻ると一面の芝原。中に二の堂。みす。後ろの陵土饅頭の二重。御影の玉垣。左右と後ろの松山。藁島。園藝模範所。クジメ技師。亞米利加葡萄、歐洲葡萄、混血兒。地から生る葡萄、地から生る梨。三年位で百なる由。牛蒡。葱。茄子の大きさ。鷄頭をもらふ。外で行厨を開く。裏に出て漢江を見る。四時過模範所を出る。西風強くして漢江を下る能はず陶山さんが大院君の別莊と石坡亭へつれて行くといふ。

夜花月といふ料理屋に招かる。新聞記者の主唱にかゝる宴會なり。他の四五名亦來り會す。總勢凡て五十名程韓人亦三名程あり。山縣五十雄に逢ふ。隈本繁吉にも逢ふ。絹を毛氈の上にのべて字をかふ騷ぎとなる。是非書かゝなければならないならば宿へ屆けてくれと云ふといや是非此所でなければならないさうでと云ふ

隈本氏傍にありて苦笑して曰く度し難いなと。好い加減に御免蒙つて山縣を引張つて宿へ歸る。久し振だから話さうと云ふ。隈本、矢野後れて至る。岡崎遠光亦至る。遠光と五十雄と冗談をいふ。矢野の曰く從來此所で成功したものは贋造白銅、泥棒と〇〇なり。其例をあぐ。期限をきつて金を貸して期日に返濟すると留守を使つて明日抵當をとり上ける。千圓の手附に千圓の證文を書かして訴訟する。自分の宅地を無暗に増して繩張をひろくする。

余韓人は氣の毒なりといふ。山縣贊成。隈本も贊成。やがて歸る。

六日朝。例の如く陶山さん來る。車で龍山に之く軍司令長官の官舍を見る大したものにあらず。然し他と比例を失して大壯なり。印刷局に至り製紙室。圖案室。活字室。寫眞室等を見る。朝鮮人百名以上日本人二百名程を使用する由。子供のときは甚だ可なれども年をとると（結婚するとすぐ馬鹿になる）。裏の山の嶺に亭あり。そこで所長と高木事務官と午餐の饗應あり。パン。ジャム。サーヂン。茶ヰスキーなり。漢江を眼下に見て眺望佳なり。引き返して太平町の郵便局に淺井榮熙を訪ふ。先生三等郵便局の主人たり。膝を容るゝとは正に是なり。余と陶山さんと這入つたらあとは何うする事も出來ない。淺井さん大いに喜こぶ。其顏を見たのが甚だ愉快であつた。

宿に歸ると矢野が先刻から待つてゐた。三人で石坡亭に行く。景福宮の左の横を拔けて北漢山の路を上る。坂にて車を棄つ。路は砂ばかり奇麗なり。空は拭ふ如し。左右は石山に松あり。北門に出づ。門を出で、回顧すればアーチの中に山の嶺と石と松と空がうつる。夫から道は細くなる。洗劍亭に至る。河邊の亭なり。河は石のみ。三地壁に至る。大きな大理石を斷面にして佛像を彫刻す。向の山から岩を缺いて石を切り出してゐる。又固の路に引き返す。石坡亭に入る。大院君の別墅のよし。宮島の紅葉に水のない位な所也。

夜山縣を晩餐に呼ぶ俳人牛人來る。短冊に句を乞ふ。東洋專門學校の生徒二名來り講話を依賴。謝絕。

七日。例により快晴。宿に二階に余一人。下に一人となる。靜。今日別段の日程なし。氣樂。

高麗人の冠を吹くや秋の風

韓人は白し

秋の山に逢ふや白衣の人にのみ

學部の小泉なにがしに依頼されたる扇子を三本かく。午から出て行く。ぶら〳〵歩行く。鈴木方に至る。歸つて勘定をする。宿料其他凡てゞ五十圓近くなる。茶代二十圓と下女に十圓やる。矢野の家に至る。松山の下に一部落をかたちづくる。町で高麗燒の水指の樣なものを見る。見やげに買つて行かうと思つて聞いたらもう賣れたと云ふ。いくらで賣れたのかと聞いたら四十五圓だといふ。驚ろくべし。歸り際にすぐ鈴木の家に至り一二泊して立つ事にする。入浴。喫飯。十二時過寐る。

八日　例により快晴。鈴木と奥さんが鐘路に朝鮮人の勸工場を見せてくれる。午飯後エランダに出て椅子による。砂土の上に菊の花壇を作つてゐる。藤棚を作るんだと云つて丸太を燒いてゐる

それから會といふ會の人來りから歌を作つてくれといふ。

夜謠をうたふ。

九日朝　始めて曇　野上、野村、宅へ繪端書を出す。稍曇る。學校參觀を勸めらる。

野上への端書に

秋晴や峯の上なる一つ松

學部の隈元繁吉君に電話をかけて學校參觀の事を依頼す。生憎女學校は休みなりとて師範學校を見に行

く。日本語で代數を教へてゐる。（二年生）、通譯つきで地理を教へてゐる。（一年生）。漢文を教へてゐる。聖經の通りなり。音字を教へてゐる。陸陽河を支那人の模したるものなり。字旨し。速成科では日本の讀本を讀んでゐた。總數二百名なれど現在は二百名餘。腹痛歸る。

長椅子の上に横はる。一時半頃穆さんと鈴子さんと一所に飯を食ふ。釋尾春芿氏來る。

朝鮮の坊主。高麗朝の弊害に懲りて李朝の壓迫。上流社會に佛を信仰するを以て恥辱とす。其代り巫女殿。夫婦でやる。舞臺に出でゝ妻舞ひ夫はやす。平生は市井に住す。

大いなる寺には有百名乃至二百名の僧あり。耕織、大工、其他悉く自家の手にてやる。惡漢少し。百に一、依然たる文字ある僧あり。維持は寄進の田地等なり。

朝鮮人を苦しめて金持となりたると同時に朝鮮人からだまされたものあり。

晩に入浴始めて雨を聽く。好き心地なり。大連を出て始めての雨聲也。夜主人と十二時頃迄談ず。明くれば一天拭ふが如し。南山の松檜んで見ゆ。鈴子さんが春の樣でせうといふ。

十日　主人新聞記者其他を招待して開城の人蔘製造を一覧せしむるとて出て行く。

坂出さんが來る。話をしてゐるうちに正春さんが轉んで鍊瓦で額を切る。下女がいときり草の油を塗つて繃帶をする。坂出さんがドクトル和田に電話をかけてくれる。下女が車でつれて出る。電話で大した事なき旨の返事あり。

喫飯後坂出さんと話す。四時過南山に上る。松及び谷盤ろくべくよき所あり。歸る。鈴子さんに誘はれ

て荒井賢さんの庭を見に行く。

それから會の爲にから歌三首を作る。

　高麗百濟新羅の國を我行けば
　　我行く方に秋の白雲
　肌寒くなりまさる夜の窓の外に
　　雨をあざむくほぷらあの音
　草繁き宮居の跡を一人行けば
　　礎を吹く高麗の秋風

夜穆さん歸る高麗百濟の歌を見て要領を得ない歌だなといふ。晩に主人の發議で十三日に立つ事にする。

十一日　七時起顔を洗つて裏の山へ登る。弘法大師があつて提灯に米子、小勇抔とかいてある。奉納の手拭が縱の小木につるしてあつた。南山の松が霧につゝまれて鼠のうちに蒼味を味びてゐたのが晴れて來た。谷の底に小家があつて前は絶壁で、ハゼ紅葉が肩から乾いた茶色を色彩してゐる。上には松が縱横に見える。八時歸る。主人馬に乗つて出たぎりまだ歸らず。

十一時より十軒程挨拶にあるく。歸つてから龍山煉瓦製造所の朱泥の花瓶にコールタールで字をかく。あまり墨をつけ過ぎたので五分程したら流れて來て失敗した。是に懲りて殘りは可成かすれがすれにやつた。それから會の河合さんが禮にくる。晩に師範學校の増戸校長と瀧川山本兩氏來る。雜談。短冊數葉をかく。それから玄耳が平壤で日射病にかゝつた話をする。

十時半奥さんに電氣を賴んで寐る。何時迄立つてもかん〳〵輝いてゐる。起きて消した。

十二日　朝市を見に行く。あれが明太魚ですと云ふ。刀の樣なこち〳〵したものゝもとに穴を明けて柳の枝にさしてゐる。

蛸の蟲が一寸幅の革の樣にぶら下がつてゐる。唐辛子の細末を賣つてゐる。胡桃。栗。銀杏。棗の干したの等がある。肉に蚊帳をかけて賣つてゐた。

午後主人統監邸に出て行く。國枝技師、坂出技師來り話る。神田書記官亦至る。短冊をかゝせらる。

十三日　九時南大門發。鈴木夫婦、矢野、菊地、國枝、セウル記者の、、。通信記者宇津宮、隈本繁吉等。なり。車中にて三井の京城支店長に逢ふ。鈴木の紹介。基督靑年會の大塚氏と夫から佐々木淸丸に逢ふ。草梁で矢野事務官の案内を受く。井本淸憲氏亦迎へらる。すぐ船にのる。京城より東京迄通し切符四十一圓九十八錢也。

十四日　六時にボイが起しに來る。窓から島が見える。もう玄海は盡きたと見える。船がとまつたので、馬關着かと思つたら左樣ぢやない檢疫の爲だと云ふ。

八時馬關着朝日の五十嵐氏出迎へらる發車九時半なり。一時間程連れて步いてもらふ。春帆樓を遠くに望む。左右に長き町なり。

車中大塚氏と談ず。京都にて落ち合ひ栂尾嵐山の紅葉を見やうと約束す。廣島で下りる。直ちに赤帽に荷物を長沼支店に放り込まして車で出る。車夫が諄々として口說き立てる頗るうるさい位也。

權現樣。
饒津神社。公園。泉邸。此橋が何橋で此河が何河で、向ふに見えるのが水道であすこへ水をためて上へ吸ひ上げて何とかする。これが何とか聯隊で是が軍司令部で云々。
歸りに大手町の井原君を訪ふ。先生ぼんやり出て來て夏目君と云ふ。小供が病氣でと云ふ。
宿に歸る。宿は表から見ると支店とは云ひなが〔ら〕甚だ汚い。這入ると表二階の廣間に通した。果せるかなあまりよくない。額丈は立派である。二枚折の金屛風もある。我たんは怪しいものだ。九時半迄三時間餘ある。枕を借りて寐る。急行劵の入らない汽車だと云ふ。では寢臺をとつてくれと云ふ。下女が下がつて番頭が出て來て上等で御座いますかと云ふ。上等でなくつて寐臺があるかと聞いたら、へえ畏りましたと云つて下りて行つた。

十五日　昨夜九時三十分廣島發寢臺にて寐る。夜明方神戸着。大阪にて下車直ちに中の島のホテルに赴く。顏を洗ひ食堂に下る。ホテルの寢室の設備は大和ホテルに遠く及ばず。車を驅りて朝日社を訪ふ。素川置手紙をして東京にあり。天囚は鐵砲打に出で、社長は御影の別莊なり。天下茶屋迄車を飛ばして遊園地の長谷川如是閑を訪ふ。遊園地の閑靜にて家々皆淸楚なり。秋光渙徹頗る快意。如是閑遠藤といふ高等下宿を去つて近所に家を構ふ。去つて尋ぬるに不在待つ少らくにして歸る。二階で話をする。好い心地也。鳥居素川の留守宅で妻君に逢ふ。如是閑濱寺へ行かうといふ。行く。大きな松の濱があつて一力の支店と云ふ馬鹿に大きな家がある。そこで飯を食ふ。マヅイ者を食はせる。其代り色々出して三圓何某といふ安い勘定なり。電車で歸る。難波の停車場から車を飛ばして大坂ホテルに入るともう六時であつた。六時四十四分の汽車にのる。如是閑と高原と金崎とがやつて來た。

此汽車の惡さ加減と來たら格別のもので普通鐵道馬車の古いのに過ぎず。夫で一等の賃銀を取るんだから呆れたものなり。乘つてゐると何所かでぎし／＼云ふ。金が鳴る樣な音がする。暴風雨で戸ががた／＼すると同じ聲がする。夫で無暗に動搖して無暗に遲い。

三條小橋の萬屋へ行く。小さな汚ない部屋へ入れる。湯に入る。流しも來ず。御茶代を加減しやうと思ふ。（最中を三つ盆に入れて出す抔は滑稽也。しかも夫をすぐ引き込めて仕舞ふ。）此宿屋は可成人に金を使はせまいと工夫して出來上つたる宿屋也。金のあるときは宿るべからざる所也。

十六日　快晴。鹽漬昆布の白湯を飲ませる。九時に二條にて大塚氏に逢ふ。嵯峨に下りて嵐山に向ふ。紅葉まだ早し。コレラの爲にや人に逢はず。大悲閣に登る。腹痛し。空を望み谷を臨み。木を觀て寐る。眠さむ。腹の痛やむ。臺の下を豚の鳴く樣な聲がする。保津川を下る櫓の聲なり。渡月橋で車を雇ふ。一臺一圓。高雄に行く。松山の峠を超ゆ御料地なり　夫から平坦の爪先上りを行く。清澄の空氣の中を日光が輝いて實に好い心持である。山は凡て青い。

高雄に至り高雄川の橋を渡る。紅葉は殆んど色づかず。其代り遊人としては一人もなし。神護寺に登る。閑靜可喜。地藏院の所で突然婆さんが椽から旦那御茶を飲んで御行きやすもしと云ふ。猿股を穿いて齒を黑くしてゐる。寺に現はるべきものとも見えず。地藏院に憩ふ。表札に小僧都何某とあるから益婆さんと緣のない事が分る。新築の奇麗な座敷で日が暑い程這入る。床に含雪の雪と雲照律師の書をかく、

「和尚さんは御小僧はんと居やはりますが」今日は留守なので番をしてゐるのだと云ふ。小僧は修業で本堂の方で御經をあげてゐるのださうだ。

八つ橋。豆ねぢ。鹽煎餅を食ふ。椽の先は崖で谷の下に水が流れる。深い谷である。向ふは眞蒼な杉や

松ばかり上に秋の空が見える。遠い山が後ろの方で霞んでゐる。歩して栂尾に至り石水院を見せてもらふ。天井が妙な四形の琴の臺を裏返した樣なもので拵らへてある。峠へ出て車で北野の天滿宮迄來る。松茸を擔ふ人ばかりに逢ふ。電車にのる。四條の襟善で半襟帶上を買ふ。十八圓程とられる。更紗を買はうとしたが女房が氣に食はんのでやめた。八時二十分の急行に乘る。土曜日なので上等滿員、寢臺一つもなし。沼津で夜が明ける。少しも寐られず。和田維四郎に逢ふ。今御歸りかと云ふ。國府津で白川がぶらりと車中に這つてくる。昨夕小田原へとまつたから御迎かた〲來たといふ。停車場では松根、鈴木の弟、小宮、西村等がゐる。筆と常といふ子が來て居る。眞鍮の車で家に歸る。腹痛む。元氣なし。

　動かざる一篁や秋の村

　蜩鳴して汽車

　歸り見れば蕎麥まだ白き稻みのる

日記

——明治四十三年六月六日より七月三十一日まで——

六月六日　内幸町腸胃[原]病院行。雨。
麴町の花屋でみづ〳〵しきあやめを桶にすい〳〵と入れてあつた。

六月八日
○五月の半頃に植木屋鉢に花隱元、萬代紅朝貌を蒔く。それが芽を出した。朝貌は三寸。花隱元は拳程な葉で五寸。萬代紅は苗の如く鉢の中に一杯出る。之は莖赤く葉二寸宛にて一寸位なり。
○行德の送つたバンテージと札のつけてあるもの咲く。石竹の如し。眞紅。
○裏の家のオンラン草[原]枳殻垣の隙より見ゆ。小形菊は先月中旬より咲く。ひめあやめもしきりに延びる、子供金蓮花を鉢で買ふ花散る。葉延ぶ。松葉菊まだ鉢にあり。
○植木屋高二尺の朝鮮矢來を欄前につくり。それに灰とどぶ泥と。白水の肥料をやつて花隱元をからます。四つ目垣は裏へ廻[原]す。
○此間から湯屋に入つて、上つて、煉[ママ]瓦塀の外を見ると、向側の古門の肩にうつぎが白赤綺麗に見ゆ。杉垣の上に松蔽ひかゝる。是は余の隣家にて余の家よりも五六尺低し。
○フラネルに薄き毛のシャツ。肌の心地よし。
六月九日。胃腸病院行。便に血の反應あり。胃潰ヨウの疑あり。歸りに日比谷で高貴の人の馬車を拜す。

皇后陛下なりといふ。然し誰人か分らず。唯脱帽して敬意を表す。
○好天氣。座敷の花活に夏菊を插す。黄のなかに赤を帶びたる小さき花簇がりて、ぴんと勢よく頭を竝べたり。書棚の上の銅瓶には百合を活ける。色黑を帶びたる赤。菊も百合もわが心に適ふ。
○裏の北緣の硝子戸を開ける。角に薔薇の樹あり。まだ花を着く。此木の咲き出したのはもう二ケ月位も前と思つてるのに、まだ所々に赤き蕾あり。夫から夫へと落ちては咲き咲いては落ちるなるべし。梧桐の根の小町菊も然り。
花壇に濃き黄の小百合開く。石榴もいつか花を着けたり。芭蕉の實赤子の頭程になる。葉出て青く見えてより既に月餘ならん。
濟勝寺の境内の樫の古木を遠くから見ると、枝を切つたのか、枯らしたのか太いの丈が頑丈に見えて其所に萌る樣な色が集つてゐる。其恰好が芝山（二段になつた）の樣であつた。
十日。曇。冷。北緣の籐椅子に椅りて眠る。眼覺むるとき、西の空微かに破れて、薄き光り木犀の込んだ葉を透して、余の顔を射る。
六月十一日　不圖思ひ立つて上野の白馬會と太平洋畫會に行く。好晴。薄暑。胃病で歩くとあとが痛くなるので、外出が恐くなつた。
○上富坂を上る右手の廣い空地に何といふ木か名の分らないのが、若い軟かい綠りを吹いてゐた。其色は舐めて見たい程美くしかつた。其一本の下に薪が高く積みあげて、括くつた藁の色が見えた。後ろには砲兵工廠の偉大な烟突から煙がもう〱と立ち上つてゐた。

○一週間前に長與病院に行つた時は雨が降つて寒かつたので袷に袷羽織を着た。是は寒がりの部で珍らしい方であつたが、夫でも其頃はセルを着てる人が多かつた。今日はみんな絽の羽織に普通の單衣である。

○夜書齋に坐つてると、北庭と南庭と開け放つた暗い庭から初夏の香が心よく鼻に通つて來る。

六月十二日

北の縁側の籐の長椅子に寐て庭を眺めてゐる。風吹いて梧桐や櫻がはた／＼と鳴る。

薄き藍色の空に二たかたまり程の白雲が出る。其輪廓が暈した樣に薄くなつて藍に流れ込んでゐる。秋の空に似たり。

○勾欄のすぐ前にある芭蕉を臨む。日落ちてからが猶快よし。暗いうちに微かに大きな葉の重なる氣色が窺へる。

六月十三日　胃腸病院行。十一日の便には著るしく血の反應あり。且つ纖維の如きもの見ゆる由。しかしまだ胃潰瘍の判斷を下す事能はず、もう一返便の檢査をなすといふ。外出歩行を禁ぜらる。謠も病症のきまる迄やめろといふ。

　歸つて長椅子に倚つて書見してゐたら眠くなつたから富士太鼓をうたつた。夫から晩食後には花月をうたつた。是で惡くなれば自業自得也。

○もう浴衣をきてゐる人がちらほら見える。

○まだ蚊帳をつらず。夜氣甚快。

○眼あしく夜の書見困難なり。

六月十四日
朝床のうちにて強雨の聲をきく。起き出づ。空暗し。フラネルに薄き夏の毛織の襯衣を着て其上に袷羽織を重ねる。冷氣。一二日前より梅雨なる由。

六月十五日

六月十六日　早[原]強雨の響を聞く。胃腸病院行。入院に決す。雨の儘の菖蒲を見る。

六月十七日　座敷に白百合を活ける。香強し。銅瓶に桔梗を插す。終日雨。日暮に晴れかゝる。薄シャツにフラネル。

六月十八日　濃陰。胃腸病院に入院。床が敷いてあるから寐る。午飯、牛乳、玉子、刺身。米飯三杯。夜。牛乳、玉子、茶碗蒸但し中味何もなし。
○室南向明るし。病院といふよりも宿屋に來たやうなり。眼の前にひばの先尖りたると青梅の葉見ゆ。
大小便共捨てす。[原]徳利と蓋物に入れて検査す。
○雨に濡れた赤練瓦の色。獨乙公使館美なり。裏霞關を下る。大道の中に突兀たる柳綠に濡る。左右道赤煉瓦の家。日比谷圖書館
豐隆、臼川來。行德來。

六月十九日　曇。五時起。病院の規則のよし。洗顔五時半室に歸る。隣の人既に書を讀む。昨日も終日時々讀書の聲をきく。是は附添のものが病人に小說を讀んで聞かしてゐる也。病人は御婆さん也。

伸六　一週間前に頭を刈る。謙信の模型の如し。

湯に入る事を申し出る。看護婦曰く。もう二三日御見合せなさるべし。よければ此方からさう云ふべしと。何故に湯が惡きか殆んど解しがたし。苦笑して已む。

冷氣。薄シャツ。セル。褥中にては冷風のため夜具をかける。

布團高さ四五寸（三枚をかさぬ）シートデ蔽ふ故品もの分らず。上掛一枚。ケンドンなり。是も表裏白布ニテ蔽フ。たゞ袋に入れて左右から括るところ見ゆ。

楚人冠。上野氏來。

六月二十日　五時前起。陰。風強し。

看護婦の掃除する間二階と二階下を見廻る。悉く掃除也。混雜。歸る。自分の室も掃除中。あとから外の看護婦が拭に來る。六時に出つて日雲を洩る。

神崎氏來。

午　池邊三山來。午後草平蓊村來。妻來。

六月二十一日。曉起（四時過）。眼に映るもの悉く雨に濡れたり。鳩　軒に鳴く。風北より吹く。深陰雨ならんとす。居室冷ならず。

○今朝硝酸銀の藥を呑む。粘液を洗ふためならん。
○病院の食事は。三度々々半熟玉子一個。牛乳一合なり。朝は是は麵麭二切れ。バタ二片。ひるは刺身。晩に玉子豆腐又は魚の煮たものも、又は玉子燒等なり。
○室より望めば電線空端に縞を描く。余の着たる浴衣の如し。南の方に細くて高い煙突あり。湯屋らし。其後ろにこんもりした丸き森あり。其左少し低き處から一本の高い松らしきもの聳ゆ。距離慥ならず少くとも十町はあるべし。近頃の梅雨の天氣にては蒼い上に常に白きものを被つて判然せず。
○朝　松山忠氏來訪。行德團扇を持つてくる。小宮來る。午迄で歸る。
　桐生悠々來。中村是公來。
○會員後藤氏來。わざ〳〵長與院長の傳言を述ぶ。院長病氣にて面會の機なきを憾むとの事。院長は余の著述を讀む由。謝してよろしくといふ。
○日暮兄來。

六月二十二日

○昨夜半夜看護婦二人夢の間に來りて蚊が出たから蚊帳を釣つて上げませうといふ。唯々として應ず。あとは知らず。
○五時覺。上厠。便なし。陰。蒸暑し。前の電燈會社の物置場より每朝七時頃から人夫が色々のものを引き出す騷ぎ罵る。八時に至つて已む。
○十一時半弓削田來。午よりうと〳〵と寐る。
○二時過妻來。

○つゞいて畔柳來。
○大便不通灌腸

六月二十三日

五時起。大便又なし。天氣濛々。しかも雨にならず。
○八時半便通少々。
○朝のパンと午の刺身に窮す。
○小宮豐隆。黑田朋信。森田草平來。
○入浴を許さる。三助絲瓜の干したので脊中をごし／＼擦つてくれる。

六月二十四日　五時起。便通。晴天。昨夜隣室の御婆さんの所へ女三四人來。花を活けてゐるやうなり。御婆さんを先生といふ。御婆さんは花の師匠か。余は町人の御隱居かと思へり。
○十時物集和子さん花束を持つて來る。十二時歸。
○午後春陽堂主人ビスケットの鑵を持つて來る。受付をどう切り拔けたものやら。
○妻白百合を携へて來る。
○平山氏鵠沼より歸朝來診。
○每日午に刺身を食ふ。少々厭きた心持なり。

六月二十五日

○五時十五分前起。陰。七時半より晴れかゝる。
○午食後東洋城來。御膳をとる（五十錢）。豐隆月給をとつてくる。
○行德　筆子とあい子を連れて來る。二人とも殆んど一語を發せずして去る。

六月二十六日　隣室掃除の音にて目覺む。四時半也。五時十分前位に起床。曇。冷。例の如し。
○隣室の御婆さん今日退院の由。見舞人先生々々といふ。花の師匠らし。
○昨日目方をはかる。體量四十八キロ百。少し減じたり。食慾乏しき爲ならんと杉本氏云ふ。食慾の乏しきは朝硝酸銀を呑む結果なるべし
○今日一日の尿の全量を檢査する由　昨日看護婦云ふ。
○昨日東洋城物集さんの花束をばらにして復活をはかる。無効。今朝は大部分凋落す。
○燕遙かの空を飛ぶ。階下に紫陽花咲く。くちなし白く咲く。花卉の鉢物を並べたるうちにジエレニアム赤し。
○午前白石良五郎來。是は此四月福岡から出て高等師範の國漢文科に入りたる人也。文學者志望の旨の手紙をよこした故返事を出したら來た。是も菓子折を持つて無難に受付を切り抜けてくる。
○妻例の如く來る。山田茂子、神崎恒子前後して至る。神崎の御孃さんが山百合と菊の花をくれる。山田の奥さんが稗蒔の鉢をくれる。
○森卷吉來。傘を忘る。
○隣の御婆さん退院。一軒置いて東の人其あとへ引き移る。是も輕症の人と見えて碁などを打つてゐる。相手は弟らし。

六月二十七日

曇　例の如し。五時起。今朝からパンを燒いて食ふ事にする。たゞではもごくして如何にも食ひ苦し。

○高田姉來。笹原親次來。森田草平來。野上臼川來。兄來。

○晩に瀨川さんから三大めしの因縁をきく。

○あまり寐てゐるものだから腹がぶつ〳〵云ふ。

○今日入浴

六月二十八日

○五時起。寐ながら雨聲をきく。

○今日より硝酸銀を廢す。

○支那人王某なるもの入院す。

○四十一圓二十五錢を病院に拂ふ

○小宮豐。安陪(原)能成。西洋料理を食はす。

○三時中村蓊來。(原)三時過内丸最一郎來

○五時、澁川、坂本來。

○九時過眠る。忽ち地震で眼が覺る。眞夜中の樣な感じなり。地震の長さも中々也。漸く靜つたとき電車の音が耳に入る。恐らく十二時位ならんと漸く想像す。

○六月二十九日

○五時起床。顔洗所で看護婦が昨夜は大した地震ですねといふ。漸く御天氣になりましたといふ。成程地震の御蔭かも知れない。久振で快晴。美くしき日が病院の烟突の本の所に見えた。

○十一時入浴。室に歸ると是公が來てゐる。昨日は大臣を御馳走したといふ。獻立をきく。其時の薔薇の花をやればよかつたといふ。

○十時頃一青年障子を開けて入り來る。顔が白石良太郎と云つて此間來た高等師範の學生に似てゐる。見た樣な見ない樣な顔なので躊躇す。是は辨天町に住んでゐて、湯屋で余に逢つた事のある少年のよし。其辨天町の厄介になつてゐた男が文學士で、其文學士の先生だと余を教へたので名前を知つたといふ。成城學校に行くといふ。軍人になるのかと聞けばさうでもないと答へる。入院後四十日になるといふ。四の大を食ふ由。澤山食つて營養がよくなれば癒るのだと云ふ。

○庇のさきに葭簀を出す。柱を立てゝ。其中央から直角に臺を手摺の上から長く出して其上で仕事をする。

六月三十日　曇。五時起床。

○朝誰も來ず。午。小宮來。西洋料理を食ふ。昨夜河岸の天ぷらを食つて明治座の立見に行つたらもう落のあとで新橋の演藝館へ來たら薩摩琵琶なので失望して此病院の前を九時頃通つたといふ。

○二時過例により妻來。純一と御房さん來る。

○森田丸善より電話をかける。大塚へ禮にやる文房〔具〕に就てなり

○二ノ宮行雄、太田善男、水上齊來。

○森田來。六圓五十錢のインキ壺を見せる。

○杉本氏回診。療治後血がとまつてから二週間して腹を蒸すのが、胃潰瘍の療法なりといふ。其あとは火ぶくれの樣に色が變るんだといふ。腹だから差支なからうと答へる。
○中村是公から楓樹の盆栽を見舞にくれる。中々見事のものなり

七月一日

○例により五時起。昨夜腹が鳴り通しに鳴る。
○菊の水を代ふ。楓樹の盆栽恰好頗るよし。
○此日晴ならんとして未だ判らず。
○是公より端書來る。今日北海道へ行く。十三日頃歸る。一所に行かれぬが殘念なり。左五へは宜しく云つてやるとあり
○鳥村苳三來。高須賀淳平來。石川啄木來。
○今日より蒟蒻で腹をやく。痛い事夥し。

七月二日　四十八キロ百五十。

○五時十五分前起。晴ならんとす。又曇からんとす。
○腹に火ぶくれが二ヶ所出來る。
○虚子來。松本樓から一圓の西洋料理を取り寄せて自ら代を拂つて去る。
○入れ代つて東洋城來る。森卷吉來。草平來。妻がえい子と恒子を連れて來る。行徳も來る。行徳は三四日内に歸るといふ。

○百合枯れ〳〵になつて色落つ。妻菊を插し易ふ。
○腹の火ぶくれを見て杉本さんがかう精を出してやつたら屹度よくなるだらうと賞めた。病院だから火ぶくれを拵えて賞められるのだらう。

七月三日　強雨の聲耳を冒す。卓軸の譬の通りの降り方なり。五時起。洗顏後稍穩やかになる。洗（顏面）所にて看護婦と鳩の話をする。鳩が三羽程居る。何處からか飛んで來たものだといふ。さうしてみんな子だといふ。親は子を生むと何處かへ飛んで行くといふ。鳩はさうだといつて承知せず
○朝鈴木の弟來。縞の羽織に角帶。鼻の療治に大學へ通ふので商店を休んでゐる由
○午後うと〳〵する。横濱の奥村來。春陽堂の岡田復三郎來。栗野の話をする。御母さんが酒飲でどぶろく拵を作る時脊中の子が泣くと乳を飲ませるのが面倒なので　こうじを嘗めさせた由
○松浦一來。高田の養子來。

七月四日　五時十五分起。冷風肌を襲ふ。北風らし。鳩（庇軒）下にあつまりて寂如たり。今日は眞白なのが一羽ます。是が親か。
○倉光空喝來。小宮豐隆來。妻來。蒟蒻をかへる爲め附添看護婦を雇ふ。昨日長野より出て、紺屋町の會に着いたばかりといふ。
○新小説と西洋の雜誌をよむ。

七月五日

○五時起　例の如き天氣。あまり暑からず。
○太陽記者中原司馬雄來。太陽の小說の選をしてくれといふ。草平來。石川啄木來（スモークを借りに）
○病院の廊下をあるくに宅から草履を買つて來た。所がそれはつつかけ草履である。
○天略晴。しかも暑からず。あつきは腹の上の蒟蒻のみなり。
○晚に二宮行雄來。

七月六日

○五時五分起。天晴の如く陰の如し。稍白き空と略青き空と相交はる。交はり方は帶の如し。さうして其帶と帶の間はボカシなり。
○附添の看護婦にどこかと聞いたら小縣だといふ。上田から三里ほどある田中とかいふ所の驛に親が勤めをしてゐる由。生れは越後ださうだ。飯を湯漬にして呑み込むから、まづいかと聞いたらまづいといふ。身體がわるいのかと聞いたら、いゝえといふ。東京へ出たての爲ならん。
○病院の患者がよくなつて段々退院するのはうれしいと瀨川さんがいふ。此間かけが見えなかつたから、どうしたと尋ねたら兄の法事で麻布へ行つたと答へた。兄は二年前に死んであとは幼兒と若い未亡人がある由。それから自分はこゝへ看護婦に住み込んだといふ。
○中野善右衛門。昨夜は來ず。これは盛岡の青年。早稻田の湯で自分を見た事ある由にて突然來る。二度目は盛岡で雜貨を商買（原）にする由を云ふ。木綿屋へ奉公に行つた事を語る。自轉車から落ちて鼓膜を破つた事を語る。四の大を食つてゐる事を語る。二（原）度目はえらくなりたいといふ事は本能ですかと聞く。本能ぢやないが本能に近い共有性だらうと答へる。誰でもえらくなりたいものでせうかと聞く。三度目は神はあ

るでせうかと聞く。あると思ふかと尋ねるとある樣に思ふと答へる。Will の話をする。善衞君聖書の百合の話をする。

○蒟蒻今日は六日目也。あついのは稍我慢しやすくなる。たゞ皮膚がすれて紫色になり。火ぶくれのあとは癩の如く水を含んであれ上る。腹を出して直立するよりも稍ともすると猫脊になる。

○胃腸の養生法といふものを買つて來てもらつて讀む。

○妻絽の袴が出來たといつて見せる。手に取れば地のわるいざら〳〵したものなり。少し遠くへ持つて行けば矢つ張りどつしりしてゐる。　○耕三より手紙　○「太陽」へことわり

七月七日　褥中にてびしよ〳〵の音をきく。起きれば風水を含んで面を吹く。樹の葉　屋根瓦より濡れたものを誘つてくるなり。割合に冷。病院生活をしてより夫程あついと感じた事なし。七月も此位涼しいものかと人にきくとそんな事はないと云ふ。

　梅雨は明けたかと訪問の客にきくと皆知らぬといふ。

○午過小宮來。五時過野上來。

○午前十一時頃看護婦鼻血を出す。汽車に乘つた爲だらうといふ。

○是公札幌よりアイヌの繪端書をよこす。

○夜蒸暑し。蒟蒻に疲る。

○昨日より西隣の患者退院。此人は岡田正三とかいふ。輕症らしく。碁などを圍めり。下女を附添に連れて來てゐたり。

○夜に入りて東のはづれの人亦退院。是は廿位の青年なり。書生ならん。

○東隣の人が此列にて一番重患らし。肛門に懷爐をあてるとか何とか看護婦がきいてゐる。病人は靜かな人なり。

七月八日

細雨濛々。無風。入院後大方は雨。時に霏々、時にどう／＼。時には今朝の如く濛々たり。

○東のはづれの部屋の患者が洗顏所にて顏を洗つてゐる。のつぺらぽうのやうな白い顏をした女なり。さうして髮の毛を切つてゐる。然し隱居の樣に切つてゐるにもあらず。後ろに束ねたさきが三寸ばかり殘つてゐる。さうして黑塗の細長い箱を持つて出て來る。其中に舊式の道具が一切這入つてゐる。楊枝は昔し使つた房楊枝なり。今頃こんなものを使ふのだから安全かみそりの余とは釣り合はない。

○東隣りの患者は床の間に大きな熨（原）斗の形をした何處かの御（原）札を奉つてゐる。

○昨日円川が佐久間艇長の遺言の寫眞版を持つて來てくれる。其死ぬ時を想像すると憐れなものである

○今日病院の仕拂日。四十一圓貳拾七錢。三十七圓五十錢は一等入院料十日分。三圓五十錢は付添五日分。二十七錢は蒟蒻。十五丁。

○妻來

七月九日

陰。暑。一二日前より看護婦長歸る。これは伊勢の人。七八年前よりこゝにゐる由。堀を埋めぬ前は前が土堤で松が生えてゐた由。昨夜來て話す。

○昨日朝火ぶくれを切つて上から膏藥を張る。

○西隣に支那人來。鄭某といふ。西隣は是で三人目なり。
○妻扇を忘れて去る。象牙骨の銀紙に百穂の畫。
○早[原]玄關に下りて花を買ふ。鋸草。麒[原]麟草。金龍。それを竹筒と床の間に分けて活ける。七錢。
花賣の荷車が露に濡れていき〳〵眼に映つた。

七月十日

○例刻起。霧の如く雨の如きもの世を蔽ふ。電信柱の向ふに見える烟突が霞んでゐる。電信柱か烟突か區別がつかず。其向ふの丸い森は丸で見えず。
○いつか電線を勘定して見やうと思ふが。晴れた時は目まぐるしくつて出來ない。雨のときはぼんやりして出來ない。
○昨夜寐るとき頭を洗ふ。
○藤井節太郎より手紙。此人は自分で香魚を漁つたといつて小包でよこして呉れたのが、箱入だつたものだからすつかり腐れてゐた。其旨を通じてやつたら殘念がつて今度は腐らないのを贈りたいが生憎雨で不漁であると云つて來た中に不如歸の巣を見付けた事が書いてある。――
「[原]鹽田宮内省御用掛御陵取調のため來付[原]案内致し候所ゆくりなく郭公の巣に行當り申候。鶯其他の巣を見付け得ざりしものか石ころの上に巣形もなく卵二個を生みて孵化に勉め居候ひしか人氣に驚ろきて飛び申候田舍にても時鳥の巣は珍らしく鹽田氏と相談の上燕の巣にて「孵」化せしめんと歸宅後燕の巣を求め候ひしも折[原]惡しく一番子終りにてよろしきもの無之仕方なさに捨置申候浮[原]化したら人工的に飼養して見る積[原]候。雲に啼きてこそ時鳥の特色はあれ籠に入れて

は俗に落ち申候ならんも茶店などにて思ひがけなく鳴かしてやるも多少の面白味有之べく歌の會併席などの賓物題に出しても俗中に幾分かの味有之べく候かと存候。

二四ともうまく行つたら一四は差し上げてもよろしくと存候。永日小品に小鳥に興味を持たる樣見受候につき云々

○例の髮を茶煎にした東のはづれの女今朝も洗顏所にて顏を洗ふ。つき添二人、ばあさんに中年の年增なり。いづれも上流の召使とも見えず。寧ろ田舍びたり。當人は例の如くぬうたる顏とぬうたる態度にてやつてゐる。大きなブリキの藥罐に湯をわかして瀨戶引の金盥に湯を入れさしてゐる。長い箱以外に下女が小さな茶碗を持つて來た。其中に糊の樣なものが這入つてゐる。當人はそれを指の先に塗り付けて、片方にに置いた茶碗樣のものに入れてある妙なもの（一寸見たら木の葉の樣に見えた）を取り出して、其糊をすり付けてゐる。よく見たら四五本の金齒を齦の脊に喰つつけたものであつた。般若の樣な氣がした。

○是公から呉れた盆栽を大事に枕元に据えて置いたのを昨日見ると黃色な葉が大分出來た。自分は盆栽を手がけた事がない。たま／＼買つてくるとみんな枯れて仕舞ふ。驚ろいて水を吹いた。枯れなければいゝがと思ふ。みだりに水をやるのが却つて枯らす工夫ではなからうかと思ふ。梅雨はやんだのやら、やまないのやら、空はいまだに暗い。

○潮東新來。鈴木三重吉、小宮豐隆來。鳥村苳三來。太田正男來。神崎恒子來、花束をくれる。鳥居素川、杉村楚人冠來。野村傳四來。

賑やかな日曜を過す。晩方一軒置いて隣りの患者の看護婦隣りの支那人の室へ來て抗議を申し込む。手前の方の患者は老人ですから、高い聲をして話をしない樣にして下さいといふ。此看護婦は特等看護婦のよし。加藤さんといふ。是から看護〔婦〕會をたてるんだといふ。

七月十一日

例刻起。曇、陰、暗、新胃腸病學を讀む。枯れかゝつた盆栽を洗顔所の窓の張出の上にのせる。

○是公から繪端書がくる。是で三度目なり。此前のは夕張の炭坑附近の懸崖の景色。是には左五、加二太、久保田勝美皆々一口づゝ病氣見舞を延べてゐる。今日のは登別の湯の瀧の氣色なり十本許の瀧に五六人打たれてゐる。其右のはづれは西加二太に似てゐる。「今着。此瀧に打たれた心地は何とも云へない好い心地、君も二三度此所にて打るゝとすぐ癒ります、是公」とあつた。

○昨日東の言傳にはひな子が熱が出たから醫者に見てもらうので、今日はことによると病院へ行かれないと妻が云つたさうである。

○突然皆川正禧が來る。一昨日出て來て誰かから余の病氣の事をきいて、大方入院してゐるだらうと思つて尋ねに來たのだといふ。屋久杉の謠の見臺を三つ、棕梠の葉の團扇を四五本、薩摩燒の猪口を一つくれる。

○森田草平來。妻來。

○二三日前より新らしい看護婦を二名廊下で見受ける。朝洗面所で新らしい人に逢ふ。金縁の眼鏡をかけた男也。夫からさつき手水に行つたら頗る脊の高き患者に逢ふ。毎日入院と退院があると見ゆる。

七月十二日

例起。便通少なし。陰。潤。細雨眼を奪いて飛ブニ似タリ。

○昨日の長身の人ニ今朝洗面所デ逢フ。西洋人でもなからうけれども慥かに合の子なり。

〇黑田朋心〔原〕來。松根來。北白川宮の御用掛をかねる事になつたといふ。西洋料理を食ふ。
〇太田善男來。森卷吉來。
〇二階の角の人今日三時か四時に死ぬ。毎晩うなれる由。細君は子供三人ありといふ。いつでも小さいのを負つてゐた。脊の高い女なり。患者は三十四といふ。來た時から大勢看護して入れ替り立ち替り見えたり。あるときは鍋で何か食ふ樣、湯治に來て間借をするに似たり。病人は久しい間滋養浣腸の由にきけり。
〇同じく二階の向側の楷〔原〕子段の入口の支那人に附添の看護婦やり切れないと云つて歸る。支那人はくさくつて厭なんだといふ。

七月十三日

曇。例起。
〇昨夜、死亡せる患者の部屋に集ひたる人影もなし。闃として壁のみ見ゆ。片隅に布團をたゝみ重ねたり。
〇看護婦云ふ今日は祇園祭ですと。長野にも祇園祭あり町々から屋臺を出して盛なる由。東京に祇園はないと教へてやる。
〇東はづれの慈姑の髮の女、突然ゐなくなる。何でも昨日杯は今迄の附添の外に若い銀杏返しの女が二人も泊り込んでゐた。よく聞けば上野の別莊とかへ來た所まだ空かないとかにて不得已病院へ入つた所、空いたときいて急に引き移つたのだといふ。うちの附添の聞いた事だから何處に間違があるかも知れない。
〇今日久し振にて薄き日の光を見る。從つてあつし。晩方稻妻しきりに起り雨ついで至る。
〇九時頃看護婦が縁に出てもう月夜だといふ。雨は何時か晴れたと見ゆ
〇妻來。是公來。胃に棚を釣つて物を載せた樣だと云ふ。小宮來。

七月十四日

○例起。快晴。病院に入つてから始めての快晴なり。洗面所にて二軒置いて東隣りの附添の下女好い御天氣で御座いますといふ。

○蒟蒻の最後の日なり。今日より焦けた所しきりに痒し。いかに熱いのを乘せても痒し。仕舞には手を出して掻きたくなる

○看護婦が膏藥を貼り替へに來て美事に燒けましたといふ。杉本さんが回診の時是はあと迄記念になりますといふ。此黑い色が記念になつて年來の胃病が癒れば黑く燒けた皮膚は嬉しい記念である。

○花屋から桔梗と女郎花とくわりんばいを買ふ。くわりんばいは始めての花なり。白くて子供のチンボコの樣な形の蕾をなす。葉は柿の葉の葉裏のあれ程にがさつかぬものなり。

○楓の盆栽を物干臺から取り下して緣に置く。見違へるやうに生々した。

○鋸草の殘つたのを短かく切つてコップに活けたら水が赤くなつた。是は葉を染めて美くしくしたものだといふ事が始めて分つた。

○小便に行つたら階子段の上の洗面所の所で余の看護婦が若い男と話をしてゐた。歸つてからあれが國の人かと聞いたらさうだと答へた。病氣は何だと云つたら腹膜だと答へた。此二月から病院に來て六月に二週間程國の方を旅行して又入院したのだといふ。醫者は安靜にして一日寐てゐるがいゝと云ふのださうだが自分は堪へられないので、忍んで外出をするといふ。結核性らし。年は十九といふ。

○野村傳四來。畫家が雛鷄をかく時牡鷄を合せかくは事實でないといふ。雛鷄は常に牝鷄に連れられて步いてゐるものだといふ。俳家の猫の戀も間違つ〔て〕ゐるといふ。私のうちの猫は正月に戀をして三月に

子を生んで五月に又戀をする。再度の戀の時は子供を放り出して構はない。つまり二度さかる。しかも兩方とも春ぢやないといふ。油かす（約束の）を持つて來て楓の盆栽にふりかけて去る。

七月十五日

〇例起。洗面所にて支那人の鄭さん王さん郭さんなるものと合の子の中川さんなるものと一所になる。鄭さんは余の隣室にゐる。王さんは東から二番目なり。寐坊也。今朝看護婦から王さん試驗中は早く起きなくつちや不可ませんよと催促されてゐた。郭さんは香水だの油だのを持つて顏を洗に出てくる。水の中に香水をたらして身體などを拭いてゐる。しかも附添から支那人は臭くていやだと云つて逃げられたものは此郭さんである。今朝便所へ這入つたら郭さんの名前の貼付けた便器がれい〳〵ときん隱しの前に置いてある。大將便を垂れて戸棚に仕舞ふ事を敢てしなかつたのである。

〇昨日王さんと鄭さん〔が〕隣の部屋で話をしてゐると、病院の男が縁側の硝子障子を拭いてゐるので廊下の仕切りを開けてゐた。一軒置いて隣りの看護婦と支那人と話を始めた。

王「私の顏色は今日は惡いでせう」

看「どうだか、何時も洗顏所で見る丈だから、あすこへ行つて見なければ分りやしない」

王「夫ぢや仕方がない」

看「王さんは丸で駄々つ子の樣だ」

看護婦は夫から鄭さんと話をしてゐた。

「矢張御國が好いでせうね。始めて東京へ來た時は厭でしたらうね」

「えゝ、言葉からして分らない」

「鄭さんは本郷ですか」
「駒場です。青山の電車の終點を下りて」
「農科はあつちにあるんですか」
○今朝東のはづれの看護婦が氷枕の水をあける時、余の石鹸入の中へ其水をどつと入れた。東隣りの後藤さんの看護婦が合の子の中川さんの齒磨入を流の下へ落した。
○昨日は此合の子の中川さんの姉さんが來たといふ。脊が高くつて瘠せて、色が赤く髪が赤いと余の看護婦が云ふ。
○東はづれの患者は慈姑の髪の女のあとへ引移つたのである。氷で冷してゐる。何病だか分らない。看護婦は二人附添つてゐるらしい。
○此間患者の死んだ部屋が又ふさがつたといふから今朝見たら青い蚊帳が垂れてゐた。
○顔を洗ふ時は例の如く陰と思つて部屋へ歸つて縁から往來を見ると番傘の（ママ）相々にした男が通つたので細かい雨が降つてるといふ事が分つた。傘にて短冊の様なものゝなかに三日月が書いてあつた。
○雨ふる。ト一時過歇む。物干に上つて天下を望む。中庭に盆栽を數多並べたり。誰の所有なるやを知らず。
○廣瀬歸芳氏余と前後して入院せしが、此間森巻吉が見舞に行つたら、此院内の空氣がいやだからもう出ると云つてゐたさうである。物干に出て天下を觀望した歸りに室の前を通つて見たら、果して外の人が這入つてゐた。其前の室に御爺さんが一人ゐる。是は文人畫にありさうな白い髯を蓄へてゐる。此間もゐた。蒟蒻の濟んだ今日通つて見るとまだゐる。眼鏡をかけて仰向に寐て本を讀んでゐた。浴衣は手拭をつぎ合せた涼しさうなものである。床に墨畫の文人畫をかけて竹の花活に杜松か何かを活けてゐる。夫は遠州と

か古流とか法に叶つた枝を曲げたり撓はしたりしたものである。此御爺さんは病院を家として此所に落付いて生活してゐるらしい。壁にかけた驗溫表がひら／＼して見えた。其數は十枚程ある。一枚十五日分だから決して昨今の御客ではない。

○今日も支那人が隣の部屋へ來て話してゐる。何を云つてゐるか薩張り分らない。然し其音調の接續高低は言葉の意味が分らない丈それ丈よく分る。寐てゐて近所の部屋へ來た見舞客の談話をきいてゐると意味の分らない時は丁度支那人の談話と同じ趣で聞く事が出來るが、意味が通じるや否や illusion が破れてしまふ。

○三時過やけどの膏藥を貼り易へる。やけどならもつと痛みさうなものだが些とも痛くない。

○風呂場へ行つて足と頭を洗ふ。三助曰くちと御辛抱が足りませんでしたなと。何の意味か分らぬ故え？と聞き返すと又大きな聲でちと御辛抱が足りませんでしたなと云ふ。仕方がないからうんと肯つた。すると少しつめて熱いのを取り替へ引き替へやる人は十日位で濟みますと云ふ。余はそんな人があるかと思つた。始めの二三日は熱くて堪らなかつた。

七月十六日

○例起。夜來雨。顏を洗つてもまだ部屋の掃除が出來ず。病院をぶら／＼す。試驗室で胃の中へ管を入れて洗つてゐた。驗便所へ四方八方から便が輻輳して來た。めまぐるしく二人ばかりの看護婦が働いてゐた。どうするのだか能く分らない。狹い部屋に便器が一杯ならんでゐるので足を入れやうがなかつた。看護婦は水の自由に出る水道の栓を前に控えて何かしてゐたらしかつた。

○座敷の硝子を開けて置くと廊下を通る人は大概部部の中をのぞき込んで行く。見舞人でも患者でも看護

婦でもさうである。たゞ合の子の中山さん丈は眞直を見て行く。是はさすがに西洋流な所がある。
○鏡で舌を見たら牛の舌を思ひ出した。少し白いけれども滑かで肌理が大變こまかになつた。さうして見てゐると舌の上が萬遍なく波の樣に動く。是は新發見である。此間新胃腸病學を讀んだら舌は診斷の足しにはならないとあつた。咀嚼をよくするものは舌苔がない。咀嚼のわるいものは舌苔が多いとあつた。入院當時は舌が厚かつたしかも焦げて黑かつた。今はかくの如しだが咀嚼は同じ事である。如何。矢張り胃がよくなつたからぢやないか。
○今日は盆の十六日である。
○體重をはかる。四十八キロ七百。
○隣の支那人が入らつしやい、入らつしやいと云つて寄席かなんぞの假聲を使ふ。入院の同國人の話に來てゐたものが部屋を出て行くとき又入らつしやいと大きな聲を出す。

七月十七日

例起。細雨霏々。
○昨夕方臼川來。銀行の監査役になつたといふ。是は親類の銀行のよし。不動貯蓄とかで資本金は十萬位の小さなもの。
○看護婦がもう御用もないから御ひまをくれといふ。小石川の親類から呼びに來たが多分國のいとこが死んで國で歸れといふんではなからうかと云ふ。妻にあした病院の仕拂日だから例仕拂と看護婦の日當を持つてくる樣に手紙を出す
○廣田道太郎がくる。やがと皆川と鎌田と佐治が三人揃つてくる。それに東が宅から着物をもつてくる。

○森田がくる。みんな歸る。東が辨當を食つて去る。
○憐[原]りの病人が退院。病氣はよくない樣である。氣の毒である。商人らし。
○三時過便所へ行つたら一軒置いて東隣りの十七號の患者も何時の間にか退院してゐる。是は蒼い顔の五十代の爺さんであつた。白髮頭を五分刈にして、夜中でもよく咳をしてゐた。

七月十八日

○例起。細雨。しばらくして歇む。
○一軒置いて西隣りの御婆さんは名古屋とか横濱とかの財産家で、大きな宿屋を作つて人に借[原]してゐるんだとか云ふ。地面と屋敷とかゞ五萬坪あるといふ。それでたつた一人で毫も親類がない。自分の所有をどうしたら好からうと云ふのださうである。是は看護婦の話なり。おれに相談すれば何うでもしてやると答へた。
○此間出た慈姑の髮の女は名古屋とかの財産家で未亡人ださうである。病院へ這入つても間食ばかりしてゐる。食物がまづいとか何とか云つてゐる。あるとき看護婦が行つたら稻荷壽司を食つてゐたさうである。
○昨日退院した隣りの後藤さんは古着屋ださうである。
○突然○○○○が見舞にくる。肺病で國へ歸つて仕舞つたと聞いたが、どうしたかと思つたら此三月頃出て來たのだといふ。弓削田から病氣の事を聞いたと云つてゐた。
○森田が昨日生田の原稿を持つて來たのをいけないと云つたら、無斷でそれを社へ廻して仕舞つた。癪に障るから自分で書いてひる迄に社へ持たしてやつた。
○妻來

○病院の部屋が一つ空くとすぐ塞がる。昨日の後藤さんの部屋ももう塞つた。

七月十九日

例起。輕陰。
○管が來る。重武が一本足で鷺の樣に立つ事を覺えたといふ。
○隣り〔の〕患者が十二支腸蟲で驅蟲をして、ひよろ／＼して余の室へ這入つてくる。眼がくらんだんだといふ。
○高田の姉がくる。
○始めて外出。髮を刈る。叮嚀なる刈方に驚ろいた。仕舞に櫛と髮剃とを重ねて頭の周圍をぞりぞりと剃つた。鋏で髮をかるのみか、髮剃で髮をそるのは珍らしい事である。十二錢の所を二十錢やつて歸る。此髮を刈つた男余の頭を刈りながら「好い毛ですね。鏝を使つて曲げた樣だと云つて何返もほめる
○栗原古城來。晩食をくつて九時頃迄話す。平田禿木氏の弟の死んだ話をきく

七月二十日

例起。晴。隣りの患〔者〕顏洗場にて昨日は失禮しましたといふ。
○雲出づ。白い雲が薄く濁つた中かに、微かに赤みを帶びてゐる。その奥には紫の匂も見える。數は切れる樣に續がる樣に澤山であつた。其背景たる青空もつや消しである。暖かく藏れてゐる。冴えたぎら／＼したものではない。嫩雲である。
○森田、東來。湯に入つて身體を拭く。

○山田茂子來。女郎花　桔梗、くわりんばいを呉れる。
○此朝菊とりうせいと樺色の八重の襞の亂れたのを買ふ。
○橋口清來。グロクスニやとかいふ花をくれる。葉を切つて砂に埋れば接くといふ。熱帶の植物で尤も熾な色をなす。花の形はまだ知らず、蕾は細長く釣鐘の如し。豐隆來、パナマの帽子を被つてゐる。

七月二十一日

○例起。かたまつた糞が出る。此二三日然り。
○昨夜電車の通る往來に荷車の音とがや〳〵いふ人聲が耳に入つて眼が覺めたから、も〔う〕夜が明けたのかと思つたらまだ三時であつた。何事か分らず。
熱帶の花　白いくわりんばいと對して異彩を放つ。强烈なる色のうちに紫と赤と黑を藏す。
○朝原稿をかいてゐると芥舟がくる。少し待つてもらう所へ長谷川達子がくる。絹絲をかゞつて作つた薔をくれる。半日ばかり毎日やつて十日かゝつたといふ。明朝國へ歸るといふ。
○入浴。太田善男來長く話して歸る。
○非常に暑い日なり。昨日から始めて暑い日を經驗ス。今日は飯を食つてもあつい。汗が出る。
○蒟蒻をやめてから既に七日になるよし早きもの也。

七月二十二日

○例起。痳苦しき晩を過ごしたり。最初眼が覺めたら電車の音がするのでもう夜が明けたのかと思つたらまだ十二時前であつた。次にもう障子が薄明るくなつてゐたからと思つてマッチを擦つて時計を見たら一

時過であつた。障子には廊[原]下の電燈が映つてゐたのである。うと〳〵して四時半にまた眼がさめた。足を布團の上で右へやり左りへやり仕舞には厚い寐床から疊の上へ落ちて見たくなつた。

○昨夜は日比谷公園に散歩した。噴水に月が映るさまが面白かつた。

○朝植木に水をやつて有樂町山下町を散歩。渴。茶を一合程のむ。

○昨日芥舟が來て床の花を見て、あれは唐菖蒲といふものだと敎へた。バイブルにある野の百合といふのはあの事だと云つた。

○桐生悠々來。中村是公來。蚊遣香をくれる。小使が間違へ早稻田へ持つて行つた事は、其小使が又病院へ持つて來たとき始めて分つた。兵糧がなくなつたら何時でもさう云へと云つて歸る。

○森卷吉來。小宮來、明日歸るといふ。森田來。

○妻來。夕食後アイスクリームを食ふ。

○夜散步。烏森、愛宕町、　湖月といふ料理屋だの、藝者屋のある所を通る。夏の暑い晩だから家のうちが大槪〔見〕える。ある家は簀垂をかけて奧の軒に岐阜提灯をつけて蟲を鳴かしてゐた。ある米屋では二階で謠をうたつてる下に凉臺を往來へ出して三四人腰をかけて、其一人が尺八を吹いてる〔た〕。ある家では裸の男が二人できやりをうたつてゐた。ある車〔屋〕の帳場では是も裸が五六人一室に思ひ〳〵の態度で話しをしてゐた中に倶利迦羅の男が床几の樣なものに腰をかけて、一同より少し高く腰を据えてゐたのが目に立つた。ある家では主人と客と相談して謠をうたつてゐた。ふしも分らないし、字も讀めないからしかつた。始め其聲が耳に入つたときは又此所でもキヤリを遣つてゐるなと思つた。ある家は五六組の柔術遣ひが汗を流してゐた。

○蚊がぶん〳〵くる。よく見たら是公から貰つた蚊遣香が消えてゐた。

七月二十三日

例起。日比谷公園散歩。今日は午飯を食つてから五時間して胃の消化の試驗。

○朝小宮を送つて阿部、安倍、森田がくる。原稿二三を持つてくる。兄來。アイスクリームを食ふ。森田歸る。

渡邊和太郎來。華山の一掃百態をくれる。（審美書院出版）。

戸川秋骨、田部隆次來。

七月二十四日

例起。

○昨夜銀座を散歩。今朝は日比谷。

○昨日午飯後五時間目に消化の試驗をやる。四十グラム殘る。食事は三の大で藥を兩食の間に一度飲んで、しかも四十グラム殘つては心細い。余のからだでは三の大以上を食はなければ間に合はぬ由

○二等に大きな圓錐形の金魚鉢に金魚を澤山買つて眺めてゐる人がある。風鈴を鳴らし釣忽をかけて樂んでゐる人がある。蟲籠をつるしてゐる人がある。

○石井柏亭がきて畫集の序をかけといふ。生田長江もくる。橋本左五が來る。昨日着いたといふ。滿洲で農業計畫のため。

七月二十五日

例起。上厠便通なし。胃液の試驗のため五時三十分燒パン一切白湯一合を飲む。散歩露國公使館の竹の色、壁にかゝる蔦の色を見る。七時九分前試驗室に行つて、クダにて胃の酸をとる。序に洗滌。成績可なる方。肉を半人前增してくれる事になる。
○物集芳子和子來。森田來。一番最初に倉光空喝來。うそを書きましたと云つて名士禪とかいふものを見せる。余に關したから噓をかいてゐる。君は新聞記者としてづうづうしくなつてゐる上に座禪などをやつて二重にづうづうしくなつてゐると云つてやつた。
○東來。渡邊和太郎兄弟來。下から廣瀨歸芳常磐大定をつれてくる。そこへ中村是公來。見なれぬ人を連れて、いやし又來やうといふて去る。階下に見なれぬ人を追馳けて挨拶をしたら龍居賴三であつた。客がつゞいて少し頭が痛くなつた。

七月二十六日

○夜來强雨の聲をきく。すさまじかりし。例起。濛々。下の部屋で飼ふ蟲鳴く。
○物集の御父さんが病氣だといふ。さうして賴んでも醫者にかゝつてくれぬといふ。いえ掛りませんといふのださうである。
○昨日東云ふ奥さんは小供の避暑地をさがしに出られた。
○野村來四時頃からロゼッタホテルで親睦會がある由。皆川廣田來。妻來。歸る時車をたのむ早稻田迄七十五錢といふ。
○階下のジエレニアム入院當時に見たとき旣に咲けり。今朝ふと氣が付て手摺から下を見ると依然として咲いてゐる。長くもつ花なり。時日の早く立つ事を忘る。

○皆川今夜の汽車にて郷里に向つて去る。

七月二十七日

○例起。陰曇。
○昨日花賣來らず。洗顔所にて菊の枯葉を捩りて再び竹筒に插む。食前十五分程散歩。
○一昨日より菜を二品つけてくれる。晩には玉子燒とコールドミート二切を食ふ。
○西隣の支那人二等に去つて代りに若い人來る。看護婦と話してゐる。書生の町人なり。金持ならん。
○グロキシニヤ花落つ。洗顔所の手摺に乘せて置く。
○來訪者、寶生新、見舞に烟草をくれる。森治厚太郎。鈴木の弟。
○石井柏亭の新畫譜の序をかく

七月二十八日

○例起。晴、もや未だ晴れず。日比谷公園散歩。桐の葉の丸くて小さい様な樹に長い細い實がなる。
○昨夜は銀座を散歩信盛堂で齒磨と石鹼をかふ。天厚上堂の屋根に上る。脚の下を見て身のすくむやうな氣がした。
○朝漸く落付く。少々讀書。森圓月長い萌黃の風呂敷に包んだ桐の箱を抱いてくる。子規の書はまだ〱と云ふ處なるべし。眞蹟のよしを別に添たる卷物の初に書きしるす
○坂本四方太、森田草平來。圓月亦來。是から不折の處へ行くといふ。石井柏亭來。夫から小林郁がくる。夫から飯田政良がくる。妻は仕事を持參して取り出すひまなくして歸る。

○小林がきて承はれば胃がんだとかいふ話でといふ。橋口もさう云ふ。
○一軒置いて西の御婆さんも退院の模樣。訪問の若い女、洗顏所で洗濯をしてゐた附添の女に、今年中もつでせうかと聞いてゐる。御婆さんは胃がんの由然し步行自由也。
○東のはづれの人退院（騙蟲中子供の病氣のよしで）。
○夜銀座散步、裏通りで女がオルガンに合せて踴つてゐた。

七月二十九日

例起。日比谷公園散步。帝國劇場、警視廳等の（新築中）間を通り拔ける
○昨日の胃の消化の試驗は二十グラム程殘りし由
○西村醉夢來り。「雜誌」（原）學生揭載の談話を筆記す。談は英語教育に就てなり
○北海道有珠山破裂。鐵嶺丸（原）沈沒。白瀨中尉の南極探檢
○是公來。今日三時の瀛車で歸るといふ。森圓月來懸物の箱をとつて去る。

七月三十日

例より十分遲く起る。五時十分。四時頃眼覺む。終夜夢を見る。
○昨夜は銀座散步、電氣噴水を見、蓄音機を二所できく。發明舘を見る。雨一二滴顏にあたる。
○今朝例の如く日比谷散步序に平野屋の新築三井集會所の前を通る。
○體重をはかる。四十九キロ四百也。前は四十八キロ百五十。
○奧太一郎熊本より出京病院訪問。森圓月金婚式の書畫帖を持つて來て見せてくれる。森田草平來。中村

翁來。

○退院してもよろしからうと云ふ。明日退院に决す。一軒置いて東の人も退院、一軒置いて西の御婆さんも退院挨拶にくる。下の廣瀨歸芳も退院是も挨拶にくる。

○雨ぱら／＼落つ。晩に南佐久間町愛宕下町日蔭〔町〕銀座を散步。暗い小路へ這入つたら天井に頭の屆きさうな家でヴイオリンを彈いてゐた。其隣りで婆さんが南無妙法蓮華經と大きな聲を出してゐた。少し行くと左側の二階家の奧で眼鏡をかけた婆さんが薩摩琵琶を彈いてゐた。謠つてゐるものも女である。よく見ると妙齡の女であつた。机を置いて本を載せて小さな聲を出してゐた。婆さんが大きな聲で敎へてゐる。十許の女の子が坐つてゐた。濱の家の裏で擦硝子に歌澤とかいてあつた。二階で歌つてゐた。

七月三十一日

例起。曇。日比谷公園散步。

○八時橋本左五來。九時の汽車で三島へ行つて大坂へ寄るとの事也。

○一昨日森圓月の置いて行つた扇に何か書いてくれと賴まれてゐるので詩でも書かうと思つて、考へた。沈吟して五言一首を得た。

來宿山中寺、　更加老衲衣、　寂然禪夢底、　窓外白雲歸。

十年來詩を作つた事は殆んどない。自分でも奇な感じがした。扇へ書いた。

○今日退院。

斷片

——明治四十三年夏胃腸病院入院中頃——

○ Idealist トシテノ Ibsen. 迂濶突飛なり。 それを日本の青年が讀んで一圖ニ實社會に影響あるものと速斷して生活に表現せんとする effort ヲナス。Ibsen ノ書いた國にても ideal ナリ。日本ニテハ無論 ideal ナリ。これを履行せんとして窮し窮して煩悶す。寧ろ gratuitous ナ torture ナリ

○アル ism ヲ奉ズルハ可。他ノ ism ヲ排スルハ life ノ diversity ヲ unify セントスル智識慾カ、blind ナル passion [youthful] ニモトヅク。さう片付ねば生きてゐられぬのは monotonous ナ life デナケレバ送レヌト云フ事ナリ。片輪トモ云ヒ得ベシ。life ハ action ニテ determinate ナリ思想（感情）ニ於テ indeterminate ナリ。indeterminate ナルハ茫漠ナル故ニアラズ。アラユル alternative ヲ具備スル故ナリ。

○ Harmony. Life ノ harmony トハアラユル elements ガ援ケ合フテ one end ニ lead スルノ意味ニアラズ。opposing elements, カンセリング factors ニ due place ヲ與ヘテ valuation ノ gradation ヲツケルコトナリ。ダカラ結果ハ resultant ナリ。addition ニアラズ。dualism ニテモ trialism ニテモ差支ナシ。elements ニ balance ガ取レタトキハ inactivity デ差支ナシ。

○ Eucken ハ Sense — Naturalism, Thought — Intellectualism, Humanism 云々（Religion ト Immanent Idealism ヲモ含ム）而シテ是等ノ矛盾衝突より life ニ meaning ヲ見出シ難シト云フ。根本的ニ life トハ one ism ニ支配サレベク（又ハ different isms ガ調和助長シテ one great end ニ lead セザレバナラヌ如クニ考フ。life ヲ斯クナラネバナラヌト考フルハ既ニ prejudice ナリ。life ハカクア

ルモノナリ。

○以太利カラ佛蘭西ニ行ツタ時ハ器械的ニ運搬セラレタルカノ觀アリ。今考ヘテモ物足ラヌ心地ス。以太利佛蘭西間ノ旅行ハ夫デヨシ。モシ life 全體ガカク器械的ニ運搬セラル、モノトスレバ情ナクナル。シテ見レバ吾々ノ life ハ吾々ノ will デ lead セザルベカラズ

○（セザルベカラズ）トハ此場合ニ於テ prejudice ニアラズ。現ニ吾人ノ life ハ吾人ノ will ニテ lead シツ、アルガ故ニ此 will ガ全く不用ニ歸シタルとキ物足らぬ感ヲ起スナリ。

○同時ニ吾人ノ life ハ悉ク自己ノ will デ lead シツ、アラヌ事モ fact ナリ。是ヲ will アリト片付ケ will ナシト片付ケ、而シテ我儘ナ egoism ヲ主張シテ威張リ。powerless ナ pessimism ヲ唱ヘテ悲觀スルハ全ク片眼ナレバナリ。

○ Practical ナ問題ハ何處迄ガ自分ノ will デナク、何處迄ガ他ノ will モシクハ nature ノ爲ニ支配セラルベキカヲ極める丈ナリ

○此 proportion ハ時ト場合デ定マル

○故ニ universal ナ且ツ concrete ナ事ハ云ヘメナリ。云ヘバ formal ニ云ヘル丈ナリ

○放タレルト云フコハ一方ニ囚ヘラル、ト云フ事なり。

○ Emancipation ガ modern cry デアルト同時〔ニ〕union and organization ガ modern cry デアル。ソレガ矛盾ダト云フ。何ノ矛盾カアラン。何ノ modern カアラン。昔ヨリ然リ。同ジ形式は何時デモ繰返サレテゐる也。

○ Capitalist ハ union ト organization ヲ說キ又之ヲ實行ス。去レド彼等自身ノ business 以外ノ con-

duct ハ emancipation ノ權化ニ過ギズ。國家ノタメニ設ケラレタル機關 陸海軍、教育其他ハ又 union ト organization 黨ナリ。去レド國家ノ爲ニ存在セザル彼等ノ private life ハ emancipation ノ cry ニ過ギズ

○前者ト逆ナル性質ノ artist ハ固ヨリ大體ニ於テ emancipation ヲ本音トシテ cry スルモノナリ。去レドモ營業的ニ又ハ勢力擴張ノ上ニテハ自然ノ結果 union ト organization ナリ。俗ニ之ヲ黨同異伐と云ふ。

○ Napoleon, Wellington, Nelson, 東郷大將、Christ, Buddha —— hero ノ時代ハ漸ク passing. Why? Individualism, Intellectualism, equality.　えらくならうと云ふ attempt コトニ己レ一人偉くならうと云ふのは attempt ニ於テ anachronism デアルシ、desire ニ於テ illusion デアル。

○われ自身ニ depend シテ事ガナセル時代ハ交通ノ不便ナ世ノ事也。education ノ普及セザル時代ノ事也。

○今ノ世ハ個人ガ一般ノ community ニ depend シテ生キル程度ノ多キ時代ナリ昔ハ community ガ個人ニ depend シテ生存スル時代ナリ、

○個人そのものは夫程 account ニ入らず。平凡ナルものを適當ナ circumstances ノ下ニ置カレヽバ相應ナモノニナルナリ、金持ノ馬鹿息子ガ大學ヲ卒業シテ留學ヲスレバ、貧乏人ノ頭腦アル青年よりモ（えラク）ナルナリ、

○芝居（筋ト技巧）、下手な筋を優れたる技巧を以て表現するは腐つた鷄卵に第一流ノ cookery ノ極致ヲ

盡すが如し。上手な筋を愚なる技巧デ演ズルハうち立ての蕎麥を露なしに食ふが如し。

創作（人生と藝術）もこれニ似たり。

○創作の depth は其内容のまとまりにあり。一句ニまとまるにあり。人生を道破セル一句にまとまるにあり。

故ニまとまる樣に書いてなければならず、又まとまる樣に讀まねばならず

故に創作家ノ philosophy ノ必要なる程度に於テ讀者ノ philosophy も必要なり。

一句にまとまらずして、此一句の力を冥々に感得する事あり。此時讀者ハたゞ咏嘆ス。たゞ之を道破セ（原）ルものは批評家なり

始めから一句にまとまらずして展開的のものあり、此時ノ面白味は平面也故ニ depth ヲナサズ

其他ノ意味ニ於テまとまらぬものは愚作なり。

○一句ニまとまるといふ事は particular case ガ general case ニ reduce サレルト云フ意味なり。更ニ云ヘバ particular case ノ application ガ廣キナリ。particular case ガ孤立セル particular case デナクテ given species ノ type トシテ見ルヲ得ルガ故ナリ（此意味ノ type ハ平凡トカ型トカ云フ type ニアラズ）、ツマリ融通ノ利ク particular case ナル故ニ深キナリ。

故ニ particular デアルト共に universal ナル tendency ヲ有スルナリ。permanent ナル感ジヲ與フルナリ。

○ particularity ト universality ノ一致スル所ガ極トナル。

眞ノ意味に於ル particular ハ名ノ示ス如ク particular ナリ。generalize シ難キモノナリ。scientist ノ collect スル零碎ノ instance ナリ。

故ニ information ニハナル。然シナガラ夫以外ニハ感興ナシ。要スルニ一種ノ surprise モシクハ stimulus ヲ與フル丈ナリ。

此 single, isolated instances ヲアツメテ其ウチヨリ common ナ所ヲ引キ拔ケバ generalization ガ出來ル。(science)

所謂 depth ノアル創作はカク generalize サレタ truth ヲ代表スベキ *particular* case ナリ。*model* example ナリ

○けれども此 generalization ニアフ particular ヲサガサウトスルト出來損フナリ

例(性格描寫ノ如シ。original conception ヲ以テ、其 conception ニ合フ樣ニカクト屹度型ニ落チル。particular デ universal ダケレド死ヌト云フ弊ニナル。ダカラ original conception ヲ捨テテ particular カラ出テサウシテ其結果ガ一種ノ conception ヲ與ヘル樣ニスベキデアル。要スルニ性格ハ conception カラ來ルモノデハナイ。conception ハ數多ノ實際ノ character ノ generalization デ人間カラ二等親ニモ三等親ニモ離レテゐる。ダカラ性格ハ consistent ナルヨリハ活動スル方ガ好い。consistent デ死ンダ character ハヨクアル。矛盾シテ活動スルノモアル。要スルニカヽル人ヲ書カウトキメテ掛ツテハ死ニヤスイ。たゞ斯ク云フタ斯ク行ツタ、斯ク考ヘタト云フ圖ヲツヾケテ行ツテ其圖ガ、枚々々ニ生キてゐれば前後ハ矛盾シテモ活タ人間ガ出來ルナリ。如何トナレバ實際ノ人間ハいくらでも矛盾シテゐるからである。

たゞ活躍スル樣ニ書かんと力むべし。かゝる性格ヲ書かうと力むベカラズ。

性格ガ出ルト云フ事ハ(余ノ考デハ)取モ直サズ其人間ガ生キテゐると云ふ事也其人ノ quality ガ describe サレルト云フ意味ニ取ツテハ間違である。今ノ評家は性格云々と云フガ、此點ニ於テ注意ヲ拂ツテゐないらしい)

○作物ノ批評ガ肯綮ニ當ラヌ時作者ハ驚ろいたり、不平を云つたり、憤つたりする。然し夫ハ無理デアル。自信ノアル

Purely artistic ナ批評（複雜ナ他ノ事情ヲ交ヘヌ）デスラ、みんな各自勝手ナモノデアル。

批評デスラ其通リデアル。況ンヤ出鱈目ヂヤ、（此出鱈目ハ大分アル）

然シ多クノ批評ノウチデドレガ一番正シイカヾ決定出來ルモノトシテ、（夫ハ容易ニ出來ナイ、或ハ不可能カモ知レナイ）、其正シイノガ勝ヲ占メ得ルト思フハ可笑イ事デアル。

Art ノ世界デハ能ク人ガ斯云フ迷信ニ近イ考ヲ持ツテゐる。今日ノ作物ガ今日人ニ認メラレナクテモ、其作物ガヨクアリサヘスレバ何時カ一度ハ世ニ認メラレルヿガアルト信ジテゐるらしい。

正直ナラ何時カ一度ハ成功スルト信ジテゐる連中ト同ジデアル。道德ノ世界デハ（然シ）善ガ勝ツテ惡ガ亡ビルモノト版行ノ樣ニ人ガ信ジテゐナイ。ダカラ道德界ニ於ル觀察點ガ美術界ニ於ル觀察ヨリモ進ンデゐるノデアル。今更天道是耶非カ何ゾト叫ブ野暮ナモノハナイ。

正直ナラ何時カ一度ハ出世スルカモ知レナイ、然シ出世スル程人ニ認メラレル前ニ免職ニナレハソレギリデアル。後世ノ judgment ハ公平だと云つテ事蹟ガ湮滅スレバ judge シヤウガナイ。又後世ハ（公平ナ代リニハ）冷淡ナモノデアル。湮滅シタ事蹟ヲ誰ガ物數奇ニ掘出サウゾ。

辯護士ノ話ニ有罪ノモノガ無罪ニナツタリ無罪ガ有罪ニナツタリスルノハ珍ラシクナイト云フ事デアル。夫ハ其筈だと思フ。それが其筈なら Art ノ世界でもさうぢやないか。（Intellect ノ domain デモ同ジデアル。）時メク學者ニクダラナイノガ澤山アル。隱レタルニ偉イノモゐる。流行ル藪醫モアレバ流行ラヌ眞醫モアル。

Chance ガドノ位 prevail スルカも觀念スレバ夫迄でアル。

此 chance ヲ eliminate スルノガ正シキ人ノ所爲デアル、此 chance ヲ hate スルノガ正シキ人ノ indignation デアル。

○近來は現代的トカ輓近的トカ云フ言葉ヲ無暗ニ使フ。ソウシテ其内容ハトニカク此等ノ言葉ヲ使ッテ其字ヲ知ルヿガ、又は其意味ヲ解スルヿガ、又ハ自カラガ其特色ヲ有スルヿガ誇デアルカノ如ク振舞フ。

ソレハ別段ノ事デナイ様ニナッテゐるガ少シ考ヘルト昔トハ反對デアル。昔ハ古人トカ古代トカヲ尊敬シタモノデアル。支那日本ハ無論デアルシ、西洋デモ Shakespeare トカ Dante トカ Michael Angelo トカヲ art ノ type トシテ之ヲ口ニシタ、(今デモ多少サウデアル。living author ヲ大學デ講義するなんて事ハまあ無イヿニナッテゐる。dignity ニ關スルヿトナッテヰル。)

然ルニ今ハ(コトニ日本)ハ Rodin トカ Ibsen トカ Andreief トカ何トカ新シイ人ノ名前ヲ口ニスルヿガ權威ニナッテゐル。

西洋ハ夫程劇シクナイガ是も大勢ハサウダラウ。少ナクトモ昔シノ大家ニ夫程敬意ヲ拂ハナクナッタヿハ事實ダラロ。

シテ見ルト二十世紀ノ人間ハ自分ト縁ノ遠イ昔ノ人ヲ idolize スルヨリモ自分ト時ヲ同クスル人ヲ尊敬スル又ハ尊敬シ得ル様ニナッタノデアル。

此傾向ヲ極端ヘ持ッテ行クト自己崇拜ト云フヿデアル。(Individualism, egoism)

(否?寧ろ我々ハ egoism カラ出立スルノデハナイカ?自己崇拜ガ第一デ、他人ハ寧ロ第二ニ來ルノデハナイカ。已ヲ得ナイカラ他ヲ崇拜スルノダラウ。古人ハ崇拜シナクテモ好イガ崇拜シテモ自分ノ利害ニ關係シナイカラ別ノ世界ノ事ダカラ公平ニ崇拜スルノダラウ。今人ハ同時ニ生キテゐルカラ何ダ敵ダッテ

悪ク見えルノダラウ。ウチノ下女ガ世間ニ對シテハえライ旦那ノ缺點ヲ列擧スル樣ナモノダラウ）

　古人崇拜ガ衰ヘ、今人崇拜ガ衰ヘ自我崇拜ガ根本ニナル。今ノ日本人ガ西洋人ノ名前ノ新ラシイノヲ引張ツテ來ルノハ此等ヲ崇拜スルヨリモ此等ヲ口ニスル pride ヲ得意トスルノダカラツマリハ池ヲ admire スルノ聲デナクツテ自己ヲ admire スルノ方便デアル

○恰モ輕薄兒ガ富貴權威ノアル人ノ名前ヲ絶えズ口ニシテ夫ト親交アルガ如クニシテ自己ノ虚榮ヲ充スガ如シ。其人一旦富ヲ失ヒ權ヲ失スレバケロリトシテ昨日ノ事ヲ忘ルヽ如クス。　方今西洋ニ名アル大家ト云フモノヲ何カノハヅミデ急ニ名聲ヲ失墜セシメテサウシテ此等ヲ口ニスル日本人ノ顏ヲ見タイ。ケロリトシテそんな人があるかと云ふ風ヲセヌモノ幾人カアル。

　ソンナヿガ試驗出來ルモノカ、價値アルカラホメルノダ、其證據ニハ彼等大家ノ名ヲ一朝ニシテ墜ス人工的手段ハナイジヤナイカト辯ズルカモ知レナイ。サウカモ知レヌ。ケレドモ余ハ公等ニ信用ヲ置カヌモノナリ。公等モシ余ノ信用ヲ得ントナラハ既成ノ名聲ヲ口ニセズ本家本元ノ西洋人ガマダ氣ノツカヌ先ニ、眞ニ價値アル大家ヲ指名シ來レ

○新聞小說ノ運命

○文晁の畫

日　記

――明治四十三年八月六日より明治四十四年一月二十一日まで――

八月六日

十一時の汽車で修善寺に向ふ。東洋城來らず。白切符二枚を懷中して乘る。しまつた事をしたと思ふ。途中車掌が電報を持つて來て、松根は一汽車後れたる故國府津か御殿場で待ち合せろといふ。

○品川から白服の軍人らしき人乘る。絽の小紋の樣に細かい縞の着物をきた人、下女と向側にゐる。紗の羽織に紫の紐をさげてダイヤの指環をはめた男、壯士の親方か辯護士か。義太夫を語る。

○白切符の買ひ餘しの割戻しの件をボイに聞き合はしてもらふ。御殿場で三圓九十六錢を受取る。角の茶屋でいかふ。三時〇九分。五時二十九分迄待つ。御殿場は五月燒けたり。家皆新けれども皆粗末なり。目に入るは富士講のみ、西洋人の出入ちよく／＼見ゆ。

○三島で四十分待つ。大仁へ着いたら車が一挺もゐない。漸く三臺を驅り出す。荷物は荷車で運ぶ。途中雨來る。車夫の脛丈見ゆ。車に提灯の光映る。夫がぐる／＼廻る。道端の草に灯うつる。其外は暗。川かと思ふ。ほろの中から仰向く暗いと思つたものが微かに薄くなつて空につゞいてゐる。黑いのは山か森か近いのか遠いのか分らない。雨ざつと至る。車夫幌をつぐ。蛙の聲夥し。

○菊屋別館着。座敷なし。關子爵の居たといふ部屋に入る。新らしい座敷也。西村家貸切と書いてあつた。今夜丈の都合なり。入浴。喫飯。强雨の聲をきく。

八月七日

雨聲。雨戸をあくれば溪聲なり。上厠無便。浴槽に下る。混雜。妙な工夫をしてひげをそる。朝飯　鶏卵二個。汁一。飯三。飯後上厠便あり。

○東洋城番頭と談判部屋の都合つきかねる樣也。本店なら一間ある由。今の部屋は前にも山が見え、後ろにも山が見え。寐てゐると頭も足も山なり。好い部ならん。十疊と六疊つゞき也。此離れの二階を折れ曲つた角には昨日品川から乘つた軍人が何時の間にか來てゐた。海軍少將の由。

○碧雲山峯をはれやかにす。須臾にして雨。飴賣の笛の聲をきく

○十時本店に移る。三階に入れられる。しばらくして考へると是は宅へ歸るか別の處へ行つた方がよい。十日に來るといふ新築の座敷十疊を談判して借りる事にする。

○胃常ならず。膨滿でもなければ疼痛でもなければ嘈囃でもなくて幾分かそれを具へてゐる。凝と寐てゐる　眠り覺めると多少は好い心持也。とう／＼五時頃迄起たず。アイスクリームを一杯呑む。思ふに朝飯を食ひ過ぎたると汁の實の野菜や、海苔を口にせし爲ならん

○日落つ。隣りで觀世流の謠をうたふ。其隣りで三味線を彈き出す。三味線の方聞き手多し。獨りでジェームスの多元的宇宙を讀む何だか意味が分らず。

○九時に寐る。十時に東洋城來。御上が今御休みになつたと云ふ。十一時頃迄話して歸る。宮樣が「猫」を讀んだ由。

八月八日

雨。五時起上厠便通なし。入浴。浴後胃痙攣を起す。不快堪へがたし。

○十二時頃又入浴又ケイレン。漸く一杯の飯を食ふ。

○隣の客どこかへ行く。雨月半分と藤渡半分を謠ふ。四時過松根より迎、足駄をかりて行く。七時頃晩餐。謠ものをわざ／＼本店から取り寄せる。午よりは食慾あり。松根に含漱劑を作つてもらつてうがひをする。かんの聲が潰れたので咽喉と鼻の間の間（原）を濕すと少しは好い心持なり。鼻涙を拭ふ。

○殿下が余に話をしてくれと松根迄云はれる由。袴も羽織もなし、且此聲では聞く人も話す人も苦痛故斷はる。松根の方でも慣例なき事故御用掛の責任を考へて未だ殿下へは受合はぬよし。

○八時過歸りて服藥。隣りは謠、向座敷は義太夫、辨慶上使の半頃也。一時間半過入浴歸りて又服藥。忽ち胃ケイレンに罹る。どうしても湯がわるい樣に思ふ。

○半夜夢醒む、一體に胸苦しくて堪えがたし。

○余に取つては湯治よりも胃腸病院の方遙かによし。身體が毫も苦痛の訴がなかつた。萬事整頓して心持がよかつた。便通が規則正しくあつた。

八月九日

雨。伊豆鐵道がとまるかも知れぬといふ。

八月十日

八月十一日

八月十二日

夢の如く生死の中程に日を送る。膽汁と酸液を一升程吐いてから漸く人心地なり。氷と牛乳のみにて命を養ふ。あれの報知諸々より至る。東京より水害の聞き合せ來る。湯河原の旅屋流れて其寶物がどことかへ上つたといふ。松根が余の病狀を報知していつでも來られる支度をせよと妻にいつてやつた。それを後から電報で取り消す。

○半夜一息づゝ胃の苦痛を句切つてせい〳〵と生きてゐる心地は苦しい。誰もこれを知るものはない。あつても何うしてくれる事も出來ない。膏汗が顏から脊中へ出る。

八月十三日

○今日も亦あれる。隣の人は先達て立つと云つて雨の爲に二日程延ばした。今日は是非と云つてゐたが此模樣ではどうするか。

○障子を立てゝ寐る。

○午　葛湯、おも湯、玉子豆腐

○晚、重湯一椀、刺身、葛練、

○下女に今日は幾日だねと聞く、多分十四日でせうと云ふ。よく知しませんと云ふ。香氣也。あしたから新聞を御取りなさいといふ。

○下女の話に下の八番の御客が何とかいふ處にゐて、水が出て主人が別莊へ逃げてくれと云ふのに藝者をあげて醉つて寐たら四時頃水が出て山が崩れて見る間に押し流された。逃げた御客は東京へも歸られず三島迄は汽車が通じると云ふので三島迄來てそれから馬車で此處へ來たといふ。

八月十四日

終夜強雨の音を聞く。山聲、樹聲、雨聲、耳を撼かす。三時頃迄眠られず。天明眠覺む。胃部不安。上顚排便。入浴、酸出。苦痛。牛乳、チリ玉、重湯にて朝飯。食後うと〳〵する。諸の聲耳に入る。

十五日

十六日

苦痛一字を書く能はず

十七日

十八日

十九日

ノ事を忘れぬ爲に書く

八月二十日　の四時過なり。

○十七日咄[原]血、熊の膽の如きもの。醫者見て苦い顔す

○十八日東洋城來り、今社から社員一名と胃腸病院の醫師一名をよこす。十二時四十分の汽車で立つと云ふ電話あり。

○同夜二人來。大和堂から長距離電話をかけたら胃腸病院で社へ知らせて、夫から社で驚ろいた由

○十九日又咄[原]血。夫から氷で冷す。安靜療法。硝酸銀

○今朝漸く乳五酌[原]、ソップ五酌[原]、を飲む。二時間後膨滿苦痛。三時間目の藥にて漸く癒る。
○ひるから氣分よし。氷依然。水飴。氷を嚙む。

八月二十一日

○十九日の吐血以後滋養浣腸。食物は流動物也。
○昨日森成氏歸京の筈の處見當たらぬ爲め滯在。
○但し院長よりは着以後直ちに當分其地にとゞまり看護に手を盡すべしと好意の電報あり、
○昨夜終列車にて玄耳來。池邊と相談どんな醫者でもどんな器械でも送る事にした由。來て見れば夫程にもなしといふ。醫者のいふ事をきかぬ爲也といふ。
○始め東洋城が宅へ手紙を出して妻に來る用意をうながす。夫から電報にて見合せろといふ。宅からは忙がしい處〔を〕長距離電話をかける。細君と知らず叮嚀に問答せり。後にて聞けば山田三良の家の電話のよし
○五時半硝酸銀を吞む。
○昨夕澁川一五〇持參。意味不明　妻にきくと是は坂元のはからひの由。相談の上今月の月給の一分として貰ふ事にする
○朝食牛乳一合。半熟鷄卵一個、水飴三匙。
○昨朝は氷嚢の重みに堪えず。今日は何の苦なし。
○澁川十時四十分の汽車で歸る。
○弘法樣の御祭りで四時頃から花火が揚る。目錄を活版にしてある。雷鳴、軍旗、露牡丹、秋の七草色々

なり

八月二十二日

○快晴。牛乳一合、重湯五勺、玉子黄味一つ。
○昨夜は寐ながら弘法様の花火を見る。秋の景色也。
坂、森、妻三人にて椽（原）で水瓜を食ふ。
○昨日松根不來。妃殿下は晩に山莊へ御起（原）の由。
○家のもの夜山莊で酒を酌む。二時過就寢のよし。
○東洋城歸京。十二時頃發
○尺八の大家と三味線と踊子下の廓（原）下で合奏
○坂元森成裏の山で七草を折り來る
○高田早苗投宿

八月二十三日

快晴。女郎花、野菊、男郎花、薄、萩、桔梗、紫の玉（藤の如きもの）
○おくび生臭し。猶出血するものと見ゆ。便に無類血色あり
○高田早苗氏の名刺を番頭持參。坂元に此方の名刺を依頼。高田氏謠をうたひ初（原）む。

八月二十四日（以下九月七日迄夏目鏡記）

朝より顔色惡シ杉本副院長午後四時大仁着ニテ來ル診察ノ後夜八時急ニ吐血五百ガラムト云フ、ノウヒンケツヲオコシ一時人事不省カンフル注射十五食エン注射ニテヤ、生氣ツク皆朝迄モタヌ若ト思フ
社ニ電報ヲカケル夜中子ムラズ

八月二十五日

朝容態聞ケバキケンナレドゴク安靜ニシテ居レバモチナヲスカモ知レヌト云フ杉本氏歸ル
東京ノ家ノ東カラ電話ガカ、今朝一番デ夏目兄上高田姉上御夫婦小供三人高濱さん野上さん森田さん中根倫さんお立ちになりましたと云ふ大塚さん大磯から來ラル安倍さんも來テクレル一汽車ヲクレテ野村さんも來ル
鴻巢氏モ來ラル

八月二十六日

容態ヤ、良好
見舞客　奧村鹿太郎、滿鐵ノ山崎氏、鈴木三重吉、春陽堂、湯淺廉孫、高田知一郎、菅虎雄、森卷吉、看ゴ婦二人、春陽堂ハ菓子折ヲクレル

八月二十七日

容態別ニ異狀ナシ
見舞客
小宮豐隆渡邊和太郎香水とビスケットヲモラフ高尾忠堅早稻田大學ノ學生、早矢仕四郞元同ジ學校ニ居タ人ノヨシ、奧村又モウ少しヨクナツタラ來マストアツタニカヘル其時小供兄姉上倫野村さん一處ニカヘル

八月二十八日

容態別狀ナシ

森成さん東京ニ用事ガ出來テ歸ル病院カラヌカダト云フ先生代理ニヨコシテ呉レル

見舞客

小林郁高須賀淳平石井柏亭行德二郎野間眞綱

八月二十九日　晴

容態良好ニテ此分ナラバ心配ナシトノ事皆安心シテ東京ヘカヘツル

大塚さん菅さん森さん野上さん小林さん湯淺さん野間さん

大倉書店ヨリ見舞狀ニソヘテ小包デ菓子折ヲクレル名古屋ノ鈴木カラ心配シテ毎日容態ヲ電報デシラシテ呉レロト云テクル見舞トシテ金二十五圓クレル其金デ毛布トンヲ買テ病人ニカケヨウト思ヒ野上さんニタノム

八月三十日

晴　容態別ニ異狀ナシ

ヌカダ醫師午後二時ノ汽車ニテ歸ル森成サン入リカワリ東京カラ歸テクル其時行德サン高須賀サン一處ニ歸ル夜[illegible]織ノ中村サンカラ山崎氏ヲヨコシテ御見舞トシテ金三百圓ヲ下サル

八月三十一日

晴　容態異狀ナシ

今日カラソツプヲノマセルト云故鷄トリヲ買テ切テモラヒ酒トツクリヲカリテ其中ヘトリヲ入レユセンニカケテ火鉢デソツプヲコシラエル夕方

名古屋カラ鈴木ガクル二三日前ニアツラエタハネブトンガクル

九月一日

晴　容態ヤヽ良好ナリ

早稲田大學生小林修二郎ト云フ人ガクル中村さんノ使山崎さん歸ル鈴木モ午後カラ歸ルイロ〳〵東京へ買物ヲ頼ム夕方野間さんが東京カラクル

九月二日

晴　容態變りなし

今日カラソツプガ三度ニナル食ヘル事バカリカンガヘテイルヨシ坂元サンガ七時頃カラゲリヲシテ腹ガイタイト云ヒ出スカイロヲコシラヘテ上ル夜九時頃ニナリ内丸サンガ來ル

九月三日

雨　容態異狀ナシ

朝十時ノ汽車デ内丸サンガ歸ル野間サンモ午後一時ノ汽車ニテ鹿兒島へ歸ル

九月四日

晴　容態同じ

朝八時頃湯淺サンが東京カラ歸道ニコル阿部次郎サンガ年當ニクル山形カラ歸リ道東京ヲス通リシテ當地ヘクル病人に話シタラ酒デモノマシテ上ゲロト云フ事故ビールヲ二本小宮サントニ人デノム湯淺サン三時ノ汽車デ歸ル

九月五日

雨　容態だん〳〵よろし

阿部サント小宮サンガサン歩ニ行キ歸リニ草花ヲ取テクル花イケニサス

九月六日

晴　異狀ナシ

今日ハ十時食道ノカン腸ヲスル四人ガヽリニオコシテ大便ヲサセル少シ出タヨシ

ハダカニシテセナカヲアルコールデフキ着物ヲネルト取カヘルワッソト－ノ上ヘナミノフトンヲ二枚カサネテ其上ヘ寝カス皆大変心配シタケド

別ニ變リモナシ大キニ安心阿部サン午後二時ノ汽車デ東京ヘ歸ル

九月七日

雨　容態よろし

今日一番デ坂元サン歸ルカバンヲ持ッテ行ッテモラフ野上サンタケヘノ御土産ニクレル

九月八日

○別るゝや夢一筋の天の川

○秋の江に打ち込む杭の響かな

○秋風や唐紅の咽喉佛

○赤蜻蛉、燕

○languid stillness。weak state。painless。passivity.

○庇護。被庇護。

○氷

○Intellectuality ニ indifference. Self-assertion ニ indifference. 人事ノ葛藤ニ indifference

○goodness, peace, calmness. Out of struggle for existence. material prosperity.

○nature

○Essen、住宅。西洋と日本ノ懸隔。

○自然淘汰に逆ふ療治。小兒の撫育より手がかゝる。半白の人果して此看護をうくる價値ありや
○吾より云へば死にたくなし。只勿體なし。

○九月九日　十一時と二時に間食。アイスクリームは冷たくていやになる。ペプトン・カーニスを五十グラム位宛
○正食　湯煎ソープ三十グ、葛湯百グ、今日から三十を百にス
○アイスクリームの器械は鈴木送る、
○吐血の時モルヒン注射　再度の嘔氣を恐れて

十日

○昨夜森成氏と禁烟の約をなす。今朝臥して思ふ左のみ旨くなけれど夫程害にならぬものを禁ずる必要なし。食後一本宛にす
○森成氏初診の時の胃の亂調の働をかたる
○最後の吐血の時、二回の注射。ブンメルン
○紫苑　みそはぎ
○萬年筆をふる力なし
○ひかん白萩梅林より來る。
○病院で一ヶ月半、修善寺で一ヶ月是から何月かゝるか分らない惜い時間也。小宮云ふ牢へ這入つたと思へ。

○時間を惜いと思ふ程人間に精力が出たのだらう
○森成氏又歸京

十一日
○曹達ビスケツトは十七日頃より
○子供の手紙を讀む。

九月十二日
秋晴　寐ながら空を見る。ひげをそる。
秋晴に病間あるや髭を剃る
秋の空淺黄に澄めり杉に斧
昨夕大和堂來りいふ。仰臥不動の忍耐感心なり是でよくならなければ醫師の責任
○羽根布團を買はぬ理由

九月十三日
○昨夜森成氏歸來。羽根枕。鹽瀬の餡。ソーダビスケツト來る。
○暗雲層疊
○まだ氷嚢を盛る。
○宮本叔氏

○吐血は醫師の責任也と杉本氏いふ

○昨日より妻頭病むとて寐る。

○晝ソップ五十より七十グラムに增

○秋雨蕭々、二絃琴と三味線を合せてゐる

○臼川歸る

○四時頃突然ビスケット一個を森成さんが食はしてくれる。嬉しい事限なし

九月十四日

○よすがらの雨

○　衾に夜寒逼るや雨の音

○　旅にやむ夜寒心や世は情

○一夜眠さめて枕頭に二三子を見る

　蕭々の雨と聞くらん宵の伽

◎　秋風やひゞの入りたる胃の袋

○藝術の議論や人生上の理窟が一時は厭になつた。

　一竿風月、明窓淨几

さう云ふ趣味が募つた。

　微雨當窓冷、一澄洩竹靑　といふ句を得た。

　風流の昔戀しき紙衣かな

○體力日に加はる。床の上にて身體を動かす力、頭を枕にずらす力にて自分によく分る。
○十一時眞のソーダビスケットを半分呉れる。東京より送るものと云ふ。鹽氣ありて些の甘味なし
○二兒皆早く死す。死する時一本の白髮なし。余の兩鬢漸く白からんとして又一縷の命をつなぐ

生殘る吾恥かしや鬢の霜

○四時に灌腸をやるよし。最後の吐血後一週間にして第一灌腸。今日二週間にして第二灌腸なり。宿便出るや否や。

九月十五日

○秋雨山村を鎖す
○昨日灌腸脫便好成蹟
○昨夜東來。洪水の寫眞帖。ロヤルアカデミー　土産
○朝飯ソップ百グラム。ソーダビスケット半片
○

立秋の紺落ち付くや伊豫絣

○

骨立を吹けば疾む身に野分かな

○今朝髮をけづる。

稍寒の鏡もなくに櫛る。

○昨夜より白毛布をかく淸楚佳意

九月十六日

○暗雨將至
○昨夜重湯を呑むまづき事甚し。
　ビスケットに更へる事を談判中々聞いてくれず
○今朝より漸く氷を取り除く
○耕香舘畫賸を見る。蘇氏印譜が見たくなる。
○重湯葛湯水飴の力を借りて仰臥靜かに衰弱の囘復を待つはまだるこき退屈なり併せて長閑なる美はしき心なり。年四十にして始めて赤子の心を得たり。此丹精を敢てする諸人に謝す
○健全なる人の胃潰瘍は三週間で全治する由。余は最後の出血より計算して今三週間目なり。漸く日に半片のビスケットを許さるゝに過ぎず

九月十七日
○一番にて小宮歸る。雨
○安心安神靜意靜情。この忙しき世にかゝる境地に住し得るものは至福也。病の賜也。
○昨夜主人鯛一尾を贈る。氷嚢を取り去れる祝の心にや
　　鯛切れば鱗眼を射る稍寒み

九月十八日
○秋晴澄徹
昨夜は十五夜で美くしき月のよし

○昨夜東洋城歸京の途次寄る。
九雲堂の見舞のコップ虞美人艸の模樣のものをくれる。戸部の一輪插是は本人の土産也。
○地方にて知らぬ人余の病氣を心配するもの澤山ある由難有き事也。京都の髪結某余の小さき寫眞を飾る由。金之助といふ藝者も愛讀者のよし。東洋城より聞く
宮樣余によろしくとの事也。
○今日は體力囘復と思ふ。明日になると夫がイリユージヨンである。今日は切實に何か思ふ明日になると夫がイリユージヨンである。
今朝はソーダビスケツトを一枚もらふ。旨くも何ともなかつた
夢中に獻立などをして樂んでゐたがよくなつて見ると馬鹿氣てゐる
○午食に起き返りて始めて粥半椀を食ふ。起き直りつゝある退儀を思へば粥の味も半分は減る位也。吾は是程疲れたりやと驚く
○一等軍醫正矢島氏伊東迄來れる序にと見舞はる森氏の命令也
○　　病む日又簾の隙より秋の蝶
○晩に百グラムのオートミール旨し
湯煎ソツプ百グラム
玉子豆腐、あん百グラム

九月十九日

○晴

〇昨夜は御月見をするとて妻が宿から栗などを取り寄せてゐた。栗がもう出てゐるかと思つて驚いた

　病んでより白萩に露の繁く降る事よ

〇花が凋むと裏の山から誰かゞ取つて來てくれる。其時は森成さんが大抵一所である。女郎花、薄、桔梗、野菊、あざみに似たものが多い。

〇昨日臼川の送つた宇治拾遺を少し讀む。少し讀むと馬鹿々々しくなる。

〇瓶に插した薄の葉の上に何時の間にか蟋蟀が一匹留つてゐる。風が搖れるたびに搖れてゐる

〇晝のうち恍惚として神遠き思ひあり。生れてより斯の如き遐懷を恣にせる事なし。衰弱の結果にや。夜は却つて寐られず屢眼覺む。昨夜は修善寺の〔原〕大鼓の鳴るを待ちたり

　蜻蛉の夢や幾度杭の先

　蜻蛉や留り損ねて羽の光

〇

　取り留むる命も細き薄かな

九月二十日

夜來の雨。しば／＼眼覺む。

　大風鳴萬木　山雨撼（搖）高樓
　病骨稜如劍　一燈青欲愁

〇東云ふ先生は蒼い〔原〕高々しい顔をしてゐながら食物の事ばかり考へてゐるから可笑しいと。昨日はソツプをやめてオートミールか粥を增す事をねだりて拒絕さる。

間食にミルクとカジノビスケットを食ふは丸で赤子也。

粥を口へ運んでもらう處は赤子也

　佛より痩せて哀れや曼珠沙華

○昨夜看護婦に二度時を聞く。始は四時十分前。後は五時十五分前。修禪寺の太鼓は五時頃より鳴るものと知れり。

○昨日より病前に讀みかけた六づかしい本を寐ながら少々讀むに頭の工合は病前と差して異ならず。其癖起き直りて便器にかゝる事は一世の大事業の如く困難である。かほど衰弱したものが何うして哲學的の書物抔を讀む事が出來るかと思ふと不思議である。妻に其事を話すと、あなたは悪かつた二三日頭が判然し過ぎてみんな困りました。

○蘇氏印略が來る。面白いけれども讀めるのは極めて少ない。

○雨中床屋が來て髭を剃る。

○胸も肩も脊も觸るとぼろ〳〵する

○南畫宗を買はうと思つたが贅澤過ぎるので躊躇す。妻に話すと御買ひなさいといふ。

九月二十一日

○昨夜始めて普通の人の如く眠りたる感あり。節々の痛柔らぎたるためか。體力囘復のためか

○　蟲遠近病む夜ぞ靜なる心

○　餘所心三味聞きゐればそゞろ寒

○　月を亘るわがいたつきや旅に菊

○　起きもならぬわが枕邊や菊を待つ

○朝ォートミール百グラムになる。ソーダビスケット一枚ソップ前に同じ

○昨日宮本博士來診の報あり。日取未だ定まらず。博士は一度余に逢ひたき由過日云はれたる由。額田さんは漱[原]石といふ人はどんな顔か見て置きたいと思つて來たと。

○玄耳より醉古堂劍掃と列仙傳を送り來る。（蘇氏印略の一巻を看通した時也）

○爽颯の秋風椽[原]より入る

○嬉しい。生を九仭に失つて命を一簣につなぎ得たるは嬉しい。

　生き返るわれ嬉しさよ菊の秋

○遠くにて瓦をたゝく音す

○夜半魚池中に躍る水時あつて池に注ぐ。未だ其狀を見たる事なし

○養其無象象故常存守其無體也故全眞全眞相濟可以長生天得其眞故長地得其眞故久人得其眞故壽

（長生詮）洞古經よりか？

○（大通經より？）

靜爲之性心在其中矣動爲之心性在其中矣心生性滅心滅性生現如空無象湛然圓滿

九月二十二日

○秋冷。昨夜は矢張よく眠らず

○　圓覺曾參文字禪

　眉毛今日着前緣

　青山不拒庸人骨

○　　却下九原月在天
　　たそがれに參れと菊の御使ひ

九月二十三日

○昨日より咽喉わろし。濕布
○妻が桑の莨盆を賣つてくる。二圓五十錢といふ。桑は陳腐である。もう一つあつた樟のを見てよければ代へたいと思ふ。松の盆（角）六圓程といふ。奇麗也。たゞ全體透明ならず。且つ丸盆が好ましいと思ふ。妻もしかいふ。賴んで外をさがして見る事にする。
○粥も旨い。ビスケットも旨い。オートミールも旨い。人間食事の旨いのは幸福である。其上大事にされて、顏迄人が洗つてくれる。糞小便の世話は無論の事。これを難有いと云はずんば何をか難有いと云はんや。醫師一人、看護婦二人、妻と外に男一人附添ふて轉地先にあるは華族樣の贅澤也。
○昨日は雨終日。午前にジエームスの講義をよむ。面白い。蘇氏印略を繰返し見る。面白い。會話の本を讀む。面白い。
○昨雨を聞く。夜もやまず。
　　範賴の墓濡るゝらん秋の雨
○　　菊作り門札見れば左京かな
○午前ジエームスを讀み了る。好き本を讀んだ心地す。
○昨夜熱度三十七度一分。輕微の氣管支にて右の方が犯されてゐる由。手を出して本を讀む事を禁ぜらる。
○（病後對鏡）洪水のあとに色なき茄子かな

○家を出る時植木屋の苗から植えて庭に下した鷄頭が三四〔寸〕になつてゐた。どの位に延びたかと思ふ。其頃は芭蕉の影に花隱元といふものも咲いてゐた。

植木屋が此鷄頭を萬代紅といふ。雁來紅の間違かと思つたらさうぢやない。雁來紅は斑入で是は眞赤になるのだと云つた。

○　菜の花の中の小家や桃一木

○　秋淺き樓に一人や小雨がち

○四時過便通始めて尋常に近き色なり。起きるとき横になつて一寸休んで、起き上つて足をベッドから下して休んで漸く便器にかゝる。手は少し力あれど、足は全く萎て丸で腰の拔けた人の如し。甚しき衰弱なり。

九月二十四日

○　秋淺き樓に一人や小雨がち

○　生きて仰ぐ空の高さよ赤蜻蛉

○今日は新鮮のさしみ（もしあれば）を少し食はせてくれる筈。刺身は夫程でもなし

○昨夜右の足の骨が痛むので眠が覺めた。肉がなくて骨許の上へ片々の足を載せたため也。其外尻が痛み手が痲痺して眠の覺むる事多し。

○昨夜痰がつかへて三四度せく。其度に看護婦が起きてくれた。

○今夜は特別列車で觀光團が修善寺へ押かけるよし。其上宮本叔氏と杉本氏もくる由

○　鶺の影穗蓼に長き入日かな

○午飯後髭をそり、髪を梳り、脱糞、衣服を着換へ、坂元の持つて來た新らしい毛布を懸ける。天氣清澄
〔原〕（坂元は昨夜沼津迄來り今朝一番でくる大祭日と日曜と重なる爲也。
○朝 Groce の美學を讀む。
○　一山や秋色々の竹の色
○四時頃楚人冠至る。觀光團と一所也。汽車が一圓いくらとまりが八十五錢馬車が十錢といふ安いもの也
○腹へる。森成氏へ訴へる。拒絶

九月二十五日

○曇。昨日觀光團のため終夜擾々。相變らず眠らず。夜通し風呂場に人氣あり。朝は暗いうちから顏を洗ふ。夜半に下女の笑ふ聲す。黎明に又下女の聲す。思ふに下女は床に入らざりしなるべし。
○昨夜宮本杉本二氏來診。十時頃喫飯。醫師も規律ある生活は送りがたし。其上觀光團にて恐らく眠り得ざりしならん。
○　風流人未死　病裡領清閑
　　日々山中事　朝々見碧山
○宮本氏云ふ今二週間にて歸京し得べし。まづ二十日と見れば可からんと。診斷の結果なり。同氏は杉本氏と午頃歸る。坂元も同時に歸る。
○　古里に歸るは嬉し菊の頃
○午飯に鯛の刺身四切を食はせらる。平常刺身に嗜好なきも矢張旨し。ソーダビスケットに水を塗り食鹽をつけて焙りたるを食ふ。是亦旨し。

○昨日觀光園に加つて見舞に來てくれた畔柳岡田二人去るとて十一時頃來る。

○　靜なる病に秋の空晴れたり

○　菊の宴に心利きたる下部かな

○午後一時楚人冠去る。

　大切に秋を守れと去りにけり

○二時頃より蒸暑、蟬なく。

○クローチエを讀んで疲勞。

○無言の玄境、放恣なる安靜、努力なき想像（原雲の岫を出るが如く。起りて自然に消ゆ。無抵抗の放任、目的なき靜臥。消極に安んずる倦怠。悠々たる精神。罣碍なき活動。苦を感ぜざる程の想像。義務なき腦の作用。

九月二十六日

○昨夜始めて起き直つて食事。横に見る世界と竪に見る天地と異なる事を知る。食事うまし。夜に入つて元氣あり。妻から失心中の事をきく。失心中にも血を吐いて妻の肩へ迸れる由。其時間は三十分位注射十六筒といふ。坂元がふるへて時々奥さんしつかりなさいと云つた。電報をかけるのに手がふるへて字が書けなかつた由。余の見たる吐血は僅かに一部分なりしなり。成程夫では危險な筈である。余は今日迄あれ程の吐血で死ぬのは不思議と思ふてゐた。

　人間の血の三分一を吐けば昏睡し。三分二を吐けば死する由

○昨夜は藥の所爲か比較的安眠（四時頃迄）然し夢は始終見たり。友人の坊主が叡山の麓迄うどんを食ふ

たと云つて一時間許りの間に歸つて來た。さうしてうどん程天下に旨いものはないと云つてゐた
○朝始めて起き直つて顔を洗ひ髪を梳る。心地よし。
○始めて床の上に起き上りて坐りたる時、今迄横にのみ見たる世界が竪に見えて新らしき心地なり

　　竪に見て事珍らしや秋の山
　　坐して見る天下の秋も二た月目

○其時松陰に百日紅の殘紅を見る。久しき花なり。どつと床に伏したる前既に咲けるものなり
○病正に輕快に移らんとして、今更病を慕ふの情に堪えず。本復の後はかゝる寛容ある、stress なき生涯、自己の好む儘の心の働きを盡して朝より夕に至る時間、朝夕余の周圍に奉侍して凡て世話と親切を盡す社會の人、知人朋友もしくは余を雇ふ人のインダルジエンス。――是等は悉く一朝の夢と消え去りて、殘るものは鐵の如き堅き世界と、磨き澄まさねばならぬ意志と、戰はねばならぬ社會丈ならん。余は一日も今日の幸福を棄るを欲せず。
　切に考ふれば希望三分二は物質的狀況にあり。金を欲するや切也。
○床に就きたる人の天地は床の上に限らるゝ事無論也。されどもわが病甚しき時の天地は狹き布團の一部分に限られたり。足の付く脊の觸るゝ處腰の据はる所丈にて其他はわが領分にあらぬ心〔地〕なり。衰弱甚しければ容易に動きもならぬ故也。小き枕にてもわが領分と領分でなき所ありき頭を動かす〔は〕大變な事業也。
○病床のつれ〴〵に妻より吐血の時の模樣をきく。慄然たるものあり。危篤の電報を方々へかけたる由。妻は五六日何も食はなかつた由。森成さんも四五日殆んど飯も食はずに休息せざりし由。顧みれば細き糸の上を歩みて深い谷を渡つた樣なものである。

○看護婦を呼ぶとき杉本さんが早く行かないと間に合はないと云つた由。吐血後一週間は危險なりし由。杉本氏歸る時もう一度吐血すれば助からぬ由を妻に云へる由

○寐られぬ夜

ともし置いて室明き夜の長かな

九月二十七日

○曇。床の上に起きて顏洗、食事、

○昨夜もよく寐ず。寐れば必ず夢を見る。然し寐てゐる事が大變樂になつた。

○午腹減りて殆んど起き直る事能はず。食後疲れて熟睡三十分藥の時間に看護婦に起さる。

○妻君と森成さんと東と朝日瀧へ行つたらしい。午院閑寂

○反物屋が雁皮紙織と、眞綿織を持つてくる。眞綿織は伊豆の大島の產也。雅な質で雅な色なり

○三人觀音樣より歸る。堂守から菊を乞ふて來る。(金をやつて)

○　堂守に菊乞ひ得たる小錢かな

○　力なや痩せたる吾に秋の粥

○　佳き竹に吾名を刻む日長かな

○　見もて行く蘇氏の印譜や竹の露

○範頼の墓守も花を作るから今度はあすこで貰つてくるといふ。

秋草を仕立てつ墓を守る身かな

九月二十八日

○曇。昨夜も不眠。去れども眼が冴えるにあらずうと〳〵として天明に至る也。

　秋の蚊の螫さんとすなり夜明方
　　　　　　　や我を螫さんと

○　頽家の昔も嘸栗の味

○　鮎の丈日に延びつらん病んでより

○　肌寒をかこつも君の情かな

九月二十八日

○昨日昨夜便通二回。一回を胃腸病院に送る。
夜安々と寐る。然し眼未明に覺む。

○桔梗、菊、紫苑、桔梗は濃くふつくらしたり。紫苑は高く大きく薄紫の菊の婆裟たるに似たり

　貧しからぬ秋の便りや枕元

九月二十九日

○　仰臥人如啞　默然對大空
　大空雲不動　終日杳相同

○昨日も髭剃。細君の注意による。始めは頤の下を剃り落しだ時は殘り惜さうなりき

○　京に歸る日も近付いて黄菊哉

○晩に玉子の煎りたるを食ふ

九月三十日

陰。漸々寐心よくなる。

○東京より返事。二日前に送つた便に血は交らない由申し來る

○昨夜オレーフ油を十グラム程飲む。是は酸を抑へる功、いたみをとめる功、幽門の出口を滑にする功。及び滋養の功ある由。[原]（或病人四十筒の注射をした時オレーフで溶解した（藥液の）ために大いに元氣を囘復せる由。

十月一日

○　稻の香や月改まる病心地

○　日似三春永　心隨野水空
　　牀頭花一片　閑落小眠中

○取寄せたる淸六家詩鈔、唐賢詩集、宋元明詩集來

○名古屋の鈴木來る

○午　鯛のうしほを食ふ。

十月二日

○夜寐られず。看護婦に小便をさして貰ふ。三時半。寐れば夢を見る。夢を見ればすぐ覺める。

○明方戸を明ける時の心持

天の河消ゆるか夢の覺束な

○

夢擁銀河白露流
夜分形影一燈愁
旗亭病近修禪寺
聽到晨鐘早上秋

○初めて百舌をきく

裏座敷林に近き百舌の聲

○

歸るは嬉し梧桐の未だ青きうち

○雨猶歇まず。細雨也

○午前雲晴日出づ。ミン／＼猶鳴く

○細君、東、森成どこかへ行つたと見えて音なし。　奥の院。（二十一日の絕食）

○

歸るべくて歸らぬ吾に月今宵

十月三日

○陰。秋かと思へば夏の末、夏の末かと思へば秋。柿も大分赤き由。栗もとうから出てゐる。稻は半分黃ぐと。

雲を洩る日ざしも薄き一葉哉

○小宮が毎日の樣に繪葉書をよこす。歌麿の浮世繪にこんな人になりたいとか、こんな人を演ずる芝居が

見たいとか書いてある。たわいもない事である。
　臼川も自畫の繪葉書をくれる。御能のスケッチを色取つたものである。松風、鉢の木、山姥等である。
たまには文句入である。甚だうまい
○昨夜。鯛の羹たのを食ふ。

　十月四日
○陰　雨を帶ぶ。昨夜雨滴千萬點を聞き盡す。睡眠狀態漸々平生に近づく
○昨日花を更ゆ。コスモス、菊、菊と野菊の中間にて黃なるもの。東君の取つて來てくれたもの
○氣管支漸く治まる
○昨日妻髮を洗ふ。
○殘骸猶春を盛るに堪えたりと前書して
　　甦へる我は夜長に少しづゝ
　骨の上に春滴るや粥の味
米は東京より取り寄せたるものなり
○鶺鴒多き所なり
　　鶺鴒や小松の枝に白き糞
　松濡るゝ。濡るゝは女松。降るは秋雨
○
　寐てゐれば粟に鶉の興もなく
○氣管支にて體を拭く事を禁ぜられたれば觸るとざら〳〵して人間の肌とは覺えず。鷄の羽を引きたる如

し

粟の如き肌を切に守る身かな

○午　障子を開けば晴空澄徹久し振也。體を拭く。垢出で、ぽろ／＼す。寐卷を着更ふ。よき心地なり。やがて腹減りて汗出づ。

○夜は朝食を思ひ、朝は晝飯を思ひ、晝は夕飯を思ふ。命は食にありと。此諺の適切なる余の上に若くなし。自然はよく人間を作れり。余は今食事の事のみ考へて生きてゐる

○

萬事休時一息回。　餘生豈忍比殘灰。
風過梧葉動秋去。　露滴竹根涼氣來。
漫道山中三月滯。　詎知門外一蹊開。
歸期勿後黃花節。　恐有羅聲落舊苔。

十月五日

○晴、稍寒。眠無事、殆んど平生に近し。

○

淋漓鮮血腹中文　嘔照黃昏漾綺紋
入夜通身渾是骨　臥牀如石夢寒雲

○野菜の高き處なりほうれん草の浸し物一人前二十五錢。鷄の高き處也。百目八九十錢。余は日に三百目の湯煎ソップを飲む。其代が日々に二圓乃至三圓也。可驚

○十一日に歸る由。其前にもう一遍便を東京に送りて檢査させると。

○

冷やかな瓦を鳥の遠近す

十月六日

○快晴心地よし。昨夜眠穩。

冷かや人寐靜まり水の音

○昨日森成さん畠山入道とかの城跡へ行つて歸りにあけびといふものを取つてくる。ほけ茄子の小さいのが葡萄のつるになつてゐる樣也うまいよし。女郎花と野菊を澤山取つてくる。莖黄に花青く普通にあらず。野菊が砂壁に映りて暗き所に星の如くに簇がる。

的皪と壁に野菊を照し見る

鳥つゝいて半うつろのあけび哉

○昨日ベアリングの露文學を讀み出す。一昨日にて現今哲學讀了

○

天下自多事　被吹天下風
高秋知鬢白　衰病夢顔紅
懷友雖無到　讀書道不窮
瘠軀猶裏骨　愼勿妄磨礱

十月七日

快晴。安眠常人と同じ。

○朝寒や太鼓に痛き五十棒

○鏡中人已老　嘔血骨猶存

十月八日

○數へると明後日は東京へ歸る日也。嬉しくもある。又厭でもある。歸りたくもある。歸りたくもない。現狀は餘程の苦痛でなければ變る事を敢てし得ないものである。

○顏に漸く血の色が出て來た。

十月九日

○雨濛々。朝食。床の上に起き返りて庭を眺めると殘紅をかすかに着けながら、百日紅が既に黄に染つてゐる。

　先づ黄なる百日紅に小雨かな

○昨日看護婦が裏の縁側に出てもうあの柚が黄になりましたと云ふ。明後日は東京へ歸る日取なり

　いたつきも久しくなりぬ柚は黄に

○コスモスを活けて東が持つて來た。コスモスは干菓子に似てゐると云つたら東は何故ですかと聞いた。何故と聞いちや仕方がないと答へた。花瓶の後ろに銀の袋戸と金の袋戸がある。上が銀で下が金である。中間は砂壁である。其砂壁の所に白と赤い花が點々として美しく映じてゐる。さうして其葉の底が青く銀紙に映つてる。

十月十日

○陰。

○昨夜、寄木細工を取り寄せて色々見る。箱を二つ買ふ。皆婦人趣味なり。あけびの箱を買ふ。又冷へた樟の烟草盆と烟草箱が一昨日出來上る。

○愈明日東京へ歸れると思ふと嬉しい

○　客夢回時一鳥鳴
　　夜來山雨曉來晴
　　孤峯頂上孤松色
　　早映紅暾鬱々明

○　足腰の立たぬ案山子を車かな

○昨夜はやけもの抔を買ふ事を相談する。やるとなると何處も彼處もやらなければならぬので大變になる。細君はなる丈葉書入と修善寺飴と柚羊羹で間に合せて置かうといふ。それもよからうといふ

○神代杉の文庫とあけびの籠を買つて池邊瀧川兩氏にや更に桑の硯箱を坂元に綸縮の兵兒帶を添へてやる事にする。

○　骨許りになりて案山子の浮世かな

○　扶け起す案山子の足

十月十一日

愈歸る日也。雨濛々、人々天を仰ぐ。蒟蒻出來。九時出立の筈。

○甘鯛の頭付にて粥二椀、オートミール一椀をしたゝむ。

○雨の中を馬車にのる。人の考案にて轎の如きものにて二階を下る。夫を馬車の中へ入れる。浴客皆出見る。轎は白布で蔽はる。わが第一の葬式の如し

○雨の中を大仁に至る二月目にて始めて戸外の景色を見る。雨ながら樂し。日に入るもの皆新なり。稲の色尤も目を惹く。竹、松山、岩、木槿　蕎麥、柿、薄、曼珠沙華、射干、悉く愉快なり。山々僅かに紅葉す。秋になつて又來たしと願ふ。

○大仁にて菊屋の主人、番頭先つあり。番頭は人足四人をつれて三島迄來る。漸くに汽車を乗りかゆ、人足なかりせば必ず後れたらん。一等室借切りなり。九人のを六人前出す二十二圓某也　神奈川にて東洋城乗る。大森にて楚人冠乗る。新橋にて人々出迎はる少々驚く直ちに擔架にのる。大抵の人には目禮した積なり。あとで聞けば知らぬ人多し。釣臺で病院に行く。暗い中で四邊更に分らず

○入院故郷に歸るが如し。修善寺より靜なり。面會謝絶、醫局の札をかゝげたる由。壁を塗り交へ疊をかへて待つてゐたと云はれた杉本氏の言葉はまことなり。落付いて寐る。電車の音も左迄ならず。

○終夜雨

十二日

○朝。食パン二片、牛乳一合、ソツプ一合、玉子一個を食ふ。修善寺の倍にあたる

○昨日途中にて

○　病んで來り病んで去る吾に案山子哉

○　濡るゝ[illegible]の間に蕎麥を見付たる

○　藪陰や濡れて立つ鳥蕎麥の花

○稻熟し人癒えて去るや温泉の村

○柿紅葉せり纏はる蔦の青き哉

○就中竹緑也秋の村

○數ふべく大きな芋の葉なりけり

○新らしき命に秋の古きかな

○院長の病氣は胃[illegible]さんに聞く。

　ええ又寒くなつたものですから

今朝妻が來て實はあなたに隱してゐました院長は死んで、葬式には香奠を以て東さんに行つてもらひました。死んだのは先月五日のよしで森成さんが最初に歸つたのは危篤のため後で歸つたのは葬式のためだといふ。わるくなつたのは八月の二十四日頃即ち余の吐血したる頃なり。初め余の森成さんを迎へたる時、院長はわざわざ電報で其地にて充分看護せよと電報をかけたり。治療を受けた余は未だ生きてあり治療を命じたる人は既に死す。驚くべし

　逝く人に留まる人に來る雁

○杉本さんが準備をして待つてゐるといふ。成程疊も新らしく壁を塗りかへ、襖も張り替へたり。居心地頗るよし。

○滿鐵の龍居が來て中村が心配してゐる由を妻に物語る。金が要るなら遠慮なく云へといふ意味らし〔と〕いふ

十月十三日

○陰雨。

○　鷄頭に後れず或夜月の雁

○　釣臺に野菊も見えぬ桐油哉

○安倍、坂元、池邊、來。妻來

○夜十二時地震あり

○ジェームスの死を雜誌にて見る。八月末の事、六十九歳。

十月十四日

○陰雨

○病室の新らしくなりたるを喜んで

〔俳句を書き一[illegible]てあり〕

○昨日滿鐵の山崎氏又見舞を持參。

十月十五日

○　思ひけり既に幾夜の蟋蟀

○曉に氷を摧く音を聞く。はづれの人は胃潰瘍の由。しかも重態[原]と聞く。本復を祈る。

○曉より烈しき雨。恍惚として詩の推敲や俳句の改竄を夢中にやる。

清露下南磵

黄花粲照顏

欲行沿溪遠
　却得與雲還

○Dr. Furnivall ノ死ヲ十月九日の Athenaeum ニ Saturday トアリ

十月十六日

陰。二時半より眼覺む。

　天地有無裏　死生交謝時
　人間失寄託　如囑一藕絲
　命根何處來　靈臺不可知
　窈窕日月遐　岌々萬象危

こゝ迄考へたら看護婦が起き〔て〕掃除を始めた。

○昨夜浣腸

○　幽明忽咫尺　乾坤半餉移
　單[illegible]躋[illegible]界　隻眼排大疑
　幸生天子國　未逢當代師
　四十猶兀々　斯道果屬誰

○鈴木、森田、小宮　次の室に來り語る外にも人ある樣なり

○狩野來る由會はず歸す。昨日の小林醫師も同じ。今朝長與又郎氏戸口迄來て引き返せる由

十月十七日

陰。四時に眼覺む。

縹緲天地外　生死交謝時
杳然無寄託　懸命一藕絲
命根何處在　窈窕不可知
唯覺天日暗　翻怪人間奇
幽明周比隣　乾坤一瞬移
單軀入雙界　隻眼挂大疑
休言閱兩極　曷得窮兩儀
生住天子國　未許稱人師
四十徒兀々　斯道竟屬誰*

朝食前に昨日の詩を改めてこんなものにした。實際の詩である。詩のための詩ではない。だから存して置く。

○病院でも朝五時頃になると大鼓[原]の聲が聞える。始めて聞いた時は恍惚のうちに修善寺に居た樣な心持がした。

○　過ぎし秋を夢みよと打ち覺めよとうつ

*孤愁澹難語　況逢蕭颯悲
仰臥秋已闌　一病欲銀髭
寥廓天空在　默看見萬果枝

十月十七日

○晴。

○昨服部より銀の莨入を取り寄せて見る。森成さんと相談の上、光澤けしの小さい奴を撰びそれに修善寺にて森成國手へと前書して

朝寒も夜寒も人の情かな　といふ句をほる事にする。價は十三圓五十錢也彫賃は知らず

十月十八日

○昨日淺川例次郎来　禮を述ぶ

○同昨日妻来。池邊の所に至り余の旨を傳へたる由を語る

○昨日寐てゐてフラネルの柄を撰ぶ。

○昨日、修善寺の菊屋の朝日より電話、御誂の寄木の箱は數不足故新たに作らせるから待つて呉れといふ。妻にきくと十六個注文したといふ。皆禮にやるなり。

○今朝昨日の古詩を作り了へ帳面の末尾に書く。

〔帳面の末尾より轉出〕

縹緲玄黄外　生死交謝時
杳然無寄託　懸命一藕絲
命根何處是　窈窕不可知
「只驚白日暗　翻怪人間奇」

單心貫雙界　雙眼挂大疑
幽明晦曉變　乾坤頃刻移
敢言闊兩極　曷得明二儀
語默共勃窣　吾事問向誰
孤愁來落枕　[illegible]露蕭颯悲
仰臥人已閑　[illegible]病欲[illegible]髭
寥廓天[illegible]在　高樹空餘枝
對比待悵久　晩懐無盡期

○秋意體によろし。
○今朝眼醒めて發句を思ふ遂にならず

　鳴かぬ夜は蟬も亦死んだと思ふ

と云ふ様な意味のものなり。
○鷗外漁史より「涓滴」一を贈り来る。漱石先生に捧げ上ると書いてありたり　恐縮
○宮本叔氏見舞。東京市[illegible]れりといふ。暫時にして歸り去る。

十月十九日

○快晴。昨夜莨入の上へ貼る樺皮の上へ細字で發句と前書をかく。それを貼り付けて彫る事にする。寫眞では燒き付けがたしといふ。
○朝食前脫便。

○リードのナチユラル　エンド　ソシアル　モラルスを讀み出す。
○菅來る。重武が病氣で鎌倉へ連れて歸つたと云ふ。自分も又床を引き上げて鎌倉に居る由
○内丸來。東洋城來。皆面會謝絕を無視して來る。東洋城と俳句を作る。宮内省御料地のバタを四斤くれる。

十月二十日　快晴

○昨日寅彥より長き手紙屆く。病氣の事を内丸の報知で知れる由。旅行中の事など委細記しあり面白し。
○「思ひ出す事など」一を書き草平に送る。十一時半頃突然花火の音をきく。寺内統監の歸京の由也

十月二十一日

雨。　朝東洋城に端書を出す。菊の句をたのまれた故也。昨日草平來。しばらく話す
○妻來。昨夜よりウォードのダイナミック　ソシオロジーを讀む。獨乙の哲學者の言說は雲の峯に翔し。ウォード抔の著述は地を行く人に似たり。平々たり坦々たり。而して足遂に地を離れず。散文的也
○森成君に病氣前の寫眞を望まれて一句を題す

顧みる我面影やすでに秋

○昨日池邊來。過般來　社から出して呉れた金の所置に就いて自分に一任せよといふ。諾す。實は歸り匆匆妻を以て辨償の事を申し出でたるなり
○一等に入院の人は食道癌一人。胃癌一人。胃潰瘍一人。何れも死ぬ人のみなり。食道癌の人は中途にて

退院他の二人はもう二三日で六づかしいといふ。親類抔聚まる模様也。胃癌の人は死ぬのもあきらめさへすれば何でもないと云ひたる由。

十月二十二日

○陰。昨夜十一時三十分、二時二十分前、四時三十分前に目覺む。

○　曉や夢のこなたに淡き月

是は寐ながらの句也。今朝の實況にはあらず

○縁にベコニヤあり。昨日妻の持つて來たもの。實は菊を買ふ積の處植木屋が十六貫だといふので、森成さんが五貫にまけろと云つたら負けなかつた。歸りに六貫やると云つたら矢張負けなかつた。さうである。今年は水で菊が高いさうである。

○　ぶら下る蜘蛛の糸こそ冷やかに

晝食後始めて室内をあるく。木庵の落款が見たくなりし故也。序に北の廊下口迄出て面會謝絶の貼紙を見る。

十月二十二日

半晴。十一時過。三時半小便をする。

○　嬉しく思ふ蹴鞠の如き菊の影

○昨夜九時半頃胃癌の加藤さんが死んだよし。道理で眼を覺ますと人聲が聞へ[原]た。余（は）看病のため徹夜するのかと思つてゐた。一室に殘るは胃潰瘍の二人である其一人は二三日有つか有たぬかといふ所な

り。

○　肩に來て人懷かしや赤蜻蛉

○　澁柿も熟れて王維の詩集哉

十月二十三日

○晴。夜十時、三時十五分前に目醒む。兩度共小便。

つく／＼と行燈の夜の長さかな

小行燈夜半の秋こそ古めけり

○尻の痛み漸く癒ゆ

○細き足漸く瘠せた身體を支ふ。力石を持ち上げる樣な氣分直る。

○胃潰瘍の人今日晩景に死す。吾等二人のうちわれ一人生殘る。氣の毒の心地す。此病人は嘔氣ありて始終げえ／＼吐きたるに此二三日は靜かなる故或は快氣に向へるかと思へるに實は疲勞の極度を出すの元氣を失ひたるものと知れたり。

十月二十五日

○雨と陰の間こ

桃花馬上少年時（醉吟時）

笑據銀鞍拂柳枝

綠水如今迢遞去

猶可考。

空留明月照秋思
別懸

○一叢の薄に風の强き哉

○雨多き今年と案山子聞くからに

○柿一つ枝に殘りて烏哉

一等患者三名のうち二名死して余獨り生存す。運命の不思議な事を思ひ。上の句あり。

○昨地震あり。看護婦が見舞に來る。長き地震なり。三時半に覺ゆ。

十月二十六日

陰。二十三か二十四の日記をつけ損つたり。

○一昨夜二十四日の晩瀧川玄耳入院。胃カタールか何か分らぬ由。ちつとも知らず余の病氣につき世話をしてくれた男今は余と同じ樣に病院の患者となる。うその樣なり。

○昨日純一來る。純一を見たのは八月六日ぎりなり。少し脊が高くなつた樣なり

○今朝水洟出づ。のどえがらつぽし。始めて袷をきる。

○山田美妙齋の死を新聞できく。癌腫のよし。

十月二十七日

○晴。三時頃より眼覺む。眠つたり覺めたりして例刻迄過ぐ。詩一首句一句を褥中に得。

馬上青年老　鏡中白髮新
幸生天子國　願作太平民

○　君が琴塵を拂へば鳴る秋か。
　　　（寅彦のヴイオリンの事を考へ出して）

○弓削田が來て大分長く話をする。區役所の役人の樣な服裝をしてゐる。

十月二十八日

○晴。身體を拭く。

○昨日東より丼カーの佛譯來る。二三頁讀む。

○明日は靈寶會の日なり。森成さんは行かれるにや。

十月二十九日

○雲出づ。陰晴共に不明。

○昨夜服部より森成さんにやる莨入を持參。細君不在にて金なき故拂はず。小僧又持つて歸る。

○澁川の妻君が來て、ウエーファーとカルヽス煎餅をくれる

○中根榮といふ名古屋の人「思ひ出す事など」を讀んで長い手紙をくれる。

○中村蓊來。西村醉夢來。

○日課　例によりウアードのダイナミック社會學、丼カーの佛譯。

○森成さんが越後高田の翁飴をくれる。一日に三つ許さる。

○雨の音蕭々の夜

十月三十日

○陰　將に晴んとす

○昨日は客四人に接す。社の山本。瀧川の妻君。中村壽。西村醉夢。

○昨日體量をはかる。フランネルに薄い毛織のシャツを着て四十四キロ五百ありたり。もと病院を出た時は四十九キロなにがしなりき

○坂本來（ひるから）、晩妻來。ごた〳〵する氣分にて、自分の思ふ事出來ず。不快なり。

○晩に病院の園丁が手作りの菊二鉢を贈り來る。見事なる白菊也。白菊は院長の遺愛の品のよし。院長は菊を愛でるよし。英國から取寄せた菊が咲いた時見せたら口が利けないので、胸に手をあて〻其手を以て胸を打ち喜を表したりといふ。

○森成さんに萱人を贈る。

○願ふ所は閑靜なり、ざわつく事非常に厭なり

十月三十一日

○曉に昨夜の菊を見る。

○風流の友に逢ひたし。人生だの藝術だの何のかのといふものには逢ひたくなし。

○今の余は人の聲よりも禽の聲を好む。女の顏よりも空の色を好む。客よりも花を好む。談笑よりも默想を好む。遊戯よりも讀書を好む。願ふ所は閑適にあり。厭ふものは塵事なり

○妻が昨夜來る時車屋の菊屋で病院へ行くならと云つてダリヤを呉れた。此ダリヤは丸で菊の様な大きなものである。花瓣の亂れた具合も丸で大輪の菊である。色は赤、薄紅、黄等である。何となく下品で菊とは較べられない。梅もどきの傍へ放り込んだら不釣合な事甚しい。
○余の病中のプログラムを打ち毀して、其損失を償ふて餘りある樣な友人なら余はいつでも歡迎する。余はかくの如き友人を多く持たない事を甚だ口惜く思ふ。
○瀧川の室より小さい菊の土鍋の平たいのに入れて、長い蔓をつけて提げる樣にしたものを呉れる。苔の間に白砂を蒔いて、札を立て、目黒の里としてある。
○神崎さんがダリヤを呉れる。ダリヤは今年に入つて非常に發達した樣である。大輪の菊の如きもの續々出る。
○　明けの菊色未だしき枕元
　　日盛りやしばらく菊を緣のうち
　　緣に上す君が遺愛の白き菊
　　井戸の水汲む白菊の晨哉
　　蔓で提げる目黒の菊を小鉢哉

十一月二日

陰。昨草平來、丸善と南江堂へ電話をかけてもらふ。坂元來、是は醫師の謝禮につき池邊と宮本兩氏の相談の經過を報告の爲め、
○朝倫敦の大谷正信よりプレイゴーアー、及びソサエチー一部寄贈、修善寺へ屆きたるを回送せり

○身體を拭き爪を剪る。

　形ばかりの浴す菊の二日哉

十一月三日

雨。

　三日の菊雨と變るや昨夕より

十一月四日

晴。からだを拭く。

○小使が貸してくれた二鉢の白菊に蟲がつく。小使がそれを癒してやると云つて代りに別の鉢を貸してくれた。それは黄の蕋に細い長花片が間を置いて出てゐるものである。野菊の大きいものである、普通の菊よりも雅である。

○小西海南見舞にくる。讃岐の話をする。

○太田祐二郎が立派な風月堂の菓子折を置いて行く。四日の日附のある菓子折なり。

十一月五日

○ナゴやの鈴木より花瓶を送る旨申し來る。

○森成さんが越後の笹飴をくれる。雅なものなれど旨からず。カステラはと聞いたら胃にも腸にも瓦斯があるから御止しなさいと云つて止められる。

○森圓月來る。疲勞を言譯にして不會。一時間程して小使手紙を以(原)て來る。藏澤の墨竹の軸を添ふ。御見舞とも御土産とも致し進呈すとあり。早速床にかく。

○體重四十五キロ三百。前週より一キロ九百グラム增す。十二貫餘なり。

○病院へ入つたら好い花瓶と好い懸物が欲しいと云つてゐたら、偶然にも森圓月が藏澤の竹をくれる。藏次が花瓶をくれるといふ報知をする。人間萬事かう思ふ樣に行けば難有いものである。

○　笹飴の笹の香や(原)

○菊の鉢は夜見る方よし。

　燭し見るは白き菊なれば明らさま

○夜鐵瓶の音をきく。

十一月六日

○つね子、えい子、あい子三人來る。有樂座の御伽芝居を見に行く。歸りに又寄る。

十一月七日

晴。

○鈴木より花瓶とゞく。平安萬茂堂と蓋に銘あり。

十一月八日

○昨日丸善よりケンブリヂ、英文學史五六二卷を持參す

○昨晩町井さんに菊を買に行つてもらふ。十輪で十二錢也。直ちに鈴木のくれた瓶に插む。
○朝副院長兩名宛の手紙をかく。三等の病人喧騷して堪へがたき故なり。

十一月九日

晴。午前陰に變ず。

十一月十日

秋雨蕭々。
看護婦が小説を讀んでゐる。背皮に表紙だから何だと聞いたら笑つてゐる。見ると虞美人草であつた。六づかしい本だから止せと注告した。

十一月十一日

霧。霧中に電燈を見る。
○金子薫園より短冊と畫帖に題句をたのまる。
○今日は修善寺を出て一ヶ月目なり

十一月十二日

晴。是公、三重吉、山口弘一より來信。
○三重吉喇叭を稽古す。

〇　藏澤の竹を得てより露の庭

〇體量。四十六キロ七百。前週より一キロ四百增加ス。

十一月十三日

晴。

〇新聞で楠緒子さんの死を知る。九日大磯で死んで、十九日に東京で葬式の由。驚く。

〇大塚から楠緒さんの死んだ報知と廣告に友人總代として余の名を用ひて可いかといふ照會が電話でくる。

〇池邊義象氏來。倫敦で逢つたぎりなり

〇東來、洋服を着てゐる。東洋城來。

〇妻來。

十一月十四日

晴

〇昨日山田の奥さんから鉢植の西洋花をもらう。雪の下の樣な葉に菫の樣な紫の花が出てゐる。雪の下の葉よりも遙かによし

〇妻來。横濱に行くといふ。森成さんの出診料として五百圓事務に拂ふ。

〇菅來。銅牛來。

十一月十五日

○晴。床の中で楠緒子さんの爲に手向の句を作る

棺には菊抛げ入れよ有らん程

有る程の菊抛げ入れよ棺の中

○　ひたすらに石を除くれば春の水

十一月十六日

○曇

○昨夜二時頃火事ありと見えて、蒸汽喞筒の鈴の音聞ゆ。今朝きけば麻布長坂の下のよし。

十一月十七日

晴。看護婦が又菊をもらつて來て瓶に活ける。入院患者に植木屋があつて澤山餘つた花を洗面所に置いてどなたでも好ければ持つて入らつしやいと云ふのださうである。菊の名を知らず

○昨日池邊三山蘇天錫の詩集と蛻巖の詩集を持つて來てくれる。

蛻巖の詩の七言絶句抔はゴマカシもの多し。蛻巖の文章に至つては甚だ整はず、まゝ稚氣を交ゆ。

十一月十八日

晴。始めて微霜を見る。須臾にして日の爲に解く。

○今日午飯に始めてめしを食はせる。粥より旨し。

十一月十九日

晴。今日は楠緒さんの葬式である。好き天氣で幸である。

〔〕妻が昨日電話で風邪の由を言ひ越す。今朝森成さんが來〔て〕昨夕見舞に行つたと云ふ。風邪の氣味故處法を置いて歸つたといふ。今日大塚の葬儀には行かれぬらし

十一月二十日

晴。此前入院した時よりは肥ゆ。昨日體重をはかる十二貫九百四十也。一週間に四五百目づゝ增して行く。

十一月二十一日

晴。昨日午後五時頃渡邊和太郎さん横濱より來る。八時頃迄話して歸る。

十一月二十二日

晴。午前石非柏亭來。

十一月二十三日

曇。午後黑田朋信友〔原〕

〔〕蛻巖集後篇の八の終にある梁邦爵の撰した埜巖府君行述の一節に曰く

府君年三十業見二毛。未及五十。齒牙豁。眉髮皓々。七十齒牙不復存一根。眉髮成黃。

十一月二十四日

風。坂元來。晩餐の時電燈悉く消ゆ。二十分後又明なり

十一月二十五日

晴。今日より午も晩も普通の飯となる。午食後二時間程寐る。覺めると頭が痛む、晩食後又寐る。八時頃覺めると今度は胸がわるい、さうして頭も依然として痛い。

十一月二十六日

晴。朝、乳をやめる。頭少しよし

○今日より野菜を少し宛食はせる。生返る心地なり

○池邊三山來。社の金を社長が君にやるから隨意に處置したら善からうといふ。余も其處で貰ふ事にする。せめて二三百圓でも取つて公共の事に使つたらといつたら面倒たと云つて歸つた。

十一月二十七日

○久し振りで妻〔來〕る。頭が痛いといふ。筆は此間からパラチフス、毎日森成さんの厄介になつてゐた由。始めてきく。

十一月二十八日

晴。山田茂子さんから奇麗な薔薇をくれる。
○二三日前から肴が全くいやになる。副食についてゐる些少の野菜を食ふ。
○龍居頼三來訪　明朝九時是公が新橋へ着く由をいふ。山田さんへ電話をかけてうちへ其由を取次いでもらふ。

十一月二十九日
晴。能成來、草平來、是公來。是公は馬車に乘つて來たといふ。看護婦の話也

十一月三十日
雨。寒氣を覺ゆ。始めて入浴心地快。

十二月一日
晝晴。韋柳詩集と王猛詩集を買ふ。

十二月二日
晴。菅の重武が死んだので妻が鎌倉へ行く。重武はベースボルで足を怪我して夫から足を切つて片足になつた。夫から脚氣だと云つて菅が東京から鎌倉へ連れて行つた。さうしたら肋膜だといふ。氣の毒な事をした。

十二月三日

晴。玄耳が來て人から頼まれた短冊をかけといふ。松山がくる。夏以來逢はず。

十二月四日

晴。栗原、梅谷來。○玄耳先生退院。

十二月五日

欠

十二月六日

是公が龍居頼三と一所にくる。龍居君がシルクハットを被つてゐるから何處へ行つたかときいたら、野村龍太の御母さんの葬式に行つた歸りだといふ。

十二月七日

晴。

十二月八日

晴。坂元、小宮、來。夜に入りて東洋城來。

十二月九日

晴。島村苳三來。

十二月十日

晴。生田長江來。行徳來。體重五十一キロ（十三貫五百六十六匁）。夜奥村來。

十二月十一日

晴。内丸、野村。下の竹中から花束をくれる。

妻、東、小供

十二月十二日

晴。太田祐三郎が來る。何時の間にか相場師になつて、結城紬の着物を着てゐるには驚ろいた。

十二月十三日

晴。欠

十二月十四日

晴　菅來

十二月十五日

晴　橋口來。水仙をくれる。支那の沙市の話をする

十二月十六日

晴、欠　夜雨

十二月十七日

晴、高原操來。

十二月十八日

欠　行徳歸。

十二月十九日

欠

十二月二十日

曇。能成來。今明日中に歸省すといふ。

障子をあけると鳶色の霧なり。倫敦の臭がして不愉快なり

十二月二十一日

陰。橋本左五郎來。午過草平豐隆來。豐隆明夕故鄕に出立結婚の爲也。

十二月二十二日

晴。六時草平來。七時山田の奥さん來。西洋花二鉢をくれる。

十二月二十三日

晴。中村是公、龍居賴三、鈴木禎次、高濱虛子、妻

十二月二十四日

晴、體重五二キロ百、

十二月二十五日

晴、三浦見習士官。天生目一治。中村是公。渡邊和太郎。

十二月二十六日

晴。大塚、坂元、竹中、妻、

十二月二十七日
晴。　物集和子、草平、本多直次郎、

十二月二十八日
晴。戸川秋骨　橋本左五郎

十二月二十九日
晴。坂本四方太。坂元雪鳥

十二月三十日
晴。森巻吉、妻

十二月三十一日
欠

一月一日
島村、子供、野上

一月二日

妻來、

一月三日

中根倫、坂元、小林修次郎、野村傳四、東新、

一月四日

晴。夜吉鄕時待。――鼈瀬の大きな菓子折をくれる。重くてやつと有つやうなものなり。風呂敷こと玄關に置いて行つたのを翌日午になつて漸く病室に擔ひ入る。

一月五日

欠

一月六日

欠

一月七日

神崎、野村、體重五三キロ三百（十四貫百七十八匁）

一月八日

欠

一月九日

山田繁（原）子、服部嘉香、妻

一月十日

犬塚武夫、坂元雪鳥、

一月十一日

森田草平、

一月十四日

體重五十四キロ二百（十四貫四百十七匁）

鈴木謹爾、岡田耕三、

一月二十一日

五十四キロ八百（十四貫五百七十六匁）

斷　片　——明治四十三年仲秋頃より明治四十四年初夏頃まで——

○ Art and Life and Philosophy.

Life is art: analizability[sic], synthesizability. Its changability[sic], its dependence on the environment.

○ Philosophy; its isolated character, its unmovability, its fixity and void, it leaves out the sum total of life's content.

○ Philosophy is form, art content: formal ∴ unification possible, at the same time its application possible. Art is never united in principle, its myriad variety, its living powers, its application in real life.

× Joseph Hooker aged 93 Linnean Society June 16.

× Jefferies and Johnson at Reno, July 14.
30.000 people coming
Millionaire suffering from privations

× Münsterberg

× Encyclopædia 11th edition —— 5.0.000
Cambridge university　　Times 4.0.000
　　　　　　　　　　　　　　1.0.000

× Haydns [sic] was reported twice as dead.　On one occasion ——
× Oxford ノ學生ノ literary taste　Litt. D.
　3000 ノ中 twenty ガ Dr. of Lit. ノ學位ヲ得ル處ヘ attend ス
× Dynamic Sociology

1910, 十月 6th. Bergson ノ translater [sic] Monc [sic] Blanc ノ上デ死ス、青年、Pogson. Heart collapse

壽命
○ジェームス*
○俳句　詩
○ Cosmogeny. —— human life
　low temperature — gas
　　　　　　　　　liquid
　　　　　　　　　solid

└─teleological int.──────┘

○ Fechner — consciousness of the earth
  Physicist — molecular activities of cr[y]stal) — analogous ?

○變化 antagonism. fossilized.

○ Continuity ? — Gap ?

  life — death
  organic — inorganic
  light — darkness

○ Metaphysic — pyramid
  Pilgrimage ? — sightseeing ?
  involves an enormous expense.
  ┌—gold in nature
  │ grammar

○ Uniformity. (law of)=both assumption and fact. *Generalization=fact. One generalization excludes all others. ∴ fact becomes untrue, or partial truth is made use of as if it were the whole truth.

○ Eucken, Spiritual Life. Comte Ennui.

○ Altruism and egoism

○ *Sequential change ノ爲ノ disturbance.
  Complexity (opposite qualities) ノ爲ノ disturbance.

○ Disintegration of matter and integration of motion.

Disintegration of motion and integration of matter.

○ Dostoiewskie ノ epileptic
死刑ヲ受ケタルアトノ心。

○統一病。 Phenomenal world.
東との會話

○ James ノ文章*

○ Baudelaire. Douglas Jerrold.

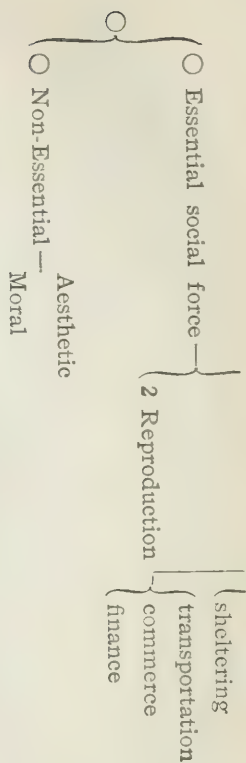
○ Modesty — *Word.*

○ Nature — Humboldt.

○ Universality of consciousness
〃 〃 life

○ { Man as he ideally is — metaphysist(sic)
Man as he has been — evolutionist
Man as he actually is — Empiricist }

○ { ○ 24 hours. — constant
○ Work to go through in a day — incessant increase.
○ Natural conclusion. }

{ 1Self-preservation { feeding
clothing

— impartiality — exclude personal inclination. — mechanicalization of self. — unity extorted out one's supple and susceptible likings. — a means for strangers to trust upon, by lowering oneself to the state of inanimate fixity. — (∴ a means of self-preservation at the expense of his wilfulness.) — there is no spiritual element in stereotyped rules and routines. — Justice — regularity etc.

○卵ヲ孵化スル America ノ駝鳥

○ Crystal ノ normal form ハ polyhedron. Irregularity — angle — facet — axis ガ缺乏ス

○ Planet ノ orbit ハ ellipse. 所ガ完全ナ ellipse デナイノハ mutual attraction ノ law.

○ Kant Earth spheroidal form ニツキ 54

○ Mortality — average 40.　68

○ Prodigality of Nature　卵ノ數　87

○ *Homer, Plato, Aristotle*
(colour sense)
是等ノ現代ニ於ル position ヲ見ても我等と彼等の差ハ昨と今ノ如き觀あり。決〔シテ〕B. C. 何年ノ様な心持セズ。inorganic, organic, living animal, man——此 long evolution カラ見レバ a minute デアル。短カイ。先ヅ no evolution ト見テモよい。然るに吾々は互ニ違フ様ニ思フ。（兄弟デモ友人デモ、外國人ハ無論）大丈人間ガ細カイノデアル。人間ノ細カク發達セルコモ亦驚くべきである。

○無理ニ讀む事。時間ノ制限、多忙、名譽ノ爲め、geniessen ヲ妨グ。詩集を讀む例

○

Simple { Sensation — feeling / Perception — intellect } Synchronical

Complex and higher { Sentiment / Judgment } Synchronical デアル〔ヲ〕得ベシ (intuition)

idea
right or wrong
good or bad

∴ Sentiment ノ importance. As important as intellectual judgment, nay more. Intuition トハ余ノ考デ是ヲ云フナリ、彼等ノ一派ノ psychologist ノ云フ如ク feeling ガ conservative デ intellect ガ progressive ノ case ノミナラズ。

○劃一ノ刑罰ハ不備ナリ。十人ガ十人トモ人ヲ殺シテモ同ジ circumstances ノ下ニ殺スモノナシ。法律ハ之ヲ無視ス。教育モ然リ。

○ Science ハ law of uniformity of time and space ノ上ニ樹立ス、ダカラ世界ノ果ヲ斷ジ數萬年ノ昔を斷ジ、又數千年ノ未來ヲ斷ズ。所ガ human beings ヲ govern スル law ハ（モシアリトスルモ）毫モ application ガ利カナイ。是ハ uniformity ガナイノカ又ハ uniformity ガアツテモ非常ニ複雜デ all cases ガ all different デアルタメデアル。甲ニ金ヲヤツテ悦ンダカラ乙ヘ持ツテ行クト却ツテ怒ラレルヿガアル。是ハ甲ト乙ヲ同じ law ガ govern シテ居ナイト見傚[原]スヨリモ甲ト乙ガ既ニ同一ノモノデナイト見ルベキ〔ガ〕至當デアル。サウシテ、甲、乙、丙、丁、[原]戊、己悉ク different ダトスレバ是等ガ uniformity ノ law ニ govern サレルニシタ所デ similar case ハ生涯ニ一遍モナイ方ガ常識ノ判斷デアル。故ニ law ハ nature ノ world ニ於ル如ク human world ヲ govern シテ居ル。但シ個々人々 infinite variety ヲ構成スル故ニ甲一人ニ apply スル law ヲ發見スルノハ人間ノ手際トシテ too complicate ナモノデアル。ヨシ之ヲ見出シタ所デソレヲ乙ニ apply スルヿハ猶更出來〔ヌ〕ナリ。從ツテ law ハアツテモナイト一般ニ chaotic デアル。夫ダカラ人間ハ昔カラ盲目ダト云ハレテ居ル。始終遣リ損ツテバカリ居ル。此所ニ人間ノ變化ノアル所ガアリ學者ノ及バザル所ガアリ、不可思議ニ見エル所ガアリ、面白イ所

ガアリ口惜イ所ガアルノデアル。土木ノ技師ガ橋ヲ作ル樣ニ萬事前カラ分ツタラバ人間學ヲ研究サヘスレバ政治家ニハスグナレル。ソウシテ內閣總辭職ハ決シテ起リツコナイ譯デアル。タヾ人間學ガ土木工學ノ樣ニ淺薄ナモノデナイノデ天晴ナ學者モ車夫ヤ何カニ對シ遣リ損ナツテ怒ラレタリ、恥ヲカヽセラレタリシテ居ル。ソコガ公平デ非常ニ興味ノアル所デアル。

○ Mechanical invention ト literary invention ノ同ジ所、

1) objective (association and dis.

2) new combination

3) objective ニ放射シテ test ス

Mechanical invention ノ value ハ實地ノ application ガ出來ル出來ナイデキマル。

Literary invention ハ夫程デモナイ樣ニ見エルガ criterion ハ矢張リ冥々ノ間ニ其所ニ歸着シテ居ル。コンナ人間ガアルモノカト云はれるとそれが ultimate ト人モ思ヒ我モ思フ樣也、

けれども mechanical invention ノ方は natureノ reproduction デハ invention ニナラナイノミナラズ、可成 nature カラ飛び離れたものでなくては value ガナイ樣ニ考ヘラレル、所ガ創作ハ nature 其物 (reproduction) デモ value ガアル樣ニ云はれてゐる。

○ Maupassant, La Confession de Théodulfe Sabot. Sabot ガ坊サンノ所ヘ行ツテ confession ヲヤツテ寺ノ修繕ヲ受負ハシテモラフ、

○三重吉、小宮ヲ傍ニ置イテ云フ、何一夜作リデヤッツケテシマイマシタ、ネー小宮、
○作物ヲホメルト得意ニナリ、ワルク云フト悄ゲル、而シテ擧止ハ是ト反對ニホメルト卑下シワルク云フト辯護スル、
○京傳畫、櫻ノ下ニ花魁トカムロ、二圓五十錢、
千蔭、冠一ッ上ニ字アリ、一圓五十錢、
バラニ頬白、蘆雪、　ロセツハ應擧ノ十哲デス、ヨク出來テ居マス、　小竹ノ詩ハ小竹ノ處立[原]チ切ツテアル、
○夜店、　日蓮上人、物茂卿、親鸞上人、弘法大師、
○三色版ノ上ニ司馬江漢描之、
○家内喜多留、子產婦、勝男武士
○大久保から戸山へ拔ける處で雨ニ逢ふ。どうせと思つたからズブ濡デ悠々とあるく、後から馳ケテ通り越すものがある。若葉が dark 〔な〕 杉を背景ニシテ軟かに見える。夫が一齊ニ葉ヲ翻が〔へ〕シタカ[原]ラ軟カイ者が急ニ凄まじくなつて背景ノ杉ノ物すごい色ト調和シタ
○胸突坂の上ヲ通ルト大キナ竹藪ガアッタ幹モ葉モ悉く黄色い、其繁ツタ間から空ガ見える。左右は若葉ノ節、
○ a, b, c, d, l, l. 私ノ教ハルトキハ l, l ジヤナクツテヨ、　サウ段々改良スルノヂ、

日記

——明治四十四年五月九日より十二月十五日まで——

○五月九日○○さんの婚禮披露。五時の約束で五時過し[原]過ぎに西片町へ着いたら門前にもう五六臺の車が見えた。床を前にして婿さんの親類が五人程並んでゐる。何れも黑羽二重の紋付であるが、一寸田舍風にも見える。

○禎次さん丈が縞の着物を着てゐたが、是は自分が縞の着物でも好いかと念を押したので、御交際の爲とも見られた。

○しばらくして○○醫學博士夫婦が來た。是も娘方の親類で余も其方であるからまづ主人側である。博士は絹帽にフロックであつた。大學に二十五年以上教授をしてゐると云つた。學生のときは大學東校とか云つて、自分の妻の父などゝ同じ仲間であつたと云つた。

○又しばらくして○○○男爵夫婦が來た。此妻君は舊幕の遺臣某伯爵の娘である。男爵は大變長く官海に居た丈で[原]古くから名前を聞いてゐたが會つて見ると存外若い顏をしてゐる。頭も黑い。

○御孃さんが出て挨拶をした。穆さんの奥さんも出て御辭儀をした。鈴木の御父さんが御前は○○さんには始めてだらうと云つたらすゞ子さんはとぼけて、始めましてと自分に挨拶をしたから自分も始めましてと頭を下げた。夫丈では物足らなかつたから、い[原]時も御達者で……と付け加へて置いた。實際朝鮮ではすゞ子さんのうちに二週間も世話になつてゐたのである。

○つい[原]御近所に居りますが、……と男爵が博士に挨拶をした。

○すゞ[原]子さんの朝鮮からつれて來た二人の男の子が、後ろから來て自分の頭を撫でゝ[原]て行つた。「おい覺

えてゐるか」と云つたら「知らないや」と答へた
○やがて宴席へ招待される。○○組の重役の○○學士が仲人で、其人と余が英國にゐた時、一面の識があるので余を其隣へやつた。すると余は老博士の上に坐る事になつたので、席をかへて、鈴木の御父さんの上に坐る事にした。余〔の〕上座には白髪の御老人がゐる。御父さんの紹介によると此老人は始終地方〔に〕居て親戚ながらいつも東京にゐた事がない、近頃やつと裁判官をやめて東京へ來たのだと云つた。御爺さんは正四位勳四等……と名[原]刺を一々配つてあるいてゐた。
○やがて御膳が出た。是は儀式的のもので、赤塗の盃に椀が付いてゐる丈である。丸髷に行[原]つた紋付の女が一々客の前へ銚子を持つて來て、一々御辭義[原]をして盃へ酒[原]へ三度に注いで又御辭義[原]をして隣へ行く。みんな伊豫紋の下女ださうである。盃をもらひに歩く時そこに坐つてゐた女に酌を賴まうと思つて、おいと呼びかけて横を向いたら豈計らんやすゞ子さんであつたので驚ろいた位である。椀をあけたら鯛の切身が入つてゐた。それを一口くつて箸を置いた。酒は一口も飲まなかつた。程なく此膳は徹[原]回された。
○次には臺の上に口取を盛つて、傍に刺身をつけた膳を運んだ。猪口もついてゐる。それに鯛つ[原]た[原]味噌汁が出た。副膳には一尺餘の燒鯛とうま煮（ふき、[原]　　）と、酢のもの（鰹か）、
○みんな主人側が廻つてあるく、仲人の學士がまづ先を越してくる。次に博士もくる。次に正四位の老人が來る。是では無精な余も如何ともする能はなくなつて、まづ御婿さんの處へ行つて御盃を頂戴した。どうか宜しくと云つて挨拶した。あちらへ御出の節は是非御電報を願ひます、えゝ濱寺から電車で通つてゐます、私は英國だの佛蘭西だの露西亞だのに八年居りました。
○御嫁さんからも盃をもらふ。次に仲人の奥さんの番になつた。是は英國で牛鍋を御馳走になつた人だが、今見ても思ひ出せない。金鎖を襟からかけて金縁の眼鏡をかけてゐる。

「英國の方が好いでせう」と聞いたら「えゝ九年も居りましたから向ふの方が大變宜う御座います」と云ふ。「もう然し東京に御慣れでせう」と云ふと、「漸くなれました。近頃では御友達も出來ましたし」「今度は漫遊に入らしつたら好いでせう」「えゝ何時でも參りたう御座います」

「あの時分より大分肥られた、御前は氣が付かないかも知れないが」と旦那の方が云つた。旦那は朝九時から日暮迄殆んど坐らないで立ちつゞけに忙がしい事を述べた。英國の方が規則正しい生活が出來て可い、彼地では夜人が來る事などは滅多にない、晚めしもまあ宅でたべるのが例であるが、日本では宅で食ふのが稀な位です、どうもあなた方の生活が羨ましいです……」

「傍から見ると誰の職業でも好く見えるものですよ、――それぢやもつと英國に入らつしつたら可かつたんですね」

「私も歸りたくはなかつたのですが、子供の教育が困るので御處置[原]をつけに來たので、夫から實は又向ふへ渡る積りの處を、此方へ引き取られまして、夫に支那の方で會社が大分損をしまして、其片付方に南淸の方へ旅行をするやら何やらでとう〳〵此方へ引きとめられて仕舞ひました」。

○博士の前へ出ると「あなたの御病氣は何で御座いましたか」「へえ潰瘍、たしか額田が修善寺へ參りはしませんか」「成程宮本叔が」

「えゝ私は熊本で、八代で御座います、池邊君や德富君とは知り合で御座います」

「池邊君抔の方があなたより後輩でせう」

「えゝ後輩になります」

○それから正四位の老人からも盃を貰つて、御婿さんの親類は略して席へ返[原]つた。博士の奥さんの前で、すゞ子さんが今日は大變勤めるのですねと云つた。

○自分の席へ歸つてから鈴木の御父さんと書畫の話をした（或は席を離れぬ前）

「あれはりやうらいです、鵬齋よりも字は旨いです、私は大雅堂のものを四十點持つてゐます。いえ集めた譯ぢやない、道具屋の方で上方へ買出しに行つて是はどうでせうと見せにくる。夫を御前いくらで買つたかか[原]と聞くと、いくら〳〵と答へる。それで私がぢやいくらで買つてやらふと云ふと宜しう御座いますと云つて置いて行く。あの屛風などは十三圓で買つたのを二十圓で買ふ約束をしたら月末に十八圓とかいて來ました。あの金丈でも燒くと二圓五十錢位出ます」

「私は大雅堂の松島の全景をかいた繪卷物を持つて居ます。是は大雅堂が二十七のとき金澤に行つてゐて書いたものです。終りに紅芙蓉[原]の印があります。紅芙蓉[原]は旨いです」

「大雅堂の廿のときの瀧を持つてゐます。が北宗[原]の筆と狩野の筆をまぜたやうなものです。大雅堂は柳澤に行つてから南畫の風を覺えたのです」

「私はもと金剛寺坂に居ました。隣が福地源一郎の宅でした。福地の妻君が癪を起して……した事がありました。昔は崖の下は崖の上から斜に尺をとつて、其間は誰の所有でもなかつたのです、だから苦情が起りません。町の名でも昔は往來へ付けたものです。だから片方で名の違つてゐる樣な事はありません、それで德川家の所有の地面抔は無稅でした。越後の高田抔もさうです。江戸も無論さうです。所が市ケ谷に本村町といふ所があつて、あすこ丈が稅を取られました。何んでかと云ふと書き損つたのであります、昔は一度書き損ふと夫成になつたのです」

「私は觀世黑雪の書いた謠本を百冊持つてゐます、珍らしい黑い雪の樣だと云ふので賜つた名です、秀忠公の時代でした。夫を見ると今の謠でわからない所がよく分ります。羽衣に……色人はと云ふのがありますが、色人では分りません、黑雪の本を調べて見ると宮人です」

「此疊は麻に澁をかけたものです、昔は御城の疊はみな紅色の縁を取つたものです、黒い縁は臺所に限りました。又縁なしは牢屋の疊です、御目見え以下は板の間、御目見え以上は縁なしです。白麻に十文字をかいて其中に丸をかいたのを本願寺では用ひてゐました。これを本願寺縁と稱へます。極いゝのは絹の縁です、丁度御雛さまのと同樣です」

「此太刀は慶長頃のです。此具足はもつと新しう御座います」

男爵は鎧に興味があると見えて鎧の噺をした。かう云ふものは無くなるのは惜しい。獨乙でもカブトや胸アテは昔の具足の眞似をしたのを用ゐる。……」

「今鎧を造るものがたつた二人殘つてゐます……。二重橋の前の楠公の像は不都合です、あゝあぶみを前へ出し反り却つては落ちます、さうして手綱の先がああ手の先へあまつては邪魔で仕方がない手綱の先は下押し込んで小指と藥〔指〕の間に挾むものです。夫からあの太刀が間違つてゐる。あれでは一里位かけると鞍へぶつかつて、鞘がワレテ仕舞ます。騎馬では尻鞘にかぎつたものです。熊の皮でも、虎の皮でも、又鬼丸などゝ云ふ作りになると皮の上を漆で塗つたものです」

○禎次さんが謠をうたひますと云つて着座した。高砂をやらうと思ふが節のついた本がない。が夏目さんは文句を知つちやゐないだら〔う〕……」

「私は御目出度い謠は知らない」と云ふと御父さんが笑ひながら、「鞍馬天狗から蟬丸俊寛……」

禎次さんの謠はしつかりしてゐるが聲がメタリックで蓄音機に似た處がある。

○やがて膳を引いて新らしい膳が又出た。此度のも副膳がついてゐる。本膳には汁、御つぼ、それから御平、御酢あへ、御椀(汁)等である。

是で膳が五度出て、汁が五つ出た譯になる。

○朱塗の御椀で飯を食つて御代りに茶をかけてくれと云つたら御湯ですかと下女が聞き返した。婚禮では茶を用ひぬものださうだ。湯は蕎麥屋の湯を入れるやうな器に入れてあつた。矢張朱塗である。
○人々がたちかけた。緣側でそれはエスコートよと云ふ女の聲がした。多分九年間英國に居た夫人の語だらうと思つた。
○遠く照らされた庭のつゝぢの前に庭下駄を穿いた納戸色の紋付を着た女が二人立つて話をしてゐた。前は崖である。
「帝國劇場も見えます。九段の花火を〔原〕見えます、何でも見えます」と御父さんが云つた。
○車の蹴込に入れた御土産は重かつた。料理と、青い籃の中に鰹〔原〕節が七本と藤村の菓〔子〕が添へてあつた。菓子は羊羹の中に松が染め抜いてあるのが一つ、白い蛤の形をした上に鶴の首がちよんぼり付いてゐる〔の〕が一つ、眞赤な龜の子が一つあつた。

○あい子曰くあの幼稚園の誰さんはころんで犬のうんちを舐めたつて、
○又曰く支那人の子が來るのよ。名はねえ、名は提灯胴つて云ふの

○植木屋が　花菱と云ふ黄色な三瓣の花のものと、八重の虞美人草とそれからカーチーションを呉れる
○西村が手紙をよこして電氣遊園に勤務してゐるが當分囑〔原〕托で月給三十五圓だといふ。御梅さんの事をどうするとも云つて來ない。此前の便には余に一二度妻にも一二度たゞ宜敷賴むと云つて來た丈である。
○五月十一日池の端で勸業展覽會を見る。三光堂の蓄音機が絕えず廣告の爲に鳴つてゐた。場後に植木屋

がある。蘭の鉢が赤紫の花を着けてゐた。三圓五十錢のを買はうと思つたがやめた
から錦　花車模樣、太平樂樣（原）、檜扇模樣、等あり、
大内織と云ふ帶もあつた。歸りに草臥れて江戸川から車にのる。夏帽に脊拔のセル服

○小宮のはロジカルダけれども駄目です。たとへば私が金がないといふと私に向つて酒を飲むなと云ふんでせう、飲みやしないと云ふとだつて醉つてるぢやないかと云ふのです。論理にや叶つてゐるが忌むべき論理です。

私や淋しくつて酒を呑まずにや入（原）られない（原）です、酒を呑むと夫でも仕事をする氣になるんです、飲まないと丸で寂寞で堪らない、所が飲んでも矢張り寂寞です、——今日も人の宅へ行つたら主人が留守だから待つてゐたが歸つて來ない、所がそいつが妙な奴で下女と二人で住んでゐるんですよ。で私は昨夕徹夜したから其所で今迄寐ました。眼が醒めてもまだ歸つて來ないから、夫から下女に酒を買はして飲んでやつて來たのです。然し酒をのむと判斷力がなくなりますね、——いゝえ陶然として天下を併呑する樣な氣持ぢやない、益淋しいのです、夫で判斷抔はどうでもよくなるんです、——昨夕徹夜をしたら曉烏が鳴いたが、あけがたの烏は氣味がわるいものですな、一種厭な心持になりました。——さうして一生懸命に何かやらうとすると益頭がいら／＼してくるのです、何だかグウ／＼大きい鼾聲をかく奴があるのです、下へ行つて見ると夫が八十の御婆さんなんだから、天下に自分に同情してくれるものは一人もない樣な氣がしました。さうかと思ふと、ギリ／＼どこかで井戸（原）を酌み始めたのです……

○京都にゐるものが東京が戀しくなつて矢も楯もたまらなくなつて、仕舞には京都の停車場迄散歩に來て、

東京から來た滊[原]車と、滊[原]車に乗つてゐる人の顔を見ると云ふ

早稻〔田〕座を東へ突き當つて江戸川の終點に出やうとするところは新開町のごた〱した所であるが、丁度其突き當りの往來の向側が少し凹んで柳の枝[原]が一本ある所に、小肥りに肥つた双子木綿の羽織着物に角帯の〆[原]た男、帽子を被らずに、組下駄を穿いてゐる。綿フランネルの裏のついた大きな袋を兩手で持つて見物人を見廻してゐる（見物人は彼の周圍に澤山群がつてゐる。）諸君僕がこの袋の中から玉子を出す此からつぽうの袋の中から屹度出して見せる。驚ろいちやいけない、種は懷中にあるんだからと云ひながら片手を胸の所で握つてそれをさつと開ける眞似をして、袋の中に手を入れると玉子が底から出た。彼はそれを土の上へならべた。諸君もう一つ出すから見てゐるたまへと云つて袋を片手〔で〕ぐつとしごくさうして又何か放[原]げ込んだ眞似をして、中へ手を入れると玉子が出て來る。今度はひつくり返して出して見せると云ひながら、袋を裏返しにして置いて、さうして同樣の手眞似をして第三番目の卵を出す。彼はそれを丁寧に地面の上に並べて、どうだ諸君かうやつて出さうとすれば何個でも出せる。然しさう玉子ばかり出してもつまらないから、今度は一つ生きた鳥を出さう……

或日朝九時頃江戸川の電車に乗る必要があつて矢來の交番の所から一直線に例の柳の所迄來て、ふと氣がつくと例の男が依然として立つてゐた。朝ぱらだから見物人は一人もゐない、彼も亦諸君玉子を出して見せるとも何とも云はない、彼は退屈の餘りか、小石を空中に打ち上げて其落ちて來る所を手に持つたステツキで叩いてゐた。さうしてさも大事業でもしてゐるかの如き様子を見せてゐた。

○腸チフスノ患者。枕の下へ巻紙をまいて入れてゐる。醫者が見ても可いかと聞いたら不可ないと云ふ。

醫者は詩でも作つたもの［と］考へて、そんなに頭を使つちやならんと云ひながら引き出して見ると、三尺ばかりの紙に鰻屋だの料理屋の名が一面にかいてあつた。病氣が癒つたら一軒毎に食つてまはる積だつたのだといふ（是は醫者の話）

同じ患者自から云ふ。腹が減つて何か食ひたくて仕方がない、仕方がないから　腹が痛いからパツプをして呉れと云つて蒟蒻を腹へのせてもらつて、夫を夜具を被つて半分程食つた。

同じ患者、弟にそつと云ひつけて羊羹の箱をとり寄せて底を拔いて上部は何ともない様にして中味を食つて仕舞つた。夫から熱が出て、半年程は腰がたゝなくなつて、今でも髮の毛が五十位の爺さんの様に薄くなつてゐる

同じ患者の病室へ細君が子供を抱いて見舞に來たら、患者其子供の手に持つてゐる菓子を見て、食ひたくて、とう〳〵夫を引つたくつて食つた。それがため遂に死んでしまつた。

○○の弟が華嚴の瀑から飛び込んだと云ふ報知は聞いたが、今日○○が來て其顚末を話した。

○佐野の呉服店の總支配人であつたが、家を出て結城の紺屋へ行つて十圓かりて栃木から日光へ來て、そこでビール一本を二時間かゝつてのんで、夫から山で生玉子を三つ食つて五十錢でつりをとつて、瀑の上に立つて羽織を袖だゝみにして、時計を置いて、帽子を取つた。其有樣が五郎兵衛茶屋からよく見えるので、上さんが手招きをしたら自殺者の方でも手招きをした。夫から大きな聲で詩か何かを吟じてすぐ飛び込んでしまつた。上さんは樣子が變だから下女を駐在所へ走したが間に合はなかつた。

○金錢上の事は悉く義務を果してゐる。女とも關係がない、全く厭世と云ふ。學問をしないで朝から晩迄金で氣を使ふのが馬鹿氣て來たのだと云ふ。家では父はあまり嚴格にし過ぎたのを悔い、兄は學問をさせ

なかつたのをなげき、繼母（母の妹）はなさぬ中だから猶茫然として何うしてこんな事が起つたのだらうかと悄れてゐる、さうである。

○日記が二三年あるさうである。それは段々々々厭世的になつて、仕舞には滅茶々々になる。すると已めにしてある。夫から二三ケ月すると又始める。其時は今日はうらゝかな天氣だから又日記を書き始める抔と書き出して眞面目であるが、段々感想がせまつて、とう／＼こんが〔ら〕かつて滅茶々々になると又已めて仕まふ。斯樣に已めては書き、書いては已め、緩より急になり、急になつてやめ、又緩に始まつて急に終るといふ風であつたさうである。

○宇都宮とかで寫眞を撮つたのが死後八日程經つてから、寫眞師から家へ屆いたさうである。普通の顏をしてゐたと云ふ。

○五月十四日　急に端書が來て國振の御馳走をするから今夕來てくれと云ふ。ついで電報が來た。五時といふ約束だけれども少し後れて六時過につく。江戸川から電車に乘つて、駿河臺下で乘換えて吳服橋で乘りかえて、又茅場町で乘りかへて、築地橋で下る。新富座は雁次郎とかいふ役者の興行で大分賑かである。

松根の宅は妾宅の樣な所である。築地邊の空氣は山の手と比べると遙かに陽氣である。水の光も柔かに見える。日のあるうち一寸散歩に出る立教中學の横から月が出る。薄赤い光りの下に圓があるが、其圓が高い家根でよく見えない。川沿を右へ曲つて月耕と云ふ畫家の前を通つて、乘りつけの車屋の所で電話をかける。御話中、又右へ折れて月島通ひの職工の通る町を國光社の處迄來て自働電話をかける。

○御馳走はさつまといふものである。是は白味噌の中へ魚肉を擦り込んで中に同じく魚の切味を生で入れて、葱を副へて、釜から移したての熱い飯にかけて喰ふ。其外に梅肉といふ梅びしほに似たものがあつた。

○此間は越後の燕の人から寺泊の名産孕みずしと云ふものを貰つた。壽司だけれども飯はない。鯛の子を鯛の身で柏餅の樣につゝんだものである

○十二年前は新喜樂で婆さんから大明魚の子と云ふのを食はされた。飲めますよと婆さんが云つた。

―――

○御梅さんを嫁にやるので妻が先方へ行つて話をして來た。

×始は親類へ周旋する筈だつたのが其方が不緣になつたものだから、今度は自分がもらふと云ひ出したのである。

×所が一年中に二つ嫁入を出すと、嫁に惡い事があると妻が聞いたので御梅さんの里がなくなつて仕舞つた。兄は大連にゐる。母は淺草に居るけれども、是は御梅さんと何等の關係もない。

×あしたが日がいゝので十時から一時の間に結納の取替せをするんだと云ふ。結納の字を書いてくれと云ふが、何とかくやら分らない、此間御房の處へ贈つて來たのはうろ覺えに覺えてはゐるが殆んど樣式を忘れてしまつた。のみならず女からのは假名で書くとか、男からのは本字でかくとか若しくは其反對であるとかで丸で分らない。

×うちで里になつてくれと云ふが前の譯で駄目になるとすれば或は媒人位にはならなければならない。とすると紋付の着物位は着なければならない。

×妻と三々九度の議論をした。女から飲んで男が受けて今度は女が納める。それを別々の盃で三度繰り返すのが法だと妻が云ふから、さうぢやあるまい。一つ盃を男が呑んで、女が受けて、女が又呑んで男が受けて納める。その度に三度注ぐ眞似をするから三々九度になる譯だと云つた

×結納は臺にのしを付けて、白髪を包んで、眞中へ金を包む水引をかけた包を載せるのださうだ。此金は

男が三十圓出すと、女が十五圓と云ふ風に半分を返すのださうだ。おれの時は三十五圓出して三十圓返して貰つたのださうだが吝な事である。尤も地方によると男が澤山出して女はいくらでも構はない所もあるさうだ。

×御房さんのときは男の方は四圓で女は二圓であつた、其代り向ふから指環が來たから此方は袴地を買つてやつた。御房さんの結婚は兄さんが七八十圓うちで百圓程出した。縮緬の二枚、帶、簞笥、鏡臺、用簞笥、夜具等である。夜具は蒲團二枚かけ蒲團と夜着で更紗の木綿で二十圓程かかつたと云ふ。

×御梅さんのはときはさんに貸してある紋羽二重をやつて、○に貸して六圓の質に入れた帶を出してやつて都合するんだと云ふ。夫から西村が質に入れた着物を十五圓程受け出してやつて、簞笥は淺草へ行つて見てもし西村が賣り拂つてゐなければ夫を持つて行くのださうだ。鏡臺はある。針箱は破れかゝつてゐるが繕ろへばよからう。其外に夜具を一組作つて夫で間に合せる積である。

○昨日松根の所へ行つた時は晩から夜にかけてゞあつたにも拘はらず、シャツなしで襦袢を着てゐた。今朝は雨が降つて急に寒くなつた。フランネルの寐巻で起きて見たら堪えられないですぐ袷を着た。夫でも寒いので綿入羽織を着た。猶凌げないので湯に入つた。遂に股引を穿いた。五月十五日である。

○昨夜御梅さんの結納を「方正」へ書かせられた。御房さんの書式があつたから其を引きうつしの樣に眞似た。たゞ指環一個といふ所丈を拔かした。

目　錄

一勝男武士　　壹　臺

一子産婦　〃
一壽留女　〃
一志良賀　〃
一末廣　〃
右の通幾久敷御受納被下度候也
以上
明治四十四年五月十五日

ほうしよと云ふ紙は墨を吸ひ込んで丸で書けない。字の坐りも惡い、恰形も變である。書法は丸で駄目、自分ながら厭になつて、三四枚消をした。妻がそんなに反古にされちや困ると云ひ出した。やつと書いて「右の通り」の處へくると、「御受納」と云ふ字で一行一杯になつて仕舞つた。第二行目には「以上」の二字丈でなくちや不可ないか、はみ出しちや駄目かと聞くと妻も考へてゐたが多分駄目なんだらうと云ふ。仕方がないから又書き直した。さう崩さないで謹直に書いて呉れと云ふ注文を妻がする、と云つて顏眞卿の様な楷書ぢや字がぶそろになつて一劃一劃が思ひ〳〵の品をして丸でしめ括りのない字になる。仕方がないから略した様な本字の様な楷とも行とも草とも片付かないものを書いた。我ながら淺間しいと思つて、内心は悄氣てゐた。是でも先達は頼まれてヌメへ二三枚書いたんだがと思ふと何だか人が違ふ様な氣がした。妻はそれを受け取つて器械的に細く折つて（二枚重ねて）机の上へ置いた。

十七日

○昨日は大變な御客が來た。十一時頃生田が平塚明子の御母さんを連れて來た。朝日に出てゐる自叙傳を

徹回してくれと云ふのである。段々事情を聞くと森田が全然違約してゐる。生田に車で森田の處へ迎ひに行つてもらふ。社へ出てゐるからとて電話をかけて呼び寄せる事にしたら。手紙を寄こして行かぬからといふ事であつた。小宮が來てゐたので又車で迎にやる。夜八時頃迄かゝる。

○黑本植氏が修學旅行の生徒をつれて來た序に行德が連れてくる。

嵯峨へ雪見に行つて瓢の酒を飲んでゐる時に嵐山小學校の看板がうまく出來てゐたので筆者を聞いたら容易に分らなかつた。後に鹿苑の獨山と知れたといふ話をする。三十年前坊主を救つたら其法兄が私を尋ねてゐるといふので尋ねて行つたら仁和寺の和尚であつた。和尚が畫をよく描くと云つてゐた。良寛が飴のすきな話をした。良寛に飴をやつて、其飴を舐る手をつらまへて、さあ書いてくれと頼んだら、よしと云つて其手は食はんと書いたさうである。

○高田の姉が此間から喘息で寐てゐる。滋養物をちつとも食はない。此度は六づかしいかも知れないと醫者が云ふから見て來てやれと矢來から云つてくる。姉ももう死ぬのかと思ふと不憫である。

五月十九日。此間の木曜にも今度の木曜にも鈴木春吉が來る。三年ばかり宇都宮の叔父さんの處から上州の安中から横濱の親類のうちを回つて歩いて、東京へ歸つて見たら自分の宅は引越してゐたと云ふ。隨分呑氣な男である。宇都宮の叔父さんは新聞屋さんですといふ。下野新聞の社長らしい。安中の御叔父さんは小學校の先生ださうである。近頃は成城學校の傍の原へ行つてベースボールをやつてゐるさうである。指を怪我をしたと云つて繃帶を卷いてゐる。ベースボールの講釋をきく。

春吉から「大和」の馬場といふ男がカフヘー・プランタで喧嘩をした話を聞く。此人は醉ふと笑つて怒つて泣いて一人で三人上戸を兼るんださうである。何でも待合の上さんか何かゞ御客と一所に來てゐた

ら、カノヘーのものが夫を大變丁寧にするのが癪に障つて、何でえ、向ふが客なら此方も客だと云ふ樣な事を云つてじぶくり出したら、來合せてゐた松崎天民が仲裁に這入つたら、第一手前が癪に障るんだと天民へ喰つて掛つた。西洋人がなだめると、箆棒めぺら〳〵分らねえ事を云つてゐやがるとか何とか方々へ吹き掛けてとう〳〵皿を抛げて壞して仕舞つた。所が其皿は佛蘭西製のものださうである。當人は皿が惜けりや歸[原]してやらあと懷から紙入を出したのを主人がまあ〳〵夫には及ばないからと止めたさうである。尤も此皿は彼の財布の底を拂[原]いても辨償する事の出來ない位なものらしかつたのださうである。翌日主人は彼の定連たる事を謝絶して、どうも君の樣なものが來ると外の邪魔になるから止してくれと云つたさうである。

春吉が又玉章の話をした。多分若い時の事だらう。いゝ旦那があつて、夫が手分をして玉章のものを買ひ集めにかゝつた。さうして有りさへすれば馬鹿な價でどん〳〵買つて仕舞つた。夫から書畫屋の方でも玉章といふと大變よく賣れるといふ評判になつたのださうだ。赤い日の出の下へ波を二つ程かいて夫で三十圓とか云つてゐる。

昨日十九日〇〇のうちへ見舞に行つた。築[原]戸の廣くなつた通りを行つて、箪笥屋の角の細い通りを曲つた横町である。古い塀のある、古[原]の屋根の小さい家だ。玄關の二疊の疊などもさゝくれて汚ない。其次の南向の六疊に炬燵櫓の上へ枕（タエルで包んだ）をつけて、下に薄い蒲團を敷いて臥[原]てゐた。婆さんが脊中をさすつてゐた。是が〇〇の旦那ですかと云つて驚ろいた顔をして、御見外れ申しましたと云つて、鯨の手の着いた四角な莨盆へ火を入れて出した。座布團も黄縞の木綿の薄いのであつた。けれども小ざつ

ぱりして垢は着いてゐなかつた。室が古いのに額が古いから何處も清新といふ感じはない。額は四五年前に見た。筒井憲と書いたのと佐瀬得所のと夫からまだあつたがいづれも茶色になつてゐる。何を見ても廢頽の感じがある。たゞ庭の先に葉を出した秋海棠と、五月十九日の開放しにした障子の外の空氣、(空は見えない)と、病人の着てゐる、紡績織の繻子の半襟のかゝつた袷丈が陽氣に見える。

「此うちは始めてだ」と云つて、見廻した。「どうです、少し惡いさうぢやありませんか。然し思つたより可いやうだ。〇〇の話ぢや食物が……」

姉は口を切る前に唾を呑み込む樣な樣子をして、

「でもね。やつと昨日から少しづゝ御飯が食べられる樣になつて――いえ重湯や御粥ぢやない、御ぜんをね――どうも夫迄は御箸の音を聞いても厭な心持がして、御醫者さんが、病氣は夫程でもないが榮養が取れないと衰弱するからつて、無理に何でもいゝから食べろつて云ふんだけれども、食べると、すぐ反吐して仕舞ふ――ぢや御かゝのソップが好いだらうつて、――そら私が御肴だの何だの丸で食べない事を知つてゐるものだから――御市ちやんがわざ／＼親切に拵らえてくれてね、好ければ又拵えると云ふんだけれども、さう／＼は氣の毒だから、今度はうちで拵らえたんだが、――御市ちやんもあの旦那も養子だけれども、まことに親切にして呉れてね、叔母さん／＼て、大事に「して」呉れる。あの人は働きものでね、近頃ぢや大變都合がいゝ樣です、謠が道樂で鼓もやるしね、御弟子が二十人ばかり有つて、利口な人は違つたものでね、道樂をしても御金になる事をやるからね」

言葉丈ははき／＼してゐるが、其はき／＼してゐるうちに重苦しい努力があつて、何時もの樣にのべつではない、時々呼息を切る。其所に餘裕があるので聞いてゐても聞きよかつた。

「此間〇子さんにも御願ひして置いたが、もし私が萬一の事があつたら、あれ丈をどうか御願ひします

義理が悪いから」

何でも○○○○○の金を○○圓とか預つたのを使つて仕舞つたから、死んだら返してやつてくれと云ふんださうだ。

「かうやつて、我慢で遣つてゐるうちは可いけれども今に口も何も利けなくなると何うする事も出來ないから今の内御願ひして置きます、夫からね、御葬の費用を少しすけて下さい。夫から、○さんに小使を少しづゝ遣つて下さい。○ちやんがあの通りやくざだから……」

二十一日　五月

高須賀淳平が病氣見舞の禮に來る。先月一寸ぶり返したと云ふ。同じ血でも咽喉から出るのと足を切つて出るのは違ふと云つてゐた。

○○の社長が信長の樣な人だと云ふ事を云ふ。多數彼の爲に盡す代りには光秀が出て來る。彼は社内で博奕をやつて、負けると月給に棒を引いたものださうである。紙屋へ代が拂へないと、頰冠りをして車を引いて紙屋へ出掛けてゆすつて、さうして紙を供給さした。云々。

神田の白牡丹の主人とかゞ梅毒で病院に這入つたものが余の猫を讀むのに書物の小口が切つてないのを看護婦に小刀をよく研いで切らせる所が、小刀が切れゝば切れる程切り損ふと、主人がなる程漱石といふ男は人に手數をかけるべく出來上つた男だ。博士問題を辭して文部省に手數を掛けると同樣の遣り口だ。と憤慨してゐたさうである。此主人は電話で妻を病院に呼んで時計の時間を計つて、細君の病院へ來た時間と途中の時間を比較して、御前は何時何分に出ると云つたが、時計の上で是々掛つてゐる。嘘だらうと

一時間位小言を云ふのださうだ。

五月二十一日

川羽田からの手紙に、苗代ももう二寸ばかりに伸びまして、麥も漸く色づいて來ました。昨秋の大洪水の結果として財力疲弊の極に達してゐる今日此頃收獲の期に近づいた麥圃を眺めることはどの位愉快で心強いか知れません

五月二十一日

えい子が二三日前八つ位の學校友達を連れて來た。其子が御辭義をするから、へい入らつしやいと云つた。あとから二人遊んでゐる所へ行つて、あなたの御父さんは何をして入らつしやるのと聞いたら御父さんは日露戰爭に出て死んだのとたゞ一口答へた。余はあとを云ふ氣にならなかつた。何だか非常に痛ましい氣がした。

五月二十二日

○森圓月が掛物の箱を抱へてくる。何かと思つたら余の書いたものを表裝したのである。懸けて見せると云つて壁にかけた。余としては好い出來には相違ないが、矢張り拙い。赤坂の溜池とかへ表裝にやつたら、職人が粗忽をしたと見えて、乾かない所を刷毛で撫でたと見えて、紙上の墨が白い處へ薄く流れたと云つた。よく見ると左樣見えるが然し大した事はない。序に箱へ何か書いてくれと云ふから日々山中と書いた上に裏へ明治辛亥初夏漱石山人と認めた。是も注文である。まづい出來である。又序だと云つて唐紙へ青

山元不動白雲自去來と書けといふから書いた。二枚書いたが是は少々俗氣なく出來上つた。圓月は兩方取つて歸つた。

○圓月の話に近頃は（玉泉堂の番頭の話）短冊が丸で賣れなくなつた。して見ると歌がはやらなくなつたのだらう。其代り絹が大變賣れ出した。もとは東京中で絹を商ふうちが三軒で壹ヶ月の賣上高が千圓位だつたのに、今は十軒もあつて一萬圓も賣る。此間去る畫家の畫會があつた時は一日に絹が千枚賣れたさうである。

晩に帝國劇場へ（文藝協會の案內で）ハムレツト劇を見に行く。四時からだけれども、虛子が來て謠を二番うたつたので遲くなつて、六時過になる。七時に食事のため三十分の幕間があつたので、ぶら〳〵してゐると、二階の玄關上で大塚と千葉掬香と、畔柳芥舟に會つた。千葉先生は葉卷をふかして、どうもあれぢや聲が徹らないから駄目だと云つて、私はカインツのを見たと云つてゐた。いつそ外國語學校の卒業生に原語でやらせたらとも云つてゐた。

坪內さんは氣の毒だ。あんなに骨を折つて、あれ丈の事をしたが、それが全くの無理な勞力である。坪內さんがあんなに沙翁にはまり込まないうちに、注意して翻へさせるとよかつた。あれ丈の人、あれ丈の金、あれ丈の時、と勞力、――あゝもつと有効が事がいくらでも出來る。氣の毒な事だ。あの連中は不入ならば世間が惡いと云ふだらう、一般の人が見なければ、それは無教育だからと云ふだらう。失敗すれば自分が惡いとは思はないで、まだ劇の趣味が發達しない抔と云ふだらう。そんなものぢやない。あれが成功したら夫こそ趣味も何もない上調子のわい〳〵連ばかりで世間が出來てゐる事を證據立てるのである。あれが失敗すれば世間が分つてゐる證據である。

理由は述べればあの人々に納得の行く樣に述べる事が出來る。坪内さんがあれ丈の事をし出す勢力がある丈それ丈、坪内さんが人を誤まつたやうな氣がする。上にゐるものは眼が利かなくつては駄目だ。幾多の雜兵の命を奪つて、それで仕事をしとげたと思つてゐる。

五月二十四日

○昨夜十一時頃謠會から歸ると、純一が頭が痛いと云つて、氷を載せてゐる。時々痙攣があつて、腦膜炎の樣だとの事。醫者をどうしやうかと考へたが、樣子が少しいゝ樣だから見合せたのだと云ふ。心配でならないが寐た。朝起きると純一は鉢卷をして遊んでゐた。幼稚園でころんだとかさうして笑つたとか要領を得ない事を云つてゐる。

○朝評議員會議に行く。初雷、驟雨至る。

○米がひまをもらひ度といふ。どうするのかと思つたら、又もとの亭主と一所になるんだと云ふ。此亭主は向ふの駄菓子屋の裏に住んでゐる。米は千葉のもので嫁に行つた先の亭主が飲んだくれだといふので離緣をして、東京へ出て來て今の亭主の處へ片付いた處が、亭主が矢張呑だくれで、米の奉公をしてゐる時にためた五十圓と衣類を卷き上げて、其上打たり擲いたりひどい事をするので米はとう〳〵自分の家へ奉公に來て仕舞つた。すると亭主の方ではまだ何だ蚊だと云つて付け纒つてくる。米も此五十圓を取り還したいと云ふ未練がある。其内亭主の所へ女が來た。それが新らしい女房かと思ふと又今度は束髮のが來た。來たといふ通知があると又間もなく出て行つた。すると今度は米が元へ歸りたいと云ひ出した。

○御房さんが嫁に入つて女の手が一人足りなくなつたので新たに來た女は米焚に使ふ事にした。是は柳町の富士屋に奉公をしてゐた處が富士屋がつぶれて又此方へ奉公替をしたのださうである。實はもつと早く

來る筈の處給金のたまつたのを取つてからにしやうと思つて遲くなつたのださうである。所が今日の夕方富士屋から此女の貸を證文にして持つて來た。それが僞證文らしいとか何とか云つて、持つて來たものを物置へ連れて行つて色々話をしてゐた。

○五月二十五日

豐田さんが來て純一に注射をする。第三號のヂフテリや血精、免疫千五〇〇。

○小林が來るから一所に散歩する。相變らずべら〳〵のべつに喋舌る。弟は下駄穿のまゝ華嚴へ飛び込んだのださうである。さうして瀧壺へでなく、瀧の中へ躍り込んだから、瀧と共に下るのが一二間見えたさうである。大體は巖頭に立つと蒼くなつて顫へて、已を得ず瀧壺迄下りて行つて其所から飛び込むんだと云ふ。あるときは親子三人飛び込んだ。其時父は謠をうたひ、娘は舞をまひ、母は三味を彈いてから飛び込んだ。ある投身者の許嫁の女が女親と一所に來て、巖の上に坐つて、此所から飛び込んだのですかと聞いて二時間ばかり、動かなかつたと云ふ。先年宅にゐた作男も華嚴へ飛び込む積で其所へ行つて茶屋へ休んでゐると、向ふ側から書生體の男が來て瀧の上で洋傘を置いて、袂から袋を出してそれを頭の上からすぽりと被つて、さうしてすぐ飛び込んだのを見て、怖くなつてすぐ引き返したさうである。

○小宮の話に鈴木は結婚したと云ふ話である。余は丸で知らない。相手は例の平野屋の御常ださうである。御常といふ名を聞いて、愈かと思つた。何でも此前の水曜に三十間堀の富貴亭で結婚式をあげたんだと云ふ。丹羽とかいふ男が媒酌人だか、里親だか分らないものになつてゐるさうである。富貴亭は會席膳が一人前一圓ださうである安いものである。

○御梅さんの甲州にゐる叔父さんが結婚費用として十圓送つて來たといふ。妻はそれを簞笥の方へ廻した

と云つてゐる。簞笥[原]は三方桐で十圓乃至七圓大變安いんだといふ。人足は一人車で夜具と簞笥[原]を積んで先方へ屆ける事にした。向ふでは祝儀の都合があるから何人だか知らしてくれと云ふから、さう極めて仕舞つた。先方の御母さんが、中の日だが何うでせうと云ふ。今迄ゐる宅を去るのだから丁度好いだらうと答へてとう／＼さう極つたと云ふ。着物は今夜出す筈である。櫛に中ざしは御房さんと同じ卵甲だけれども大變安い、兼安で買つたのは十圓積[原]であつたが、今度のは三圓五十錢である、さうして見た所は同じである。平打の後ろざしは金[原]卷繪に青貝の蝶を出したものであつた。

五月二十六日

○二十二日　帝國座文藝協會のハムレットへ招待

○二十四日　會議

○二十五日　大掃除

○二十六日

○二十七日　御嫁の媒人

○兩國で電車を降りて馬喰町から左へ曲つて大丸の通から人形町の通へ出ると遠くに柳々[原]が兩側に青々と見えた。明治座の處から濱町の日本橋倶樂部の横を這入つて細い洒落た家のある小路を曲つたり折れたりしてとう／＼河岸へ出たら橋の臺を鍊[原]瓦で積んでゐた。柳橋を渡［つて］深川亭の所から瓦町へ出て須賀町から工業學校の前へ出ると記念祭の花火が上つた。藏前で鍬を買つて烟[原]草を飲んで電車に乘つて歸る。

○晩に簞[原]笥へ唐樣[原]模樣の袋をかけて、車に積んで夫に夜具一包と、川簞[原]笥と、針箱と鏡臺を添へて美添へ送る。車夫にはこつちからも向ふからも五十錢づゝやるんだと云ふ。

八時過に御梅さんが長々御厄介になりまして、此度は又一方ならぬ御心配を掛けましてと云つて暇乞に來る。今夜は淺草へ行つて一晩留つてあす美添へ落ち合ふのである。方がわるいからだと云ふ。

五月二十七日　（土曜）

○夕方から御梅さんの媒酌人として御婿さんの所へ行く。西五軒町だから車で行けば大した道程ではない。こゝだと云はれて見ると表通りから細い通り否寧ろ路次に這入る。車がからうじて拔けられる處である。其所の二軒目の小さん門の處に「美添」といふ標札があつた。つきあたりの格子戸を開けると、如何にも手狹でありさうに見える。沓脱に立つて一人が自由に身を動かす事さへ出來ない。美添さんはこゝに御母さんと、弟と妹と都合四人で住んでゐる。夫に御梅さんを加へると五人である。床を敷いたら寐る所もあるまいと思はれる。玄關の右が茶の間と見えるが、是は二疊か三疊ですぐ臺所につゞいてゐる。玄關の奥の座敷は六疊に過ぎない。其横に三疊があるが唐紙で見えない。余と妻と筆はそこへ坐つて御母さんに挨拶をした。御母さんは色の黑い五十四五の女であつた。田舍もの見たやうな顏ではあるが、然し眼鼻だちは整つてゐる。其上言葉遣杯は極めて上品である。

式は手狹だから裏でやると云ふ。裏といふのは今迄御父さんの存生中住んでゐた家で今度人に讓り渡したものである。建仁寺の間を拔けるとすぐ小さな庭へ出る。余と妻は一寸式をやる處を拜見と云つて、緣側からあがつた。汚ない古い家である。座敷が二つある。奥の方で式をやるので次の方に婿、其前の三疊の方に嫁を控えさして、我々が兩方の部屋から出て差向ひに坐らして三々九度をやらせるのである。三疊は眞闇であつたが、御梅さんの持つて來た唐草の模樣の蔽をかけた箪笥が半分見えた。下には赤い毛布が敷いてあつた。

次の間に銚子[原]が二つ黒塗の膳の上にのつてゐた。それに紙で折つた雌[原]蝶雄蝶を結びつける。妻はどつちが雄でどつちが雌だか分らないと云ふ。御母さんに聞くと私もこんなものを書いた本を仕舞なくしたものだから、と云つて、二つを並べて見て、たしか此先の尖つた方が雌かと思ひますと云ふので、さう極つた。余は手傳つてそれを銚[原]子に結びつけた。其部屋には晩の御馳走の口取が並べてあつた。海老の赤〔い〕のときんとんが目についた。

「おいおれは此所へ坐つて、此縁側から、美添を連れて出て、向ふむきに並んで坐るんだね」

「さうです美添さんと御梅さんが向き合ふ様に」

「合圖をしなくつちや何時出ていゝか分らない」

「大丈夫です」

「さうして筆は何所から出るんだ」

「筆は此襖をあけて、盃と御銚[原]子を持つて御夫婦の間へ出るんです」

筆はとくに此役の爲に傭はれたのである。

○三人は又元の家へ歸つた。そこで御婿さんに合[原]つて少し話をした。おもに圖書館の話をした。（此路次は赤城の坂の下へ抜けられる、中には五十[原]圓位の家賃のうちがある。廣い池がある。それから三十圓位の貸家もある。其所には三四年前から博堵打が這入つてゐる。家賃はちつとも拂はない。夜中の二時か三時に女房抔が泣き込んで家には食ふものも着るものもない、歸つてくれと夫を伴れにくる。夫は今直歸るなどゝ云つてゐる。冬の寒い晩などはことに悲酸である。）

○其内御嫁さんが見えたとか云ふので妻が立つて裏の例の暗い部屋に連れて行つた。余も御婿さんと例の口取の並んでゐる部屋で待つてゐなければならない。御婿さんは何處へ行つたか分らない、狭いうちだか

らすぐ分る筈だが、一向影が見えない、獨りでのそ〳〵口取の處へ來ると、自轉車の置いてある妙な處から出て來た。此處へ坐るんだと教へて、又少し話をした。御梅さんは妻に髮か何か直してもらつてゐた。
○もう宜しう御座いますと筆が云つて來た。婿さんを連れて約束の通り緣側から座敷へ這入つて四人が向ひ合せにすわる。筆が襖を開けて銚[原]子を持つて來るべきのであるが、何時迄待つても靜まり返つてゐる。妻は仕方なしに及び腰をして襖の角をとん〳〵と敲いた。するとは襖を開けてにや〳〵と笑つた。さうして教つた通り嫁の前へ三寶と銚[原]子を置いて叮嚀に頭を下げた。夫から盃へ酒を注いで、三々九度をやる度に都合九度御辭儀をした。一方の盃を濟まして一方へ持つて行く時に立つたびに、眞中につりランプが下つてゐて、夫が筆の頭に打つかつた。リボンが油でよごれる樣な氣がした。リボンは白茶の樣な色であつた。筆は其度にうす笑をした。
○盃が濟んで元の座敷へ歸つて、夫婦の左右に余と妻がならんで向ふ側に御母さんと弟と妹が竝んで膳についた。親類の盃をする。妹は九位である。黑の紋付に袴をはいてゐた。弟は外國語學校の制服を着てゐた。かねて來るべく豫期された叔父さんが來ない、是は埼玉のいはつきとかの郡役所へ勤めてゐて、極めて忙がしい身體だから遲刻するかも知れないと云つた。（筆が活動寫眞に行きたいから歸してくれと云つた。御母さんが强いてといふので飯を食ふ事にした）
○御叔父さんの來たのは彼是九時近くであつたらう。
「どうも用が片付かないで……」と云譯をした。
イワツキと云ふ所は太田道灌の城跡ださうで、うまく出來てゐると云ふ話であつた。舊幕時代は大正といふ二萬石許の小大名の領地であつたさうである。大宮迄一里馬車で來て夫から滊[原]車に乘るのださうである。

五月二十八日

○妻が昨日から月經があると云ひ出した。月經が三月にあつて、四五となかつたので或は懷姙ではなからうかと思つてゐた。實は四月に月經がとまつたと聞いて、おや又かと思つた。子供は七人ある。其上病院から出るとすぐ又一人殖える是ぢや遣り切れないと考へた。所が又月經があると聞いで[原]夫では姙娠ぢやなかつたのかと思つて大いに安心した。尤もいつもの樣に惡疽[原]はちつともなく飯は平常の如く食つてゐたから不思議だと思つてゐた。

○音樂會へ行かうかと思つて本鄕へ行つて切符を買はうかと思つたが、みんなに切符を賣る樣子がないので、聞く氣にもならず、又電車で上野迄行つて山の手線に乘り換えた。日暮里、田端、巣鴨などを通つて新宿迄來て又甲武線へ〔乘〕換へて大久保で下りた。拔辨天の坂の途中の古道具屋に虎の二幅對があつて、其畫が氣に入つたので、越前守岸駒とあるのが本當か僞かは論ぜず、價を聞いて見る氣になつたからである。音樂會へ行く時妻に金をくれと云つたら「はい」と云つて十圓渡したので、又ひやかす氣が起つたのが、[原]本で音樂會の方を已めてわざ／＼山の手線へ乘り換へたやうなものである。所が停車場を降りて其所へ來て見ると岸駒の畫はもうなかつた。

○朝は久し振で矢野義二郎が朝鮮から出て來て話をした。

○夕方になると妻が急に下腹がつつ張ると云ひ出した。仕舞には腹の方迄突張ると云ふ。御產の輕いのをする樣な痛み方だと云ふ。中々落付さうもない、腰のあたりをさすつたり揉んだりしたが心配で不可ない。

中島襄吉さんを賴む事にして、電話を山田さんの處で賴んで掛けると、中島さんは子供が病氣で來られない代診ならすぐ行くと云ふ。代診でいゝ惡いと云ふ議論が始まつた。妻は水原を呼んでくれと云ふ。け

れども下女は代診でもいゝから直來てくれと頼んで仕舞つたといふ。夫から兎に角それを待つて、其模樣で又外の人を呼ぶ事にしやうとなつた。時計を見てるるが中々來ない、十時過になつてくる。或は流產だらうと云ふ鑑定である。口元にあるのを器械で出してくれる。器械を金盥へ入れて煮沸さして、夫から藥をひたして、脫脂綿をひたして治療にか〔ゝ〕つた。中々手間が入るので十一時半頃になつた。

○診斷によれば流產に相違ない。危險もなからうけれども出血でもあつて氣分に變化があるやうなら呼んで吳れいつでも出るからと云ふ。此方も心配になつた。氷囊や藥罐に湯の用意をして置く。車屋にあと押をさせて藥をとりにやる。是は出血の豫防だから今夜飲んで置く方がいゝのださうである。起きてゐるやうかと相談したら何寐てもいゝとの事だから、寐た。苦しくなつたら起してくれと賴んで寐た樣なものゝ、橫になると前後も知らず寐て、藥取の車夫が歸つたのも知らなかつた。あくる日眼がさめるかさめないうちに醫者が來た。仕方がないから、會はずに廁に入つて飯をくつてゐると、醫者は今日も手術をして、歸つた。玄關先で一寸逢つたら、自然の儘にして出るのを待つ方がいゝだらう、大した事は御座いますまい、先生も其內上がるかも知れんが何しろ御子供が惡いものですからと云ふ。

妻にきくと、血が出ないうちなら、流產にせずに濟んだのかも知れなかつたのだと醫者が云つたさうだ。

其言葉を聞いて、自分の作つたものを壞して仕舞つて濟まない樣な氣がした。又殘酷な事をしたと云ふ樣な氣もした。さうして姙娠でなくて先の仕合せであつたと云ふ昨日の安心は何處かへ行つて仕舞つた。

五月二十九日

○三山來。中島襄吉さん、松尾氏、洗滌

五月三十日

○雨ふる。柿の花點々として落つ、あい子が傘をさして、しやがんで一生懸命に拾つてゐる
○松尾氏來、洗滌、まだ少し殘つてゐるかも知れぬと云ふ。病人は平氣にて痛全くなし
○雅樂演奏〔會〕の案內あり、六月三日

五月三十一日

○雨晴、透き通る樣な空なり、湯殿の擦硝子に昨夜の湯氣が露になつて凝り付いてゐる。下に蠅が一匹靜肅にとまつてゐる。硝子の缺けた隙間から樫の若葉が見える。其葉の茂つた間から青空が見える。二つのあざやかな色が判然區別される。意識の明確になる朝である。
○十一時頃御梅さんの母（實は母でもなんでもない）が來る。斯んなに御厄介にならうとは思ひませんでした。どうも何から何迄恐れ入りました。萬事私の方で致さなくてはならないのですがと挨拶をする。淚を拭いてゐる。

六月一日

木曜なので三重吉と小宮がひるのうちに來る。丁度「賴政」を謠ひかけてゐる所であつた。三重吉は先頃の結婚に就て、「どうも、とう／＼……」何だか要領を得ない事を云つてゐる。大いに面目ない樣な樣子である。所がしばらくすると大變調子が變つて先生何か祝つて下さいと云ひ出した。「實はね、今のうちに押入の樣で唐紙の立たない所があるんで、大屋にね一體こゝには襖かなんぞあつても宜ささうなものぢやありませんかと云ふと大屋も成程さうだと云つて、大工の所へさう云ひに行くと、大工が冗談云つち

や不可ねえ、ありや箪笥[原]を入れる所だ。あの男は田舎ぺえだから知らないんでさあと凹まされちまつたんですが、東京ぢや何ですね、箪笥[原]を装飾にするんですね、——どうでせう箪笥[原]を一つ奢つてくれませんか、何そんなに高かあありません十圓位で買へるでせう」。「箪笥[原]は大き過ぎるから用箪笥[原]位で負けとけ」「そらねぎつて來た。大きくつても構ひません、先生が脊負つて來ないでも人足を出しますから」「擂鉢とか箒とか云ふものぢや間に合はんか」「益下落しますね、あんまり下品でさあ」「末廣と云つて扇は目出度いものだが、夫ぢや一層扇を一對やらふか」「夏だから扇は結構かも知れない。澁團扇に火吹竹なんざあ酒落てますね」と云つて三重吉はしきりと落花生の砂糖の衣のかゝつた〔の〕を食つてゐる。「其内行幸を仰ぎたいもんですね」「うん何か謠つてやるよ」「どうぞ願ひます、かねての御約束通り俊寛でも宜う御座います」

話はやがて新らしい細君の上になつた。「どうも急に世帶じみた、昨日抔も月給を取つて君の所へ行つて歸りに腹が減つて蕎麥が食ひたくつて仕方がない。けれども自分一人で食つちや濟まん樣な氣がして。とう／＼宅へ歸つた。九時頃。さうしたら御つねが飯を食はずに待つてゐたよ。けれども何にもなかつた。……方々へ拂をしたら、とう／＼米屋丈足りなくなつた。……あいつはね衣物は持つてゐる。帶は二十本位持つてゐる。……おれの紙入に小遣のないのを氣にして、始終五圓位は入れて置くよ。……御婆さんをよくするぜ」と頻りに小宮に話してゐた。まあ琴瑟和合といふものだらう。

○晩に春吉がくる。君は酒を飲むかと聞いたら「えゝ飲ませれば飲みます」菓子は？「菓子も同じですな」「のん氣なんだらう」「えゝまあそんなものでせう」道龍[原]樣のあとの原へ行つて、珠[原]なけをやると下宿の主人が出て營業妨害だといふ。すると向ふの方に住んでゐる畫師のおやぢも出て來て、自分のうちには子供がゐる。子供は未成品だ、是からどんなものになるか知れない、夫に怪我でもあつてはどの位國家

の損だか分らない、失禮ながらボール抔をやる人は大抵人間が分つてゐると云つて小言を云ふさうである。

輜重輸卒、春吉は日露〔戰〕爭のときに補助とか何とかいふ輸卒になつたさうである。になひに水を汲んだり、とろで物を運んだりしたうち二十五六貫ある破裂彈の箱を脊負つてあるいたがよく擔げたものだと自分で感心してゐた。是はころぶと危險だから步けたのだらうと云ふ事であつた。

六月二日

○内田が來て書をかいてくれといふから書いた。かうやつて手習をしてゐるうちに旨くなるやうである。

○七時過でもまだ少し空明りがある。牛込見付から市ケ谷の方を見ると外濠の電車の下の土手が青く霧がかゝつたやうに見える。下の水は平であるが、不規則な處丈皺が寄つてちゞれた縮緬の樣になつて白く光線を反射してゐる。其平らな透明な中に長く火の柱の樣なものが寫つてゐる。それは濠端にある電燈の影であつた。其周圍には牛込の高臺の老木の若葉の陰が遠くから落ちてうすい影になつてゐる。影の盡きた所に空の影がより明るく見えるので樹の影であるといふ事が分る。眼の前は左右の柳がふさ〳〵と雨を含んで甲武線に通ふ橋下の道からは櫻の葉が眼を射つた。電車の燈が遙かに動いて去り、又向ふから動いて來る。奇麗な畫であつた。

六月三日

○夜來の雨いまだ晴れず、陰。午頃に路略乾くやうな氣がする。

拜啓陳者來六月三日雅樂稽古所に於て音樂演習相催候間同日午後一時より御來聽被下度候

此段御案内申進候也

樂部長　宮地巖夫

明治四十四年五月

夏目金之助殿

と云ふ。招待狀を懷中に入れて家を出る。牛込御門内に着いたのは丁度一時五分前である。門内にはたゞ人力が二三臺ある丈である。正面の玄關で招待狀を示して、帽子と杖をあづけると、此方へと云ふから跟いて行くと左の突き當りの部屋にフロックを着た人が二三腰をかけて話してゐる。其部屋へ這入らないで、右に曲ると、金屛風が立ててある間を拔けて、こちらへと椅子の竝んだ所を指し示される。其所は三間を長くつなげた細長い見所で丁度舞臺の正面にあたる所であつた。まだ人が五六しか來てゐない、前の列に紋付の女が三四人、一番後ろにカーキー色の軍服の上官が二人と外に五六人ゐる。尤も正面でない、左右の見所には澤山ゐた。元來舞臺の三方は見所と切れて雨も日も自由に屆く。其間は四五尺もあらう。それを直角に三方から取り卷いて見所としてゐる。向つて左の方には束髮の袴の女が澤山ゐた。是は學習院女子部に關係のある人たちだと後から聞いた。其隣りの仕切つた所には大槻文彥さんの顏が見えた。隣に十徳を着た白髯の爺さんがゐたが、是は何だか知らない。右側の見所は高等師範とかきいたが是は見えなかつた。

○舞臺の正面には赤黑の木綿幅位の切を竪につぎ合せた幕がかゝつてゐる。さうして其一行に妙な紋が竪に竝んでゐる。あとで聞いたら織田信長の紋ださうである。信長が王室の式微を嘆いてどうとかしたと云ふ緣故から來たものださうである。其幕の上下は紫地に金の唐草の模樣ある緣で包んであつた。其前の眞中に太鼓がある。是は薄くて丸い枠のなかに這入つてゐて、中央に金と綠と赤で丸い模樣がある。左りのはぢに火熨斗位の大さの鐘是も枠に入つてゐる。琴が二、琵琶が二面　其前は青い毛氈で敷き詰めた舞ふ所である。見所には紫に白く菊を染め出た幕が張つてあつた。

○何時の間にか傍に鍋島侯爵が來て誰かと何か話してゐる。今日は教育會があるので來られないと云ふのは細君の事なんだらう。つゞいて坊主頭の丸々した眼の丸い小作りな處[原]が鍋島と話をしてゐる。是は後で皇太子妃殿下の兄にあたる九條公爵だと云ふ事を敎はつた。もう一人細君をつれて來た無髯の人（人品のあまりよくない男）は此等の人と話をしてゐたが、是は古谷久綱と云ふ故伊藤公の引立を受けた式部官であつた。細君の紋が曾我兄弟の紋なのが眼についた。あとであの細君はどこから來たときいたら慥か伊東元帥の娘だとか云ふ話であつた。伊東だからあゝ云ふ紋をつけるのだらう。高崎正風と云ふ御歌所の長も見えた。山口圖書頭の顏は知つてゐた。頭がすつかり禿げた、沙翁の寫眞〔の〕樣である。高橋順太郎?（醫科の）文科の漢學の御爺さん（名前が出て來ない）、宮內次官の河村金五郎（是は二十餘年前大學のボートレースで顏丈知つてゐる）坪內博士夫婦?

○やがて樂人が出た。みんな烏帽子をかぶつて直垂といふ樣なものをきてゐる其半分は朱の勝つた茶で、半分は紫の混つた茶である。三臺鹽と云ふ曲と、嘉辰といふ朗詠をやる。夫が過ぎて舞樂になる。始めには例として振鉾をやる。其時の樂人の出立は悉く烏兜と云ふのだら〔う〕妙なものを被つて、錦で作つた上下の上の鯨の骨の入らないやうなものをきて、白の先で[原]幅三寸位の赤い絹のついた袖をつけて、白い括り袴で胡坐をかく頗る雅である。鉾をもつたものは一人左の帳の影からでる筒袖の先を括つた上に矢張りチヤン〳〵の樣なものを着てゐる。夫が舞ひ已んで、此度は右から又一人出て夫で御仕舞である。

○次には「春庭花」是は四人冠をつけて其冠に梅の花を插んで出る。薄茶の紗の樣な袖の廣い上衣に丸い五色の模樣の紋を胸やら袖やらに着けてゐて、片肌を脫いで白い衣と、袖のさきの赤い線をあらはしてゐる。帶の垂れた所に紫の色が見える。黃金作り〔の〕太刀を佩いてゐる。ヅボンは白である。四人が四人調子を揃えて如何にも閑雅に舞ふのである。足の踏方手ののばし方優長な體操である。

○次は數手である。樂人の服裝は悉くあらたまる。けれどもカットは前と同じない。舞手は薄納戸の紗に例の五色の模樣、模樣は胸に一つ左右の袂に一つ、股の前に一つ、尻に一つ、脊に一つあり、

○拔頭、毒々しい天狗の樣な面をつけて出る。袖口を括つた朱色の衣、褪赤地に唐にしきの樣な模樣の二つ三つあるチャン〳〵、肩から胴、上膝［の］所迄同じ幅で垂れてゐる。さうして緣に細い房の幾重にもなつたものをつける。あたまは綿の頭巾の樣なもの、坊主が因導[原]を渡す時の恰好のもの、ヅボンは錦なり、凡てが丸で錦の獵人也

○還城樂は服裝は略同じ、面は矢張眞赤なれど飄逸の趣あり、團子鼻、金蛇を持つて喜んで躍る。

○蘇志摩利、珍らしきものゝ由、青い簑の樣なもの、[原]をばら〳〵に着て、腰に青い笠をぶら下げて四人出てくる。中頃から腰の笠をかぶつて舞ふ。

○御茶を上げますと云ふから、別室に行つて狹い處[原]を紅茶を飲み、咖啡色のカステラと、チョコレートを一つ食ふ。サンドヰッチは食はず、

喫烟室で煙草を吸つてゐると、東儀氏が誰かと話してゐる。東儀はやがて去る。

「とう〳〵——を罷めて役者になつたさうだ」

「儲かるのかね」

「えゝ儲かるんだらう」

「大變なものになつたね」

「此間ハム［レ］ットとかを演ると云ふ事が新聞に出てゐたがあの方なのですか」

「えゝさうださうです」

岩倉掌典長と九條公爵と萬で[原]小路の三貴族の間にこんな談話が交換されてゐた。

六月四日

○快晴、急にあつくなる。フラネルの下に薄い襯衣を着てゐて、坐つてゐると少し堪えがたい

○六月五日

○晝昨日と同じ北側の縁に出て、籐椅子に寐て、ノイエ・ルンドシヤウを見る。地面が濕つて滑かで實に好い氣持で英國などでは千金を出してもこんな色と肌色[膚]の地面は手に入らない。萩は柔かく伸びて二尺位になつた。其隣りの薄も細い葉を左右前後にひろげた。紫陽花は透る樣な葉を日に照らしてゐる。猫の墓標は雨で字がかすかに殘るやうになつた。前に白い小さな茶碗が具[供]へてある。其前に生けた竹筒の口だけが見える。中から薄紫の花の色が出てゐる。小供が東菊を插したのだらう。靜かな眠つた空氣であつた、(少し曇つてゐたから)其中でカン／＼と云ふ、鐵を打つ音がする。(昨夜宗參寺の門前を通行したら新らしく往來に堀り上げた土の底が幽かな火に照らされてゐた、穴の中に蠟燭が立つてゐた、向ふに提灯を點けて、三四人がインギルの上で鐵を打つてゐた。大きな鐵の火鉢もあつた。) 大方昨夜の工事のつゞきだらうと思つて聞いてゐた。

○一週間前に黑い猫をもらつて來た。是は飄けた顏をした怪物であつた。貰つた夜はえひ子とあい子をひつかいて寐かさなかつたと云ふ。次の夜は妻の夜具の上へ糞をした。其次の夜はゲツ／＼と云つて何か吐いた。又其次の日はあい子が猫の糞をつかんで泣き出した。今日は朝からオルガン〔の〕後ろへ這入て仕舞つた。さうして泡の樣なものを吐く、尻からは寒天の樣な粘液を出す。柳町の醫者の所へ連れて行つたら小さいのに無暗に硬いものを食はしたからだと云つた。牛乳以外に何にも食はしてはいけないと云つて

藥をくれた。診察料と藥で四十錢、下女は足りないから又來ますと云つて歸つて來た。藥を飮んだら元氣になつて其日の夕方から疊で爪を磨ぎ出した。

○Natural dwelling for passenger と書いて障子に張つてあるのに驚いて軒燈を見ると、朱で天然居と書いてある。勝手口の障子には天然居勝手口也と貼りつけてある。格子の上を見ると支那人の名刺が五六枚貼つてあつた。

○目白に行つて麥の正に黄なるを見た。

六月七日

○新の所へ行つて隅田川の語りを習ふ。藤野老人が近頃出京して新の家に居て新版の諸本の校正をしてゐた。老人が酒と碁は上達しないといふ話の序に勝負事の談になつて、雨敬の花をひいた事を話した。雨敬とか澁澤とかいふ連中が花を引くと二日も徹夜をする。無論さう云ふ席へは人を入れないが、藤野老人の知つてる某といふ男は近い關係からそんな所へ出入りをして、急用のあるときは一寸と云つて室外へ呼び出して用を辨じた。元來此等の人は所謂紳商だから金持に違ないが、千以上負けると「むき」になつて、いきり出してくる。さうして話があつて呼び出しても頭が整はない爲に一向纏まりがつかない。然るに雨敬のみは神色自若たるもので、いつ呼び出しても其席で平然として平常の如くに用を辨ずる。是が彼の他と異つた所であると、藤野老人は雨敬との關係で○○家が甲武鐵道の株をあんなに買つたのだと話してゐた。

　藤野老人は昔の留守居役であつたので、始終御馳走の席などへ出たが、其頃は客十人に就て盃が四つ位と云ふ割で一人が一つ宛は盃を有つてゐなかつた。其所で主人役はいつでも盃をもらつて歩かなければならない。酒が呑めないで役も勤まるまいと思ふ位苦しんだと云つてゐた

○德田秋江が來て姦通事件の話をする。小說の樣に面白かつた。御增と岡田、秋江の淋毒、關口臺町から喜久井町、增の姉の亭主文吉、文吉の家で團扇を見て、日光の宿屋へ行つて一軒々々去年の宿帳を調べてあるく事、神山旅館に、岡田菜園雨と書いてあつた事、文吉との談判、神田の家具屋の齋藤と云ふ所に妾奉公をしてゐるといふ噓、御增の實兄の女房の兄の三百代言、向ふの利害を代表して來て、秋江の味方になつて、岡山へ岡田をゆすりに行かうと云ふ相談、德田の岡山行、女の東京へ歸り、德田が後から歸ると女はもうゐなくなつてゐる。

○伊藤長七君來、愈長野の敎育會へ出席の事を諾す

五月八日[雨]

○結城素明と森圓月と來て、繪と書を交換す。素明の話に、大阪に森一鳳といふ繪家がゐて、あるとき雨が降つてゐる藻刈舟を畫いたら、人が續々賴みに來る。仕舞には藻刈舟に飽きて外のものを畫いたら氣に入らなかつた。是は藻を刈る一鳳（儲かる一方）と云ふ謎なのであるさうである。近頃美術院派の畫家に梅村（倍損）と云ふのがあつて、ちつとも流行らなかつた。其弟には櫻村（大損）と云ふのがゐて猶流行らなかつた。とう／＼名前を易へて仕舞つたさうである

○同素明の話に、文晁時代には席畫を二三度かくと一年の生計があつた。是は御大名が御客をする餘興に畫家が出て席畫をかく大抵はうちから畫いて行く位形式的なものであつた。すると其御客が三十人ゐるとすれば三十枚か〻なければならないが、是は歸つて約一年のうちにかく。さうして其料は主人側の大名から取るのださうである。さうして文晁にはこんな席畫が每日のやうにあつたさうである。

六月九日

○本多來

○早稲田鶴巻町から關口へ出て土手傳に細川家の裏から砂利場へ出て、學習院の裏を落合に出て、高田停車場から歸る。

×關口で瀧の上のちよろ／＼流を小供が跣足で渉つて遊んでゐる。左側の田圃に水菓子屋氷屋抔出來る。

×田は鋤き返して苗代三寸許り、畔に青草、遠く望めば青々としてゐる、學習院の裏へ出ると向ふに青い高い土手、其上を電車が通る、

×アーチの赤錬瓦、鐵橋、

×麥刈り入れ、

×芋の芽一寸

六月十日

○會議に出る。森田の小説不評判、半ば辯護、半ば同意して歸る、

○昨日は帝國座で高麗連の惣見があつた。例の御種さんが藤間の關係から切符を持つて來て、奥さんどうぞ入らしつて下さいと云ふ。少し都合が惡いからと斷はると、夫でも受取つた切符は（十五枚とか）向ふへ返す事が出來ないのだから是非と云ふ。賣れる丈賣つて、餘りを向へ返すのは當前の事である。始めから師弟の關係を緊張して、是丈は賣れても賣れなくても御前の擔任だと捌けぬ前から押し付けがましく不當の義務を脊負せるのは馬鹿氣てゐる。不埒な藝人根性から出た厭な點だから妻に斷はらした。聞けば芝居が濟んでから電車を待つ間に七人連でカフエープランタンへ行つたさうである。其中には秋聲と田村と

し子が居た。さうして勘定は小宮が拂つたのださうである

六月十一日

○昨日から大相撲。

○午少し前中村是公がくる。薄茶色の雨コートを來て丸でオットセーの御化けの樣ななりをして玄關に立つてゐた。飯を食ふと云ふから牛を取つて牛鍋で飯を食ふ。柳生の所から廻つて來たと云ふ。是から山口宗義の處へ行つて、四時に家へ歸つて夫から四時半頃帝國座へ行くんだといふ。膠州灣の總督のトロッヘルとか云ふ男が日本へ來て芝居を見たいといふから案内をするのだと云ふ。

○傘を持つて散歩に出る。番町富士見町を足駄であるく。夕方の號外を方々で賣つてゐる。相撲の勝負だらう。

六月十二日

○今日から入梅だと云ふ。陰。東の空煤烟に鎖されたるが如し。

○昨日妻が長野へ喰つ付いて行くと云ひ出して聞かない。

○鈴木さんの所で男の三毛猫が四匹生れたので是が大きくなると、一匹五百圓合せて四五二千圓だと喜んでゐるうちに二疋は病氣で死んで仕舞つた。

六月十三日

○昨夕、鈴木が醉ぱらつてくる。白縮緬の半襟に薩摩絣、茶の千筋の袴へ透綾の羽織をきて丸で傘屋の主

人が町内の葬式に立つて、懐に强飯の折でも入れてゐさうである。是は此間泥棒に洋服をすつかり取られた爲である。森田が氣の毒がつて自分の質に入れてあるのをやるから、出せと云ふが、出すには利を入れて五圓許り要る。其金がないから結婚祝の十圓許の品物を五圓に負けるから現金で呉れといふ。夫は羽織が可笑しいのだからおれの絽の古いのをやるから夫を着て間に合せろと云つたら、どうも紋が違ふから四五日はいゝが長くは困ると云ふ。とう〳〵五圓取られる。

○○○に○○○○とかいふ代議士がゐる。其弟に○とかいふ男が二百萬の財産があつて、金持でない器量はどうでも出の惡くないものを嫁にもらひたいとか云つて、妻の末の妹をどうかと云ふ相談があつた。丁度○○が來たから○○町に○○といふのがあるかと聞くと、「え丶あのおやぢは何でももとは犬殺しをした樣に云はれます、警察の代書をやつて、夫から○○○○○○を起したまあもぐりの樣なものです、何で二百萬あるものですか、○○町邊はみんな自分の地所だつて好い加減な事を云つてらあ、あの○はわたしが小僧のときから遊んだ奴です、人間はわるくはありませんが、まあ道樂息子で、か丶あ何か養ふ力はありません、國の中學や何かを落第して、高等商業なにかにゐるものですか、まあ然し緣ですからよく人に聞いて御覧なさいまし。

○昨夕下女の時が妻に話すのを聞けば「あの奥樣支那人の言葉は少しは分りますね」「さうかい、分るつて何んな言葉が」「でも反物を買つて下さいつて云つて來るのを、○○が入らないよと云ふと、夫でも見るだけ、まあ見て下さいと云ひましたよ」「夫や御前支那語ぢやない、日本語ぢやないか」「でも丸つきり分らないと思つたら少しは分るんですもの、可笑しいぢや御座いませんか」「夫やいくら支那人だつて日本語を使やあ分る筈だあね」

○あい子云ふ「あのね幼稚園にゐる支那人は提灯胴と云ふ名なのよ」

○昨日露國のポポフと云ふ男、神學校長瀨沼氏と共に來る。此人は日本の文學を研究したいと云ふ志望のよし、浦鹽の東洋語學校の三年生で、今度卒業論文に余のかいた何かを中心にして論じたいと云ふのださうである。卒業の上は日本へ來て文學研究をやる積ださうである。「門」をやる。

六月十四日

○昨夕紀尾井町を散歩。歸りに牛込見附迄來て、西の空を見るとどす黑い雲が一面にひろがつて、それが半圓を描いて次第に薄くなつてゐる。中心の所は甚だ濃い、稻妻がさす。神樂坂へ來ると、人が馳け出す。手を出して見ると、雨が一二滴あたつた。植木屋露店悉く荷をしまひかける。寺町で早稻田歸りの車にの る。車を往來に卸して烟草を呑んでゐた。やがてきせるを仕舞つて、どうです參りませうかと云ふから、辨天町迄いくらと云ふと十二錢やつて下さいといふ。乘るとき橋の上だと云つたら夏目さんでしたねといふ。うちへ〔原〕く坂の所から降り出す、家へ這入ると凄まじい雨が〔原〕音がし出した。

○神田駿河臺散歩、淡路町の裏を無暗に通つたら御神樂をしてゐた。馬鹿が二人で何か手眞似で話してゐる。そばの二階でそれを見下してゐる。かみの縮れた美人がゐた。

○朝のうちは長野の講演會でやる講演の腹案を纏めてドラフトにする。

○妻が昨日歌舞伎座の鶉の四か五を注文してゐたのを鈴木が急に朝鮮に歸るので斷つて來たから、斷はりに山田へ行く。

○晩に坂元がくる。坂元は文藝委員會の書記見たやうなものをやつてゐる。委員會の話などをやる。「杜若」を一番謠ふ。

六月十五日

○朝内田榮造がきて短冊をかいてくれといふ。書いてやる。先生私の耳は動きますといふ。成程動く。左右同時に同樣に動く。小供のとき小學校で叱られて腹を立てゝ齒を喰ひしばつて見たら、何だか妙だから鏡へ向いて見たら耳が動いた。夫が始めだらうと云ふ。

○小林郁來、又短冊をかゝせられる。

○小宮來

○小林修次郎來又短冊をかゝせられる

○神崎恒子來

○關淸潤かきて扇子へ書いてくれといふ

○夜鈴木春吉來

○春吉が北海道へ測量に行つた話（三十二年頃）をする。

○熊笹が高さ二丈位に一面生に生えてゐる。夫を刈つて見通すやうにして進む、朝起きて見るとマムシが日向にとぐろを捲いてゐる。それを遠くから棒で抑えて、逃がさないやうにして、傍へ寄つてみんなで打ち殺して仕舞ふ。それを臟腑を拔いて火に燒いて鹽をつけて食つた。
　味は肉と魚の間の樣に覺えてゐる。（蛇は糞をするか、卵を何處から生むかと聞いたら知らないと云つた。）

○あらゆる茸を食つた。ます茸と云ふのは廣蓋程大きい、蒲鉾の樣だつた。月見茸といふのは抱へる程大きい（是は食はない）鼠茸といふのは三つ葉の根の樣である。

○大きな傘の中へ葡萄を一杯入れて來て食ふ。舌が荒れて弱つた

○澤へ蚊帳を持つて行つて川魚（○○○）を捕つた。蚊帳が臭くなる。
○一週間絶食をした。是は人足が村へ米を取りに行つたあとで雨が降つて、澤の水がまして澤傳ひに歸れなくなつたからである。仕舞には夜だか晝だか分らなくなつた。夫でも便はある小便も
○山にはくほ[原]蜂ほどのあぶが居る。夫からだにたかる。それがからだに食ひ入つて手で障[原]つた位では落ちない。あぶは群をなす。帽子から白布をさげて眼の所だけあける。
○熊にあつた。夜テントの外で焚火へあたつてゐたら、がさ〳〵出て來た。
曲角などで出逢ふ恐れがあるときは騷いで行く。
○大風にあつて、芒原から三抱もある樹の竝んでゐる所へ逃げ込んだら、樹の幹が風に搖られて根が動くので丸で地震の樣にからだがゆすぶれた。
○大木を片方から[原]鋸で引き片方から[原]斧を入れて倒す。丁度自分の方へ半分程切つてまだ大丈夫と思ふ樹が倒れた。幸ひ首丈[原]はあとへ引いて尻持を突いたら膝は凹地で少し倒れた木と間があつて助かつた。

六月十六日
○南明俱樂部にて謠會あり、藤野老人の謠をきく。十一時過歸る。微雨至る。十二時に寐る。車夫が門を敲く、玉屋が門をたゝく。三時頃から五時半迄寐る

六月十七日
○愈細君の同行にて長野行
○王子の先のしそ畠、紫色、長さ二三寸

○田を堀り返す。苗代三寸許、田植をしてゐるのもある。もう濟んだのもある。
○一等列車は高崎迄しかなし。列車ボイも食堂もなし。
○浦和の先に來て大きな停車停についたら、大宮であつた。辨當を賣つてゐる。向ふ側に實業の日本を讀んでゐた、銀縁眼鏡のつめ襟のハンチングの人が是から先はいけませんよと云ふ、高崎にもあるが落ちますといふので、とう〳〵買ふ。二個五十錢
○ふと好い香がするから向を見ると、ハンチングの隣に東洋人だかニホン人だか分らない、腹の非常に肥つた男が葉巻をくゆらしてゐた。是は大宮からのそりと這入つて來た男である。
○前の眼鏡の人の眼鏡が鼻をはづれてゐる。それを平氣で實業の日本を讀んでゐる。
○鐵道の御役人らしい人が浦和附近で朝日の一頁をかしてくれた。己のを借りて返したのだと思つたらさうではなかつた。此人は上野を出るときか〔ら〕朝日を讀んでわらび、浦和、大宮ときてもまだ眼を放さなかつた。漸く桶川邊でやめた。
○高崎で山が見える。段々高くなる。横川といふ驛に碓氷嶺一里とあつた。
○トンネルヲ十程拔けて熊の平といふ停車停前後ともトンネルの中の小さな驛である。汽車は何の爲に停るにや
　下りて見ると汽罐に水を入れる爲なり、よくこんな高い所で供水の便があると思ふ。汽罐車は眞中に一つ、後ろに一つ、なり、
○トンネル二十六を出ると輕井澤なり、プラットフォームを逍遙して列車に歸ると、フロックコートを着たまがひパナマを被つた男が夏目先生は御出でありませんかと云ふ私ですといふと、私は長野縣の教育會から命ぜられて先生をこゝで御迎をして長野迄御連れ申すものでありますといふ。

○すると今這入つて來た洋服の土方の親方とも云ふべき見えの男が夏目君僕は野田だ（高等學校時代に居つた）といふ。成程よく見ると野田である。長野の土木技師をしてゐる。あれが淺間で、あれが何と一々說明をする。前の男は北佐久小諸小學校長田中直次君である。から松と雨敬の關係、桂公の別莊、あやめさくと（は）しほらしいと云ふ歌、布引觀音、姥捨山、牛に引かれて善光寺參り。妻女山、茶臼山、あんずの樹、其他を說明す。
○長野にて師範學校長以下の出迎をうく。犀北館といふのにとまる。
○夜色々な人の訪問をうく。
○森成さんが高田から迎ひにくる。

六月十八日

○善光寺境內向つて右池に河骨、蓮、菖蒲、文人畫理想の松ある處、小庵あり看板に曰く元祖藤八昔(原)指南所三代目玉栖谷(原)一爲。蟬しきりに鳴く。蟬聲(原)閑か。主人は坊主で妻君らしき人と暗い部屋で活花を眺めてゐた。前に黑白ぶちの小さい耳の尖つた日本犬が寐てゐた
○常照坊常明坊の石段の上の左の處で浴衣の丸髷の女が御饌の丸揚を食つてる（た）。
○石道四間幅左右柳松柏抔
○入口に名物生蕎麥　かどの大丸
○十時半頃から議事堂で講演十二時過旅宿に歸る。二時十分の汽車で立つ。薄謝といふ包をくれる。奥さんの分を拂ふから宿は其儘といふ拂はないで出る。高田迄の切符上等を二枚くれる。
○妙高山の頂きに雪の筋が見える。

○麥黄、植付すむ。
○五時過髙田着、一筋に細長い町なり。森成さんの家につく。家の構造、裏は川、畠、
○六時半柳絲郷にて夕飯。中學校長、師範校長、農學校長、髙田新聞二名、髙田日報二、離れ座敷、前に
泉水築山、雨蕭々、蛙鳴く。

○六月十九日
○中學校にて講演天天(原)體操場、上から生徒の顏を見ると、玉子の行列の如し。何もいふ事なくして困る。
雨大至聲聞えず
○十一時五十九分の汽車で雨を冒して直江津に至る。雨漸く晴。五智に行く。わくら樓、
○樓の作り。長庇し(原)、土緣、内庭のはづれに戸を立てる。十疊の三間つゞき。髙麗緣。床　稼穡の圖　米
俵、垣、柳下の子守、馬をひいて行く人。額　煙波浩蕩　松方伯。庇の外の藤棚半庇の上にかぶる。屛風
銀地
○右のはづれ、彌彥。左に能登の鼻、向に佐渡
○庭前柴垣。砂山つゞき。汀に砂磧(?)に船點々。
○内庭の端に手水鉢葉蘭、石露(原)、紫陽花
○屛風、詩佛、鵬齋、蕪村の嵐雪(?)、巢兆春琴の菊竹、竹谷の蘭、文晁の富士
○郷津の石油礦業事務室。がけ緣、破椅子兩脚、硝子窓から見える波、中の角火鉢、テーブルの上から電
報用紙がぶら下る。縞の縮の襯衣をきた(原)事務員らしき人が崖傳ひに海岸へ下りる。井戸の深三百間鐵綱
の上下に七分を費やす。どろをしやくつてゐた。

〇テーブル。傍「白米の通片田鑛場御中」醬油通春日組片田事務御中
〇國分寺　稱武帝の建立といふ立札あり、大いなる本堂に五智如來を安ず、親鸞謫居の迹あり、傍に鏡が池の舊跡あり、
〇わぐら樓にて一寸午睡し、湯に入る。快。六時二十五分の汽車で高田へ歸る。三等列車丈なり

六月二十日

〇八時出發　田川、菊池、高田日報主幹送る。長野で諏訪の守屋氏出迎ふ。姨捨山、田毎の月、松本にて下車　天主閣を見る。鹽尻峠の隧道。

〇六月二十一日朝七時頃出て、下社春の宮、秋の宮へ行く。
湖水の緣に沿ふて車を走らす、
水と道の間に植付の濟んだ許の靑田あり、其間に土を殘して小さい樹を植う。林檎らし。小さい實に袋をかぶせてゐる。波平。歸途は春の樣な心地、藻刈船、對岸の山、色が斑らに變化、其下の人家、
〇家の前を水が流れる。水をとめて槽を作り其内に魚を飼つてゐるのもある。鍋の蓋か一つ浮いてゐるのもある。
〇中庭が表から透いて見える田舍の料理屋もある。
〇きたない家の二階に胃活の看板がかゝつて、屋根の上に古手拭の鉢卷をした男がつくろひをしてゐる。
〇下社の四方に一ノ御柱（五丈五尺）二ノ御柱（五丈）三ノ御柱（四丈五尺）四の御柱（四丈）の柱を立つ。七年目とか云ふ。春の宮へは二月一日、秋の宮へは八月一日に移る。鳥居から丸石を敷いた道をだら

くに上る。萱葺の素樸な宮なり。杉の森。

○六月二十八日

一昨夕散歩から歸るとどつと降り出して、昨日は終日の雨に風が加はる。今日は怪しい空に風が音を立てゝ飛ぶ。午後四時から美學研究會へ出て講演をする筈であるが、少し穩かになつてくれゝば好いと思ふ。

○三四日前（長野から歸つた翌日か）寺田が歸朝した。御土産をくれた。金のリンクスを余に、ブローチを妻に、四本のリボンを娘に、ミユージカルボツクスを純一に。

○同じく三四日前に津田青楓と杉本正生がくる。

○昨日ベルクソンを讀み出して「數」の篇に至つたら六づかしいが面白い、もつと讀みたいが今日は講演の頭をとゝのへる都合があつて見合せる。

○車で大學御殿迄行つて講演をやる。歸りに夜八時半頃本郷で寺田の宿を尋ねる。十時過歸る。風烈し幸に雨は歇んでゐた。

六月二十九日

○朝雨がどう／＼と降る。豪壯のうちに凄然の氣色なり。午頃小降になる。車で神田の南溟館へ謠會へ行く。中野武營、中野岩太、細川侯爵等を御客にしての饗賓會なり。賓盛と草紙洗を聞いて歸る。入違に寺田が來たよし。晩に小宮と岡田がくる。

六月三十日

○朝雨がまたどう／＼と降る。新聞を見ると大分水が出る。新聞が濡れてゐる。

七月一日

○終日雨。晦冥。じめ／＼して堪へがたし。
○仮田のため大阪へ電報をかける
○ベルグソンの「時間」と「空間」の論をよむ
○夕方少し雨やむ。門を出づ。薄墨い空の雲はやく走る中に仄かに青きもの見ゆ。明日晴かと云ふ氣を起つた。船河原橋の下で大勢四つ手を卸してゐる。それを土左でも見る様に人がたかつてゐる

七月二日

○晦冥益甚し。牛込御門行を見合せて宅にゐる。

七月三日

○相變らずの雨にてくさ／＼する。踏むもの觸るゝもの悉くじめ／＼して心地悪し。二時頃寺田がくる。第五の出身者が五六人精養軒で飯を食ふから出ないかと云ふ。雨では恐れるがと思つたが思ひ切つて出る事にした。江戸川終點へ出る間の道の悪さ加減はまことに言語に絶してゐる。仕舞に腹が立つ。然し土を鑑賞する事が出來たら此位美的な土はあるまい。ファインで粘り氣があつて柔かで申し分がない。是をはき寄せて、タンクを作つて壁土に利用したら通行者にも經濟にもなるだらうと云ふ事を寺田が申し出た。歸りには豪雨の御蔭で此どろが悉く流れてゐた。

○精養軒では久し振りに木下理學博士、田丸博士、石崎所長、内丸助教授、野並專賣局技師と寺田と余と落ち合つた。食後木下が余から叱られた話をする。懐舊談が多かつた。九時過出る。寺田が江戸川迄送つてくる。（木下云ふ病氣の時見舞ふと思つたが、昔し叱られた事を思ひ出すと恐くて行く氣がしなかつた）

七月四日

○雨が依然として堂々と降る。今日は九段に夜能があるから見ないかと野上から誘はれた。
此雨は音丈聞いてゐても凄まじい。

七月八日

○暑甚し。風吹く。午後より烈風。晩方散歩。店を半分閉ぢたる處あり。往來で人の帽子を飛ばしたものに逢ふ事數回。たちどまつて風の過ぐるを待つもの澤山あり。風の音ひゆ／＼と鳴る。此日日比谷公園に萬朝所催の電車市有反對の市民大會あり。歸りに電柱に號外の張出あり。
○神樂坂の演藝館の看板に早川辰燕とか云ふ浪花節の口上に
「昨年六月より滿韓巡業の處本年六月に至り長男○○早稲田大學在學中青山腦病院にて死去の報に接し悲哀と親愛にて感慨登壇　諸君の同情と割愛を煩はすと云爾」
○寺田來。ビールを飲む。明後日國へ歸るといふ。

七月九日

○晴天。暑甚し。晩方水道町から神樂坂を散歩。榎町の角の倉田屋の隣の提灯屋が纏ひを書いて上下に駁

斗を散らして、眞中を藍に塗つて、其處へ銀で棒を引いてゐた。天井には岐阜提灯が澤山ぶら下つてゐた。
○神坂坂に蟲屋が荷を出してゐた。長さ一間位の荷の上を屋根の様にして前に暖簾をかけてゐる。黒い中に白で字が染め出してある。眞中に山の下へ越の字其左右に蟲の名が並べてある。松蟲、鈴蟲、轡蟲…中には籠が一杯ある。扇の形、舟の形 鳥籠の形、紫のひもで括つたものや、緋の紐で結びたもの、夫から家の形に出來たもの、蟲屋は其下に腰を掛けてゐる。殆んど足を動かす事さへ出來ない。

七月十日

晴。暑甚。朝 社の會議に行く。歸つて長椅子の上でぼんやりしてゐた。五時頃車で安倍の家へ行く夫からケーベル先生の宅へ行く。御茶の水で電車を降りて先生の家の前迄來ると、高い二階の窓から先生の頭が出てゐる。烟草の烟りが見える。入口で安倍が久保君々々々と云ふ。久保君は海軍中尉であつたが軍人をやめて大學へ來て哲學を研究してゐる。久保君が二階へ上つて行くと、先生が高い處から降りて來た。ミスター ナツメ、アイ アム グラッド ツー シー ユーと云ふ。階子段の下で握手をして二階へ上る。先生の書齋は大きなテーブルがあつて本があつて古い椅子が二三脚ある。頗る古びてゐる。少しも雅な所も華奢な所もない。たゞ荒涼の感がある。先生は縮のシャツにケンドンの上衣をきた丈である。襟さへ着けてゐなかつた。「君が盛装してゐるのに私はこんななりで」と云はれた。

○「ハーン」の話 アブノーマル

○「ウード」の話

○昔しケーベル先生の處へ行つて置いてもらへと牧巻から云はれた話、

○十八年日本にゐるといふ話、失望ハシナイ、大ナル豫期を持つて來なかつたからと云ふ話

○圖書館とコンサートと芝居がなくて日本は困る丈だと云ふ話
○日暮が庭の樹に鳴く話　日暮が好だと云ふ話　トカゲが美くしいと云ふ話
○ロシャ人には日本人によく似た顔があるといふ話。三十年前の寫眞
○鳥が凍〔原〕へ死んだ話
下の食堂に行く白布がない。四人一方に一人づゝ坐る。何を飲むジン、ブランデー？と聞かれる。余は
葡萄酒とビールを飲んだ。
○梟が好きだと云ふ話
　蝙蝠が好きだと云ふ話。羽はデヸルの羽だ。
○椿がきらひの話。菊は紙造りの樣だと云ふ話、リ、ーオフゼヴレーの好きな話。
○日本の果物は林檎丈食へる。他は駄目だと云ふ話
○今から百年したら日本にオペラが出來るだらうと云ふ話。
○日本で音樂家の資格あるものは幸田だけだ。尤もピや〔原〕ニストと云ふ意味ではない。たゞ音樂家と云ふ丈だ。日本人は指丈で彈くからだめだ。頭がないから駄目だ。
○自分が音樂をやるといふ事は日本へ來たら誰にも知らせない筈だつた。處がどうしてかそれが知れた。然しもう近頃は斷然どこへも出ない事に極めた。自分で獨樂しむ丈である。音樂學校は音樂の學校ぢやない、スカンダルの學校だ。第一あの校長は駄目だ。
○ブラウニングは嫌だ。ウオーヅウオースの哲學の詩は全く厭だ。ボーは好だ。ホフマンは猶好だ。
新らしいのはあまり好かない。アンドレーフは厭だ。チエホフは非常に立派な文體だ。
○自分が日本を去れば永久に去る。一寸歸國などはしない。

○自分のやつてゐる仕事はすきだ。自分の書生が好だ。淋しい事はない。散歩つて、何處へ散歩する。町へも出られまい。本を讀んでゐる丈だ
○メレジユコースキーのアレキサンダーと云ふ小説をよんだ。甚だ佳い。
○コフヒーが、凡ての飲料のうちで一番好きだ。此間和蘭公使館で飲んだコフヒーが一番上等である。
○儀式は大嫌だ。あしたも卒業式があるが無論缺席をする。どうも三時間も立つてゐるのは敵はない。もつた簡單に出來る事をわざ／＼あんなに面倒にする。

七月十一日

○かん／＼照り付ける。殆んど堪へがたい。籐椅子の上でこん／＼としてゐる。晩方えい子とあい子と純一を連れて神樂坂へ散歩に出る。氷屋でアイスクリームを呑む。純一は氷あづきを食ふと云ふ。おもちや屋でえい子は金製のベツト、あい子は西洋人形、純一は飛行機を買ふ。此飛行機は飛ぶ事受合の處ちつとも飛ばず翌日すぐ破れて仕舞つた。

七月十二日

○今日もかん／＼で殆んど堪へられない。晩に又三人連れて江戸川へ行く。硝子入りの菓子と菓子の烟管、烟草入と夫から旅行用のブランデー入れまがひに菓子の這入つたものを買ふ。きせると烟草入は純一、ブランデー入は仲六への土產、
　純一どぶへ落ちる。
○江戸川へ來ると往來へ店を出して、眞菰、緒殼、みぞ萩、鬼ほうづき、（青くて所々薄赤くなつてゐるも

の）を賣つてゐる。盆の心持を促がした。

七月十三日

○漸く曇る。少し凌ぎよし。

七月十四日

○六時頃散歩に出やうかと思つてゐると空が急に暗くなつて雨が木の葉を打つ音がした。夫がまたゝく間に豪然として地上のあらゆるものを鳴らしてすさまじく降り出した。すると雷が鳴つた。雷より稲妻の方が烈しかつた。光りが段々になつて最高度は白晝と異なる所なく光つた。さうして其段々が一瞬の間に凡てを經過してしまふ。あとは暗くなつて物凄い。芭蕉がすさまじく動いた。光りに恐れて下女が（縁側の戸を立てゝゐた）突然玄關へ來てつつ伏した。此時電燈が全く消えた。巨人が帛を裂くやうな音がして夫がすぐ割れた。

七月十五日

快晴。又熱くなつた。

○ねだられて活動寫眞に行く。あつくて仕方がない。一等は少しすいてゐるので、まだ凌げるのだが外は鮨をつめたやうで、うぢや〳〵してゐる。伯爵夫人とかいふものをやる。女をなぐつたり、男をつき飛ばしたり殺伐な眞似ばかりをする。さうして口籍入りだから猶いやになる。幸ひ白はがや〳〵してよく聞えなかつた。エイ子、恒子、雛子は夫で泣いてゐる。何で泣いてゐるのだか分らない。雛は十三、恒は十一、

エィ子は九つである。夫から西洋のおどけたのを見る。其方が面白い。歸りに氷葡萄を飲む。

七月十六日

○盆。少し曇る。午後四時頃山田の奥さんがくる。粽をくれる。山田さんの前に小宮と鈴木がくる。

七月十七日

○曇午時頃から降り出す。

○昨夕江戸川を散歩して澤山ある橋のうちの尤も小さい橋の欄干によつて東を眺めたら、水の左右から水の上にのしかゝるやうに柳が綠の枝をさし出してゐた。夫が遠くに行つて櫻の[原]變つて兩岸が蒼く丸くこんもりと高く見［え］る中に水が長く流れた其中を橋がいくつも横切つてゐる。さうして凡ての末に後樂園の高い森の中から砲兵工廠の烟突が二本出てゐた。

○今度は電車終點の所へ來て同じく橋の欄干に倚つて西の方を望んだ。其時は人の顔が漸く區別される位の薄暮であつた。其上空が曇つてゐた。けれども其薄黑い空明りが水の上に落ちる爲か流の面が蒼茫とした地面の上よりも岸よりも明らかにきら／＼してゐた。其中に小船に人が二人乘つて棹さして上つて行く。船も人も只眞黑に輪廓が眼に映ずる丈であつた。動く棹が細く黑く矢張り見えた。此黑いものがひかる水に包まれて廻り燈籠の影法師の如く見えた。やがて竪にさす棹の色がぼんやりして判然しなくなつた。

七月二十一日

○曇、十一時過滿鐵に行く。そこで午餐を認め。夫から自働車で停車場へ行く。鎌倉行。[原]滊車中○○のい

たづら話をきく。〇〇に藝者が惚れたやうに老妓から云はせる。〇〇が夫を眞と思ふ。長春から川上がくるのを奉天で待ち受けて、長春にゐる川上の關係のある女の寫眞を雜誌から切り拔いて臺紙へ張りつけ、滿鐵公所の下女に手紙をかゝして、夫を郵便で出す、川上が奉天へ着くや否や郵便を受取る。みんなの前で半分あけてやめる。みんなで追求する。獨りでストーヴの所で見る。其裏を見たと云つて、責める。云々。

〇二時過鎌倉着電車で長谷迄くる。別莊は長谷寺の後ろにある。光則寺の入口の右手の高い所なり、東南が開けて、東の正面に材木座と山を見る。中間に松原が見える。夫が風に倒られて斜めに海の方から逆に高くなつてゐる。山の前の灣夫から右の方は大海。樓の右手大松、左斷崖、前築山を降りて（芝生の〻島、蜜柑、棠閣、芋など生える。池（原）の中の藤棚

〇杉山茂丸の別莊。山を上る。鹽をあびる。夜十二時寐る。

七月二十二日

曇。モヤで向の山がぼうとしてゐる。海が殆んど見えなかつた。段々明かになる。船點々。帆走る。沖の方の第二の山脈の下の處水光る。

厠に上ると窓から崖が見える。蟹がゐる。

〇八時頃から小坪へ漁に行く。昔し來た事のある村を今見れば矢つ張り魚臭き所、道幅、軒（原）許の處右が段落に磯になつてゐる所、左が段上りに登つてゐる所が記臆（原）と一致する。小坪へ來た事は來たが何といふ宅か分らない。西のもので南の方から養子に來たものと云つて聞くんださうである。隨分昔話の樣な聞き方なり。とし子さんが極りが惡いと云つて聞くのを厭がる。子供に聞いたら知らぬといふ。婆さんに聞いた

らしばらくしてそれならあすこだらうと云つて教へてくれる。編笠をかぶつて歌をうたつて月琴を彈く女が休んでゐた。そこから十間許來て右へ曲ると、石段が三級ばかりに仕切られてゐる。いづれも踏み減らして凹形になつてゐる。其天邊へくると五坪程の空地を前に家内の眞黑になつた萱葺がある。軒下に御祭りの提灯があるのを見てとし子さんが田中吉太郎といふのですと云ふ。無花果が隅に二三本、未熟の果、きり〳〵〔す〕の籠が懸けてあつて、下に痩せこけた鷄が四羽ゐる。あみはいびつのブシユカンの様である。入口に杓子、其上に（酒日 裁 乙女 田中吉太郎 一家一同）

婆さん曰く實は頼んで置いたが今朝の天氣だからと云つて舟で出たから呼びにやりました。

くさくて堪らなかつたのがなれて漸く直る。

○磯へ出て舟にのる。たこを突く。鏡、の構造、藻がゆつくり動搖する。

○生簀の魚を買ふ。いさき、すゞき、黑鯛

○いきに橋の上を通る。海岸橋といふ。下は滑川ならん。車夫は閻魔川だといふ。左手の畠に黄なものが見える、菜の花の感じ、唐瓜なるべし。good effect.

○歸りに海濱院の所で舟を上る。八幡前へ行く。

○めしを食つて午睡三時三十三分の汽車で急行新橋着。

○車中で○○曰く。滊車に大便所をつけるときは大議論ありし由、夫から寢臺車をつけるときも然り。

○井上が淺野侯の寶物の懸物を奪ふ話。伊國公使になつたとき呼ばれて寶物の二幅對を見せられる。出立後留守に向つて先日のを一幅讓つて頂きたいといふ。淺野家では大臣の事だから評議の末承知の旨を答ふ。井上は返事に二幅共御讓り被下候よし難有しとあり。夫から淺野家では寶物を決して懸けて人に見せない。

七月二十六日

○昨夜十一時頃より暴風雨、二時頃に至つて凄まじき音して寐られず、そつと起きて、外を見ると、風の狂ふ中に木の鞭たるゝ樣見ゆるが如く見えざるが如し、空に少し赤味ありたる樣覺ゆ（余厠の窓より見たり）電燈消えて眞暗也。
○新聞今朝號外を出す。相模灘の颶風東京灣に海嘯を起し。洲崎の堤防を破壞、貸座敷一戸を倒す。娼妓十五六名死す。嫖客の死體も續々出る。
○高輪の鐵路破壞下り列車不通
○逆流大川口より浸入　深川水となる。
○舟が陸へ乘り上げて家を倒しかけたるあり。

八月九日

○七月二十六日の暴風雨が漸く歇んだと思つたら又したゝかに雨が降つたので天龍川の堤が切れて汽車が不通になつた。それを徒歩連絡で十町ばかり足を勞すれば濟むやうになつたのは一昨日である。其十町が七町に減じたと今日の新聞にあつた。所が昨日の新聞に暴風雨の警戒があつたので、もしやと思つてゐると、重い空の中から昨夜枕元にしたゝか降つた。明けて見ると又したゝか降る。午頃少し輕くなつたら午後から又どうどつと降る。是では折角の連絡も亦不通になると思つてゐると、社から小池君が來て、實は高原が今朝立つたが連絡が切れて靜岡で留つてゐるとの話。昨日の大坂からの電報に東海道延着につき十一日に御着あるやう十日に立たれたしとあつた。自分は明朝八時半の一二等最急行で行く積であつたが、不通では仕方がない。講演は十二日からだから十一日の八時半でも連絡さへつけば間に合ふ。車夫に電話

で新橋局[原]へあすの連絡の模樣を聞き合せてもらふ。
車屋が歸つて今は不通ですが明日にならなければ明日の事は不明だ、まあ大抵六づかしからうと云ふ返事をした。

十日

○夜眼を三度さます。一度は靜かであつたがあとの二度は大變な音をして雨が降つてゐた。明日はとても不通だらうと思ふ。昨夕寐る時、車夫に起きがけに電話をかけて不通か連絡がついたかを聞き合せてもし不通ならば、汽車不通あすの朝迄待つて見るといふ電報を社へかけるやうに命じた。所が今朝六時に起きて飯を食つて、七時過になつても車夫が歸らない。聞いて見ると電話が御話中[原]に中々かゝらないのだといふ事が分つた。そのうち七時四十分になつた。八時三十分の汽車には殆んど返事の如何に關らず到底間に合ひさうもない。雨は一時小降りになると共に天地が非常に靜かになつた。表をあるく人の足音が耳に入る。門の外を窺ふとあらゆる泥を洗つたやうに白い砂利の肌が明か〔ら〕さまに見えた。八時頃車夫が歸つて、矢張不通だといふ。新聞の延着したのを見ると、

颶風沖繩に滯在す

九日朝四國沖にありし颶風の中心は豫期の如く西北に進行し屋久島附近を通過し支那東海に入り目下東經百二十八度北緯三十一度の邊にありて中心の示度七百五十耗を僅に降りたり又沖繩島附近に在りし颶風の中心は依然として滯在す、沖繩より電報未着につき詳細を知る能はず九州にては東の風頗る强しと雖槪して曇天にして處々驟雨あり甲武兩毛地方にては雷雨のため多量の降雨あり東京附近に大雨ありしは之が爲なり東京附近は十日天候不良ならざるべし、東京午後三時迄雨量十三耗

（九日午後二時迄實況）

東京地方警戒

△五區（東海道地方）を警戒す、風雨強かるべし颶風は琉球の南東洋上（北緯二十四度東經百二十八度）にあり示度七百四十粍、北方に向ひ進行しつゝあり（十日午前零時三十分）

△東京地方を警戒す風雨強かるべし以下略（同上）

△第一區二區三區四區（臺灣九州四國中國畿內）を警戒す暴風雨の虞あり以下同上（十日午前零時三十分）

とあつた。

十時頃蟬が鳴き出して空の奧に日光をつゝみたる氣合なり。雷なる。格子を拭いてゐた下女あつといふ。

十一日

快晴新橋に行くと東海道全通とある。早速乘り込む。鶴見の手前で電信柱の半水に埋れたのを見る。道中夫程の災害もなき模樣、袋井の處はレイルの下を割つて二十尺ばかり持つて行つたので長さは僅ばかりである。

車中川崎造船所の桑ばた、小山正太郎畫伯、濱野工學、遞信省の猪木士彥に逢ふ。暑甚し。八時半つく。長谷川高原兩氏迎へらる。銀水に入る。川向の家なり。對岸に病院、前に圖書館、公會堂、夜暑甚し、緣側を明け放して寐る。

十二日

五時半起床、朝見るときたなき旅屋なり下宿の少し氣の利いたやうなものなり、室に澁を引いた紙を一

杯にしく。たまらぬ暑なり、七時になつても下女が床を上げに來ず。
九時過箕面電車にて箕面に行く溪流の間を上る。朝日倶樂部は寺の左の崖の上にあり、甃、繩暖簾、ぢぢと婆、婆はつんぼ。ぢいさんも。婆さんはくり／＼坊主である。其上又外の婆さんの頭をくり／＼にしてゐる。脊中を叩くと、おや御免やす、今八十六の御婆さんの頭を剃つとる所だすよつて、……御婆さんおつとしてるなはれや、もう少し[原]げけれ、――よう剃つたけれ毛は一本もありやせんよつて、何も恐ろしい事ありやせん。――御婆さんは頭を撫でゝ、大きにといふ。それから御免やすといつて歸つて行く。御婆さんどこだと聞くと千秋閣だす、御歸りに御寄りやす。千秋閣とは入口の立派な料理屋[原]なり。
瀧の處に七丁程上る。シブキを浴びて床几に腰を掛けて話す。夫から倶樂部に歸つて千秋亭から料理をとつて食ふ。ひる寐。五時頃起きる。婆さんが又湯に入れといふ。やめて入らず。又電車で梅田に歸る。夫から直に明石に向ふ。社の販賣部の男案内をしたり荷物を持つてくれる。八時三十分明石着衝濤館に入る。庭先二間の所に三尺程の石垣あり、波が其外でじやぶ／＼といふ。川か海か分らず、船で三味線を引[原]ひて提灯をつけて來る。幅の廣い涼み船なり。販賣の人歸る。たゞ波の音をきく。

十三日

昨夜次の部屋で何かこそ／＼いふ。よく聞くと西洋人である。黑い影が一寸蚊帳へさす。見返ればもうなし、しばらくして彼烟草を呑むといふ聲がする。下の座敷で騒ぐ。
朝六時頃起きて風呂へ這入らうとすると雨戸がしまつてゐて、明ける事出來ず。やうやく冷水を浴びてゐると女が風呂の戸を開ける。部屋へ歸つて雨戸を開けて海を見る、男が二人出て泳ぎ出す。下の男何處からかボートを借りて來て漕ぎ廻る。昨夕の藝者が一人づゝ乘る。夫から漁船を雇つて乘りうつるに、か

の男眞黒な小供を二人舳艫に乘せて漕ぎ廻る。藝者大きな聲を出して阿呆といふ。
舞子の先が見える。淡路の燈臺が見える。泳いでゐる人の足がよく見える。くらげが見える。帆懸船がぞく／＼出る。
午後公開堂で演說。宿に郡長、市長、助役などくる。七時頃歸る。九時着、紫雲樓に入る。

十四日　快晴

九時五十二分の汽車で和歌山に行く事にする。和歌山からすぐ電車で和歌の浦に着。あしべやの別莊には菊池總長がゐるので、望海樓といふのにとまる。晩がた裏のエレベーターに上る。東洋第一海拔二百尺とある。岩山のいたゞきに茶店あり猿が二匹ゐる。キリといふ宿の仲居が一所にくる。裏へ下り玉津島明神の傍から電車に乘つて紀三井寺に參詣。牧氏と余は石段に降參す、薄暮の景色を見る。晩に白い蚊帳を釣り明け放して寐る夫でも寐苦しい。朝起

　涼しさや蚊帳の中より和歌の浦

十五日

早車で新和歌の浦に行く長者議員某氏の招く所といふ。トンネル二つ。運動場といふのは砲臺の出來損の如し。歸りに權現樣に上る。橋の所に乞食が二人ゐる。石段は一直線で三にしきる。夫から片男波を見る。稀らしく大きな波が堤を越えてくる。電車で和歌山へ行く途中から降る。縣會議事堂は蒸し熱い事夥し。宴會を開くといふから固辭しても聞かず、已を得ず風月といふのに赴き離れで待つてゐる。宴開くる頃から風雨となる。隣席の綿ネル商望海樓は危險だといふ。藝妓の踴と和歌山雲右衛門の話を聞いて外へ

出ると吹降りである。西岡君は三度も電話をかけて大丈夫かと聞いたら大丈夫と云ふ。牧君にどうしませうかと云ふと牧君は夏目さんどうしませうと云ふ。北尾君がこちらが宜しいでせうと云ふ。後醍院君は是非和歌の浦迄行くと主張する。余等三人はあとの[原]西岡、後醍院、早[原]記の○○君と和歌の浦に向ふ。余等は富士屋といふのに入る。電燈が消える。ランプを着[原]ける。其ランプが又消える。慘澹たる所へ和歌の浦の連中が徒歩で引き返す、車で紀伊毎日の所迄行つて電車を待つてゐると電車は來るには來るが向へ行くのは何とかの松原迄で其先は松が倒れて行けないといふ。何時〔迄〕待つても埒が明かないので歸つて來たといふ。西岡君は今[原]望海樓が今夜中持つか持たぬかゞ疑問だといふ。是は電話をかけても通じないからだといふ。所が富士屋から電話をかければ望海樓へよく通じる。風雨鳴動のうちに愈十六日となる

十六日

今朝十時の汽車で大阪へ歸らなければならない、西岡君は早朝荷物を和歌の浦迄取に行く。つな引でなければ行けぬといふので二人の車夫を雇ふ（後で壹圓八十錢平生の三倍とられる。）歸つて、向ふは何でもない、三階の客は皆よく寐たといふ。

一時頃大阪着。晩の六時に平野町の川卯とかへ慰勞會に出席する筈なり。

十一月十一日

大阪で病氣をして湯川病院に這入つて（八月十九日？）から九月十四日に東京へ歸つて

痔を切開して以後丸で日記をつけない。
　其間に池邊が主筆をやめた。余も辭表を出した。

○昨日も佐藤さんに行つた。（佐藤さんには隔日に行く）。支那人の患者にあなたの家は何處かと聞いてゐた。武昌の附近だと答へた。なに外に心配もないが弟が一人參謀になつてゐるのが、どうしたか心配ですと答へてゐた。佐藤さんに聞くと是は工科の學生ださうだ。又一人の支那の學生が來たのに向つて、あなたの所の公使はどこかへ姿を隱したといふぢやありませんかと聞いてゐる。えゝ公使も氣の毒です。留學生の學資が來ないのに、政府の信用がないから銀行で金を借[原]してくれないのです。大きな額ならまだしもですけれども二十萬や五十萬ぢや誰も借[原]さないです。公使は自分の金を十萬圓出しました。氣の毒ですといつてゐる。是は漢口の稅關長の伜ださうである。（[原]近頃の新聞は革命の二字で持ち切つてゐる。革命といふやうな不祥な言葉として多少遠慮しなければならなかつた言葉で全紙埋まつてゐるのみならず日本人は皆革命黨に同情してゐる。――革命の勢がかう早く方々へ飛火しやうとは思はなかつた。一ヶ月立つか立たないのに北京の朝廷は殆んど亡びたも同然になつた樣子である。痛快といふよりも寧ろ恐ろしい。
　佛蘭西の革命を對岸で見た[原]ゐた英吉利と同じ教訓を吾々は受くる運命になつたのだらうか。

○佐藤さんから錦織剛正の話を聞いた。錦は佐藤さんの父の家に寄食してゐた。さうして其町で一番物持の一人娘をそゝのかして小判三百枚を盗み出して東京へ出たのださうである。入獄して出るや否や人氣取りの爲に圓遊一派の藝人の寄附金で各區に米屋をこしらへて米を實費で貧民に頒つ人氣取りの策を講じた。實際二三所に米屋を開いて、自分の居宅の近所では米を施こしか安賣かした樣子であつた。夫から飲口の製造所を造つた。のみ口といふものは專問[原]家でなくては出來なくて其專問[原]家は東京に十五六人しかゐない

其他は大阪にゐるといふので、夫等を雇ひ集めて「のみぐち」製造會社を作つた。所が一年程して職工がストライキをやつて滅茶々々になつて仕舞つた。次に九州の或る海岸に古代の釣鐘が沈んでゐるの〔を〕上げる。上げた鐘は宮内省で十萬圓で御買上になるとか號して金を集めにかゝつた。然るに此鐘は普通の繩や紐では揚げられない。毛綱が必要だとか號して神社佛閣に奉納してあるのを貰つて歩いた。いざ潛水夫を雇つて探つて見ると岩と貝で一ぱいだから一々金槌か何かで敲いて離さなければならないとか云ひ出した。さう〔し〕て折角の毛綱は切れて仕舞つたからもう一本拵らえるとか云ひ出した。其上此鐘は村で祭てあるのだからもし引き揚げるなら村のものへ何萬か遣らなければならない。――こんな事を云つて歩いてゐたが鐘は夫切になつて仕舞つた。――今では本所邊に畫工をしてゐる。

○今日から綿入を着る。（天長節に始めて密[原]柑を八百屋に見る）

十一月十八日

○昨晩は木曜日だつたけれども南暝[原]倶樂部へ謠をうたひに行く。碧梧桐、虚子、四方太なども來る。久し振で同吟す。能も久し振りで此十二日に見た。櫻間伴馬の改名披露の能であつた。

○昨日より妙に生温かい、丸で肅殺といふ感じを失つて春先ののぼせる季候である。昨夜十時半頃南暝[原]舘から表へ出るとどんよりした空の下にレールが生白く光つて往來はしつとり濡れてゐた。

○今日は依然として不快な曖氣である。さうして厭に頭痛を誘ふ風が強く吹く

○昨夜弓削田來不在、一昨夜松山來。

○今晩地震〔が〕あるといつて鈴木さんが教へに來た。妻は今夜は隣の部屋で勉強なさいと云ふ。何故だと聞けば此室は本箱が倒れる恐れがあるからですといふ。

○芭蕉まだ靑し。山茶花しきりに散る。苔の靑き上に瓣が折り重なつて亂れてゐる。梧桐はもう黄色になつた。

十一月十九日

○袁世凱といふ人が此間內閣を組織した其顏觸は新聞に出てゐたが內四人は滿人ださうである。是は立憲君主政體で行く積ださうである。武昌の方は共和國を建設するのが主意だとかいふ。
廣東の總督は斷髮令を下したと書いてある。
○昨日妻が机の前へ來ていふには「あなたなぞが朝日新聞に居たつて居なくつたつて同じ事ぢやありませんか」「仰せの如くだ。何の爲にもならない」と答へた。すると妻は「たゞ看板なのでせう」と云つた。余は「看板にもならないさ」と答へた。出たいといふものを何だ蚊だと云つて引き留めるにも當るまいと思ふが、其處が人情か義理か利害か便宜かなのだらう。

十一月二十日

○十八日に弓削田が來て考へ直せといふから辭表を撤回したら今朝池邊から夫を送り屆けて吳れた。松山が午後來るといふ電報をかける
○佐藤さんの所で又肛門の切開部の出口をひろげる。がり〳〵搔く音がした。今度は思ふ存分行つたといふ。看護婦も是で本當に濟みましたといふ。然し深さは五分程まだある。此先癒るとしてもまだ二三度はこんな思ひをしなければならないかも知れない。餘程たちの惡い痔と見える。
○朝日講演集を三部送つてくる。自分の丈を一息に讀んで見た。思つたよりも下らない氣がする。

○昨雨[原]の雨晴れて、茶黄の梧葉に日がきら／＼當る。濡れた紅葉が一面に庭に落ちてゐる。子供が夫を拾つて縁へ並べてゐた。

十一月二十三日

○例により暖、木曜だけれども久し振にのんきな外出をやらうと思つて出る。少し雨が降る電車に乗ると晴れる。本郷通りに敷石の人道が出來たのに驚ろく。（寺田の話に之は四萬圓を要したとかいふ）寺田の宅で少し話して、蕪村と五岳の畫を見る。連立つて表慶舘へ行く。王羲之の眞筆と賀知章の眞筆を見る。是は珍らしいものである。支那人の花鳥畫の面白いのもあつた。歸りに上野精養軒へ盛裝の白紋[原]及びシルクハットが續々車、馬車及び自働車を馳[原]るのを見る。醫科の教授多し。たから亭へ來て晝飯を食つたら二時半である。九段迄歩いて電車に乗つて歸る。寺田家迄くる。疲勞。夜。

十一月二十四日

○異常に暖、九時過より雨。庭砌に蛙鳴を聞く。此間から蛙がなく。どうも一匹らしい。丸で春先の感である。

○佐藤さんの所で膀胱鏡を見る。ニッケルの管の先が匙の先の様に曲つた所にガラスがあつて、其内に電氣の光が通つて、其光がプリズムに反射して管の口の所でレンズに擴大されて眼に入る装置である。マーゲン・ウンテルズッフングといふ器械の繪も見たが是は一ノ管で空氣を送り、電燈をつけかねて管の先から箸の様なものを出して物をつまんで引き出し得る様な装置が出來てゐる。是等の道具は破損すると日本では丸で修復が出來ないのださうである。膀胱鏡の粗末なのが五十圓少し變つたのは百圓もするさうであ

る。
○脾臓の鐵分を貯蓄するといふ機能が近頃漸く發見されたといふ話も聞いた。是は余も近來の雜誌で見た。
○房楊子を呑んで胃を切開した話も聞いた。
○靜脈の血をとつて動物の血と交ぜて血球が互にデストロイしなければ黴毒のない證據になるといふ話を聞いた。
○肉牙の話も聞いた。瘢痕にも多少の血管が通つてゐるのださうである。

十一月二十五日

○新來る。備後福山の柚餅をくれる。盛久をならふ。頼政をさらふ。謠も何時迄も小供らしくならひ、小供らしく教へられるので毫も上達した樣でない。時々は馬鹿氣た心持がする

十一月二十六日

○朝起きると朗らかな空に曙光が充ち渡つて最勝寺の大欅の幹の半分を朝日が染めてゐた。緊縮の感が全身に起る。此頃は暖か過ぎて秋らしくなかつたが今日始めて積極的に身のしまる心持を得た。夫でも段々暖かになつた。玄耳の處へ行く。佐藤さんへ廻る。風起る。
○國民の島田賢平氏人の爲めにコンラッドの小説を借りにくる

十一月二十七日

○漸く秋の風を聞く。肌にも秋の風と感ぜらる。芭蕉猶青くさら／＼と鳴る。裂けながら鳴る。梧桐は殆

んど片葉をとゞめず。

昨曉小村侯爵死す。支那へ出兵一大隊程で北京の日本人の守護をするのださうである。

十一月二十八日

曇。どんよりして陰氣からすくめられる樣な天氣である。冬の近づいた氣分である。曇る中に太陽が薄く見えるのを眺めると倫敦の時候を思ひ出す。夫でも太陽が毒血の樣な色をしてゐないのが、まだ荒涼の感を柔げる。空氣の臭も少し違ふ。晝頃からわびしい雨となる。今日は帝國座で文藝協會の「人形の家」があるので招待を受けやうかと思つてゐたが書齋から薄暗く芭蕉（近頃芭蕉をよく觀察してゐるが芭蕉は露がいくらしとゞに降つても枯れない。山茶花が散り梧桐が坊主になるのにまだ青々としてゐるのが毎日見る度に不思議でならない。）にかゝるのを見るといつそやめやうかといふ氣にもなる。入浴後妻が着物を出して呉れたのでフロックに改めて車を命ずると、車屋の男は筆と恒を迎ひに女子大學へ行つた、主人は士官學校へ是亦客を迎に行つたから少し待つてくれといふ。時間はもう四時過である。四時三十分に開會といふのだから間に合はない。然し少し待つてゐやうとしてフロックの儘立つたり椅子へ腰を卸したりしてゐたが、とう／＼待ち切れず誰か外のものを雇つてくれと註文しに行くと雨が降つては奇麗なのは出てゐないから少しの間歸る迄待つてくれといふ。不都合な事だと思ひながら雨を眺めて敷島を一本を吸つてゐるうちに四時二十分になつたので、もうやめやうといつて外套を脱ぎにかゝると、御孃樣御歸りといつて車夫が芝居の樣な大きな聲を出して玄關へ車を引き入れた。

帝國座へ着いたらもう始まつてゐた。けれども入は存外少なかつた、招待だからと思つてフロックを着て行つたがそんなに極つた人は極めて稀であつた。向ふに千葉鑛藏氏がゐて挨拶をする。此間も有樂座で

逢つた。社の松山が其後變つた事もないかと云つて話をしにくる。後ろからやあ先生と西村醉夢が呼びかける。德田秋江君がよく御出掛でしたと聲をかける。今日はほんたが來てゐますといふ。ほんたは自分の前を通つた。存外よくない女である。前に野間伍造がゐるといふ。白髮まじりの角刈で大島の着物に茶の羽織で丸で請負師の樣に見えた立つ處を見ると夫でも袴を着けてゐる。野間伍造といふ人は二十何年か前に二三度逢つたが色白の好男子とのみ心得てゐたのに斯うも變るかと思つてもどうしても同人とは受取れない。自分も名乘りでもしたら先では矢張り同じ感じを起すであらう。二三軒右へ寄つた所に三宅雪嶺氏が來てゐた。是には挨拶をしなかつた。島田賢平氏が先達は御邪魔をしました虛子も來てゐま〔す〕といふから二階を見上げると虛子が番附を振つて合圖をしてゐるので御辭儀をした。

すま子とかいふ女のノラは女主人公であるが顏が甚だ洋服と釣り合はない、もう一人出てくる女も御白粉をめちや塗りにしてゐる上に眼鼻立が丸で洋服にはうつらない。ノラの仕草は芝居としてはどうだか知らんが、あの思ひ入れやジエスチユアーや表情は強ひて一種の刺激を觀客に塗り付けやうとするのでいやな所が澤山あつた。東儀とか土肥とかいふ人は普通の人間らしくて此厭味が少しもないから心持がよかつた。

人形の家丈見て一人歸らうと思つて右側の玄關へ出ると車夫がゐない、外の奴が誰です呼んで上げませうと云つたが、幸雨が歇んでゐたので供待部屋へ行つて見ると矢張りゐない。おやまだ飯でも食ひに行つて歸らないのかと思つて、見廻すと右の方に自分の膝掛が見えたので彼は其下に長くなつて寐てゐる事が分つた。「おい、そいつだ」といふと外のものが「旦那の御歸りだ、起きろ〳〵」と云つた。

まだ早い積だつたら宅へ歸つたらもう九時半であつた。夕食には何もないといふ。そんなら帝國座で何か食へばよかつたと思つた。蕎麥を取つてもらつて夫を食つて寐る。

十一月二十九日

○快晴、新來、盛久のつゞきを教はる。

○日暮中村蓊來。談話中小供が二人廊下〔原〕を馳けて來て笑ひながら一寸來て下さいといふ。大方ひな子がひき付けたのだらうと思つて六疊へ行つて見ると妻が抱いて顏へ濡手拭などをのせてゐる。唇の色が蒼い。然しよくある事だから今に癒るだらうと思つてゐると、いつもと樣子が違ふといふので前の中山さんを呼びにやつた所で、丁度下女があわてゝ歸つて來た所であつた。今其所へ出掛〔る〕といふ處に會つたので、すぐ來てくれるといふ話である。其通り中山さんがやつて來たが、何だか樣子が可笑しいから注射をしませうと云つて注射をしたが効目がない、肛門を見ると開いてゐる。眼を開けて照らすと瞳孔が散つてゐる。是は駄目ですと手もなく云つて仕舞ふ。何だか嘘の樣な氣がする。中山さんも不思議ですといふ。からし湯でも使はしたらと思つて相談すると遣つて見ろといふから瓦斯で湯を沸かしてからしを買ひにやつて腰湯を使はしたが同じ事である。タヱルで拭いて又元の通りに寐かした。可哀想な氣がする。口を開けて眼を半眼にして丸で眠つてゐるやうである。○○さんが來ても駄目だらうなといふと妻もえゝと答へてゐる。其内○○さんがどうかしましたかと笑ひながら這入つてくる。駄目ですと云つて樣子を話すと乾〔原〕度なつて、烈しく人工呼吸をやつてゐたが、どうも不思議だなと二度も三度も繰返してゐる。

「死亡診斷書を書いて頂きませうか」と云つて書いてもらふ事にする。

屛風がないから仕方がない。六疊に置いては可哀想だから座敷の次の間へ北枕に寐かす枕元に風船を置いて〔原〕ある。葬具屋から白木の机と線香立、花立、樒、白團子、をもつてくる。

あした區役所へ行つて死亡屆を出して埋葬證書をもらふ事は行德に賴む。寺の談判は兄に賴む、十二月

一日は友引で縁喜が悪いといふので二日にする。

十一月三十日

○經帷子をみんなが少しづゝ縫ふ。女の子が多いので袖や裾が方々の手に渡る。藤が半紙を以[原]て來て南無阿彌陀佛といふ字を一杯かいてくれといふ。筆子も書く、豊隆も恒子も行德も居合せたものは皆書かせられる。

○棺に入れる。裸にすると脊の方が紫色になつてゐる。小さい珠數を手にかける、小さい藁草履、編笠を入れる。赤い毛絲の編んだ足袋を入れる。珠がぶら〳〵して歩いて居る所が眼に浮ぶ。人形を入れてやる。蓋をして白綸子の布をかける。

○行德が朝の内區役所へ行つ〔て〕死亡屆やら埋葬證書やらの手つゞき〔を〕濟ましてくれる。兄が本法寺へ懸合つて百ケ日迄仕切つて二十五圓位にする談判を引受けてくれる。葬具屋に喪柩車一臺をあつらへる。御者の酒代やら何やらを合せて三十圓程である。

十二月一日

○昨夜はおたねさん、御房さん、お梅さん抔が來て通夜をしてくれる。自分は御免蒙つて寐た。夜中に眼が覺めると話聲が聞えた。

○漢陽は六晝夜の激戰の後とう〳〵官軍の手に歸したと傳へられる。革命軍が武陽を守る事も困難だとかいふ。此間迄天下を席捲するやうに云ひ傳へられた革命軍もかうな[原]つては心細い氣がする。革命軍の大將黎元洪は休戰を申し込み、滿州[原]政府の代表者と各省の代表〔者〕と革命黨の代表者を上海に會して和議

を講ぜんといふ條件を出したさうだ

十二月二日

葬式を濟まして落合の燒場から歸つて、みんなの歸るのを送つて坐つてゐると寺田が又來たので話をしてゐるうちに六時近くなつた。小供が中ノ間で白木の机の前に坐つて昨夕の通夜僧の讀經の眞似をして笑つてゐる。昨夕の通夜僧は三部經を讀んで和讃をうたつた。和讃は親鸞上人の作つたものに三代目の何とかいふ人が節づけをしたものださうである。御文樣は八代目の蓮如上人の作ださうである。此通夜僧は本法寺の十三代前の通達院が辻說教をした話をした。此辻說法の話が上野の宮樣の耳に入つて度々召されたある時、駕籠で送らせたら、菊の紋の駕籠を歸さずに次の度私風情の乘つたものにあなたが再度御召になるのはよくないからと云つて貰つて仕舞つて、夫へ乘つて兩國で矢張辻說教をしてゐた所が幕府で不審を抱いて其理由をたゞしたさうである。

○今朝九時の出棺で六時半に起出でゝ服を改めて時の至るを待つてゐた。妻は黑の繻子帶に黑紋服、小供は縮緬の紋付に袴純一丈は海軍服に黑紗を捲き。南無阿彌陀佛と書いた短册をちらして棺の中に入れる。みんなの買つてくれた玩具を入れる。あしたの朝來るから顏を見せて下さいといつた山田の奧さんが來て棺の中をのぞき込む。やがて釘付にして綸子の覆をかけて花輪をのせて喪車の中に入れる。黑い馬、黑い幕の下から花環が少し見える。

○僧は五人、讀經を略してもらつて早く燒香を濟ます。

○落合の燒場へ行く　自分、倫、小宮。小供の時見た記憶が少しある。一等の竈に入れて鍵を持つて歸る。（十圓だけれども子供だから六圓いくらで濟む）

○杉の森の中に弘法大師千五十年供養塔といふのがある。其下に熊笹が生へて吹井戸があつて、茶屋がある、橋がある。それを渡つて行く。

○晩秋の落木〔原〕、黄な銀杏、高い木（枯枝）殘つた葉が時々落ちる。大變長く時間がかゝる。夫だのに瞬間毎に非常に早く廻轉する。

十二月三日

○骨をひろふ爲に落合迄行かなければならない。心持よくはれた。九時二十分車で家を出る。自分等夫婦と行德と小一と夫から藤であつた。昨日の路を又通るのだから幾分かは親しいやうな氣がする。谷を隔てて目白臺のつゞきとも見える所に枯木と黃葉と常磐木と夫から麥の青いのと大根の青いと新らしい家が錯綜して見える。大部分葉を失つた大きなけやきの幹が道の左右にならんで高く立つてゐる其幹は白けて枝の先は高く空に聳えてゐる。幹の頑丈な割合に先は非常に細い枝を持つてゐる。さうして其枝がファインに澤山かたまつてゐるから、ひとかたまりの樣でさうして其隙間〳〵に空を割り込ませてゐる。夫から此高い木が左右に竝んで路が少し廻つてゐるので丁度眼界が三角（往來を橫ぎる地平線をベースにした）細長く高い三角になつて其頂點は枝と枝の交叉した所にあるから道は暗い筈だが却つて通常の通である。枝の上の方に黃を根調にして靑を交ぜた樣な葉がついてゐるが、夫を一眼見ると不純に穗先を染めた繪筆でべつとり枝の上へなすり付けた樣である。たゞ光線の具合で角度の違ふ陰陽の違ふ葉が各自に色をなすとき一筆で引いたといふ感は消えて頗る複雜な（色以上に意味のある物質）に見えてくる

○火葬場に着いて鍵はときくと妻は忘れましたといふ。愚な事だと思つて腹が立つ。家から此所迄四十分懸〔原〕つてゐるから、今から取に行けば往來八十分でさうして今十時だから十一時二十分になつて仕舞ふ。時

間は十一時迄だから間に合はないかも知れないが、すぐ菊屋の若い男に藤を乗せて取りにやる。硝子戸から這入る日影を脊に縁臺に腰を掛けて三和土の上に兩足を据え[原]ル。座敷には觀音の像がかゝつてゐる。骨拾ひが二三組來る。一組は婆さん許りの四五人連であつたが、是は自分の羽織袴やら門内に待つてゐる車やらに氣をかねたのか小聲で話をする丈であつた。脊の高い[原]とかすりの着物を着た男の子は活潑に壺を下さいといふて一番安い十六錢程のを買つて行つた。三番目には散髮に角帶をしめた女だか男だか分らない人間と束髮と婆さんが來て、まだ時間はありませうねと聞いてゐた。退屈だから燒場の中を徘徊してゐると並等といふのにほつ／＼眞鍮に〇〇〇〇殿とかいた札がかゝつてゐる。然し鍵もなければ封[原]印もついてゐない。裏には奇麗な孟宗藪がある。向に松薪が山の樣に積んである。其下は靑い麥畠で其先が又岳[原]つゞきに高くなつてゐる。又茶屋の前へ來ると事務の男が出て來て犬にからかつてゐる。やがて十一時五分前頃に藤の車が歸つて來た。上等の壹號の前へ行くと昨日の花環が少し凋みかけて前に具[原]へてある。御封印をといふから構はん明けてくれと頼んだらへいと云つて、おんぼうが鍵を入れてかちやりと音をさせて黑い鐵の扉を左右に開いた。奥は薄暗いなかに灰色の丸いものやら黑いものやら白いものやらが一かたまりに見える丈である。いま出しませうと云つてレールを二本前へ繼ぎ足して鐵の環のやうなものを棺臺の端へかけて引張り出した。其内から頭と顏の所と二三の骨を出して後は奇麗に篩つて持つて參りませうと云ひながら入口に置いてある臺の上にそれ等を竝べた。竹箸と木箸を一本宛にして吾等はそれを白い壺の中に拾ひ込んだ　腦を入れやうとしたら夫は後になさいましと云ふ所へ篩つた殘りを持つてくる。齒は別になさいますか、と聞いて齒を拾ひ分けてくれる　顎をくしや／＼とつぶして中から出したのもある。何だか白米を選り分けてゐるやうである。是が御腹の中にあるものですと綿の黑く燒けたやうなものを見せる。腸の事を云ふのか知らんと思つた。おんぼうの一人は箸で壺の中をかき交ぜて骨の容積を少なくする。最

後に腦蓋を蓋の樣にかぶせて白い壺のふたを載せるとともに腦蓋はくしやりと破れて、ふたは隙間なく落付いた。手袋をかけたまゝのおんぼうが針金を出して夫を結びてくれる。又木の箱の中に入れて風呂敷につゝむ。車へのる時は自分の膝の上へ載せた。

○生きて居るときはひな子がほかの子よりも大切だとも思はなかつた。死んで見るとあれが一番可愛い樣に思ふ。さうして殘つた子は入らない樣に見える。

○表をあるいて小い子供を見ると此子が健全に遊んでゐるのに吾子は何故生きてゐられないのかといふ不審が起る。

○昨日不圖座敷にあつた炭取を見た。此炭取は自分が外國から歸つて世帶を持ちたてにせめて炭取丈でもと思つて奇麗なのを買つて置いた。それはひな子の生れる五六年も前の事である。其炭取はまだどこも何ともなく存在してゐるのに、いくらでも代りのある炭取は依然としてあるのに、破壞してもすぐ償ふ事の出來る炭取はかうしてあるのに、かけ代のないひな子は死んで仕舞つた。どうして此炭取と代る事が出來なかつたのだらう。

○昨日は葬式今「日」は骨上け、明後日は納骨明日はもしするとすれば待夜である。多忙である。然し凡ての努力をした後で考へると凡ての努力が無益の努力である。死を生に變化させる努力でなければ凡てが無益である。こんな遺恨な事はない。

○自分の胃にはひゞが入つた。自分の精神にもひゞが入つた樣な氣がする。如何となれば回復しがたき哀愁が思ひ出す度に起るからである。

○また子供を作れば同じぢやないかと云ふ人がある。ひな子と同じ樣な子が生れても遺恨は同じ事であらう。愛はパーソナルなものである。小村侯が死んでも小村侯に代る人があれば日本人民は夫で滿足する。

仕事の爲に重寶がられたり、才學手腕のため聲望を負ふ人は此點に於て其人自身を敬愛される人よりも非常な損である。其人自身に對する愛は之よりベターなものであつても移す事の出來ないものである

十二月四日

○待夜[原]。ほんの内々のものが寄つて位牌の前で飯をくふ。それでも二の膳でさしみ、口取、燒肴、酢のもの、御平、白和へ、汁、御椀、鳥のうま煮などが並んでゐた。それを車屋へ二人分やつたら、禮を云ひに二返來たさうである。行德へも持たしてやる。植木屋だの下女だのは宅で食はす。自分は後れて來訪中の中村と共に膳につく。純一が膳の上を飛んで跨ぐとか云つて騒動してゐた。

○此朝佐藤さんへ行つて又痔の中を開けて疎[原]通をよくしたら五分の深さと思つたものがまだ一寸程ある。途中に瘢痕が瘤起してゐたのを底と間違へてゐたのださうで、其瘢痕を搔き落してしまつたら一寸許りになるのださうである。しかも穴の方向が腸の方へ近寄つてゐるのだから腸へつゞいてゐるかも知れないのが甚だ心配である。凡て此穴の肛門に寄つた側はひつかゝれたあとが痛い。反對の方は何ともない。

十二月五日

○新聞を見ると官軍と革命軍の間に三日間の休戰が成立して其間に講和條件をきめるのださうである。彼等から見ればひな子の死んだ事などは何でもあるまい。自分の肛門も勘定には這入るまい。

○十時にひな子の骨を本法寺へ納め（百ヶ日間あづかつてもらふ約束）に行く自分等夫婦とひな子の姉妹（純一と伸六は行かず[原]）と妻妹豊子、御房さん及び下女藤。骨は箱ごと白い布につゝんで藤が車に乘せる。

○小僧が出て來て佛の燈明をつける。其奥にある蠟燭立に蠟燭をつける。三[原]本に御供を盛つたものを其兩

側に置く。壇の前の下に白木の机にひな子の骨を載せたものへ白い絹を掛けて据える。[原]二人の衆徒が一段低い疊の上に並んで如來に向つて並んで平伏する。しばらくして茶の袈裟をかけた若い僧が佛壇の後ろから出て來て一段高い本堂のはづれ迄進んで夫から佛壇の方へ向き直つて、疊半疊程の所へ上つてばたりと何かを落すと同時に平伏した二人は頭を上げる。讀經が始まる。阿彌陀經であつた。

○若い僧は一人で退く。衆徒のうち一人が殘つて本堂の段をのぼつて向つて左手の棚から黑塗の箱を持つて出て、吾等と同平面へ下りて、前へ進む一歩の足を奇麗に又後へ戻して東向に着席して御文樣をよむ。

「……朝に紅顏あつて夕に白骨となる。――六親眷屬嘆き悲めども其甲斐なし?………」

○夫から仕切をあけて出て來て御燒香をといふ。常[原]子は香入の中の香をつまんで香爐の中に入れべきのを間違へて香爐の中の灰をつまんで香の中に入れた。

○終つて座敷で休息中主僧が出て挨拶をする。あなたが金之助さんと仰しやるのでございますかといふ。初めましてといふ。(私は夏目家のものですが分家を致しましたので、今度始めて御厄介になります。)

○是で一段落ついた。

十二月六日

○晴　風强し、稍冬の感。風の音の所爲だらう。芭蕉はまだ青い。朝は濃い露が降りて微雨の後の樣に庭一面に濡れてゐた。

○佐藤さんの處へ行つたら細菌とはこんなものですと云つて八百五十倍の顯微鏡を見せられて[原]、着色のものだから丸で圖にした樣なものである。かいこの種の樣にかたまつてゐた。是は葡萄狀の細菌ださうである。外に捍[原]狀といふのもあるさうだ。淋病のは不染質が中央にあるため染めると二つに見えるさうである。

○眞山靑果が佐藤さんと同級であつたといふ事を聞いた。學校に泥棒があつて眞山ださうであると人から聞いた通りを云つたら眞山が誣告の訴をすると云ひ出したのださうである。順天堂に自分の弟子を入れて死んだとき醫者の云付を間違へて看護婦がアトロヒンを注射器に入れたから死んだと云ひ張つて、あの看護婦をなぐらせれば我慢すると云つて懸合つたさうである。

○山師の醫者が金を出して廣告の代りに新聞の雜報を利用する話を聞いた。神谷傳兵衛なるものが十年前に足の裏に針を立てたのが今日に至つて某醫學士のX光線の力で所在を發見して肩から出たといふ如きである。今報知新聞にドクトル何とかいふものが新ツベルクリンの功能を書き立てゝゐるが如きも其例であるさうである。開業の當時通信社のもの抔が來て素人には面白い事實が屹度あるだらうから、是非新聞に御出しなさいと勸めたといふ

十二月八日[原]

○朝池邊に行く。松山が來て、支那の革命の話をしてゐる。干渉は出來まいが金を貸したらどうかといふ話である。

○夜岡田がひな子の爲に葉牡丹と菊と水仙を持つて來てくれる。二七日に墓參をしたいといふ　線香をあげて歸る

十二月八日

○佐藤さんへ行く痔が癒るのやら癒らぬのやら實以て厄介である。

○今日倫敦の天氣の樣に往來が暗い。九段下から見ると燈籠やら燈明臺が茫として陰の如く見える。

○佐藤氏曰く屁は臭いが新らしい糞は大程臭いものぢやない。
○此間鈴木が先生が死んだら葬儀の意匠を私に任せろといふ。おれが死んだら藝者の手古舞をつけてさやりで送つてくれといふとさうするとうかれて生き返るだらうと云つてみんなが笑つた。
○今朝妻があなたは何でも世間に反對するつきあひの出來ない方だ。人が來て御通夜をすると云へば夫には及ばないから歸せといふなんてえのが夫です。己が死んでも其代り御通夜なんどしなくても好いよと云つたら、夜中に鼠でも出て來て鼻の頭でも食ふでせうといふから、さうして痛いと云つて生き返れば結構だと答へた。
○十二月六日午前八時に休戰は撤回、黎元洪と袁の代表者の談判は不調。武昌は漸く勢づける模樣とあり。攝政王醇親王は退位の上奏をなす。

十二月九日

○初めて白い霜が降る。芭蕉を見ると無慘にくしや／＼になつて裂けて下を向いてゐる。色は火に焦けたやうに茶色をしてちゞれて仕舞つた。
○霞寶會へ行く湯谷の女つれと鉢の木のしてつれを謠はせられる。九郎の鸚鵡小町を聞く。どこがうまいか一寸分らず。少なくとも面白味がなかつた。之に反して新のワキは壯大雄拔の感を禁じ得なかつた。

十二月十日

○畔柳芥舟來。留守に魯庵來。昨日藪柑子來るよし承はる。

十二月十一日

○あい子、純一風邪

十二月十二日

○持病の分泌少なくなる。大分の抵抗力を押し切つてよし膏薬を入れても痛からず却つて心地よし。

○夜あい子熱出る。氷で頭をひやす。

○えい子を相手に鞠をつく。

○ふだ黒ぶしのそばの坐りだこの所腫れて動けず。

十二月十三日

○盛久の稽古

○こたつであい子とふざけて遊ぶ。御八つの焼芋を食ふ。

○空密に暗く室内凍るやうに寒し。ストーヴを焚く。瓦斯漏れて臭ければやめる。

○霞寶會で鸚鵡小町を謠つた連中の報酬をきく。九郎二十五圓、政吉八圓 桐谷四圓、藤野二圓。新評して曰く九郎の小町心持はで過ぎたい。年の所爲ならんと 中老には調子が低くなり、夫から過ぎると又高くなるものゝ由。而して地の所もう少し上げたいと思ふ所却つて低かりし由

十二月十四日

○昨夜ストーヴを焚き小供と唱歌をうたふ。もういくつ寐ると御正月といふ唱歌である。

○今日氣候少し緩む。朝早く覺む。
○江戸川端の櫻はみな葉をふるふ。ひとり柳の樹のみまだ綠の色を失ひ切らずにゐる。柳は中々散り盡さぬものである。
○昨日の新聞に九日午前九時より十五日間休戰の約なる由（支那戰爭）見ゆ。
○昨朝新に盛久のつゞきを習ふ。強吟のくせの處にて散々の體となる。
○藤 太田さんへ行つて坐りだこを切つてもらふ。車夫がおんぶして二十貫ある重い〳〵といふ。
○森園月來。子規と余の俳句を雙幅にしたるものを持つて來て見せる。素明の畫の表裝出來たるを持つて來てくれる。角に漱石と彫つたもの及び磁印材一個をくれる。

十二月十五日

○今日から小說を書かうと思つてまだ書かず。他から見れば怠けるなり。終日何もせざればなり。自分から云へば何もする事が出來ぬ位小說の趣向其他が氣にかゝる也
○十四十五は深川八幡の市、十八十九日は淺草觀音、二十二十一日は神田明神、二十三二十四は芝愛宕。

斷片

——明治四十四年五月十六日より同十二月頃まで——

一

○一昨年四十二年秋（八九月の頃）森田と明子さんが電車で偶然出會。三崎町のある宿屋で「楳[原]烟」の事實の有無の議論あり。翌日歸宅。其時森田よりの先方への手紙にて奥樣に面會を申し込み生田君を立會はせんと云ふ。
○平塚氏宅へ生田森田兩氏奥さんと明子さんとの會見。煤烟の事實の有無に就て談合。森田は事實と云ひ明子さんは事實でないと云ふ。夫では煤烟を取り消すと云ふ。然し世間から忘れられてゐるものを復活させる恐ある故其儘にしたし。且其後も此件につき一切書かれざらん事を希望する旨を述べて森田承諾す（明子さんに關する事）又當人同志直接の文通もすまじき旨の約束もとゝのふ。
○半年あまりして（去年の四月）森田より突然明子さんの處へ出す。（匿名にて。）是非御目にかゝつて（白山の電車停留所へ何時何分）清算したいと云ふ。明子さん留守。奥さん開封の上生田氏へ行く。放つて置くがよからうと云ふ意見で其儘にして置く。
○同日に三通奥さんの所へ來る。再三の事故平塚さんの耳に入る。夫ではとて平塚氏自身面會の旨を告げて、翌日奥さんが生田方へ行かる。生田君余の所へ來る。二人で夕飯〔を〕神樂坂で食つて話す。生田はそんな事をしては困ると云ふ。森田の答は別になし。其時平塚の手紙を注意されて見て、そんなら行くから一所に行つて呉れと云ふ。

○その二三日後森田と生田と同道して平塚氏迄出向く。森田より問題を提供すべき筈の處一向其景[原]色なきより平塚氏より「此問題はこれぎりにして頂きたい」と云ふ依頼あり。「娘が雑誌記者に話したからと森田が八かましく云ふが、家族も親戚もそんな事は喜んでゐない。だから森田氏にも世人の記憶を回復する様な事は書いてくれるな」と頼み、森田は決局承諾す。（たゞし立合人として生田氏の考によると、問題外に渉つての話多かりしは事實〔な〕り）

○其以後事件なし

○自叙傳出てより以來生田は責任を感じつゝも感情の離隔などありて、其事に對して何も云はず

○そこへ明子さんが生田の宅へ來て自分の想像として父は困るだらうと云はれた。

奥さんは神戸で東京の朝日を見て、平塚さんに相談をされた。

× Extension of Education

× Levelling tendency — Democratic movement

× In the intellectual domain — Destruction of authorities. — Anarchic Equality — no hero worship.

× Is a hero a chimerical being — an illusion ?

× Is it impossible for a Buddha or a Christ to exist in the 20th Cent.

× Conclusion.

× Ancient Education — inspiration — imitation — admiration — practical effect — at the expense of the Intellect.

× Modern Education — Disillusion — confession — effect on the sense of Shame — truth — fact — forced conduct (for the sake of an ideal) gave place for the open and unconcealed exposure of weaknesses. — gain in honesty; loss in aspiration. 負惜（虚偽）ノ減少；堕落ノ増長 — 平凡化. — They are there because they look perfectly legitimate in social estimation. (Indulgence)

exception — military and naval — 教師

× The effect of this education and appearance of Naturalistic Literature.

Taking advantage of social indulgence.

Finding support in the moral ground of honesty.

× Its success. — No wicked person in the strict sense of the word. A man's course of conduct placed under particular circumstances becomes suddenly excusable, when followed step by step in the true path of psychology, though looked at as a third person and social being it is quite culpable or even odious. Even the sense of repulsion is mingled with that of an uncertain emotion that he may, when put similarly, be tempted to the same course of conduct. — consequently sympathy and indulgence.

× Its decay. — on account of abuse. — Artistic Defect — i. e. enormity and abnormality, resulting in want of sympathy. (Shock)

× Reversion where?

on one hand { honesty, straightforwardness } . { indulgence, expansion of sympathy }

on the other { hypocricy [sic] / Reserve / 會釋 } { strictness / Coldness, narrow-mindedness / 制裁 }

Perfect stage { honesty / 會釋, 遠慮 } { indulgence, sympathy / 制裁 }

○學者と名譽

○新聞小說　際ドイ〆、文晁、北齋、モーパサン、フランス

○日本人ノ體格容貌

○自己ノ作物

○オベッカノ言語

畫ト文學、昔ノ日本ノ畫〔工〕ト今ノ畫工　昔ニ恐入ル

〃　文士ト今ノ文士　昔ニ恐入ラズ

Life, art, philosophy.

中味と形、　―― note ヲ取ルトキハ中味ノ爲ニトル、ソレガ已ヲ得ズ一種ノ形トナル。

――後カラ note ヲ讀ムトキハ形ニヨツテ內[原]味ヲ推〆ニナル、殼カラ中味ヲコシラヘル〆ニナル、氣ガ

拔ケル、ダカラ役ニ立タナイヿガ多イ、役ニ立ツ場合ハ輪廓カラ中味ガ逆ニ充實サレ得ル場合ニ限ル、

Art. ——藝、　落語、體操、謠、王乘[原]、儀太夫[原]、等、

pure practice.（歩行）、effort ナシ　自然。自然ニ出來テ form ニ合ス、

相撲、. Art.　Life ハ此意味ニ於テ art.

Art ハ philosophy ヲ含ム、

Philosophy itself ハ life カラ content ヲ取ツタモノ

ダカラ art ハ life ヲ構成スルガ philosophy ハ living power ニナラナイ、

∴ Experience ノ importance.　無學デモ無心ニ philosopher.　イクラ philosopher デモ action ノ助ケニハナリニクイ、philosopher ハ form カラ contents ヲ逆ニ inspire シナケレバナラナイ、

給使[原]カラ上ツタ人ト大學出ノ新シイ人、

大シタ學問ガナクテ立派ナ作ヲスル人、

學問ガアツテ practically ニ役ニ立タヌ人、

學問ハ（人事上ノ）delicate ナ區別ナシ、　實際ノ事ハ非常ニ delicate ナ區別アリ、analogy ハ決シ

テ起ラズ、反應モ決シテ same ナラズ、其 nice distinction ヲ art ハ feel シテ事ニ當ル、故ニ artist ハ事實カラ云ヘバ artist ハ philosopher ヨリモモツト delicate ナ philosopher デアル、

極端ハ分別思議ノ時間ヲ許サズシテ分別思議ノモタラス result ヲ實行ス、intuition デアル。
ex. マバタキ、地震ノトキ飛ビ出シタヿ、軍略、其他、

×大抵ノ人ハ結果論者ナリ、人ヲ評シテ危儉(原)トいふ、人モシ危險ニ陷ツタトキ始メテ夫見タカト云ふ。人モシ危險ヲ逃ルレバ内ニ耻ヅ。是等ハ自己ノ judgment ノ正否ヲ未來ニ質スモノナリ。
× Philosophy ハ過去ヲ材料トシテ deliberate シテ未來ヲ決スルナリ、
× Artist ハ現在ニ卽シテ過去モ未來モナキナリ、
故ニ artist ハ尤モ free ナリ、而シテ又尤モ necessitate セラル、ナリ、whole being ガ茲ニ向フナリ、intuitive (back ground ニ past ヲ帶ビル philosophy ヲ骨格トシタル、又 future ヲ鷲ヅカミニスル自信ヲ持ツタル、サウシテ殆ンド是等ヲ思量スル暇ナキ) ニ働クナリ。
×此 intuition ガ必ズ當ルトハ限ラズ。art ハ過去ノ練習デ success ハ未來ノ adaptability デ定マルカラデアル。ケレドモ當ラヌトハ限ラズ。
當ル場合ニハ

是ハ山デハナイ、又勝負ノ賽デモナイ、御ミクジ、トノ類デモナイ、シカアラザル可ラザル一種ノ念力ナリ、ダカラ自分ニ全ク經驗ノナイヿニハ働ラカズ。無經驗無學ナル者ガ此山カラ金ガ出ルカ出ナイカヲ

認定シタツテ直覺ガ働ク筈ガナイ

○時代後れ。家ノ下女　仙臺、長野、房州、長大。

○結婚――表慶館、上野精養――自働車、馬車、

白石の詩、澤庵和尚、

王、賀の書、

明畫、（原）六祖の畫

吳州、なんかうの茶碗

柿右衞門、仁淸

乾山、

(1) AトBノ確執。

(2) Aノ得意（Bノ vanity ニ損ニナル）（BノAニ對シテ講和セザ（ル）可ラザル）

(3) Bノ動作　(I) Aノ得意ノ妨害 (II) 今日迄ノ態度ヲ棄といふ (III) 絕對謝罪

○關口水道町ノ變化

○痔　Kley ノ畫

○不思議（ひな）子ノ死

○子供ノ死、夫婦ノ和解

○子供ノ死　freethinker ノ superstitious ニナル

二

○鎌倉、蛸取、小坪

○雅樂

○婚禮、太神宮、五軒町、西片町

○明石、和歌山

○大阪病院

○痔　括約筋

○能樂堂　左陣　松風

○有樂座名人會　呂昇　堀川

○帝國劇場、ノラ

○子供の死。

　葬、火葬場、骨拾

○關口と早稻田の變りやう。

○小川町停留所

田川敬太郎

森本

須永市蔵 ｛母 春
　　　　 ｛妹 妙

田口要作 ｛千代
　　　　 ｛百代
俊　　　 ｛吾一

松本恒三 ｛咲
　　　　 ｛一男
〃 仙　　｛重
　　　　 ｛嘉吉

三

It is calculated that a single bacterium, comfortably lodged in a nourishing medium, will produce 16,500,000 descendants in twenty-four hours, and at the end of the third day will have a family of 47,000,000,000 or in words, forty-seven millions of millions.

四

○黑人ノ仕事、 (art ノ保存) art ノ life ヲ長クスル。(自己ノ freedom ト特色ヲ犧牲ニシテ)

means, not end

○黑人ノ競爭

Same direction along one special line.

寸、尺、丈

∴ absurd 俳句ノ例

藝者ノ例

○黑人ノ自覺

×還元 (modified form) 的

× New departure (different plane)

○ Art. 女ノ言語動作

芝居 (子供ヲ道具)

五

分化

○耳垢取、桂庵、士[原]藏倉引、元祖藤八拳、半襟、帽子、襟飾、シャツ屋、一般、特殊、雜貨店、田舍、東京、

學問

○結果、深狹、箱の四方をを[?]る。
時間の不足、——同情、不同情、

○不具者。　嫌厭の點

日記

―― 明治四十五年五月より大正元年十月五日まで ――

○代議士の運動猛烈なる時（四十五年五月十五日選擧）ある人來りて某の爲に投票を依賴す。座に寺田理學博士あり、依賴者の歸りたる後、どうして代議士などになりたい氣が起るだらうといふ。

○五年振に中川芳太郎に逢ふ。近頃は羅甸語を教へてゐますと、夫からイリアッドが讀めるやうになりましたといふ。小宮と鈴木が驚ろく。余も驚ろく。

○右は世の中に全く利害を異にする人間が生存するいゝ證據なり

○日本橋の某議員候補者の事務所に來て、あなたを投票して今歸りだといつてわざ〳〵斷つて名刺を置いて行つたものが七百何名とかあつたが、實際投票の數は其半分しかなかつた由。是程御叮嚀なうそを吐くのは（候補者のやり口にわるい所があるからでもあらうが）彼等の道德の程度が甚だ低いといふ證據也。此道德の水準をどうして高める〔か〕といふ事が選擧問題よりも餘程な大事件大問題なるべし。

○五月二十三日　霞寶會。六郎の隅田川。モガ〳〵何を云つてゐるか分らず。斯んな irritating なものなし是を含蓄と心得るのは沙汰の限りなり。然し謠を外にして末段の所作は面白かつた。

春日偶成

其一

莫道風塵老　當軒野趣新

竹深鶯亂囀　淸晝臥聽春

其二

竹密能通水　花高不隱春
風光誰是主　好日屬詩人

其三

細雨看花後　光風靜坐中
虛堂迎晝永　流水出門空

其四

樹暗幽聽鳥　天明臥見花
春風無遠近　吹到野人家

其五

抱病衡門老　憂時涕淚多
江山春意動　客夢落煙波

其六

渡口春潮靜　扁舟半柳陰
漁翁眠未覺　山色入江深

其七

流鶯呼夢去　微雨濕花來
昨夜春愁色　依稀上綠苔

其八

樹下開襟坐　吟懐與道新
落花人不識　啼鳥自殘春

其九

草色空階下　萋々雨後青
孤鶯呼偶去　遲日滿閑庭

其十

渡盡東西水　三過翠柳橋
春風吹不斷　春恨幾條々

○五月二十五日午後四時水上飛行器（原）の飛行を擧行するといふ案内を受けて芝浦の埋立地第二號に行く。今日中止!!!と張りつけてある。わざ／＼案内をして理由もなく中止す。驚ろくべき無責任なり。テントの中に飛行器（原）あり。カーチスなるものは恐らく山師ならん。
×電車の内で齋藤與里にあふ。土曜劇場の歸りといふ。
×大曲の觀世では追善の能をやつてゐる。芝の山内では自動車、自轉車の展覽會あり、帝國劇場はマチネ、
× Justice ト贔屓
× Love と義務（Sex ノ欲ト未來の子供ヲ育テル務）
×利害心ト Kindness

○他の權威が自己の權威に變化する時之を生活の革命といふ。其時期。及び說明。

○「人を見たら泥棒と思へ」「信を人の腹中に置く」　兩者の意味、其對照

○文藝協會。ボストンの四部合唱。行啓能。自由劇場、土曜劇場の合併。上野音樂會。露西亞音樂團。博文舘二十五年記念祝賀會。アーチャー歡迎會。

○五[原]月六日夜青年會舘にて露西亞音樂團の唱歌を聽く。服裝はなやかにて奇妙なり。四五十人の團體なり。

○五[原]月二日？妻　小猫を踏み潰す。醫者とても駄目といふ。晩に線香をあげる。翌日まだ腹が動く。再び醫者に連れて行く。遂に埋める。もとの猫と同じ所也。

○九日上野音樂會を聽きに行く。ハイカラの會なり。管絃樂も合唱も面白し

○十日行啓能を見る。山縣松方の元老乃木さん抔あり

○新曰く最初舞臺に出る時は見物の顏も自身の所作も分らず夢中にて下る。段々度數重なるにつけ見所にゐる人の顏やら樣子やらが明瞭になる。けれども同時に彼等の動作に囚はれる。最後には明瞭に見えながら丸で彼等が眼中になくなる。新は常に臆病を自白す。地震で屋根へ飛び出したり窓から飛び下りた話を

する男であるが、臺[原]台の上では大抵の雷があつても平氣なりと語れり。

○　雨晴天一碧　　水暖柳西東
　　愛見衡門下　　明々白地風

○六月十六日市村座へ行く

○六月二十二日畔柳芥舟佳例により鄕里の櫻坊を持つて來てくれる

○二十三日中村是公愛久澤直哉來。二時過自働車で向島へ行く露伴、淸香の香浮園を訪問夫から堀切の菖蒲を見て、東五軒町迄歸る。六時前也。夫から築地の瓢家へ行く。夫から芝の是公の家から牛込へ歸る十時半也。自働車だからこんなにあるけるのだと思ふ。

○　芳菲看漸饒　　韶景蕩詩情
　　却愧丹靑技　　春風描不成

○　高梧能宿露　　疎竹不藏秋
　　靜坐園蒲上　　寥々似在舟

六月二十九、三十、一日　鎌倉

○江島の岩屋へ這入る手前の橋の處にて、男女二人退潮の岩の上にて貝か何か尋ね廻る有樣也。歸りに見ると彼等の蝙蝠と足袋と草履と風呂敷が見えるけれども二人の姿が見えず。まさか入水でもなからうと思つたが何だか不安であつた。橋の上を少し歩くと、彼等は夢中になつてまだ何か探してゐた。彼等の姿は岩の影で見えなかつたのである。

○ある腰辨出張の前ある待合に行き素人を注文す。主婦よろしいと云つて寫眞を見せる。其中に自分の妻君の寫眞あり。主婦曰く此人○日から○日迄でなければ御意に應ぜずと腰辨腹の中で計算して見ると丁度自分の出張する間の日取也

○鎌倉の別莊の生垣には珊瑚樹多しゆづり葉の如き厚き光澤ある葉なり地味に合ふと見えて發育甚だよろし。大きなのもあり。八幡境内蓮池の柳の陰に一本あり。細かな茶色な花をつく。

○光明寺境内（材木座）に開祖記主禪師手植の槇あり見事な木なり

○茂子の別莊を北側の庭から見ると京都邊の古刹の趣がある。たゞ少しく家庭趣味を交へた所が違ふ丈である。南側は頗る時代が着いてゐない。

○鮑百目二十錢也。二つ三百五十目故七十錢にあたる。さゞい。とこぶしを交へ蛸一疋（五錢）を加へ一圓へ買ひとる。籠は頗る重し。

○　綠雲高幾尺　葉々疊清陰
　　雨過更成趣　蝸牛踄翠岑

○七月十三日（？）　臨風大觀二人に招かれて下谷伊豫紋に行く。

二十一日小供を鎌倉へ遣る。一瀛車先に行つて菅の家に入る。二階から海を見る。涼し。主人と書を論ず。何紹基の書を見る。午後小供のゐる所へ行く。材木座紅ゲ谷といふ。思つたよりも汚なき家也。夏二月にて四十圓の家なれば尤もなり。庭に面して畠あり、畠の先に山あり大きな松を寐ながら見る。其所は甚だ可。たゞ家の建方に至つては如何とも賞めがたし。東京の新開地の尤も下等な借屋の如し。

○二十二日、濱へ出て見ると、海濱院に逗留の唐人海につかつてゐる。女は赤や水色の手拭樣のものを頭へ卷きつける。着物も膝迄のを着る。四時五十何分の瀛車で歸る。雨。東洋軒の出張所で晩餐。車を雇ふ。二臺にて一圓〇八錢。稻妻ゴロ〳〵

○二十三日是公突然來る。晩餐を食ひに行けといふ。築地の山口へ行く。御しん、しめ子、御しほ、小露、ひな子抔といふ藝者の顔を見る。外に六べゑさんと自稱する藝者から金神さまの講釋を聞いて信者にさせられる。此六べゑさんは松前の（北海道）產なり。言葉なまりあり。

○大觀畫をやるといふ。余の書をくれといふ。仕方がないから御禮の詩をかくといふてやる。詩の方先づ出來上る。

獨坐空齋裏　丹青引興長
大觀居士贈　圓覺道人藏

野水辭君巷　閑雲入我堂
徂徠隨所澹　住在自然鄉

○流山の秋元梧樓又入らざる明治百家短冊帖とかを出板す序をかけと云つて聞かず。手紙に詩を添へてやる。

雲箋有響墨痕斜
好句誰書草底蛇
九十九人渾是錦
集將春色到吾家

百人を九十九人としたるは余を除きたる也。余の短冊は實際物になつてゐるとは思へず、九十九人は謙遜でもなし。事實を申した積也。

○七月三十日午前零時四十分　陛下崩御の旨公示。同時踐祚の式あり。

○三十一日に改元の詔書あり

朕菲德を以て大統を承け祖宗の靈に告げて萬機の政を行ふ茲に
先帝の定制に遵ひ明治四十五年七月三十日以後を改めて大正元年と爲す主者施行せよ

御名　御璽

明治四十五年七月三十日　各大臣連署

右は公羊傳に「君子大居正」易經に「大享以正天之道也」とあるによる。

先帝の御諡號は

明治天皇

○朝見式詔勅

朕俄に大喪に遭ひ哀痛極罔し但だ皇位一日も曠くすべからず國政須臾も廢すべからざるを以て朕茲に踐祚の式を行へり顧ふに先帝睿明の資を以て維新の運に膺り萬機の政を親らし内治を振刷し外交を伸張し大憲を制して祖訓を昭にし典禮を頒ちて蒼生を撫す文教茲に敷き武備爰に整ひ庶績咸熙り國威維揚る其の盛德鴻業萬民具に仰ぎ列邦共に視る寔に前古未だ曾て有らざる所也朕今萬世一系の帝位を踐み統治の大權を繼承す祖宗の宏謨に遵ひ憲法の條章に由り之れが行使を愆ること無く以て先帝の遺業を失墜せざらん事を期す有司須らく先帝に盡したる所を以て朕に事へ臣民亦和衷協同して忠誠致すべし爾等克く朕が意を體し朕が事を奬順せよ

○大正元年七月三十一日齋藤海軍大臣及上原陸軍大臣を宮中に召され陸海軍人に左の詔勅を賜ふ

朕茲に大統を嗣ぎ列聖の遺烈を承け萬世一系の帝祚を踐むに方り特に朕が親愛する陸海軍人に告ぐ

惟ふに皇考嚢に汝等に軍人の精神五箇條を訓諭し一誠以て之を貫く可きを示し給へり汝等軍人は夙夜此聖訓を奉體し累次の征戰を經國威を宣揚し皇基恢弘し以て曠古の偉勳を奏成したり朕は朕が統率する所の軍隊は卽ち是皇考の慈育愛撫し給たる所の軍隊なるを念ひ汝等軍人の忠勇に信倚し皇考の遺業を紹述し倍々皇國の光威を顯彰し億兆の福祉を增進せんことを冀ふ汝等軍

人は皇考の遺訓に由り以て直に之を朕が躬に效し愈々奉公の志を鞏くし思索の選を愼み宇内の大勢に鑑み時世の進運に伴ひ拮据勵精各其本分を竭くし朕が股肱たるの實を擧げ以て皇謨を扶翼せんことを期せよ

○右に對する陸軍大臣の奉答文

畏くも優渥なる勅諭を賜はり感激の至に堪へず臣等鞠躬盡瘁誓つて叡旨に副ひ奉らんことを期す

海軍大臣の奉答

陛下登極に方り特に陸海軍人に優渥なる聖勅を賜ふ臣等感激の至りに禁へず誓て叡旨に副ひ奉らんことを期す

海軍々人を代表し謹んで奉答す

○朝見式勅語に對する西園寺首相の奉答

臣公望誠惶誠恐伏して言うす

大行天皇奄に登遐あらせられ臣民憂懼措く所を知らず今

叡聖文武なる天皇陛下大統を承けさせられ茲に彝訓を垂れ給ふ聖猷遠く慮り睿圖遺すなく上は

先帝の鴻業を纘ぎて憲法の條章に循ひ下は億兆の和協を奬めて忠誠の至情を輸さしめ以て

祖宗の休光を無窮に發揚せむとし給ふ是れ寔に宇内の齊く仰ぐ所にして臣庶の永く賴る所也臣等聖勅を拜し感激の至りに勝へず今より後益匪躬の節を效し夙夜淬礪邦家の進運を扶翊し以て

聖旨に答へ奉らんことを誓ふ臣公望誠惶誠恐頓首謹みて奏す

○三十一日拜訣式竝に納棺式

御船（内棺の事か）の厚さ七分、中棺は二寸外棺は三寸、三棺の間はセメントを詰込、總體の長さ一丈高さ三尺四寸幅四尺、棺臺の厚五寸其上に白の薄縁、靈柩は臺と共に白木の呉床の上に安置し白羽二重を以て覆ふ。前に幅一尺五寸四方高一尺五寸四方位の根付の眞榊一對と御忌火、御神饌、御幣帛。御船の中に入れる遺骸には白羽二重の清き衣、同じ枕、三襲の褥、丹其他の香具數種

○一日の新聞に左の廣告を出したるものあり

> 御崩御に付
> 謹で弔意を表し奉候
>
> 日本橋區久松町三十五
> 舊稱森又組
> 大正屋商店
> 電話浪花二九四一
> 振替東京九五六
>
> 喪章
>
> 純絹製一掛
> 金十五錢
> 金三十錢
>
> 宮内省告示に基き喪章發賣仕候
> 五掛以上御届申可候

○幡車（牛車）

總體（御）黑塗にて（御）寸法は英照皇太后陛下の（御）時より長大となり（御）型は夕顔型なり外側の大輪は七箇にて一輪の組矢二十一枚、左右と上部は栗色網代にて御簾は四箇所に垂下され前後兩面と左右の上部後方に於る二箇所にて竹は本磨　緣、編絲とも鈍色、御簾の內側の御引立は四箇所とも近江表鼠色の平絹を用ひ御引立の上部より垂下すべき簾は鈍色の精好　屋根裏は黑塗の格天井御簾の上部に吊るすべき瓔珞は何れも黃金色の御紋章菊花と花菱にて御欄は黑色の漆塗なり御金具は全部黃金色なり尙萬一の場合の御雨被は靑漆色の桐油にて製造し御紐は白色なりといふ

○御輦（靑山より桃山迄）

御神輿に均しきものにて一名蔥華輦と申し總體黑色と爲し金具類は飾なき素銅四方の御垂簾は本磨きの竹、組絲、緣、總て鈍色の絹を用ひ、四隅に鈍色平絹の御帷を垂れ御屋根四隅の尖端には絹絲の房を吊るし竪添棒、横添棒とも漆塗の黑にて屋根裏は合天井、垂木の末端には素銅の飾を附し御輦の後部は觀音扉也扉の外面には御簾を垂る御萬一の御雨被は濃黃色の桐油にて四箇所に金の御紋章を施さるゝ筈也

○八月二日鎌倉に行き二日三日とまつて四日の夜歸る。

九時四十分の瀛（原）車で行く。商家の男、姉妹と見える女を三人つれて乘る。何れも落付かず、相應の服裝と相應の言葉遣ひをしながら立つたりゐたり毫も餘裕なき風。中の女の帶をさして妻が厭ですよといふ。成程。白縮に薄い藍で松を染め下に茶色の線で家　薄紅の紅葉。むかしの御殿女中の着物かかいどりにありさうな野暮なものなり。變な好みの復活と思ふ。

○仲六二日程前より熱。猩紅熱ときまつて今朝病院に入院したといふ。車で行つて見る。東京から呼び寄

せた看護婦とつねが世話をしてゐる。猩紅熱は咽喉と腎臓を冒す由にて其方の注意を怠らぬやうにするとか。經過は一ヶ月かゝるといふ。彼の布團やかい卷を病院で消毒してもらふ。夜消毒をしに家に來る人五六人。皆白い着物をきて家中石炭酸の臭がする。散歩から連れて戻つた小供が盆槍してしまふ。暗い夜で、あたりの別莊はしんとしてゐる中で自分の家丈が火の影や白い着物の行違ふ影でごた／＼するのを立つて見てゐるのは變である。

「少しも品物が傷みはしません。二三日立つと臭が拔けてすつかり故の通になります」と云つて消毒掛の人が、しきりに消毒をすゝめる。自分の洋服と妻の着物丈はチャブ臺に載せて暗い畠の中に出して置く。

夜は夜具が足りないのを工夫して二つの蚊帳に子供六人我等夫婦岡田とみねと寐る。

三日。小宮が藤村の菓子をもつてくる。みんなで海へ行く。遠淺でよき所なり。子供等は浮ぶくろを脊負つてボチや／＼す。

小宮とまる。純一飯を十一杯食つて腹がくるしいといふ。いろはがるたをとる。源平でジャンケンをやる。

四日　寒いのを我慢して海へ這入る。ひるからあみだをやる。二錢の籤にあたる。昨夜妻が病院から歸つて、病院の看護婦の不親切を訴ふ。事務と看護婦へ金をやつて來たといふ。アイスクリームを食へと醫師がいふ。さうして付添には室外へ出てはならないといふ。さうして誰も來なければ、どうしてアイスクリームを食ふ事が出來やう。馬鹿々々しい事である。白い着物も病院で貸してくれる（是は妻が事務で聞き合せて承知した事）のを貸さないで着なくては不可ないといふ。此病院は評判のわるい病院ださうであ

る。何か看護婦にいふとふんと答へる丈ださうである。看護婦長にいふと普通の答はするが一向其通にはしないのださうである。東京から來てくれた付添の看護婦が妻にこんな所は始めてだと云つたさうである。去年か一昨年妻の遠縁のものが此所へ這入つた時抔は湯たんぽの湯さへ拵らへなかつたといふ。

五時頃仲六の見舞に行く今日は大變よくつてバナ、を四つ食つたさうである。床の上で電車をおもちやにして遊んでゐた。

六時過の滊車[原]で歸る。日曜だものだから中等客一杯。小宮と一等に移る此所には獨乙人が五六人乘つてゐた。八時過銀座の佛蘭西料理へ這入つて晩食をくふ。夜街頭をあるくと大變寒い。妙な氣候であつた。

○松の枝に御櫃が干してある。蟹が松の下を這ふ。

まさきの柦[原]。ひかんの黄な花（婆さんが西洋の芭蕉といふ）桔梗。百合。月見草。唐茄子。サ、ギ。玉蜀黍。芋。茄子。仁參（丸い仁參）。　青いトマト。

珊瑚樹の垣。珊瑚樹の花。遠くから望むと綺麗なり。

光明寺の裏の松山の松が軒を壓して見える。

○八月十七日　鹽原行

九時三十分の急行。赤坊[原]に聞くと大分中等が込みあひさうなので上等にのる。寢臺六人前（上を併せて十二人分）の列車にたゞ一人なり。煽風器が頭の上で鳴る。大宮々々、浦和々々、といふ聲を聞いて寐てゐる。

十二時頃食堂に行く。食堂のつぎに喫烟室其次が中等の一部。其此方からのつき當りの左の隅に丸髷の女、突當りに男、つれだか何だか分らず。食卓の前の男（色の青い丁稚上りと見える）海老のフライを二

皿食ふ。左側の男しやつ一枚で食ひながら書物をよむ。しばらくする〔と〕さつきの女と男がつれ立つて食堂へ這入つてくる。はじめて連といふ事が分る。

西那須〔野〕へ下車。輕便鐵道の特等へ乘る。さつきの男女向側へ腰をかける。關谷で下車　車を雇ふ。一番先がしやつ一枚で書物をよんだ男其次は帽子の下へハンケチを風に吹かせた男其次が自分、女と男は後れて來る。

いゝ路なり蘇格土蘭土を思ひ出す　松、山、谷、青藍の水。

後から四臺つゞき（是は自分のすぐ隣りの中等室に家族一同のれる人）くる。特等列車のうちでどちらへ手前は鹽の湯へ參りますといつた男の妻子もくる。大網といふ所で私は米屋で御座いますといつて仙臺平の男が呼びとめる。其間にあとの車が先になる。

やがてしやつ一枚の男は橋の處で寫眞をとる。余の次の室の一團は松家の門口でとまる。余の車は美人のあとからずん／＼行く。男と彼女の距離よりも彼女と余の距離の方餘程近し。遠か御供と見える。米屋の所で一寸御茶を一つといふうちに又かの女と遠かる。余が別館へ又出掛ると彼等は又楓川樓から引き返す客が多くて斷はられたものならん。

別館は變な所なり。只閑靜といふのみなり。米屋へ入湯に行く。

○八月十八日

寶の湯へ行く。きのふ見た馬が河原でまだ草を食つてゐる。白と黑の斑な馬。小栗宗丹か曾我蕭白の書きさうな變な馬なり。寶の湯の前に石があつて朱字で千葉縣野田醬油產地何の某。神經痛が癒つたとか書いてある。五時過だといふのに大入で這入る場所もない。小屋掛中は男も女も滅茶々々なり。女の隣へ入

れてもらふ。尻からぶく〳〵と玉が出る。是湯の湧くなり。そばの蓆に一人寐てゐる。ごみだらけ也。ラヂウムが含まれてゐるとかいふ話ですと女がいふ。石を四つ五つ並べて御由是を一つ持つて行かう「御止しなさいよ、そんなつまらないものを。第一重くつて仕様がありやしない」「重いたつて滊[原]車が重いんだ」余は「何にするんですか」と聞いた「盆栽にあしらふんです」と答へる。カル石ヤラ斑入ヤラあつたが何れも愚なつまらぬものであつた。夫でも當人は堀出物の氣で河原へ行つて探し出したのだと威張つてゐた。

○晝から鹽の湯へ行くといつて出る、米屋の子[原]脩馳けて來て曰く只今東京から二人見えましたと。行道に本店に行くと二人は湯に入つてゐる。夫を待ち合はして一所に鹽の湯へ行く。玉屋へ電話をかけてくれる。ペンキの箱の樣な宅の三階の角の室に通る。時々三階がゆれる。廊下傳ひに湯に行く。一町餘り下る。谷川の岸に湯壺が六個ある。男も女も區別なし。入浴の上谷川で頭を洗ふ。是公女按摩をとる。

「按摩さん何處だね」

「古町です」

「按摩さん御亭主があるかい」

「……」

「おれは四十六だが亭主に持たないか」

「おとつさんに持ちませう」

…………

…………

「山でつつころがした松の木でゐた[?]、　　樣な女でも……人が袖引きや腹が立つ」

按摩曰く御金をためて東京へ行つて藝者を上げて歌を聞きたい。按摩歸る時、按摩さんあぶないよ大丈

夫かいと聞く。大丈夫ですといふ。猶念を押すと按摩は階子段をとん〳〵と馳け下りるやうにする。驚ろいたなあと引き返す

是公宿るといふ。藥を忘れたため留る能はず、余一人歸る。薄暮山を下る。古町を外れると宿の番頭が提灯をつけて迎にくる。

下女が御淋しいでせうといふ。蓄音機でもやりませうかと聞く。蓄音機を持ち出して一時間ばかり聞く。

○昨日の朝　三位の洞穴へ行く岩の間に[原]　茂る其所の崖から水が垂れる、夫から階子段を下りて愈本式の穴に入る。蠟燭を點けて白い上蔽を借りて這入る。

裏道傳ひに岨道を下る。螢草、夕貌、蘆、川柳、葛の間に牛の樣な岩あり。街道に出て引き返す。昨日の女結付草履にて男と一所にくる。家に歸りて足袋を穿き洋傘を持つて八幡樣へ行く。細長い石段夫が曲つたりたるんだりしてゐる。上り切ると大きな杉が二本。逆さ杉といふ畫端書にあるものなり。見るとそばに先刻の女と男がしやがんで納涼んでゐる。正一位正八幡宮は憐れなものなり。泉があつて杉の木立がある

八月十九日

八月二十二日。　S來。海苔をくれる。懷中汁粉を食ふ。たゞみ鰯をもらふ。はなを教はる。何遍教つても分らず　場役手役四光。青短赤短凡て說明されて猶分らず

二十一日[原]　龍化の瀧。秀、須磨、瀧壺に入り冷たいといふ。歸途須卷の瀧に行。三本の湯瀧。カブト被

る。胸をうたして死んだ人ある由にて、ある婦人突然來り胸をうたすのは御止しなさいといふ。此宿山の中に一軒あり、御出なさいとも入らつしやいとも云はず、帳場に人が居ても知らぬ顏をしてゐる。さつき二人連が來た筈だがといふと分らないといふ。白い團子。

二十二日　妙雲寺の常樂瀧。Z書畫帖にかけといふ。小僧墨をすり出す。（S、K、同行七福神を買ふ）。不得已舊製を詩箋に書く。住持出てどうぞこちらへといふ。浴衣がけに手拭をぶら下げたる儘にて逢ふ。（高尾のうちかけ）

晩住持書畫帖を持つて來る。今朝迄あづかる硯を求むなし。遲く來る。ZとK墨をする。送鳥天無盡看雲道不窮の句を書す盡字を誤つて逆に作る。朝匆々之を訂正す。

宿のもの記念に何か書いてくれといふ。山色清淨身といふ句をかく

○華藏院

三百坪芝原。月見草、芒一株、疎竹

菜、午蒡、芋、黄瓜　唐もろこし、

いちご、萩、

二十四日　馬で中禪寺へ行く。尻いたむ。レーキサイドホテルで晝食。又馬にて引き返す。

胃　酸わき、膨滿、苦痛、食慾なし、湯に入る、益甚し、寐る。瓦斯胃より腸へ逃るゝ心地也　淸野氏

來り是公と會見。對話斷續聞ゆ。

二十六日　輕井澤より豐野、長野にて是公待ち合はせる。力石に會ふ。豐野にて下車。きたなき馬車宿。さうかと思ふと護謨輪の車あり。巡査が挨拶する。自働車が今中野を出たから二十分待てといふ。自働車は頭の上にズツクを張つたものなり。田道を疾驅す向から馬車がくる時が危險。衝突。馬車の心棒まがる。舟橋を渡る。中野着。二頭立のガラ馬車に乘る。段々田舍道に入る。心細くなる。田中の入口にて上林塵表閣の主人出迎ふ。車にのりて澁安在を過ぐ。絶壁を下りて橋を渡る

（澁の二三間の道路の兩側の二三階相對して話が出來さうなり風流。女が四五人手すりに倚りて下を見る）橋を渡りて又上る山を切り開いた道の樣で人氣毫もなし又心細くなる漸くにして山の中の一軒家につく。器具布團座敷思つたよりも淸潔　閑靜心地よし。廣業、晩霞、橋本邦助、（契月、一草）の銀襖に鹿、曲江）

○左右兩側にあやしげな風呂　鼠色の褌を見て心細くなる。湯田中に着くと木賃宿の樣ななかに立派な家あり。馬車を下りると護謨車がある。心細くなるかと思ふと心强くなる。トンチンカンの處が夢の樣である。

○二十七日　地獄谷へ十二町深く入る。河原へ下り〔る〕と眞中に大きな岩がある其岩から向側へ渡した橋を渡る。

河原の中からすさまじき勢で噴水のやうな大きさの湯が騰る

晩に新橋の桝田屋の御かみの一行が澁で義太夫會を開く由にて是公提灯をつけて聞きに行く。猿屋の亭

主とかゞ眞打の由。

○二十八日　午後村田君澁から寫眞機械を荷いでく〔る〕殘念な事をしたといふ。水瓜を持つて來たら途中で落して割つて仕舞つたから腹が立つたので皆食つてしまつた　腹が張つて仕方がないといふ。

今夜は諸君の爲にわざ〳〵義太夫の連中が澁で開く事になつたから來いといふ。みんなを呼んで飯を食はせる事にして置いたから一所に來て食へといふ。

五時過出掛ける。杉の木立のある神社の處へ來ると水瓜の落ちたのが散らばつてゐる。田舍道を指して吉野に似てゐるといふ。

津幡屋の二階へこつちから持つて行つた鳥をひろげて朝鮮の石鍋で食ふ。四十恰好の白粉をつけた婆さんが挨拶に來る。村田君に聞くと桝(ママ)屋の御上だといふ。飯の時刻が遲いので失禮して隣で食つたといふ。食つたすぐあとは聲が出ない。大掾さん抔は滋養物は晝食べて晩は菜葉に卵をかけたのを食つて養生をするから七十幾つの今日迄聲には少しも變りはありません。たゞ耳が遠くなつて三味が聞えないので時々調子を外す云々。えて屋の勝公といふのが挨拶　是は此座の眞打で眼の細い鼻のかたまつた趣味のない色男である。村田君は君は實にのんきだね、うちがあんなにごたついてゐるのに此んな所で淨瑠璃などを語つてといふと勝公はえへゝと笑つてゐる。あなたも寫眞を御やりですか手前も大好きですと村田君の器械をいぢくつてゐる。又奴といふ藝者もくる。面長の女で美人らしいが眼に多少足らない所と鼻の恰好が余の好みに合はない。三人は氣が氣でないのですぐ隣りへ取つて返す。三味線の音がする。始まつたなといつて鳥をつゝく。仰向になつてゐると、勝公が表から又奴が出ましたと知らして(ママ)呉れる。是は美人だからみんなが聞かうといふので勝公が教へたのである。Zは合切袋を提げ余は平野水に藥をのむ湯を入れて隣へ

行く、又奴が三十三間堂を奇麗な聲で語つて入る。[原]けれどもちつとも力が這入つて居ない。それから升田[原]屋の御上のいゝ人といふ藝名淇泉君の御所櫻になる。是も辨慶上使などをやるには無理な貧弱な語り口である。其次が御上の安達が原　是はいゝ人よりはましである。次は勝さんの寺子屋　一寸うまいのだが途中でやめてしまつた。白い麻の着物に夜の蟬が來てとまつたので御客が笑ふ。仕舞が堀川の懸合である。三味は六代目清七といつて文樂でいゝ所を彈いてゐたのを連れて來たのだとい〔ふ〕。是は本式の黒人である。是がつれびきがないからといふのを村田さんが無理に勸めてやらせたのである。役割は母　桔梗(勝公) 與次郎 (淇泉) 御しゆん (桝肇　御上の事) 傳兵衛　御つる (日吉)　此日吉といふのは坊主あたまの髭を短かく刈つた書生見たやうな男である。村田君にあれは何ですと聞くと藝者屋の主人ですと答ふ。

引き幕に赤いうちに黒丸をかいて中に廓と書いてある。廓といふのは湯田中にゐる人で廓[原]大夫といふのださうである。

途中でZが指を出して何かやらなければなるまいといふ。是丈でいゝか　指を一本ふやす。村田君に相談するときうざなといふ。20にして村田君に渡す。中入頃になつて村田君があまり馬鹿々々しいから十にして置きませうといふ。何聞いてやれば嬉しがるのです。さうしてほめてやれば澤山です。私は祝儀としてゞなく前からの關係で十やつて置きました。

十二時頃提灯をつけて歸る。

九月十七日

○鹽原の平元德宗師に依賴されて鹽原の詩を紙にかく

　蕭條古刹倚崔嵬。溪口無僧坐石苔。

　山上白雲明月夜。直爲銀蟒佛前來。（妙雲寺觀瀑）

○九月二十六日　正午痔瘻の切開。前の日は朝パンと玉子紅茶。晝は日本橋仲通りから八丁堀茅場町須田町から今川小路迄歩いて風月堂で紅茶と生菓子。晩は麥飯一膳。四時にリチ子テ飲んで七時に晩食を食ふたが一向下痢する景色なし、翌日あさ普通の如く便通あり。十時頃錦町一丁目十佐藤醫院に來て浣腸。矢張り大した便通なし。十二時消毒して手術にかゝる。コカイン丈にてやる。二十分ばかりかゝる。瘢痕が存外かたいから出血の恐れがあるといふので二階に寐てゐる。括約筋を三分一切る。夫がちゞむ時妙に痛む。神經作用と思ふ。縮むなといふ idea が頭に萌すとどう我慢しても縮む。まぎれてゐれば何でもなし。

　部屋から柳が一本見える風に搖られて枝のさきが動いてゐる。前の家で謠をしきりに謠ふ。赤煉瓦の倉の壁が見える。床に米華といふ人の竹がある。北窓閒友とかいてある。

　夜　新内の流しがくる。夜番が拍子木を鳴らしてくる。えい子あい子來る。

○二十七日。食事パン半斤の二分一。鷄卵二。ソツプ一合。牛乳は斷はる。岡田がくる。藤村の食後と霽といふものを買つて來てもらふ。晩に東と妻がくる。

○二十八日。尻の穴の方のガーゼを取る。今晩歸つてもいゝと云つたが面倒だから一週間ゐる事にする。

隣は洗濯屋。……へ行くなら着て行かしやんせ。シッ／＼シ。無暗にうたをうたふ。少しうるさくなつてきたぜといふ。隣が洗濯屋でなければいゝといふ。さう馬鹿に見えるかねといふ。洗濯屋は人間かいといふ。行徳が書過ぐる。妻がよるくる。妻に富貴紙と巻紙と状袋を買はす。

○伊東榮三郎さんの死んだ通知に對して弔詞を出す。

○二十九日

朝回診の時尻の瘡の處をつゝかる。少々痛し。ガーゼを少し緩めて見たらまだ血がにぢみ出すから二三日そつとしてゐないとわるいといふ。二三日すれば出血しても逆りはせぬから構はないといふ。

看護婦さんが銀杏返しに結ふ。髪を結ひましたねといふと、へえいたづらを致しましたと答へた。膳を持つてくる時には日本服を着てきた。どこかへ出ますかと聞くと、いえあたまを結ひましたからと答へた。

夕方洗濯屋の物干にある一列の洗ひ物がまだ乾かないと見えて物干から突き出した儘それなりになつてゐる。それが暮色を受けて薄藍に見える。厚たつぷり日が暮れて空の色が沈むといつの間にか白い色が浮き出して風に搖られてゐた。

夜に入つて雨。毛布一枚で夜半寒し。

○三十日　前夜の引つゞきにて雨降る。わびしき日也。今日は手術後五日目なれば順當に行けば始めてガーゼを取替る日なり。うまく取り替られゝばいゝが。

回診の時醫師はガーゼを取り除けて至極いゝ具合です。出血も口元丈で奥の方はありませんといふ。

○十月一日

十一時頃浣腸。ガーゼを取り替へる。瓦斯多量に出る。便は軟便にて少々なり。「出血はありましたか」と聞く。「是が癒り損なつたらどうなるでせう」「又切るんですさうして前よりも能く穴が残るのです」心細い事である。「なに十中八九迄は癒るのです」「二三週間遅くて四週間です。」「括約筋をどうして切り残して下からガーゼが詰められるのですか」「括約筋は肛門の出口にやありません。五分程引込んでゐます。夫を下からハスに三分程削り上げた所があるのです。括約筋の幅の三分一です」瘡のない右の方が急にはれて苦しい。床の中でぢつと寐てゐる。あしたから通じをつけると云つて腹のゆるむ薬を一日三回に飲む。

○寐てゐて見てゐると前にある煉瓦の倉が見える。其所に打釘の大きな様なものが一列に三本と山形の下に一本見える。是は装飾だらうか實用だらうかと考へる。装飾ならつまらないものである。實用なら何になるんだらう。あの折釘に縄をかけて上つて来てそれで仕舞に其釘の股に足を掛けて家根に上れるだらうかと色々考へる。とう／＼上れさうもないと思つてあきらめる。煉瓦の前に電線が二本ばかり風にふらふらして見える。

○隣りの洗濯やは自分の椽側から三尺許りの所の穴から屋根へ出るやうになつてゐる夫から階子段を上つて物干へ洗濯物をかついで出る。小僧が白いものを擔いで物干臺の所迄上つて行つて其所へ放り出すと上にゐた大僧が白いものをぢかにそんな所へ置く馬鹿があるかいと云つていきなり頭を張りつける。小僧はだまつて白いものを一つ一つ拾つて籃の中へ入れてゐる

○小さい看護婦は群馬のものだといふ。（大きなのも群馬である）。名前を聞いても云はないから、それぢや君の事を群馬縣と云つてもいゝかといふと、よござんすと答へた。今日午のときまた聞くと、石がつきますといふ。石井、石川色々あげたが、いゝえといふ。仕舞に石關ですといふ。名はひやくだといふ—

二三四の百だといふ。それから御百さん〳〵といふ。大きいのは都丸しくだといふ。「内のものはみんなくの字がつきます」

十月二日

○昨夜から粥を食ふ。昨日から腹をゆるめる藥を呑む爲め今日は通じを催ふす。診察時間前故我慢する。
陰。冷やかな風。
午過細君車を持つて迎に來る。看護婦二圓宛やる。荷物を風呂敷に包む。袴は穿かずに合羽を着る。

十月三日

○便後醫者に行きガーゼを取り替へる。新らしいガーゼを入れる時痛みが段々なくなる。
夜小宮岡田鈴木がくる。

十月四日

○朝便通なし。醫者で浣腸してもらふ。
○昨日山本（社の）が來て文展の批評をしてくれと頼む。
○胃わるく。酸わく樣子也
○留守に中村是公來る。

十月五日

○朝後架にてひよ鳥の鳴聲を聞く。
○醫者に行く。「今日は尻が當り前になりました。漸く人間並の御尻になりました」と云はれる。今日は便後肛門がはれてゐなかつたからである。
○歸りに牛込見付を出ると、市谷八幡の方角の森と小石川の牛天神の森のなかの木が幾本か焦げたやうな色に變つてゐる。
　秋の影響は既に梢を侵したのかと思ふ。たゞのに人はまだ大概單衣を着てゐる。日はかん〳〵當つて目眩ゆい位である。
○車上にて「痔を切つて入院の時」の句を作る

秋風や屠られに行く牛の尻、

断片

——明治四十五年五月以降——

○五月六日の晩に市原君が約束の通り老妓の話を聞きに連れて行く。小學校の先生の樣な服裝をして鐵縁の眼鏡をかけてゐる。自分は袷に袷羽織にセルの袴で一所に行く。

途中で市原君は藝者といふから少しは奇麗かと思ふときたないの許寄つてくるといふ。どうせ御茶を挽いてゐるのが聞きにくるのだからさうでせうと答へる。第一無學で、今年は明治何年か知らないのがあるといふ。全體何處かと聞くと檜物町だといふ。

吳服橋で下りて少し西へ行つて右へ折れて夫から又左へ曲つて丸善の高い建物〔の〕見える横町へ出て細い露地を入る。幅三尺ばかりのうちに兩側に家が並んでゐる。その左の一軒だ。

○上つた所が卽ち坐る處で、四疊に長火鉢と茶箪笥がある。そこに亭主（八百屋のよし）と神さんと下女とした地つ子（？）がゐる。狭くて蟄息しさうである。此所で話すのかと聞くとさうだといふ。

○下地つ子が迎に行く。病氣で寐てゐるといふ。來られるか來られないかと又念を押しにやる。今御膳をたべてゐたと下地つ子がいふ。夫れ御覧といつて又迎にやる。とう〱出て來た。顏のてら〱した赤ら顏の面長の女である。髮の毛がぬけて薄くなつてゐる。挨拶をして、こんな話は堅氣の人が聞いても面白くはありませんといふ。

○神さんと雜談をして中々話をしない。そこへ抱えの藝者が歸つてくる。帶の間か〔ら〕紙の包を出す。御作が銀貨の御祝儀は珍らしいといつて笑ふ。藝者は女の御客だといつていやな顏をする。女の御客はいやなものだといつて同情するやうな事をいふ。何か藝を試驗されていぢめられたらしい。藝者は湯に行く

○御作はとう／＼話を始める。宮崎の泉亭とかいふ家で引かされてカゴ島で大きな家を持つて三人の下女を使つて奥様に仕立て上げられる時から［の］話である。旦那は鑛山の持主で十一の時から洋行して十何年とか英國にゐた人だといふ。耶蘇教ださうである。耶蘇教が藝者を受出すのはどういふものだと聞いたら耶蘇にも色々ある。日本にも禪宗や日蓮宗や眞宗があ［る］やうなものだと答へたさうだ。

○書物は旦那が讀んで是なら好いと思ふものを讀まなければならない。朝は六時夜は十時に起きたり寐たりしなければならない。

○西郷の畫を額にして掛けて叱られた。銀杏返しに結つて叱られた。車屋を車やさんと呼んで叱られた。下女に御何と御の字をつけて叱られた。

○其内堀といつて自分ともと關係のあつた男が自分と旦那の間を離間してしまつた。ある日飯を食つてゐると、手紙が來た。至急申入候、……大阪へ立て、小生は何日午後六時に行く。――手紙を讀んで飯を中途でやめた。是は自分の氣を引く爲と思つたから支度も何もしなかつた。旦那は約束の時に來て玄關から上る時、何うせかうなる事とは思つてゐたと云つた。上つて支度は出來たかといふ。支度はしませんといふ。金を五百圓出した兎に角是を以て此家のものは持てる丈持つて大阪へ歸つて學校へ入るなり何なりしろ。其内何うかするといふのである。自分は棄てられるといふ疑念もあつたが年が若いからまだ外にもいい旦那が出來るといふ慢心もあつて、とう／＼云ふ通りにした。其翌日旦那が歸る時、後姿を見てゐたが急に（玄關から門迄石の舖いてある道）其あとを追かけて外套の裾をつかんだ。旦那はふり拂つたなり後も見ずして行つて仕舞つた。夫から內へ引返すと急に悲しくなつて泣いた。下女にブラ［ン］デーを買ひにやつて飲んだが、むか付いて飲めない。縁側へ出て吐いて仕舞ふ。

○大阪へ行くには定期船でなければならぬといふ旦那の云付である。荷物は夫々片付けて三人の女中のう

ち一人を作にしてあとは暇をやる。庭にあつた九年坊や夏密柑や凡ての柑類を大きな籠につめたもの迄荷作りした。

○船にのる積で宿屋へ行くと其所で琉球通ひの朝日丸の事務長の△さんにひよつくり出逢つた。やあつといつたが、自分の服装が白襟で襟なしの御召に紋縮緬の羽織なので、無遠慮に口を利いていゝのか何だか分らないので、少しまごつく。すると酒を飲んだ勢で室へ這入つて來て、話をし出して、御酒は如何でよ杯といふ。頂きますといふと夫から酒のやりとりをした。下女は驚ろいた。夫があとから新聞に出て、其事務長と譯があるやうに書かれたのださうである。（旦那の分れる時、是から先また御前が藝者をして何處かで廻り合つたら妙なものだらうなと云つたさうである）

○船は上等へ乘る。ベッドが四あるうち一つを女の西洋人が占領した（日本語の出來る）神戸へ近くなつた時、食堂へ出ると同じ上等にゐた役者と食卓に就く其時役者は御作を通辯と間違へてあの異人さんは何處の人ですかと聞いた。段々話をして大阪の南の××町のあまきの子だといふ事が分つて、懇意になつて、神戸の常磐で一所に飯を食つて梅田で分れた。

○あまきへ來て、目ばかり出して、こちらの娘さんの御作さんから言傳を頼まれてきましたといつて母の氣を引いたら母は今でも御作の事を心配してゐるやうであつたから、被り物を取つて挨拶をした。（板野へ行つて喧嘩を仕掛られる。前の話をしらないのでよく分らず。金をやつて手を切る。

○兄から前田の方の片をつけろと云はれる。手紙を出しても電報をかけても返事が丸で來ないので已を得ず又宮崎へ出掛る。旅屋へ泊つて樣子を伺つてゐると前田は堀の家にゐる。けれども何うしても會せない。其内彼は立つてしまふ。懐中は無になる。又藝者になる。喜樂といふ料理屋の裏に下女を使つてゐる。すると牛乳屋の何さんから呼ばれる。其所の夫婦が丁重にする旦那が神戸の八十七番の總支配人で金山を買

ひに來てゐるのださうで、一返行くと祝儀を五圓づゝくれる（其頃は三十錢か五十錢）。夫が一週間程つづいた後で、牛乳屋の夫婦からあの人を旦那にしないかといふ云ふ相談をかけられる。應ずる。すると此男が又外の藝者と關係をつける。さうして一所に芝居へ行く。其頃の宮崎の芝居は田舍の小屋掛である。御作は酒を呑んで髮結ともう一人の藝者を引き連れて喧嘩に行つて彼等の隣へ席をとるや否や彼等はすぐ席を立つて土間に入る。夫で御作はやけ酒を呑んで、舞臺で何をしてゐるか何だか分らないのだが、何とかいふ役者が奇麗さうだつたから、あいつを買つてやらうといふ氣になつて、芝居がはねたら來られるかと聞いたら上りますといふ。夫からぐでん／＼になつて家へ歸つて寐てゐると朝眼が覺めると、傍に寐てゐるのが、黑あばたのしつつりだらけの奴で久留米絣の變なのを着て淺黃の垢だらけて其兒帶が枕元にあるので、愛想がつきて仕舞つた。すぐ家を飛び出して湯に入つた。

○夫からある座敷へ呼ばれると客が夜具を被つて寐てゐる。聞くと御前に顏が合はされない人だといふ。郎ち牛乳屋の周旋した男である。仲直り。其男が御作の家へ這入り込んで、洋服を作る、香水を買ふ、何でも金を使ひ放題使つて、さうして御作に拂はせる、御作は我慢して拂つてゐるうちに素寒貧になる。其内警察へ呼び出されて、彼女の家に居るものは詐欺師の嫌疑のあるもので、神戶を調べてもそんなものはゐないとの事、今引き上げるには少し證據が足りないが、もう少しすると拘引するといはれた。御作は苦しい仲から金を三十圓出して、あなたの世話になる積でゐたが、到底さういふ譯に行かないから是であなたは何うでもなさいといつた。其時彼は詐僞師だといふ事實を御作に告白して、然し女の金などをどうする積ではない、金山をたゞ取つてやる積で來たのだと告げた。御作は夜の二時頃彼を延岡迄立たして、途中迄送つた。夫から警察へ出て、うちから繩付を出すのはいやだから斯々したから必要なら延岡の方でつらまへて吳れと告げた。

○御作は丸で賣れなくなつた。檢事正とかの何とかいふ人の所へ往つて百圓借[原]してくれといふと、何うも職掌柄こまるから己の妻に頼んで見ろといふ。酒を呑んで其人のうちへ出掛けたが這入れない、飲み直して行つても這入れない、三度目にとう／＼這入ると來客中だから今に都合のいゝ時を知らせるからといふ。家へ歸つて待つてゐると知らせが來た。細君がいふには十や二十の金ならだが百圓となると女の金ではない亭主の金だから一寸證文を入れて呉れといふ。――夫からしばらくして座敷へ出ると例のアバタの檢事正がゐて、其證文を歸して呉れた、其代りいふ事を聞かなければならなくなつた。所が其證文は細君の許諾なしに亭主が盜み出したのであつた。それで其家には風波が起つて大變な騷動になつた。

○御作は是がため益賣れなくなつた。どうしても逃げ出さなければならない。熊本へ行かうとするが旅費がない。ある贔屓の客が藝者を上げてゐる所へ行つて事情を話すと紙入にあつた十五圓を呉れた。夫から其人に熊本の落付く先を知らせたら役場から謄本を取つて送つて呉れと頼んで、車夫に熊本行を相談すると三日かゝる、其上あと押が入る。さうして四十圓でなくては不可ないといふ。四十圓でいゝからといつて、太神宮へ參詣に行つてくるといふうそをついて宅を出た。（長さ三百間で青竹の中へ藁をつめたやうな橋を這つて渡る話あり。どこの事か分らず、果してそんな所があるや疑問なり河合又五郎の屋敷あとを見たといふから人吉の方でも通つた事なるべし）きたない宿屋で車夫と同じ部屋に寐たり、寒くて路傍の枯枝を焚いて暖を取る。

○熊本の春日へ三日目の夕つく。呉服町の梅の屋といふのへ車屋がつれて行く。けい菴を頼む。二本木の市樂といふのが來て三年で千二百圓出すといふ。手つけを二百圓貰ふ約束をすると、後から清川といふのが來て、千五百圓出す、市樂のやうな小さな所では損だといふ。婆さんが二百圓置いて行つてくれる。車夫に六十圓やる。衣ものを拵へる。市樂と清川の爭になる。車に乘つて行くと市樂へ引き込めとか清川へ

引き込めとか大變な騷ぎである。淸川の方が手前にあるのでとう／＼其所へ這入つて仕舞ふ。
○檢査に行けといふ。段々聞いて見ると二枚鑑札だといふ。どうれで相場が高過ぎると思つたさうである。所が夫には親元の印がいるので淸川がわざ／＼大阪へ出掛けてあまきに掛合ふと、當人が承知だから仕方がないやうなもの丶、他日もしあの時に判を押して吳れなかつたならと恨む時機が來ないとも限らないから是許りはどうしてもいやだ「と」云つて承知しなかつた
○其內梅の屋のものと懇意になつて親子見たやうな間柄で、梅の屋にゐて贅澤をいつて暮すやうになつた。そこへ來るある豪家の爺さん。天神さまのやうに白い髯をはやしてゐる御爺さんに世話をされる。
○女芝居を見に行くとどうしても女と思へない役者がゐるので、念晴しの爲め其役者に會はせると御德さんといふ矢張り女であつた。其御德さんが馬鹿に氣に入つて、御馳走をしたり祝儀をやつたりすると、御德さんに附隨したものまでも引受けなければならなくなつた。たで例の白い髯の御爺さんの所へ汽車の使で一日に二度も三度も小使を請求するので、御爺さんもとても續かないといつて斷はつて仕舞つた。
○今度は陸軍の病院長とかの何とかいふのが妾を探してゐるといふので月三十圓（三十圓では宿の拂にも困る一圓二十錢の上に晝飯は別だから）で雇はれる。所が其男が一ヶ月ばかり來て、月給を吳れずに影を見せなくなつた。幾何尋ねて行つても逢はない。それから車夫をかたらつて、夜病院へ行つて、門をどん／＼叩いて、急病人があるから開けて吳れと怒鳴らして、婆さんが門をあけるや否や中へ這入るや否や奥へ行くと例の男がベッドの上に寐てゐて、御作の顏を見るや否や逃げ出さうとした。そこで逃すまいと爭つてゐるうちとう／＼何處かへ逃げられて仕舞つた。御作は無論醉拂つてゐた。其處にある硝子戶をめちやめちやに壞して、中にある本を出して、滅茶々々に扯き破つた。隣から憲兵が來たが、何しろ泥醉してゐる「の」だから仕方がない縛つて床の上に寐かして置いた。朝眼がさめると御作は紙屑の中に寐てゐた。

彼女の扯き破つた書物の代價は大分なものであつたさうだ。彼女は憲兵と談判をした。あなたが證人に立つなら、引き取ると云つたら、僕は憲兵だから役目上どうもそんな證人には立てないが、僕の友人に十時といふ曹長がある。其人を證人に立てるといつて、十時を呼んで來た。是は柳河の家老の家とかで曹長でも家はいゝのださうである。其十時が僕があなたの顏を立てるやうにするからといふので一先づ梅の屋へ歸つた。

○十時が紙へ百圓包んで持つて來て是でどうぞ勘辨して吳れと賴んだ。夫から、全體あの男は月給を四十五圓しか取らない、夫で三十圓の妾が置ける筈がないのだから、そこを調べないで無暗に妾になつたのか惡いんだといつた。能く聞くと病院長か何か知らないが何でも出店の病院の長らしいのである。夫から十時が憲兵と病院長、御作を呼んで料理屋で御馳走をして、盃を廻して夫を割つて此で結末がついたと宣告して落着を告げた。

○所がある時十時が三十圓金を送つて來た。變だと思つてゐると、料理屋から呼びに來た。さうして自分が仲人に這入つて置きながら、こんな話をするのはまことに變なものだがといふ相談である。然るに十時はチンの樣な顏をしてゐる。十時は御作を妻に貰はうといふのである。

○さうかうするうちに相撲が來た。梅の屋には友の平だの、白猫だの梅垣だのといふのがとまつた。白猫といふのが顏はよかつたが、梅垣といふのが可愛らしかつた。其梅垣が宿の神さんに、あのうつくしいねえさんの室へ酒と肴を持つて行つて飮みたいと申し込んだ。御作は相撲は嫌だから斷つたが、宿の神さんが折角いふものだから、承知したら大きなきたない奴が無暗にやつてきて、滅茶々々に食つたり呑んだりする。御作もつい飮んでへゞレケになつて寐てゐた。夜中に眼がさめて寐返りをしやうとすると後がつかへて動く事が出來ない。見ると梅垣がそばに寐てゐた。起きやうとすると、まあ傍へ寐る位勘辨しろとか

何とか云つてゐる。〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇。
〇あくる日梅垣が今日は棧敷をとつて毛布を敷いて御酒と辨當を用意して置くから、是非見に來てくれ、さうすると己も張合があつて勝てるからと賴んで出て行つた。御作は芝居の話を聞いて面白さうだつたから、宿のものを誘つて芝居へ行つて梅垣などの事は忘れてゐた。すると相撲の方では梅垣がちやんと用意をしてあるのに御作が來ない、夫で負けて仕舞つた。
〇御作が餘念なく舞臺を見てゐると、突然梅垣が來て襟がみを捉へて一寸來いといつて恐ろしい權幕をする。みんなが此方を見る。今に歸ると云つて歸したが、宿のものが歸つたらよからうといふので歸つて見ると、己に恥をかゝしたから、みんなの前で今日は相撲へ行く筈だつたけれども、誘はれたので已を得ず芝居へ行つたのだと證言しろといふのである。御作は其通りにしたら相撲取は飲んだり食つたりして二本木へ行つく（原）。梅垣は大分金を使つた。其うち相撲が御仕舞になつて、梅垣が熊本を引き上げる時に、幕の内に入つたら是非女房にするから、何處にどう流れて行かうと居所だけは知らせて呉れろ。と云つて、西洋の護謨楊子と縮緬の單衣を（原）呉れた。御作は藝人からたゞ物を貰ふのは厭だつたから縮緬の長（原）繻絆をやつた。すると梅垣は毎日のやうと（原）、今日は何處で興行今日は何處で興行といふ音便をする、（原）御作は惚れた譯でもないので丸で返事をしなかつた。すると、今度は梅の屋へ向けて御作はまだゐるかとか何とか聞き合せて來た。
〇御德の女優が長崎へ（原）行く事になつたので御作も一所に連れて行つて呉れと賴んだ。御德さんは引受けた。長崎へ行くと一行中の立（原）御山の阪東三津五郎といふのが病氣だから、小紫の役をやつてくれろといふ。宜しいと引受けて阪東三津五郎といふ旗を後ろへ立てゝ市中を車で乘り廻した。愈舞臺へ出て見ると鬘でコメカミを締められるので、苦しくつて卒倒しさうになる。一日丈で御免蒙つて、とう〳〵又藝者〔に〕な

つて一ち子といふ名で出る。

○其時長崎へ雁次郎の一行が來た。もと〳〵知り合だから家へ遊びに來て花ばかり引く。雁次郎の弟子だか、男だか滅茶々々に食ひ潰す。さうして引上げたあとはスツテン〳〵となる。大晦日に餅もつけない、正月の煮しめも出來ないで弱つて塞いでゐる。呉服屋が拂をとりに來る、コマカイのがないといふ。御釣があるといふ。コマカイのがないのに大きいのがあるかと怒鳴つてやつた。する物産會社とかの御客が偶然御作どうだと門口から這入つて來た。此ていたらくだと話すと(彼女は所持品に悉皆封印をされて、身代限りをしてゐたのである)御客が金を四十圓くれた。其金で餅を買はして、酒を買はしてぐい〳〵飲んでゐた。正月の十六日に又呉服屋がとりに來たから、何うです斯うしてゐては何時迄立つても借金を返す譯に行かないのだから、もし借金を取らうといふなら、稼げるやうにして呉れないかといふと呉服屋も尤だといつて衣服を拵らえて呉れた。漸く座敷へ出られるやうになつたが、さて些とも賣れない。何うする事も出來ない。仕方がないのでとう〳〵大阪へ云つてやると、兄が五百圓持つて出て來た。千圓以上の借金だけれども夫丈あれば何うにかなるので萬事は兄に任せて自分は大坂へ歸つた。(其時例の宮崎の詐僞師○○○○○が丁度懲役から出た時で、大阪の方をだましに行つて、御馳走をさせて、うまくだました。)

"Personne sur terre ne peut aimer la campagne autant que moi, écrit Beethoven …… J'aime un arbre plus qu'un homme." Chaque jour, à Vienne, il faisait le tour de remparts. A la campagne, de l'aurore à la nuit, il se promenait seul, sans chapeau, sous le soleil, ou la pluie. "Tout-Pouissant (sic)!—Dans les bois je suis heureux,—heureux. Dans les bois—où chaque arbre

parle par loi. — Dieu, quelle splendeur ! — Dans ces forêts, sur les collines, — c'est le calme. — le calme pour te servir.

……il écrit avec sérénité : "Je prends patience et je pense : tout mal amène avec lui quelque bien."

Le bien fut la delivrance, "la fin de la comédie," comme il dit en mourant, — disons : de la tragédie de sa vie.

Beethoven au Wegeler : "et si le bien-être n'a pas un peu augmenté dans notre patrie, mon art doit se consacrer à l'amélioration du sort des pauvres……

■女の顏の變化する事。「どうも不思議だよ」とAが云ひ出した。自分はAと同じ蚊帳の中に枕を并べて寐てゐたのである。

■それは僕の幼少の頃であつた。自分ではいくつ位か分らないが勘定して見る〔と〕六七歳の時の事である。僕は父と母と喧嘩する聲で毎晩眼をさました。

■乞食の湯　馬

■日光　馬

■澁　素人義太夫

■「何君ダリヤだの朝貌だなんて一時のものだからね。本當の盆栽でなくつちや買目がない。僕が何故かう盆栽好になつたか其起りを話さう……

■九時三十分の青森行。「中等は込むかね。……」上等へ乗るとたつた自分ぎりである。煽風器。食堂へ行く。女と男。

■酒をやめたXは河童が陸へ上がつたやうな顔をして默つてゐる。（あとなし）

■始めて男と寐た女曰く
始めて女と寐た男曰く

■乃木大將の事。同夫人の事

■すしの食ひ方。　眞劍の勝負の時の心得

■書畫屋の惡德

○灘の川邊にゐる贋物作りにどんな畫でもかゝせる。それが七圓位、表裝が二三十圓。夫を田舍へ持つて行く。一人が舊家などへ入つて所藏の幅物を見て本物を散々けちをつける。其あとへ贋物を持ち込んで本物と引換える。さうして本物は東京で高く賣る。

○大阪では地面を買ふと同じ心得で書畫を買ふ。

○滅多に藏幅を表具師などへは託されない。すぐ寫しをこしらへる。さうして本物と稱して賣る。

○東京でも玉堂は雅邦のニセを昔大分描いたさうだ。玉淵は玉章のニセを拵らへたさうだ。夫でなくても熟頭位な人になると表具師か書畫屋から釣られる。絖などを持つて來て先生何かかいてくれと云つて

其禮に五圓位くれる。先生大得意でこんな事を繰り返すうちに書畫屋と親みが出來る。其時先生是を一枚寫してくれ抔と頼まれる。正直な熟生は悪い事と知らないからすぐ引け受ける。書畫屋は夫をすぐ本物として高く賣り付ける。

○まだ玉章の尺八が三十圓位の時分、地方か〔ら〕書畫屋を媒介に何か描いてもらふと、あとから苦情が出て實はもう少し密なものをといふ注文であつた抔といふから、能く譯を聞いて見ると、書畫屋は周旋料を取つた上潤筆料の大部分をハネタ上三十圓丈玉章の所へ持つて來てゐる事が分る

○箱書をかいてもらつて其中に僞物を入れて、本物は別にうる

○下條正雄抔は本物へけチをつけて、人を遣つて散々にこなして買ひ取つて、夫を宮内省や何かへ高く賣りつける。

○書畫屋が畫の相場をつけて無暗に高くする。さうして其利益をしめる。畫家がもし夫を排斥すると、新畫の市で其人の畫を蹴倒して相場を下落させて復讐をする。

○ある大家が實業家から繪をたのまれてかいたら其翌月其繪がすぐ賣物に出て、さうして箱書をたのみに來た。是は儲けるために書いてもらつたのださうである。

十一月二十九日

○朝ひな子の墓参。風強く全くの冬の景色。ちゞれた梧桐が風に吹かれて枝を離れやうとする。十時過車に乘る。妻、筆子、えい子、あい子、行徳、岡田。音羽で植木屋に合ふ。植木〔屋〕は先へ行つて墓の掃除をする筈である。彼は余の車を見るや否や馳け出した。車と一所に馳けるのは無理だと思つたらいつの

間にかどん〳〵先へ行つて仕舞つた。例の苗畠、苗には竹が添ふてゐる。何の苗か分らない。
○棒のから坊主になつた下に楓が左右に植ゑ付けられて黄と紅との色が左右にうつくしく映る。
○依撤伯拉何々の墓。安得烈何の墓。神僕ロギンの墓。其前に一切衆生、悉有佛性とい〔ふ〕塔婆。枯木の銀杏の下に銀杏の葉がうづ高く掃き寄せられてゐる。
○墓標がなくて、土饅頭もある。
○全權公使、、、といふのもある。
○入口に土をならして新墓地を作つてゐる男が鍬の手をやすめて吾等を見た。
○ひな子の墓の向ふも土をならしてゐた。

○あい子の肺炎。去年の暮から晩方少し熱が出る。あくる日になると下るので幼稚園へ行く（〔原〕彼女は今年の四月から小學通ひ（明治四十五年即ち大正元年）コタツにあたつて默つて居る（正月）蜜柑類を欲しがる。熱を計ると四十分〔原〕二分
○熱下がらず。何だか分〔ら〕ず。心臟を氷でひやす。
○肺炎ときまる。胸に濕布。
○脈がわるいのでカンフルをのむ。癇癪を起し寐ず
○水蜜を欲しがる。ほかの菓物〔原〕ではいやといふ。
○寐かしてくれといふ。どうしてと聞くとねん〳〵よと云つて寐かせろといふ。
○奇數の日でなければ熱は下らずといふ。
○其時冷やしつゞけると危險だといふ。分離の時が肝要といふ。

○おもちやを買つて來てやる

○十二月三日四日新富座で越路太夫を聞く。

三日。あたまをあげて見ると棧敷から有賀長文の顏が見える。妻に話すとしきりに上を見る。外聞が惡いからやめさせる。

歸りに猿屋の前で、小露にあふ。

四日。土間にて見物六人。一間置いて隣りに坊主頭の爺さんあり。時々奇聲をあげる。出方が客を案內してくると大きな聲を出して靜かにしろと怒鳴る。

斷片

——大正三年頃——

×甲は疵のない珠の様である、圓滿無缺　然し惣體に曇りがある。乙は所々に疵がある。けれども質は玲瓏透徹

×賠償　人に毒を盛つて其賠償だと云つて御馳走を食べさせる、いくら御馳走を食べさせたつて毒は消えるものではない。毒を盛つたのが惡いと知つたら何故解毒劑を與へない、若し解毒劑がないと知りながら毒を盛るならば自己の罪は相手に與へた結果に於て永劫拭ふ事は出來ないのである。たとひ解毒劑があるにしても毒を盛つた行爲に永劫に亡びるものではない。況んや御馳走を食はして置いてどうだ毒は消えたらう／＼といふ横風な顔をするをや。

×あなたは子供の出來た事を聞いた時非常にいやな顔をしました。夫から生れたあとは子供を可愛がつてゐます。私は違ひます。

其筈だよ。御前は子供の生れない先から子供の脈を感じてゐる

×道義的正當と利害的正當

×金錢授受の場合。淨財喜捨、打算的ならぬ場合、翌日からくれ手に反對してもよき場合

×コンミツシヨンを云々ス。不公平の念より出る嫉妬心なり

×皮肉り了せれば夫がとゞの詰りと思ふ。豈計らんや人間の性にはもつとまとものものあり

○金力。權力、腕力、個性力。

○二ツの異なる世界、一點の交渉。觀察點の相異。爭の源因。個人主義の必要

○

1増刷の件　2雜誌注文の件。　3スタンダードの件

嚴冬高節古
盛夏綠陰新

綠陰迎客去
味影送僧來

紅爐焰上雪華飛
一點清涼除熱惱

衝開碧落松千尺
截斷紅塵水一谿

日記

○十九日　朝東京驛發、好晴、八時發。梅花的皪。岐阜邊より雨になる。展望車に外國人男二人、女五人許。七時三十分京都着、雨、津田君雨傘を小脇に抱えて二等列車の邊を物色す。車にて木屋町着、（北大嘉）、下の離れで藝妓と男客。寒甚し。入湯、日本服、十時晩餐。就褥、夢昏沌冥濛。

○二十日　朝靜甚し。硝子戸の幕をひく。
東山吹きさらされて、風料峭、比叡に雪斑々。忽ち粉雪、忽ち細雨、忽ち天日。
一草亭君來、同畫十五六幅を示さる。鷄、雀に蘆、雀、馬蓼、雀に蘆、椿、皆美事なり。
此朝、臥牀中一號二號三號の戀を聞く。津田君から。「先生の顏は赤黑い」「あなただつて同じだ」「そんな事はない」「夫でも若い時は綺麗でしたか」「えゝ今よりは」「いゝえ他の人に比べて綺麗でしたか」「えゝ」「ぢや女に惚れられましたか」「えゝ少くとも今茲に三つあります」云々
三人で大石忌へ行く。小紋に三ツ巴の仲居。赤前垂。「此方へ」「あちらから」と鄭寧に案内する。舞があるから見る。すぐ御仕舞になる。床に蕎麥が上げてある。薄茶の席へ通る。美くしい舞子と藝者が入れ交り立ちかはり茶を出す、見惚れてゐる。佛壇に四十七士の人形が飾つてある。菜飯に田樂が供へある。腰懸をならべた所で、蕎麥の供養がある。紺に白い巴を染め拔いた幕。
三年坂の阿古屋茶屋へ入る。あんころ一つ。薄茶一碗、香一つ。木魚は呼鈴の代り。座敷北向、北の側、山家の如し、絶壁。（祇園から建仁寺の裏門を見てすぐ左へ上る。）　淸水の山傳　子安の塔の邊から又下

る。小松谷の大丸の別荘を見る。是も北に谷、其又前に山を控へて寒い。亭々曲折して斷の如く續の如く、奇なり。石、錦木を植ゑたり。小樓に上る。吳春蕪村の畫中の人、腹いたし。電車にて歸る。晩食に御多佳さんを呼んで四人で十一時迄話す。

二十一日　八時起る。下女に一體何時に起ると聞けば大抵八時半か九時だといふ。夜はと聞けば二時頃と答ふ。驚くべし。東山霞んで見えず、春氣曖靆、河原に合羽を干す。西川氏より電話可成早くとの注文。二人で出掛ける。去風洞といふ門札をくゞる。奥まりたる小路の行き當り、左に玄關。沓脫。水打ちて庭樹幽邃、寒き事夥し、床に方祝の六歌仙の下繪らしきもの。花屛風。壁に去風洞の記をかく。默雷の華藏世界。一草亭中人。御公卿樣の手習机。茶席へ案内　敷（原）奇屋草履。石を踏んで咫尺のうちに路を間違へる。再び本道に就けばすぐ茶亭の前に行きつまる。どこから這入るのかと聞く。戸をあけて入る。方三尺ばかり。ニジリ上り。更紗の布團の上にあぐらをかき壁による。つきあけ窓。それを明けると松見える。床に守信の梅、「梅の香の匂や水屋のうち迄も」といふ月並の俳句の贊あり。

料理　鯉の名物松淸。鯉こく、鯉のあめ煮。鯛の刺身、鯛のうま煮。海老の汁。茶事をならはず勝手に食く（原）。箸の置き方、それを膳の中に落す音を聞いて主人が膳を引きにくるのだといふ話を聞く。最初に飯一膳、それから酒といふ順序。

午後二時より京坂（原）電車墨染より竹藪梅の花を大龜谷、兵隊かけ足で二三度四列位のもの行き過ぎる。太閤の千疊敷の跡、佛國寺、桃陽園、左右の梅花、の中に道白く見ゆ。上は平ら。家十戶。夜、買つて來た鑵詰、鷄、ハム、パン、チヨコレート。エルモツトをのむ、ユバト豆腐、萱草の芽のひたしもの。にて飯を食ふ。細君曰く大抵のものは食へます。ゲンゲ、タンポヽ、其他、夜炬燵を入れて寐る。自分の今の考、

無我になるべき覺悟を話す。

二十二日　井戸に行つて顔を洗ふ。宇治川と巨椋池、を眼前に見る。佛國寺へ行く。高泉の開山、聯には支那沙門高泉拜題とあり、普光明殿には曇華の落欵あり、山門石段なし、横門丈殘る。昨日買つて來たパンで食事、玉子、紅茶、ハム、桃花[原]園主にあふ。其計畫を聽く。

鳥鳴く。何ぞと聞けばチンチラデンキ皿持てこ汁のましよ。

十時半山を下る、梅、竹藪、赤土、六地藏、鐘樓赤、釣鐘青。そこを拔けて、六地藏から電車一區宇治に行く。黃檗にて下車久し振で赤塗[?]の山門と青い額と石段と松の樣子を見る。彼岸中日で施餓鬼を執行門前の普茶料理で晝食、腥物のなき支那料理。品數多くして食ひ切れず。雨降り出す。小僧傘を二本出す。貸すのかと訊けば停車場迄送るといふ。宇治迄行つて歸りに黃檗の停車場へ置いて行く約束にて出る。雨を冒して宇治に向ふ。徒歩にて。途中難義[原]なり。宇治橋につく。鳳凰堂より土堤へ出て河を横切る。輿聖寺の奥の溫泉へ行つて此所は何だときくと料理屋だといふ。溫泉はときくとあるといふ。崖道傳ひに亭の下から傳つて行くと溫泉と書いた戸あり、錢湯の如し、服を脫ぎ湯につかる。雨歇む。から傘を肩にして出づ。

電車。雨中木屋町に歸る。淋しいから御多佳さんに遊びに來てくれと電話で賴む。飯を食はす爲に自分で料理の品を擇んであつらへる。鴨のロース、鯛の子、生[原]瓜花かつを、海老の汁、鯛のさしみ。御多佳さん河村の菓子をくれる。加賀の依賴。一草亭來

二十三日　朝靑楓來。一草亭來。今日はある人の別莊を見る計畫なり。一草亭曰くある別莊の主人は起

きるすぐ店へ出、夕方家へ歸る、別莊を見る餘暇なし、細君にすゝめられて雪の降る日など一寸ひる位迄は我慢して家に居れど東京から手紙が來てゐるかも知れないと云つて出掛る。とう／＼折角の別莊を見ずに死んでしまつた。他の一人は他からかういふ家に起臥して嘸よからうと云はれて、どう致して此所にゐて人にでもつらまつた日には尻を落付けられて甚だ迷惑するから出來る丈早く店へ出るといつた。腹工合あしく且天氣あしゝ。天氣晴るれど腹工合なほらず。遂に唐紙をかつた[原]三人で勝手なものをかいてくらす、夕方大阪の社員に襲はる。入湯。晩食。御梅さんとしばらく話す。

二十四日　寒、暖なれば北野の梅を見に行かうと御多佳さんがいふから電話をかける。御多佳さんは遠方へ行つて今晩でなければ歸らないから夕方懸けてくれといふ夕方懸けたつて仕方がない。車を雇つて博物館に行く。寫眞版を買ふ。伏見の稻荷迄行つて引き返す。四條通りの洋食屋へ連れて行くまづい。四條京極をぶら／＼あるく。腹工合あしゝ。歸つて青楓に奈良行の催促をする。晩に氣分あしき故明日出立と決心す。

二十五日　寐臺[原]車を聞き合せる。六號。胃いたむ。寒。縁側の蒲の上に坐[原]布團をしき車の前掛をかけて寐る。其前青楓來。奈良行の旅費を受持つから同行を勘辨してくれとたのむ。一草亭から、蘆に雀の畫(御多佳さんの持つていつたの)をもらふ。御多佳さんがくる。出立をのばせといふ。醫者を呼んで見てもらへといふ。寢臺を斷つて病人となつて寐る。晩に御君さんと金之助がくる。多佳さんと青楓君と四人で話してゐるうちに腹工合少々よくなる。十一時頃淺木さんくる。二三日靜養の必要をとく。金之助の便祕の話し。卯の年の話し。先生は七赤の卯だといふ。姉危篤の電報來る。歸れば此方が危篤になるばかり

だから仕方がないとあきらめる。
幽靈が出る話、先生生きてゝ御呉れやす

二十六日　終日無言、平臥、不飲不食、午後に至り胃の工合少々よくなる。醫者くる。

二十七日
夕方から御君さんと金之助と御多佳さんがくる。三人共飯を食ふ、牛乳を飲んで見てゐる。御多佳さん早く歸る。あとの二人は一時過迄話してゐる。金之助が小供を生んだ話をする。御君さんは金神さまの信心家自分ハないといふ。

二十八日
昨夜三〔人〕が置いて行つた畫帖や短冊に滅茶苦茶をかいては消す。一草亭より蕉雨の書畫帖をかしてくれる。一草亭は西園寺さんより小燕といふ小鳥をもらふ。牡丹と藤、百合、を小僧に持つてこさせる。
醫者來、人工カルヽスをくれる。

二十九日
又畫帖をかく、午後御多佳さんがくる。晩食後合作をやる。

【以下四月八日まで缺く】

九日

師走の廿日あまりある人のもとにて大祇[原]とともにはいかいして四更はて?に歸りぬ雨風はけしく夜いたうくらかりければ裾三のづまでかゝげつゝからうじて室町を南に只走りに走りけるに風どゝ吹落て小とぼしの火はたとけぬ夜いとゞくらく雨しきりにおどろおどろしくいかゞはすべきなどなきまどひて

蕪村云

かゝる時には馬てうちんといふものこそよけれかねて心得有べき事なり

大祇[原]云

何馬鹿な事云な世の中の事は馬てうちんが能やら何がよいやら一つも知れない

大[原]祇がはいかいの妙すべて理窟にわたらざる事此語の如しかの吉田法師が白うなりといへるものあらばといへるに伯仲すべし

夜半寫

春雨やものかたり行く簑と笠

若竹やはしもとの遊女ありやなしや

○御多佳さんの一中節

大長寺と與次兵衛*

河東節の熊野

宇治文庫　宇治紫文齋

*シテあづまうけ出せ山崎與次兵衛　ツレうけ出せ／＼山崎與次兵衛　合いつかおもひの　□下紐とけて　合昔思へばうやつらや忍昔も　ドうやつらや　本こうしシテイロ詞「情なや誰あらふ「山崎與次兵衛下様とては人におくれを亂髪の　△あつまがかほも

ワキ「アレあれをみや蟲さへも　シテつがひはなれぬあげ羽の蝶　ツレ「われ／＼とてもふたりづれするなどふしの　シテ中々に春にもそだち　ワキ花さそふ　シテ菜種は蝶の　ワキ花しらず　シテ蝶は菜種の　ワキあぢしらず　シテしらず　ワキしられぬ　シテ中ならば　ワキうかれまいもの　シテさりとては　ワキくるふまいもの　シテあぢきなや

斷片

——大正四年一月頃より十一月頃まで——

一

「硝子戸の中より」

(1) 卯年
(2) 猫
(3) 犬
(4) 或女の告白
(5) チヤブドウ
(6) 書いたものを見てくれと云つた女ニ告げたこと
(7) 戰爭と病氣
(8) 癩病者曰クそれは人間ニいふ事でせう
(9) 福井利吉郎
(10) 講演　十圓切符　十圓ノ禮ニ就て
(11) 實際問題ノ應用
(12) 藪錦山、岩崎太郎次
(13) 燒褌、〔一字不明〕
(14) 生と死

(15) 武者小路ノ送書籍

(16) 書ノカキ始メ、湯淺、今ハ不愉快ヲ逃レルため、
寺田との議論　(1) positive artistic impulse
(2) 反響

(17) 星ノ音

(18) Carlisle read Jane Austen
During Transvaal general Smuts (スマッツ) read Kant's Critique of Pure Reason.
Marcus Aurelius, Julius Cæsar, Julian the Apostate

(19) German publisher

(20) 電話始末書

(21) 電氣燈が消える筈がないと理論上主張しても消える事實は消滅しない、

(22) 楠緒子　妾ヲ撃退ス

(23) 獨乙ノ本屋　几帳面

(24) 芥舟

九寸五分
盆さん、
楠緒さん

靴ヲ貸セ
元日
岩波ノ机
南畝莠言
回復力　繼續力
花賣
倉吉
下女ノ密告
○鼠
22 the rich and the poor
23 Georg Brandes
24 take some works of art and philosophy, with the value set upon them by the nation in which
they are produced.　Gosse,　Saintsbury　famous reviews
25 陽氣ノ加減で氣が變ニナツタ
26 人ノ草稿ヲ讀ムヿ、卒業論文ノ話、
27 維新ノ際ニ生レタラバ
28 自分ノ書いたものを見て呉れと云つた人ニ話せし事。　社交ニアラズ、自己ノ弱點ヲサラケ出サズニ人
カラ利益ハ受ケラレナイ、自己ノ弱點ヲサラケ出サズニ人ニ利益ハ與ヘラレナイ
多クノ人ニ接シナケレバ人間ハ分ラナイ、多クノ人ニ接スルト人間ガスレル、墮落シナイデ多クノ人ヲ

知リ、知ツタ知識ヲ自己ノ特色ニ取リ入れる
29 Entropy. 力學ノ行キヅマリ、
30 大塚夫人の事、妾撃退
31 自己は人の理解し得ザル美點を承知シテゐる。人は自己の理解し得ザル缺點ヲ知ツテゐる。

二

水明莊　（牡[原]詩殘夜水明樓）
泠泠莊　（ハ泠々脩竹待王歸）
竹外莊　竹外風煙開秀色　文衡山
寂淹莊
虛白山莊　虛室生白　虛白高人靜
三川莊
曠然莊　曠然蕩心目
如一山莊　雲水空如一
澄懷山莊　凝神著書澄懷觀道
從生山莊　功名多向容中立禍患常從巧處生
回觀莊　靜中見得天機妙閑裡回觀世路難
澄明莊　澄明遠水生光重疊暮山聳翠

半眞山莊　　心事半眞半僞世故半濃半淡
空碧莊　　草堂春綠竹溪空碧

三

○書物を送ると其返事。
×善良なる人、利口な人、同じ結果、返事をすぐよこす。
×多忙の人、無頓着の人、無禮な人、病氣其他の事故ある人、返事をよこさず
○自覺なきものは度し易し、自覺あるものは度しがたし。
×癖などは氣を付けてやればすぐさうかと肯ふ。
×自分が自覺して善もしくは美と信じたる事は到底人の勸告に應じて其否を肯はず
×だから人を啓發するといふ事は、先方で一歩足を此方の領分へ踏み込んだ時に手を出して援ける時に限る。
○大我は無我と一ナリ故に自力は他力と通ず
○藝術的衝動と好意は必ずしも一致せず。好意あれども藝術的衝動なき場合はいかに好意に滿ちたりとていゝものを書いたり畫いたりする事能はず
○猫が庭の木立の下に寐てゐる。椅子に腰をかけた私を見てゐる。姿勢は落付拂つてゐる。然し呼吸がはげしい。自分に似てゐる
○猫が時〻雀をとる事を思ふと猫を飼ふのがいやになる

○御多佳へ手紙、　アートと人格、人格の感化とは惡人が善人に降參する事

○露西亞の音樂(原)はビアンスキと綴つてスラヰアンスキーと讀むのか。冠り(原)、赤と調(原)、薄青の調、靴サラサ模樣

○早稻田ノベースボール
○純一と伸六　緣の下へ寐る
○宿雨晴れ染めつけたやうな
○寶寺

○森がきて早稻田の野球試合に誘ひ出す。戸塚のグラウンドを望むと人の雲が一ぱいに層をなして廣い原を取り圍んでゐる。遠い屋根の上にも豆の樣な人の顏が見える。それが日光に照らされた瓦の上に立つた儘少しも動かない。高い所に赤毛布に竿をつけたものが風になびいてゐる。其毛布は古いもので所々に穴のあいてゐるのが遠くから能く見える。それから黑い筋が二本入つてゐるのも明らさまに毛布だと名乘つてゐるやうで多少無雜作な面白味を與へた。

場内は人で埋つてゐるので何所が入り口か丸で分らない。たとひ解つても這入れさうにない。森は自分の繩張うちへ這入るといふ氣があるので人と人の間を裂き割るやうにして這入つてしまつた。自分は出る事も引く事も出來なかつた。

一高はサードベースの側を一杯占領してゐた。其數は千人位もあらう。皆白い旗を持つてそれを一度に動かす眼がちら〳〵する。自分の頭の上に居る男が比較的大きな旗を持つてゐてそれを夢中で振ると旗の

端がぴたり／＼と自分の頭や頰にあたる。一齊にたつて怒鳴ると砂ほこりが立つ。衣服其他が黄色いこなぶれになる。

第一ベースの方の赤旗は是亦より綺麗にちら／＼した。赤い着物に袴をつけた人が號令をかけた。自分達のゐる北側の赤連の號令者は青坊主であつた。

十對五で一高が負けた時白軍は急に大風のあとのやうに靜まつた。千人の人が一人も口を聞かなかつた。默々として密集した隊伍が細い道をつゞいた。自分の前には太鼓をかついだ男が二人で歩いて行つた。力がぬけて元氣がなささうに見えた。森が「撰手が泣いてゐる」と云つた。私はどこだらうと思つて見たが多人數に遮ぎられて見えなかつた。

行列が一時とまつた。「撰手が歩けないのです」と森が又自分に告げた。早稻田大學の北門を入つて講堂の前へ出ると一高の生徒がみんな地面の上へあぐらをかいて休息してゐる。肅然として一語を發するものがなかつた。

○伸六が八十五錢〔の〕喇叭を買へと云ふのを排斥されたので怒つて緣の下へ這入つてしまつた。どうしても出て來ない。あい子が海苔卷を緣の下へ出すと、怒つてゐる伸六も食ひたいと見えて、パクリと食ふのださうである。其代り口は決して利かない。

純一が怒つた時は裸で緣の下へ寐てゐて是亦どうしても出て來ない。さうして人が近寄ると泥をつかんでは抛げる

○寶寺で鬱金木綿の財布をもらつて、手のひらを才槌で打つてもらつてその手の平を握つた儘門の處へ來る、後ろを振り返つちやいけない

○痔の療治

○鹽原

○江戸川終點の昔の光景

○生よりも死、然し是では生を厭ふといふ意味があるから、生死を一貫しなくてはならない、(もしくは超越)、すると現象卽實在、相對卽絶對でなくては不可になる。「それは理窟でさうなる順序だと考へる丈なのでせう」「さうかも知れない」「考へてそこへ到れるのですか」「たゞ行きたいと思ふのです」

○御松、倉吉、

○煽風器の風は紐の中から出る

○寺田の鮨の食方

○心中のあとの夏蜜柑とビールの空罎

○仲六曰く御父さま犬は仁參たべる？

○獄中で鳩を飼ふ話

○技巧の變化、(右、左、縱、横、筋違、) さうしていづれも不成功の時、どうしたら成功するだらう？といふ質問を出して又次の技巧を考へる。さうして技巧は如何なる技巧でも駄目だといふ事には氣がつかず。人間の萬事はこと〴〵く技巧で解決のつくものと考へる。さうして凡ての技巧のうちどれかゞ中るだらうと思ふ。彼等が誠に歸るのは何時の日であらう。彼等は技巧で生活してゐる。恰も水の中に生活してゐる魚が空氣といふ觀念がない癖にどうしたら地上を歩く事が出來るかと工夫するやうなものである。

○××の結婚。××の死亡。××の死亡

○aが依頼するからbが芝居へつれて行つて遣る。又は御召の着物を買つてやる。又は畫をかいてやる、書をかいてやる。

(1)bはaに滿足を與へるためと思つてゐる。

(2)aは反對にbが自分の虚榮心を滿足させるための發現と思ふ

(3)それでbの力量以上のものが世間には色々あるといふ事をわざとらしい方法でbに示して其鼻を挫かうとする。bはaに對して厭な心持を起す

(4)此場合bはaの幸福を目的として働らいてゐる、aは又bの弱點を中心としてbに働らき返してゐる。矛盾は其處から出る。

○人の名聲がなくなるといふ本當の意味は其人の行動なり作物なり言論なりが死んでしまふといふ意味である。夫等が死んでしまふといふ意味は夫等に接觸する凡ての人に何の働らきも起さないといふ意味である。つまり夫等は其儘存在してゐても夫等の働らきが死ぬといふ事である。もし此働らきが死ぬ以上は拱手して坐つてゐても其人の名聲は死んでしまふのである。

然し其働らきが殘つてゐる以上、又其働らきが强烈である以上、いくら外部から政略的に其人の名聲を亡ぼさうと思つても駄目である。

其理由

(1)暴力以外に其人の言論なり作物なりを封鎖して接觸の途を絶つ譯に行かない。

(2)惡聲丈ではそれ丈の力が出てくる筈がない。默殺でも同じ事である。(積極消極の區別がある丈で)

(3)惡聲と默殺は心的狀態を變化するけれども、たゞ評番(原)といふ丈だから、其人の實際の言論なり作物なりに比べると働らきが間接である。從つてより多く器械的である。いくら太陽は冷たいと云ひふらしても、實際太陽の光に浴する刹那に反對の結論を自知するやうなものである。

(4)だから力のあるものを亡ぼすためには當人の惡口をいつたり冷罵したり其他凡て當人を傷けるやうな策をめぐらすのは近途のやうで却つて迂遠なのである。策略として最も効力あるのは、(本人は其儘にして置いて)本人から動かされる一般の人々の方に働らきかけるにある。しかも器械的に威壓的にやるのは一時性の効力しかないのだから、もし働らくとすれば、心理的に働らかなければならない。卽ち其人々の心的狀態を自分達の都合のいゝやうに變化させるのである。其人の言論作物に對して淺交涉に濟まし返つてゐられるやうに人々の心を改造するのである。所がそれが策略丈で(相當の根據なく)出來る業だらうか?とても出來ない。換言すれば不自然は自然には勝てないのである。技巧は天に負けるのである。策略として最も効力あるものが到底實行できないものだとすると、つまり策略は役に立たないといふ事になる。自然に任せて置くがいゝといふ方針が最上だといふ事に歸着する。

○形式論理で人の口を塞ぐ事は出來るけれども人の心を服する事は出來ない。それでは無論理で人の心を服する事が出來るのか。そんな筈もない。論理は實質から湧き出すから生きてくるのである　ころ柿が甘ひ(原)白砂糖を內部から吹き出すやうなものである。形式的な論理は人形に正宗の刀を持たせたと一般で、實質の推移から出る——否推移其物をあとづけると鮮やかに讀まれる自然の論理は名人が名刀を持つたと同じ事で決して離れ〳〵にはならないのである。

○「Temptation ヲ resist スルト云ふ以上は對象が本當の誘惑でなくてはならない筈だ。僞りの誘惑卽ち見せかけ丈は誘惑の相を具したものを斥けたといつて、其人は誘惑に打ち勝つたのでも何でもない。其人はたゞ相手の技巧に打ち勝つたのである。たゞ手に乘らなかつたといふ丈である。從つて誘惑を斥けるといふ事が德義上堅固な所を發揮する美德としても、此人は此場合毫も賞するに足らないのである。夫から相手はもと〳〵策略でやつたのだから、どうしたつて不正欺瞞の誹を免かれないのである。

　技巧を弄して人を釣らうとして吾人が釣られるか釣られないか試驗して見やうとして人がそれに釣られなかつたから、あなたは感心だ試驗に及第しましたと云つたら、賞められた人はいや私はあなたの技巧が嫌だつたので、技巧が表はさうとしてゐるもの愛なり金なりが嫌なのではありませんと答へる丈である。夫から「あなたは感心だ堅固だと云つて私を賞めて下さるけれど、私を賞めさへすれば私が嬉しがるとでも思つてゐるのですか、馬鹿々々しい。よし私が嬉しがるとした所で、あなたは夫で平氣でゐられるのですか、あなたが私に働らきかけた技巧卽ち虛僞は私の人格を侮辱したものではありませんか。其罪は（私に對する）どうする積なのですか。まさか私を賞めたからと云つて其罪が消滅するものでもありますまい。私はあなたから下さる讃辭を謹んで御返却申します。それからあなたの人格を輕蔑する事を公言致します」と答へる丈である。

○心機一轉。　外部の刺戟による。又内部の膠着力による。

○一度絕對の境地に達して、又相對に首を出したものは容易に心機一轉が出來る

○屢絕對の境地に達するものは屢心機一轉する事を得

○自由に絕對の境地に入るものは自由に心機の一轉を得

○ general case ハ人事上殆んど應用きかず。人事は particular case ノミ。其 particular case ヲ知るものは本人のみ。

小說は此特殊な場合を一般的場合に引き直して見せるもの（ある解釋）。特殊故に刺戟あり、一般故に首肯せらる。（みんなに訴へる事が出來る）

○うら盆、眞こもの敷物の上に供物、蓮の葉の中に芋、枝豆、サ、ギ、一方の蓮の葉の中には鬼灯、青葡萄、瓜、桃　茶椀の上にみそ萩

○伸六（八）　インキ〔ン〕ダムシの事を南京魂といふ。
○あい子（十一）怒つて曰く御立腹だから面會は出來ないよ
○少しくコウケンしてしまつたといふ言葉を使ふ。少し厭になつたといふ事なり
○ガブチクだよといふ言葉を使ふ。もう返さないといふ事なり

四

カ絣、の例。
×極力細カクスルト勞力多き故價値高し。然細かさの適度以上になる。故にそれを着るものは趣味ハドウデモ金を見てくれといふ事になる。

×若し金を見る事を知らぬものがそんな細かな絣の着物（高き）と適當の絣の着物（安き）を見て後者を擇ブナラバ、其人は趣味丈に忠實と云はなければならない

×何にも知らない門外漢が黑人に勝るのは此所にある。小兒が大人に勝るの〔は〕此所にある。

× unsophisticated ダカラ。pure ダカラ。無邪氣ダカラ。

×此問題には道德をも含む。競爭シテたゞ勝たう〳〵の念が趣味性を害しても絣を細かくするのだから、ツマリ控目を知ラナイトいふ事ニナル。虛榮トいふ事になる

×同時に能力の可能性を發揮するといふ事ニナル。intellectual 及ビ practical ニ行ける所迄行くといふ事になる

×同時に行き詰れば何方カヘ方向轉換をしなければならないといふ事になる。さうして通路を開くといふ事になる。變化といふ事になる。意志（心理的にいふと）の疎通といふ事になる。堀りつくした鑛山見たやうなものでもうどうする事も出來ないのである。だからあまり盛になると衰へるのである。盛になりかたが惡いからである。

五

〔「道草」〕

兄　長太郎
健三
住　遠山
妹（高橋）芝　要さん

寒木犀、
琉球ツ、ジ
霧島、五月、
トケラ（ヒヨドリ）
ユウカリ（白き葉）
梅擅（ハゼの様ナ實）

子供、井戸側、丸木橋　千圓やル。髪結床　アイツ。
西洋人釣に行　小便

湯河原の川　藤木川
合して千歳川　向側ハ伊豆

七

The Portrait of Caterina Cornaro by Giorgione (finished by Titian)
Providence dealt capriciously with Caterina Cornaro in that, when the great age of Venetian

portraiture began, her beauty had already become a legend. It was by the sight of her portrait that her uncle is said to have first caused the Lusignan to entertain the idea of the match, and at the time of her betrothal the Senate, according to her biographer Colbertaldo, in the dearth, apparently, of native masters, commissioned a certain Dario of Treviso to paint her portrait as a gift to her future husband, who, in acknowledging it, said that he had never seen so beautiful a maiden. A Cypriote chronicler tells how, when she landed in her kingdom, the people proclaimed the return of Venus to her native Cyprus.

(一)文展の繪、effort、小笠原流、美術院、假裝行列、
○己を空うして nature ヲ受ケ入れる
（極ハ寫眞。其寫眞と此種ノ繪ノ區別）
○己レノ寫眞ヲ nature ノ上ニ燒きつける。
例　文人畫
Symbolism　獨乙ノ畫ノ項參照
(二)小說、ノ尤モ有義ナル役目ノ一ツトテ、
particular case ヲ general case ニ reduce スルコ
× general case ヲ general case トシテハ陳腐
× particular case ヲ particular case トシテハ奇怪、

×新らしき刺撃アリテ然モ一般ニ appeal スル爲ニ第一ノ如クスル必要アリ、

×吾人ハ effect ノ爲ニ然スルノミナラズ、人道ノ爲ニ然セザル可ラズ

(三)古キ道德ヲ破壞スルハ新シキ道德ヲ建立スル時ニノミ許サレベキモノナリ。

(四)批評家、胸中ニ一ツノ固マリアルベカラズ。有ユル塊原マリナカルベカラズ。他ノ尺度ヲ以テ他ヲ評セ原ザルベカラズ、 versatile. 賊馬ニ騎シテ賊ヲ逐フ、

(5)徹底ノ意、sbsolute freedom アリや、妥協ナリ。徹底トハ omniscient ノ上ニナル妥協ナリ、

(6)あらくれの評

(7)人ハ自分に相談シテ言動セズ。故ニ氣ニ入ラヌ者ナリ。若シ之ヲ忌マバ自己ノ標準ト他トヲ一致セシメザルベカラズ　或程度迄出來る。(感化的形式的ニ)　然シ他ノ立場ヲ考ヘナイ場合若クハ考ヘテモ理解デキナイ場合ハ全知ノ特權ヲ有ツテ居原ナイ場合トテモ取除ク譯ニ行カナイ

(8)生死ハ透脫スベキモノナリ回避スベキ者ニアラズ。毀譽モ其通リナリ。

( ) Nietzsch econsidered the Prussians dangerous to culture: he said that even the presence of a German retarded his digestion; he poured scorn upon Treitschke and disliked Bismarck in his later years; and above all he despised the notion of "Deutschland über Alles" and every kind of nationalism.……It seems to us beyond question that it will and does operate to deepen all contempt, to lessen every kind of sympathy for those less fortunate and to lead to the most useless frittering even of individual gifts. For the most highly gifted person needs more, not less, of the community sense, if he is to be of the service he might be; and that is the reason

for the superiority of Dostoievsky.

..... "Nothing is true, everything is allowed" is dangerous no less to the rare than it is to the common man.

○大塚ノ哲學ノ系統　　virgin　　prostitute

○竹篦

○技巧ハ己ヲ偽ル者ニアラズ、己ヲ飾ルモノニアラズ、人ヲ欺クモノニアラズ。己レヲ遺憾ナク人ニ示ス道具ナリ。人格即技巧ナリ

○皆川ノ手紙ニ silk hat ヲ樽ノ樣ナモノト書イテアツタリ

○奈良高師ノ德永曰ク友達ハ出來マセン。要リマセント。　余曰ク友達ハ絶對ニ要ラナイモノニアラズ。時ニヨリテ厄介ニナルナリ。重荷ヲ負フテ旅行スルガ如シ。脊負ツテ居ルウチハ厄介、宿ニ着ケバ役ニ立ツ

○藝術ノミ豈一元論ヲ許サンヤ、萬法歸一、

○或人ハ告白ガイヽト云フ、或人ハ告白ガ惡イトイフ。告白ガイヽノデモ惡イノデモ何デモナイ、人格ノアルモノガ告白ヲスレバ告白ガヨクナリ、シナケレバシナイ方ガヨクナルノデアル。美人ガ笑ヘバ笑フ方ガヨク泣ケバ泣ク方ガヨクナル樣ナモノデアル。惡女ハ何方ニシテモイケナイノデアル

○ゼエレン・キエルケゴオル。和辻哲郎

○動物をいくら研究しても動物にはなれない

○音樂會、猫や犬ヨリハ可からうと思つて行つた。

○ Dostoievski ト Maeterlinck

○戰爭（歐洲）　Kant カラ出タト云フ、　Hegel カラ出たといふ

○自分ノ作物ハ bastard ノ様ナ心持

○高等工業ノ演說、

mechanical, universal, abstract laws application

日記

——大正四年十一月九日より同十七日頃まで——

十日夜

○百目四十錢の火藥、丸が十二錢
　雉三百羽、雄五十錢

○農と獵半々

○鍛冶屋へ行く

○鴫が居るか。雉か兎

○何號で打つか。四號か五號です、六號でも打ちます

○春になると羽が強くなるから三號だがね

○犬はゐるか、走ります

○ちや駄目だ。待つてゐないだらふ。ついて歩けない

○犬は鐵砲の音を聞くとピシヤリト留る。鳥が落ちると留る。

○此所いらの犬は食はずに持つてくるのは好いうちです

○山鳥は犬が早くないと駄目だらう

○さうです。足の弱い人は輕便の下から上の方へ登つて行く。

○明日は行かれません、鹿狩に行きます。朝三時半に立ちます。先生と一所です。

○先生とは宗久といふ醫者。

○ボタ鳴はゐますが田鳴はゐません
○ヒヨはゐますが十二號ぢや勿體ない。三十號位ならイヽデス
○雉や鶉は待つ犬でなければ駄目。山鳥は走る犬でなければ駄目
○山鳥は（シキみ林などの）窪に居る。水のジクジクした所。山が枯れると能く分りますが、今は山がまだ青いから窪にもミヨにもゐますから。雉子も野が枯れないと分りません

○禪關策進と白隱。慈明引錐
今ノ學人ハ生理、心理、ヲ知ル。故ニ臆病ナル。此臆病ニナルベク餘儀ナクセラル、生理心理トモ科學ニシテ average men ノ所有の現象の統計ヨリ來ルニ過ギズ。故ニ exception ヲ許サヾル如クニ考ヘラル。生徒學生、之ヲ學ブモノ皆自己ヲ average men ト見做シ且ツ人ヲモ average men ト見做スノ癖アリ。故ニ引錐等ノ事ヲ見テ能ハズトナス。（激勵的ノ師範ナキモ其原因ナリ）、只天才ハ自己ヲ average men ト信ジナガラ生理心理ヲモ心得ナガラ之ニ背イタ行動ヲ餘儀ナクセラル、ナリ

十一日
不動の瀧。橋二つ渡る。左の下河と田、右山（稍開きたる）の間を行く。其先に一軒家の茶店あり。溪流に臨む。右に上る數間にして瀧二筋天邊より來る。割合に樹木なく瀧の上に山なし。草山の間より岩出で其割け目より水が長く落ちる。少し下の右側よりも落ちる。
御茶屋の御神さん。色白く眉濃く赤い模樣の襦袢を裾より下に一寸出してゐる。黑繻子の半襟をかける。どうして斯んな所に一人居られるかと思ふ。頓狂庵の妻君なる事分る。（日本橋ですといふ）

宿へ歸つて下女に聞くともと葭町の藝者だといふ。一寸驚ろかされる。頓狂庵に大分金を遣はした結果だといふ。翌十二日（宿の御神さんいふ。亭主は西洋小間物商の所御店が破産して此所へ來た所、あとから女も來たよし。（亭主はわた樽屋の息子なり）さうして藝者といふ名では出られないが師匠といふ名目で御客の座敷へ出たいといふ。ある日御客が來た時熱海へつれて行つて呉れと賴む。宿の御上さんと客夫婦と外に男もついて熱海へ行くと亭主が電話をかけてすぐ歸れといふ。夫から以後客にあれは亭主と一所でなければ座敷へ出ないといつてゐます云々）

十二日

夜來の雨で是公路がわるいので鐵砲打に行かないといふ。九時過伊豆山から熱海へ行かうと云ひ出す。馬車で出る。十時三十八分の輕便に間に合ひ過ぎて茶屋にやすむ。こまどりの話をしてゐる。上さん曰くした餌一、糖二、の割です。小飼だからよく馴れてゐます。此邊にある季節になるとこま鳥が里近く出て來ます。それを捕るのです

伊豆山の相模屋へ行く崖道を一丁半も下る。前はすぐ海なり。千人風呂へ入る書生さんが四五人で泳いだりもぐつたり色々してゐる。

露西亞人ノ 50 年輩ノ人ニ對スル考

He (Afanasy Ivanovitch Totsky) was a man of five-and-fifty, of artistic temperament and extraordinary refinement. (The youngest ハトテモ駄目)

The general with his knowledge of life attached the greatest value to Totsky's proposal from

the first. As owing to certain special circumstances, Totsky was obliged to be extremely circumspect in his behaviour, and was merely feeling his way, the parents only presented the question to their daughters as a remote proposition. They received in response a satisfactory, though not absolutely definite, assurance that the eldest, Alexandra, might perhaps not refuse him. She was a goodnatured and sensible girl, very easy to get on with, though she had a will of her own. It was conceivable that she was perfectly ready to marry Totsky; and if she gave her word, she would keep to it honourably.

"Idiot" ノ中ニ Prince Myshkin ガ general ノ妻君ト娘ニ話チスル中ニ Dostoievsky 自身ノ經歷ノ如キ者ヲ插話トシテ述ベタ條ニ曰ク：——

This man had once been led out with others to the scaffold and a sentence of death was read over him. He was to be shot for a political offence. Twenty moments later a reprieve was read to them, and they were condemned to another punishment instead. Yet the interval between those two sentences, twenty minutes or at least a quarter of an hour, he passed in the fullest conviction that he would die in a few minutes. I was always eager to listen when he recalled his sensations at that time, and I often questioned him about it. He remembered it all with extraordinary distinctness and used to say that he never would forget those minutes. Twenty paces from the scaffold, round which soldiers and other people were standing, there were three posts stuck in the ground, as there were several criminals. The three first were led up, bound to the posts, the death-dress (a long white gown) was put on, and white caps were pulled over their

eyes so that they should not see the guns; then a company of several soldiers was drawn up against each post. My friend was the eighth on the list, so he had to be one of the third set. The priest went to each in turn with a cross. He had only five minutes more to live. He told me that those five minutes seemed to him an infinite time, a vast wealth; he felt that he had so many lives left in those five minutes that there was no need yet to think of the last moment, so much so that he divided his time up. He set aside time to take leave of his comrades, two minutes for that; then he kept another two minutes to think for the last time; and then a minute to look about him for the last time. He remembered very well having divided his time like that. He was dying at twenty-seven, strong and healthy. As he took leave of his comrades, he remembered asking one of them a somewhat irrelevant question and being particularly interested in the answer. Then when he had said good-bye, the two minutes came that he had set apart for *thinking* to himself. He knew beforehand what he would think about. He wanted to realise as quickly and clearly as possible how it could be that now he existed and was living and in three minutes he would be *something* — some one or something. But what? Where? He meant to decide all that in those two minutes! Not far off there was a church, and the gilt roof was glittering in the bright sunshine. He remembered that he stared very persistently at that roof and the light flashing from it; he could not tear himself away from the light. It seemed to him that those rays were his new nature and that in three minutes he would somehow melt into them ······ The uncertainty and feeling of aversion for that new thing which would be and was just

coming was awful. But he said that nothing was so dreadful at that time as the continual thought, 'What if I were not to die! What if I could go back to life — what eternity! And it would all be mine! I would turn every minute into an age; I would lose nothing, I would count every minute as it passed, I would not waste one!' He said that this idea turned to such a fury at last that he longed to be shot quickly.

「九日」の事。御大典の前晩。外出。暗くて雨が降りさうな宵。宿のものが提灯を點けて跟いて行かうといふのを斷つて谷川を沿つて小半丁行つて谷川を離れて右へ折れるとすぐ又元の方角へ轉じて再び谷川を左へ渡らなければならない。其丁度鍵の手の樣に折れ曲つてゐる角の旅館の玄關に人立がしてゐる。門を入つて人の後ろから覗き込むと模樣のある着物を着た女の子が踊つてゐる。是は上り口の上での所作だから外からも見え〔る〕筈だが小さい兒なので頭に載せた手拭丈が見える。三味線と月琴を彈いてゐる男女は我々と同じ地面の上に立つてゐるので却つてよく分る。見えないからすぐ出る。

「高山彦九郎が何とかして故郷を伏し拜みつて唄つてゐ〔る〕から馬鹿だな。皇居を故郷と間違へてゐやがる。……」

「此酒屋の御上さんの妹は別品だから見ろ」

「此所に己の舊知己がゐるから一寸寄つて行かうかな。小鳥を飼ふ仲間だ」

狹い町はすぐ盡きて灯が段々少なくなる。村外れにある鎭守の森へ出る少し前から又橋を渡つて引き返す。

元の旅舘の前へ來ると先刻の踴子の連中が丁度仕舞つて門からぞろ〳〵出て行く月琴を抱へた女が黑紋付の羽織を着てゐる夜目には縮緬らしく見える、夫から小さい踴子は友染の着物に赤い帶を立矢の字に結んでゐる。最も奇異に感じたのは彼等の一人が提灯をぶら下げてゐる事である。彼等は其提灯で足元を照らしながら今出て來た旅舘の裏手にある橋（川向にある他の旅舘へ丈通ずる細い橋）を渡つて行つた。

〇十五日　昨日宿の婆さんから食逃の話を聞く。一人は來て飯をくふ所其量がどうも多過ぎた。やがて御上さん此所いらに烟草屋はありますまいかと聞く。あとで上さんが亭主に「御前さんあれは慥かに食逃だよ。あとをつけて御覽なさい。見付の松迄行つて歸らなかつたら其儘にして歸つて御出なさい」。一人は知りもしない癖に「旦那今日は」と威勢よく這入つて來た。上さん曰くありや錢なしだよ。二三日後亭主上さんに云はれて客の入浴中包をしらべる、果して何にもなし

御幸さんから泥棒の話を聞く。日本大學の制帽をかぶる男、菓子を買ふにも散歩するにも悉く大學帽をかぶる。隣の御客さんの話を襖へ耳をつけて聞く。同じ年輩の書生と懇意になる。一所に伊豆山へ行く。友達が二十圓持つて行くといふのをとめて五圓も持つて行けば澤山だといふ。友達はそれを欄間と鴨居の間にある横柱の裏にかくす。それをぬすぬ。[原] 宿料を催促すると色々辯解すれどもよこさず遂に追出す

〇やせ馬の話。脊中へやせ馬をつけて米俵を二俵背負つた女の話。上さんが男にヤセ馬で近所へつれて行かれた話

〇十六日

一の字峠、金堀瀧

木の名　ヅサ、カンバ、
長尾曾根。沼津三島と靜岡灣を見る。
鞍懸の眺望　八ヶ國の眺望（靑ページヂヲ見ヨ）
相模武藏安房上總下總信濃甲斐伊豆駿河遠江〔靑ページより揭出〕

十七日　朝富士屋を出て湯本へ行く途中車夫の語[原]、――
宮の下の天皇陛下も此春死にました。飛ぶ鳥を落すやうな勢でしたがね。何しろ偉い人で往來を歩くと小供でも何でも御辭儀をするので、「己は頸がかつたるいから」つて仕舞に手を擧ける丈で頭は動しませんでした。それで眞直を見てゐて横目なんぞは使はない癖に誰が何所を通るかちやんと知れるんだから偉いもんです。
何しろ西洋人の金でなくつちや取つたやうな氣がしません。駕籠を雇つて大地獄迄歩いて行つて少しも乘らずに、それで酒錢を呉れるんですからね。日本人は尻が痛くなつたつて中々下りやしません
奈良屋と富士屋の間には契約があつたんです。日本人は奈良屋で取る其代り西洋人は富士屋で貰ふつてね。それが何でも二三年前に滿期になつたんださうで、今ぢや兩方共日本人でも西洋人でも客にします。然し奈良屋へ西洋人は行きませんや。行つても午飯を食ひに富士屋へ來て見てすぐ移つちまひます。此方はコックが十五人もゐる所へ持つて來て、向は一人か二〔人〕しかゐないんですからね。

○湯河原で是公曰く
馬鹿囃は六づかしいものだぜ。今東京の藝者のうちであれが本當に出來るものは吉原の御貞だけだ。彼

はキャリと馬鹿囃とを混同してゐる。手古舞は御神樂の事と考へてゐるかも知れない

癲癇病ノ心狀 (The Idiot ノ中ヨリ)

He remembered among other things that he always had one minute just before the epileptic fit (if it came on while he was awake), when suddenly in the midst of sadness, spiritual darkness and oppression, there seemed at moments a flash of light in his brain, and with extraordinary impetus all his vital forces suddenly began working at their highest tension. The sense of life, the consciousness of self, were multiplied ten times at these moments which passed like a flash of lightning. His mind and his heart were flooded with extraordinary light; all his uneasiness, all his doubts, all his anxieties were relieved at once; they were all merged in a lofty calm, full of serene, harmonious joy and hope. But these moments, these flashes, were only the prelude of that final second (it was never more than a second) with which the fit began. That second was, of course, unendurable. Thinking of that moment later, when he was all right again, he often said to himself that all these gleams and flashes of the highest sensation of life and self-consciousness, and therefore also of the highest form of existence, were nothing but disease, the interruption of the normal condition; and if so, it was not at all the highest form of being, but on the contrary must be reckoned the lowest.

日記及斷片

——大正四年十二月頃より大正五年七月二十七日まで——

○ブランデス。テイン。主義標題ハ主義標題。個人作家の批評ハ批評。リンクを缺く。

○軍國主義論、軍國主義ハ方便、目的ニアラズ故に時勢遲れなり

獨乙の「力」の考と佛蘭西の「力」の考

○甲でもあり乙でもある。執着もあり執着なくもある。論理的でない。然し論理は果して事實か。謠曲を習ふ例。

○人から遠慮される樣な地位にあるものは啓發を受くる機會なし。體裁のいゝ事をいふものばかりを相手にして滿足してゐる。夫故此滿足を打破する者が出て來るときは、自然前者を同情者もしくは味方として見る。さうして後者の方が間違つてゐるのだと推定する。その方が自然だからである。もし前者が誠實な贊同者である場合には夫でもよろしけれど、虛僞の場合には此位地を有する人程氣の毒なものなし。

○箒庵の茶會記事。其道に入ると何事によらず天下他事なき有樣なり

○獨乙の繪（ハ思想ナリ）*

○トライチケ

○科學的一元說（テイン）トベルグソン

○象徵主義（グールモンの與へたる）ノ定義*

○老人雜話。佛蘭西ノ捕虜物語

○アナトールフランスの

○歐洲戰爭　宗教、社會主義、經濟、人道、皆國家主義に勝つ能はず

○田中君の話

酒。コンニヤクの上等が第一
　ブランデーは年數、香りと味
　葡萄酒も年數
　然し年數が同じならば vintage

杖。ピカーヂリーの傍セントジエームのブリッグス。籐（製セザル者）四百圓

食物。天麩羅、花長、魚河岸の屋臺見世を料理屋へ呼ぶ、
越後屋の菓子（八百善、常磐屋の注文）。池の端の鹽煎餅。黑砂糖の羊羹　槇町の太平堂。黑砂糖の飴、赤坂のチマキ屋（注文のみ）。
茶　ブラックチーとウーロンを交ぜる。キューブの砂糖の味。

毛皮。シルバーフォックス、總毛一萬圓、六千圓。ラッコの皮少しづゝ白い毛が生へたのを貴ブ。長さ一寸五分。襟皮七八百圓。帽子、三四百圓。自動車へ乘る連中の着るもの

衣服。門平を作る。羽織の長きは無用。袴腰改良。心ハ紙上に帶心を捲く。洋服の改良

湯河原

一月二十八日（行）より二月十六日（歸）

○宿の老上さんの話

△男ある素人の情人をつれてくる。同じく關係のある女（待合の女將）あとから來る。男風呂場で女將につかまつて出る事が出來ず湯氣にあがる。上さんに救はれて部屋に歸る。素人の女の方は泣いて東京へ歸るといふ。上さんなだめて戸棚の中へ布團を敷き火鉢を入れてかくす。さうして男と女將をたしなめる。もう騒動をしないといふ言質をとる。それから男一人に女二人同居す。男風呂に入る。二人とも遠慮してどつちも湯に追いて行かず。男コボシテ曰クリヨマチで手拭が絞れないのに二人とも一所に來てくれなくつちや仕様がない。

△男あり横濱の藝者と深い仲なり。單身湯治に來る。別口の新橋の好きな藝者を呼ぶ。すると其藝者の來る前に横濱の方が勝手に來てしまふ。呼ばれた方はあとから來て指を銜へて二人を遠方から見てる。

○小三さん婆さんの話。

私は十五のとき紀州熊野から親につれられて大阪へ出ましたがあした食ふものもないやうに零落してしまつたのです。父は千人前の法華寺の坊さんと懇意なので其所へ入ればどうかなると云ひますが母や妹の始末が出來ないのです。それで堀江の眞暗ないやな家へ五年百圓の約束で行く事になりました。所が其所の家では又私を讃岐の志度といふ所へ轉賣してしまつたのです。私は親の手へ百圓の金が渡つた事とのみ思つてゐますと、母が妹を脊中へおぶつて志度迄遣つて來ました。驚ろいて聽いて見ると其百

圓を一どきには呉れないでちびく\渡すので何うする事も出來ないのださうです。母が漸く國へ歸ると材木屋の旦那方が御米も可愛さうだからどうかして遣つたらよからうといふので百圓持たして迎ひに寄こして呉れました。それが十七の暮で（明治五年？）す。夫から宅へ歸つてから一人で東京へ出て來ました。「石の上にも三年」といふ言葉が私に刺戟を與へたのです。東京へ出て材木屋さんの關係から木場へ一寸落ち付きました。夫から葭町へ來て口をさがしましたが何處でも相手にしません。漸く一軒まあためしに置いて見やうといふのがありましたが其所へ這入つて見ると苦しいものでした。朝は下女と一所に起きて拭掃除をさせられます。御茶を挽くと御午御飯は燒芋より外にあてがはれないのです。燒芋は一錢分で六本しかありません。それに惡い男の子がゐて其燒芋を横取りしてしまふのです。惡くすると二本位で我慢しなければなりません。さうして夕御飯は御座敷へ出ても食べられません家へ歸つても食べられないのです。稽古は姉さんがして呉れますが、ひどい目に逢ひます三味線の撥で手の甲を打たれるので手が腫れてどうする事も出來なかつた事があります（北州を教つた時）。言葉が通じないので手水場に入つて言葉の稽古をしました。御座敷へ出て二十五座を遣れと云はれてそんな段物は知りませんと斷つて小便藝者と云はれた事があります二十五座といふのは段物でも何でもないのです

△「一人寐る夜は二人が淋し二人見る夢一人ごと」此文句の解釋が二通りあるんですよ云々

○豐田のばゞあ曰く昔は足を氣にしたものです。枋の木炭ばかり遣つて、親指の爪を深くとつて、それで素足へ齒のある下駄を穿くのです。

○眞鶴行

門川迄あるく。田舍道で荷を肩にした肴屋ニ會フ。「旦那方はどちらへ御出です。」「眞鶴ですか。な

にさう遠くはありません。あの無線電信の柱が見えるでせう。あの山の向ふ側になります。」（右の方に海に突き出てゐる岡を指して）
「好い所かへ」
「えゝ揚屋が十軒あります」
「外に何にもないかね」
「もう少し早いとブリ網が見られるでせう」（時に十一時頃）
門川の茶屋に小さん、豐田の婆さん、榮ちやんといふ女が待ち合せてゐた。茶店の女主人に「御上さん、鶯が眞鶴に預けてあると云つたつけね。今日是から眞鶴へ行くから序に見せて貰はうと思ふが平井屋にゐるのかい。」（眞鶴の宿屋）
「へえ平井屋で近藤の鶯と仰しやれば解ります」
榮ちやんが來て赤切符を渡してくれる。默つて受取つて、ぞろ〳〵輕便に乘る。（並等に）一杯なので手を出してつり皮をぶら下げる横に渡した棒につらまる。豐田の婆さんが下から仰いで見て腕が寒いでせうと云つてシヤツの端を引張る。生憎半そでなのでシヤツは少しも袖口の方に出て來ない。
吉濱でとまる。右はすぐ海、海の岸は石垣で築いてある。左手は小學校、前に廣場、それから山路へうねつて這入る。先刻右の山の上に見えた無線電信の柱が山に遮ぎられて見えなくなる。
一山超えた所で「輕便」を降りる。眞鶴へ行くのはすぐ右に折れて田舍道のやうな所を通つて行くのである。何所にも眞鶴らしい影も見えない。
「此樣子ぢや是から半道もあるんだらう」
此時吾々を足早に追ひ越して行つた男が急に振り返つた。

「そんなにありやしません。五丁です」
彼の言葉は鋭どかつた。
「眞鶴が遠いといつたつて、里程を間違たつて何もさう拳突を食はさなくつてもよささうなものだ」と田中君が驚いたやうにいふ。
右は雜木林で小高くなつてゐる。下は二三間の切岸で下は畠である。日影になつてゐる田舍路は霜どけでぐちや〳〵する。女連は弱らせられる。中村が豐田のばあさんの手提籃を持つてやる。田中が小さんに杖を貸してやる。キルクの草履を穿いてゐる榮ちやんは尤も手古摺つてゐる。
「跣足になれ」
「負ぶつてやれ」
「よござんすよ」
榮ちやんは斷乎としてゐる。
「早く先へ行つて宿屋から迎を寄こしてやるがいゝ」
男はどん〳〵歩いた。
道が忽ち盡きて坂になつた。それを曲つて叉下りると人家がちらほら見えた。叉曲ると今度は石段になつた。
「平井屋といふ宿屋は何所かね」
荒くれた漁師風の爺さん、
「ずつと云つて右側だ。前がトタンで後ろが藁葺だ」
平井屋の二階へ通る。

七面鳥が菜を食つてゐる。鷄が餌をつゝいてゐる。やがて向ふの垣根の處に白い兎が顔を出した。

「午餐を食ふが何が出來るかね」

「バショー烏賊にホウボーのやうなものです」

「ホーボーを酒と醬油で煮てくれ。それから烏賊の刺身をおれ丈食ふから持つて來い」

「へい」

「おいまだあるよ。先刻途中で見たら鰯が店先にあつたが、宅にもあるんだらう」

「へい御座います」

「あれを生の儘持つて來い。此所で燒いて食ふんだから」

飯の支度の出來る間濱へ出て見る。狹い道にはみんな石が敷いてある。それがみんな濱の方へ急な勾配が着いてゐる。さう〔して〕不規則に幾筋もある。それからそれを横に貫いてゐるのもある。悉く石丈で疊んである。路丈は何だか以太利邊の小さな漁村にでも來たやうな心持である。（家は無論比較しやうがないが）芝居の廣告のビラが路傍に貼つてある。「こんな所にも何々座といふものがあるのかね」

少し行くと右側に蕎麥と看板を懸けた生新らしい粗末な家の中で二三人の女の高い笑ひ聲がする。濱は三方陸で馬蹄がたに水が食ひ込んでゐる。靜かな小さん灣で僅か餘された一方の砂地に引き上げられた船が竝んでゐる。水面は强い色をしてゐたが鏡のやうに穩かであつた。右手の山の頂上に先刻の無線電信の柱が見える。

「あれは海軍のだらう」　先刻思ひがけなく狹い路で水兵に四五人擦れ違つた

宿へ歸つて飯を食ふ。中村はもう一人で鰯を大分燒いて骨を皿の上に竝べてゐる。小さんが「此鰯は生で食べるべきものだ。さうして骨も食はなくつちや本當でない」といつて、下女に丼に醋を一杯もらつ

て其中に鰯を浮かして、それをむしやく食ひ始めた。（彼女はそれがために其晩嘔いたり下したりしたさうである）

「是からブリ網を見に行くんだ。婆さん連も一所に行きなさい」

婆さん連は最後の輕便で東京へ歸る事になつてゐた。

「時間に間に合ふでせうか」

「間に合ふとも」

婆さん連は懸念しながらもブリ網が見に行きたいので一所になつて又濱へ出る。

莫蓙と座布團を持つて來た宿の下女も二人船に乘せる。我々は外套の襟を立てゝ陣どる。風はなく海は平かだが時節が時節だから寒い。右手に石山がある。

「あれは〇〇さんの持つてる所です」

「あの泥棒が持つてるんぢや碌な事はねえだらう」

「何でもあすこを石垣にしてやるといふ約束で此土地のものも承知して賣つたんですが、一向石垣なんかつきさうもないですね」

「あいつの事だから石を切り出して儲ける氣なんだらう」

山のはづれ迄船が來た。すると大きな海面に丸太を浮かしたやうな目標だか浮きだかゞずつと竝んで見える。それは規則正しく間隔を置いてある恰形に排列されてゐるにも拘はらず其恰形の何であるかは素人眼には一寸分らない。どこから何う始つて何處で終つてゐるか分らない。其丸太の上に鳥が澤山留つてゐる。灰色のやうな薄茶けたやうな色をしてゐる。

「何だね」

「鷗さ」

「はあ　何だか恰好が違ふがな」

「沖の鷗だから、海のと隈田川邊のとは違ふさ。」

其うち鳥は低く飛んだ。

「成程あゝして飛ぶ所を見てゐると如何にも鷗だ」

沖には船が澤山見える。

「凡てゞ十一艘居ます。あれで十四五人宛乘つてゐるんですから、惣勢は二百人近くです。大漁の時は七萬位ブリがかゝる〔の〕ですから、まあ十萬圓近くの金になるんです。一人が一晩に二十とか三十とかいふ金を懷に入れますがそれをみんな飲んぢまいます」

「それで揚屋が必要なんだね」

船はある間隔を置いて浮いてゐる例の丸太のやうなもの、一列に竝んでゐる傍を通り拔けて遙かに見えた漁船の一つについた。船には苫が片側に懸けてある其中から顏を出した漁夫が二三人吾々の船の女を見て何とか聲高に罵つた。宿の女は笑つてゐる。やがて船が苫の向側へつくと十四五人がごちや〳〵になつて固まつてゐたが起き返るもの立つもの、立つて又寐るもの、雜然として吾々の船を見てみな新たに活動し始めた。

「何時頃から網は引くんですかね」

「まあ四時頃からです」

時に三時半頃。答へたのは恰(原)腹の好い立派な男である。

「歌右衞門に似てゐるよあの人は。いゝ男だ事」と豐田の婆さんは感心してしきりに歌右衞門といふ言

葉を振り舞はす。此歌右衛門は四十代の立派な男である。「私が司令長官です」と云つた。五分刈の頭に後ろ鉢卷をしてゐた。

「網は日に大抵四囘位やります。漁業期は十二月から六月位迄です。小田原の鈴木の持網です。網の價は壹萬六七千圓位でせう」

向ふの船に櫓があつて其上に人が一人立つてゐる。

「あれは見張りですか」

「えゝ魚が寄つてくるとあすこで大きな聲を出してみんなに知らせるのです」

「知らせる迄は取り掛らないんですか」

「なに時間が來れば遣ります。疲れてみんなが寐ますからな。大きな聲を出して知らせる必要があります」

「さうして君が司令長官だとすると、みんな此所へ寄つて來る譯かね」

「いえ手前は司令長官ですが元船はあすこにゐます」

大きな網は元船へ手繰り寄せられるのである。

「あすこへ行つて乘せて貰ひませう」

船頭は船を元船へ着けた。

「うちの御客さんだ少し乘せて見せて御呉れよ」

我々は苫の陰に一團となつて這入つた。氣持がよくないので默つてゐた。眼をねむつてゐた。動く船と波を見ると氣持が惡くなる。

爐が切つ［て］あつてそこへ誰かが榾[原]を横縱に十本ばかり渡した榾[原]は燃える前に燻ぶつた。けむい烟が

我々の眼や口を襲つて來た。やがて巧みに竝べられた槇[原]は赤い焔を吐き出した。へさきに近い所にヘッツイがあつて一抱えもある釜が掛つてゐた。其前に黒焦に焦げてぴか〳〵した鰯が串に刺した儘一本立てゝあつた。呪符か食ふものか解らなかつた。

みんな飯を食ひ出した。

やがて網引は始まつた。元船から見てゐると其[原]〔を〕扇の要として末廣に十一二艘の船が丸るく何時の間にか陣を張つてゐた。やがて素裸になつた漁子が舷に胸をあてがつて手を水際から揚げたり下げたりし始めた。一艘に十人と見て百二三十人の兩手だから二百四五十本の手が人形の樣に水から離れたりついたりする。同時に彼等のこゞんだ脊（赤銅色の）と黑い頭とが手ととも〔に〕人形の樣な運動を始めた。凡てが調子づいて、さうして其調子を保つため、（又それが原因になつて）一種の掛聲が遠くから起つた。掛聲は時計の振子の樣に雜音ではあるが規則正しく續いた。彼等は胸を舷側に着けて水際近く下ろした頭を舷と同じ高さ迄上げる。さうして又其頭を水際近く下す。同時に手に持つた網の目を此運動の調子につれて一度ごとに手繰り寄せる。あゝからだの重みを船緣に靠たせて何うして胸が擦り剝けないのだらう。又あゝ眼まぐるしく頭は動かして眩暈が起らないのだらう。

人形のやうな運動は勇ましい掛聲と共に段々元船に近寄つてくる。彼等は一つ摑んだ網の眼を投げると同時に其先の眼をつかまへ、次には又其元を摑へるといつた風に段々段々元船に近寄つて仕舞には十艘の船では形ちづくれない程の小さな輪になつてしまふと、一艘、二艘、列から外に離れて行くとう〳〵六七艘の船で完全に取り圍まれた輪になる時分には網の底はもう水とすれ〳〵になる。網中の魚は船の中へ掬ひ上げられる、ブリは何時見えるかと思つて見てゐたが中々見えない。しまいに青い棒のやうなものが籃の中を横切つた。

不漁で三尾しか取れなかつた。
「おれは飯を食つたがかゝあはどうする」
船の中でこんな事を云つた船頭がある。
宿屋に着くもう東京へは間に合はないといふので婆さんは又湯河原へ引返す。大風。宿のものが提灯をつけて案内する。提灯は消える。掛茶〔屋〕の薄暗い灯の下で輕便を待ち合せる。

……………

「あの元船へ移る時ね、船頭が誰か身體の汚れてゐるものはゐまいなといつた時、私やぎよつとしました。榮ちやんが若しきゝやしまいかと思つて。あゝいふ縁起を祝ふ稼業ですからね」
身體の汚れてゐた榮ちやんは蒼い顔をして其時船の中に寐てゐた。船頭の言葉を聽いたか聽かなかつたか、それは誰も知らなかつた。又後になつても訊ねなかつた。何しろブリは三尾しか捕れなかつた。

贅澤

(一)藝術上。　漸々氣六づかしくなる。始め眼を喜ばせたものが仕舞には少しも藝術的に訴へなくなる。それが高じると本當に好いと思ふものは眞に僅かになる。人は之を稱して向上といひ當人も夫で得意である。
(二)物質上。　藝術の場合と同じ。然し人は之をよく云はず。當人も成るべく之を隱さうとする。「足る事を知れ」「田螺のわび住居」
(三)人間の好惡の上、　是も同じ事。さうして評價は(二)と同じ

(四)精神的、　俗にいふ氣六つかしい事、是も二の場合と同じ

此四つは論理から云へば皆〔同〕じ方向に向つて評價されべきものなるに、かく反するは第(二)(三)(四)は道德的意義に解釋さるゝが第一と反對になるなり。道德的とは相手に迷惑を及ぼすといふが一つ。自己に安心なきが故といふ意味二つなり。然るに自己に安心なしと云へば藝術の場合も同じかるべし故に此場合は自己〔に〕安心なき程よきものを人に給與するが故によしと見ざるべからず（藝術的向上心に道義的評價を附着すればゞ）。もしくは自己の安心を犧牲にしてョリ好きものを摑まんとあせる慾望を肯定すると見ざるべからず。（此場合は如何に自分が向上したればとて他に害を及ぼさず迷惑をかけざる故凡て自己本位にて差支なしと見做されて居るなり）

○物を觀る時間と好惡の變化

第一印象の時　大變好く

漸々　　　　　刺戟がなくなると平凡に見える

最後に厭きる

○私はKさんと同じ食卓で御飯を食べました。Mさんとは違つた食卓です。もと〱Mさんと一所に行つたのぢやないんですからね。それで何うしたといふのです。Kさんとは親しいがMさんとは親しくないといふんですか。親しくないんぢやない知らないんです。向ひ合つて話してさへゐれば貴方は親しいと思ふんでせう。然し身體は離れてるても口は利かなくつても親しいものはあります。心は距離で隔てる譯には行きません。どんな遠い所へでも行けます。口を利かないでも思ふ通りの話が出來ます。

○○○○子の話

私は下野眞岡のもので御座います。家は荒物業であります。其日に困る程の經濟狀態では御座いません。兄弟は十三人で大變大勢ですが父が非常に子煩惱でそれがため私が他を欺かなくてはならない羽目に陷つて弱つて居ります。

私は宇都の宮の女學校の專修科に居りました。其頃私の母方の從兄に當る子供が同じ土地の中學に居りました。これはもと眞岡の中學に居りましたが卒業する時にある事故から免狀を取る譯に行かなかつたので宇都の宮の方へ轉學したのです。海軍志望なのでどうしても中學を卒業して置かないと免狀がもらへないために轉學の必要もあつたのです。

其男の姓は○○と申します。此○○は眞岡に居る時は私の宅から中學へ通つてゐたので私の兄弟及び私などは兄弟のやうにして暮らしてゐました親しいものですが、宇都の宮に居る頃不圖私に戀を打ち明けて妻にもらひたいといふ事を申し出しました。私は驚ろきましたが其頃既に十七歳にもなつて居りま[原]ので少しは思慮も御座いましたから其問題について考へました所、先方の父と私の父とは到底性質が一致しませんから是は先へ行つて旨く行くまいと思ひまして其旨を當人に答へました。

然し私は其人を立派な人格の人だと信じて少しも疑つて居りませんでした。

其後○○は海軍の試驗に及第して少尉になりました。それから私の叔母を通して私を貰ひたいといふ旨を通じました。私は異存が御座いませんでした。父母も承知を致しました。それで婚約が成立致しました。否もう結婚するといふ事に迄話が進んで來ました。

すると○○が叔母に向つて結婚する前是非一度私と二人ぎりで會見したいと申し込んで來ました。叔母はそれは責任があるからと申し一斷りました。然し○○は既に貰ひ受けた女〔な〕のだから二人ぎりで會

つた所で決して不都合のある筈はないと主張しました。それで叔母も已むなく都合して私と○○とを私の家の二階で會見させる事にしました。

然るに私を驚ろかせたのは其時の彼の態度です。○○は私に向つて何にも申しません。たゞ默つてるるのです。それから口へ出した僅かばかりの言葉は又私を驚ろかせたのみならず却つて私を不審がらせました。又私を不快にしました。彼は私に向つて斯う云ひました。

「○ちやんは私などの所へくるよりももつと立派な人の所へ行つた方が好くはないか」

○○の立派な男といふのは私の親戚にあたるある文學士の事をいふのであります。自分で是非私を貰ひたいと申し出して置きながら、さうして自分の云ふ通り私をもらふといふ事に話を極めて置きながら、會見の時にあたつて、斯んな言葉を未來の夫から聽かされやう「と」は私も夢にも思ひ掛けませんでした。

彼はさういふ不得要領な態度で座を立ちました。夫から東京へ來て一寸自分の宅へ寄つたなりすぐ自分の勤務先の呉へ向つて立つてしまつたのです。さうして夫からといふものは結婚についてどういふ考なのか一向歩を進めてくれないのです。

それが何の爲だか解らないのです。然し○○家の一家の事情は其後になつて私達によく知れました。彼の父は養蠶を業としてるたものですが性來頗る善人で利害を眼中に置かないやうな性格であつたのでとう／＼破産してしまひまして故郷にゐる譯にも行かず東京へ出たのであります。で其一家は○○の兄が引受けなければならなくなりました。所が此兄は砲兵中尉で既に自分の家族があるのですから、とても薄給でさう多勢の世話をする譯には行かないので、自然借金が出來ました。仕舞に已を得ず弟の名義で玉突場を經營し出しました。所がそれが當局者間の問題になつて軍人として商業に從事するのは不都合だから何方か已めろと其筋から注意されたのであります。そこで兄は此苦境を免かれるために弟に私と結婚して其家

を救つて呉れと云つたのです。○○は怒りました。金の爲に結婚を強ひるなんて甚だしい侮辱だと云つて喧嘩をしたさうです。然し彼は兵學校在學中から始終兄の世話になつてばかりゐて家のためには何も盡して居らんので自分も心苦しかつたのです。

　で愈兄が辭職するかしないかといふ期限の三日前になつて、彼は兄に向つて其位の金はいくら自分だつて出來ない事はないと意地づくで兄に明言してそれで私に會ひに來たのださうです。所がどうしても私にはそれが云ひ出せなかつたものと見えて默つてゐたものと思はれます。彼は同じ町内の知人に遂一[illegible]の顚末を話したさうです。其人は旨を領して宅へ來ましたが生憎父が不在だつたので兄に話をしなければならなかつたのです。すると兄はたゞの好意でする普通の依賴と心得て好い加減にあしらつて返してしまひました。

　そんな事で私の婚姻は破れる。私は多勢の兄弟の間に居つて父母に心配をかけるのが辛くなりました。（兄は嫁を迎へなければなりません）そこで横須賀の叔母をたよつてしばらく身を寄せる事に致しました。此叔母は女醫です。すると驚ろいたのは○○が何時の間にか横須賀（御大典後）詰になつて、ひよつくり叔母の宅へ訪問て來た事です。彼は私を見て今迄の事件に就いては何も云ひませんでした。碌々話す機會もなかつたのです。家には看護婦だの下女だのが大勢居ますが私と○○との關係に就いて委細を知つてゐるものは一人もありません。たゞ兄弟のやうな間柄とのみ取つてゐるやうでした。

　其うち○○の樣子が變になりました。一人で默り込んで外套などを被つて診察室の隅に寐てゐたりします。夫から今度松山から女房を貰ふ事になつた抔と云ひふらす許りか、女の寫眞を看護婦などに見せるやうになりました。或時は其寫眞さへ其所いらへ載せて置いたり何かしました。

　私は最初から○○を信じてゐました。他から馬鹿と云はれても何でも其人を疑ふ事が出來なかつたので

す。然しこんな事實を眼前に見るとどうしても疑はずにはゐられなくなります。私の知つた人で若いうちに過ちを犯して今はたゞ一人　八つになる子供を育てゝ暮してゐる人があります。其人は今三十二ばかりですが六つ年下の男と關係をつけて、男は高等商業を卒業して滿鐵へ奉職したぎり何うしても一所になると云はないのです。その女の人が自分の經驗から推してゞせう、私に「あなたはあの人にあれ程踏み付けられて口惜しくも何とも思はないのですか」と云ひます、私は口惜しがる前に果して男がさう輕薄だつたのかを是非確めなければならないのです。他から見れて明白な事實と見えるかも知れませんが私は一旦信じた事をどうしてもさうでないと思ひ込む譯に行かないのです。そんな筈がないとばかり思へてならないのです。○○は此女の人に手紙をやつた事があります。其手紙にはこんな意味が書いてあるのです。

「私は是非結婚をしなければならなくなつた……」

手紙は女から私に内覽するやうにと云つて送つて來ました。私に見せては好くあるまいとも思ふが又私に決心させる手よりにもなるからと云つて女はわざ／＼其手紙を私に送つて呉れたのです。私は男が何故そんな事を女に云つてやつたものだらうかと疑ふのです。實際私が厭になつたのか、夫とも私に早くあきらめさせてほかへ嫁に行かせやうと思ふのですか。それが私に判斷がつかないのです。

女は又○○と私の事に就いて話し合つた事もあるのです。

「○○ちやん程立派な女はゐないと思ひます」

「そんなら何故其○ちやんを御貰ひなさらないのです」

「私は貰ふ價値がないのです。私はやくざな人間ですから」

此會話が果して彼の本意を語つたものでせうか。彼の本意ならば彼の其後の擧動はどう解釋して好いものでせうか。私は煩悶しました。叔母は私を引受けて相當の所へ縁づけるから心配するなと受合つて呉れ

ます。然し私の様子を見て餘程心配になると見えて父に手紙を出しました。「〇〇ちゃんの事は引き受ける積りだが當人が今のやうに圓覺寺へ行きたいの何のと普通でない事をいふやうでは困るから」

父は私を見て泣きました。どうか今から又何か勉強を始めるとか何とか云はずに大人しくして叔母さんや御父さんのいふ通りになつてくれと云ひます。

私は承知致しました。私は必竟他に期待があるからこんな煩悶をするのだから、此期待を打棄てゝしまはうと決心しました。それで當人の事はもう考へまいと思ひました。然し叔母の勸めで横須賀邊の人へ嫁くとなると、矢張り〇〇の顔を見なければならないので、夫を思ふと殆んど耐へられない氣がするのです。よしそれを忍んで良縁を求めたとしても、今迄の事を默つてゐなくては結婚が成立しないから默つてゐろと父から云はれます。私は又人を欺つて嫁に行くのがつらくてならないのです。

〇ある藝術家ノ述懷として小說中に出す

(1)刺戟ガ强烈ナルㇹ

(2)實生活ノ反映としてウンザリスルㇹ

(3)心に餘裕ガナキㇹ、從つて不安ナルㇹ

(4)俗ツポイ事

夫で自由、安穩、平和を求める、——繪畫は一番それに近い。ドラマチツクナ繪畫は(人情ガカツタ)成功スルものが少ない。其理由は不明ナレドモ脚本や小說の本質を冒スカラジやナイダラウカ、吾人には繪を別の方面カラ眺めるからぢやないだらうか。畫の本質を全然異つた所に置く爲ぢやないだらうか。(カラクテリスチツクを表現する現代的繪畫ノあるものは如何といふ質問も起つてくるが)。然ラバ其畫の本

質とは何ぞやと云はれると困る。

つまり生活に飽いたものが田舎へ引き込むのと同じで、自然、と人間（傍觀的態度で見る。無關心で賞翫する）を愛するといふ氣分が取も直さず繪を愛する氣分ぢやないだらうか。

所が小說や脚本の藝術の強烈サニ辟易して繪に逃れるとすると其所に又人間臭いいやな所が出てくる、人に賞められたくなる。人と競爭したくなる。仕事それ自身は平穩な刺戟を持つてゐるが其仕事と世間との交渉になると矢張り俗ポクツテ煩ハシクツテゴタ〳〵してゐて、塵埃ダラケデ仕方ガナイ

○AとBの關係。寧ろ愛より愛の形式、靈より寧ろ肉

AとCとの關係。歷史的には前者よりは遙かに淺し。外部より見ればスライト・アクヱインタンス。然し内部にインスタンテニアス flash

（A＋B）の關係は外面的に非常に近し然し（A＋C）の關係は内面的に却つて近し

此時Bより觀察せる（A＋C）の關係。

或時はハツと驚ろく。さうして大變だと思ふ。或時は推察がすぐ事實と同じものになつて嫉妬心を起す。或時は推察の眞か僞かを疑つてたゞ不審の念を起す。或る時はたゞの否定に傾く。

○慣れぬ仲間の前へ出た時

(一)神經質の人の恐怖

(二)場慣れない人の恐怖

○二人の友達が久し振に會ふ。昔し會つた舊友の事などを話しあふ。「あいつは何うした」。曾遊の事を話しあふ。「あの時は何うだつた」

○プレートニツク　ラツヴ。

A、僕はあの女に對してたゞプレートニツクラツヴを有つてゐる丈だ

B、皮肉ナ笑ひ方をする。BハAの內々で道樂をする事を知つてゐるので。

Aはそれに氣が付いたか付かないか頻りに前言を强調する

B最後に自分の腹のなかにある事を打ち明けて、「いくら君が左樣綺麗な事を口先で云つたつて、信用が出來ない」といふ

B自己を說明する。彼はその女丈に對して肉感を起さないのだといふ。さうして他の女に對して肉の感じを起しても、ある一人の女（非常に自分の愛してゐる）に對してのみは全く其欲から獨立したものだといふ事を說明する

○己の顏は動物さへ見る顏だ

○「愛はハシカの樣なものだと誰か云つてましたね。つまり一度は誰でも罹らなければ濟まないのでせう」

「ハシカなら一度こつきりで濟むけれども愛はさうはいきません。二度でも三度でも罹りますからね。Kなぞは私の知つてる丈でももう五六遍遣つてますよ」

「まあ氣の多い事。然し本當の戀は一生に一度しかないんぢやないでせうか。私の知つた人に好きな人と一所になれない爲に獨身でゐる人があります」

「そんなのは常世向ぢやないんでせう。現代は固定を忌むんだから」

「さうすると貴方も一度や二度ぢや濟まなかつた組ね」

「何うして」

「だつてアナタの主張がさうだからよ」

「主張ぢやないわ。全くさういふ人があるんですもの」

「然しあなたはその一人ぢやないといふの」

「どうですか。自分がさうでなくつたつて、其人の腹は理解出來るぢやありませんか」

「理解出來るのがさういふ人に近い證據よ。」

「とう〳〵浮氣ものにされてしまつた」

○細君賣淫の話

「私はそれをKから聽きました。それからといふものはどうしても女を信ずる事が出來なくなりました。」

芝居を見るレーデーが役者に貢ぐ話

「私はそれをHから聞きました。それからといふものは矢張り女を信じる氣になれません」

○人はあるものを白だとも云へます黑だとも云へます。しかも少しも自分を僞る事なしに。是は白と黑との兩方が腹のうちに潜伏してゐて、白といふ時は白の立場から、又黑といふ時は黑の立場から一つものを眺めて説明するからです丁寶なものです

Perfect innocence and perfect hypocrisy

○ポセツション
「私はいくら女を戀しても一直線に其方へ進む譯に行かないのです」
「何故」
「女が自分で自分を所有してゐないと思ふからです」
「ぢや女は誰が所有してゐます」
「既婚の女は無論夫の所有でせう。少くとも夫はさう認めてゐるでせう」
「さうです」
「未婚の處女は兩親の所有でせう。少くとも父母はさう認めてゐるでせう。父母〔の〕許諾がなくて嫁に行く女はまあないからです」
○肛門　プレートニックラッヴの條と連結す
○Aといふ女とBといふ男
A、Bのインヂフエレントな態度を飽キ足ラズ思ふ。又は其愛情を疑ふ。Cとフラーテーションをやる。（Bに氣が付くやうに。）B嫉妬を起す。怒る。喧嘩。A猶Bをぢらす。Bも亦對抗策としてDといふ女とじやれる。Aこれをかんづく。そして今度は自分が嫉妬を起こ。口說。喧嘩　A、Bに本心を打ち明ける。同時に too late であつた事をも打ち明ける。
○Aの家の面會日は火曜。ある晩Bノ宅から雨が降つたので下駄を持つてくる。Bは宅を出る時Aの所へ行くと云つて出たのださうである。
同じ火曜のある晩。Cが來る。此晩Aは旅行して不在。Cつまらないものだから歸りにBの家に寄る。

「今Aの所へ行つたら旅行で留守でしたから來ました」
Bの妻君變な顔をして曰く「良人もAの所へ行くと云つて出たのですよ」
「でもBさんはAの所にゐませんでしたよ。Aは旅行で不在なのですから」
「へえ」

○一日の新聞（大正五年三月十八日）
電報。　廣西獨立宣言（上海特電）
　　獨乙海相交迭（ロイテル）
×經濟會議參列者を阪谷芳郎男にきめたといふ事。阪谷男の意見。歐洲戰爭の經濟狀態に及ぼす影響につき。一年二年の間に千億の軍費を要するが如き經濟上の大事件を適當に始末するため救濟善後策の必要あり。それから敵國苛めの案件もあり。
×英艦が日本の商船を頻々臨檢する事につき解決如何（我國は法律上の）……
以上箱中にあり。
通讀すると一項から一項へ心が段々變つて行く。讀了の後　はあ心が色々の經驗をしたなと思ふさうして其經驗に切目がなくてさうして變化が多い。變化の多い事といつたら考へると大變なものである。此繼目のない多大の變化を經過した心は「是で何分かゝつたらう」と思ふ。
○坊主のすしの記事。澁柿にあり
○三月十六日　柘榴の盆栽をもらふ。カレ枝から青い葉が見不看の程度で出てゐる。それを緣側へ置くと日々ずん〳〵青味がのびて行く。

○ Stiffness — rigidity
Pliability malcability[sic] } adaptability
Liquidity } degree
Gaseousness
人ノ conversation ノ topic ニスグ同化シタリ、人の勸誘デスグ散歩スル氣ニナツタリ。自己ノ流動的態度

○トルストイのアンナの中のレ井ンニ草を刈る處（一生懸命になると）無心になる時あり。鎌に精神があつて一人手[原]に動くやうに思はれる

○公平、冷靜、正直、落付、アル處置、然し如何にその殘酷なるかの場合

○心中の心理
「生きてゐると故障があつて一所になれないため死んで一所になりたいといふ意味でせうか」
「すると死ねば一所になれるといふ信念か、哲學が何處かになくてはならないでせう」
「えゝ、さうすると矢張り只苦痛を回避するためでせうか」

○Aある事を思ひて其事を實現せずにゐる。他日他に向つて辯解シテ曰ク「そんな事を考へた事はない」彼は實行せざる以上は考へないと同樣と考へてゐる。少くとも他に對して是が立派な辯解になつてゐると

考へてゐない。

○畜生と思つてある仕事にとりかゝる。其畜生と思ふ心が取り付いてどうしても其仕事に一生懸命になれぬ。自分では是程一生懸命にならうとするのにとつく／＼口惜しくなる。他に罵しられたがため成功したとか激勵を受けて業をなしたとかいふのは此心理からいふとみんな嘘の事である。それにはまだ他に原因があるのだらう。それを研究せずして無暗に人を叱ればば奮發すると思つたり辱めればえらくなつたりすると思ふのは愚である。

○コンシート

人に目遣ひをしたり乙な様子を見せたりしておれにチャームされたらう、おれは色女だらうといふ風をするものは、その目遣や様子に動かされる男を己惚者と云つて笑ふ。然し自分の己惚は全く棚に上げてゐる。

○臆病

人が自分を馬鹿にしやしないか、愚弄しないかと思つて始終不安の態度でゐるものは餘程の臆病ものか、又は僻みものである。

然しある人は斯う云つた。――

「己は臆病かも知れない。鷹揚でないかも知れない。然し正しいのだ。正しいものとして正しくないものを打ち倒さうとするのだ。故なく他を損ふものを嫉むから、そんなものはどうして「も」打ち懲らさなければならないといふ氣がむら／＼と湧いて出て、この己を不安にするのである。己の落付のないの

は巡査や探偵が眼を皿のやうにして良民を害する惡者を捕へやうと一生懸命に氣を遣つてゐるやうなものだ。

○甲其妻の云ふ事を聞かず。乙といふ婦人のいふ事を聞く。其事あれば乙に賴む。妻は乙を德とすれども同時に彼女に對して嫉妬の念を禁ずる能はず。

○亭主何事に限らず妻に干渉す。衣服、外出、立居振舞悉く批評の材料となる。ことに嫉妬の氣味あり。妻之を厭ふ。人に逢ふ度に苦情を洩らす。後亭主の態度俄然豹變す。妻に對して全く自由放任となる。妻却つて喜ばず物足らぬ思をなす。

○結婚後少し新味を失つた夫外へ出てある他の婦人と逢ふ。其特色は悉く自分の細君の有つてゐないもので悉く細君の夫等よりは上等な樣に思つて宅へ歸る。細君は夫の爲に化粧して服裝迄注意して夫を迎へる。夫を自分の方に引きつけやうとする。夫はそれが鼻につく。大した感興も起らず。細君は心中で夫を恨む

○ love の素質あつて love を滿足させた事のない人の他の愛に向つて同情なき敍述

○ハニカミ屋

○惚れ合つて夫婦になつたもの、段々喧嘩をする。細君往時を回顧して先にやさしかつたのは金であると解釋す

○フロツクコートと軍艦

○亡妻。彼女は何處へ行つた。私は何處にゐる。云々。

其人又新らしきラヴァッフヘヤーを遣る。曰く私は此所にゐた。

友達笑つて曰く saint が又墮落した。厭世を治するものは love だ。
しばらくして其人又不安になる。「此所にゐると思つた私が又何處かへ行つてしまつた。どうしたら好いだらう」

○殺人の箭か、活人の箭か。
「其坊さんは箭殺されたのか」
「いゝや」
「殺されない事を承知の上で胸を敲いたのか
「それぢやヤまを張つたやうなものだらう。機略だらう。殺されてもびくともしない氣があるので全體が活きて來るのだらう」

音樂會

○ ○○の音樂會。子供無邪氣で出る積で勉強してゐる。
「あいつに常識があれば構はないが」
「あいつは突飛だから何をするか分らない」
「宅の小供などを主にして音樂會をやれたもんぢやない」
「宅の小子供などは錢を取るべき音樂會へ顏を出す資格はない」
「餘興として御慰みに出るにしても惡い」
「あいつは法螺吹か馬鹿だから。何方にしても變なプログラムを作る恐がある」

○ love の滿足を得た夫婦。無暗に他人に同情を感じ金などを遣る。其滿足の薄らいで來た時、段々冷淡になり、施しや金を貸したがらなくなる。

○何うして暮してゐるんですか。

「出所があるんだらう」

「……」

「政府から貰ふのさ」

「無暗に金をやつて構はないんですか」

「構つても仕方がないから遣るのさ」

「瀆職事件が起るでせう」

「起らない場合の方が多いに極つてるさ」

「でも惡い事でせう」

「己の宅へ來て金を借りられるより增しだらう」

○爆彈事件豫審決定

○良寛の書七絕聯落、越後柏崎の在にある舊家より出しもの。

良寛は氣に入つたものには沙門良寛とかき猶好きものには越州沙門良寛とかきし由。田崎良寛といふは良寛在世の頃よりの僞書家にて良寛通りの書をかきし故人其姓田崎の下に良寛の二字を加へ僞筆に會へば是は田崎良寛かと訊くといふ。良寛屛風ならば立派なものに書きしかど、托鉢の序など書いてもらふ時は

あり合せの紙など繼ぎて氣の變らぬうちに書いて貰ひし由。夫故美濃紙を横に繼ぎたる如何はしき紙に書きたる方が却つて本物の場合多しといふ。彼は酒を少ししか飲まぬ癖に酒をくれると書を書きし由。魚をくれても書きし由。

田崎は間違。島崎良寛。島崎といふ所にゐたる故にしかいふとなり

○男は女、女は男を要求する。さうしてそれを見出した時御互に不滿足を感ず。自分に必要でさうして自分の有つてゐないものを他に於て見出すが故に互に要求する也。同時に自分になくして他にあるものは元來自分と性質を異にしてゐる故に衝突を感ずるなり。コンプレメンタリとして他を抱擁せんとするものはアイデンチカルならざる故に又他を排斥するなり。故に陰陽は相引き又相彈く。相引く事に快を取らんとすれば相彈く苦痛をも忍ばざるべからず

○我一人の爲の愛か

「私はそんな氣の多い人は嫌です。自分一人を愛して呉れる人でなくつては」
「外の人は全く愛せずに自分丈に愛の量を集めやうといふのですね」
「さうです」
「すると其男に取つて貴女以外の女は丸で女でなくなるのですな」
「えゝ」
「何うしてそれが出來ます」
「完全の愛はそんなさうでせう。其所迄行かなくつちや本當の愛を感ずる譯に行かないぢやありません

か」
「然し考へて御覽なさい。あなた以外の女を女と思はないで、あなた丈を女と思ふといふ事は理性でも悟性でもに訴へて出來る事でせうか」
「感情の上では出來る筈ぢやありませんか」
「然しあなた丈を女と思ふといふと解し得られる樣ですが外の女を女と思ふなといふと想像が出來なくなるやうです。何故といふと若し外の女を女と思はないで濟むなら肝心の貴女をさへ女と思へる筈がないからです。自分の家の花丈が花で外の家の花は花ぢやない枯草だといふのと同じだから」
「枯草でいゝぢやありませんか」
「枯草つていふ譯がないんですから。夫よりか好きな女も嫌な女もあり、其好きな女にも嫌な所があつて、其興味を有つてゐる凡ての女の中で一番あなたが好きだと云はれてこそ貴女は本當に愛されてゐるんぢやありませんか。絶對ぢやない比較的で澤山だ

○齒石、唾石、——是は唾液中にある石灰質が齒根に沈着するもの。此齒石が齒莖を壓する結果、ハグキが段々低くなるに付けて齒が段々高くなる。さうしてハグキから少しづゝウミが出る。
齒の長さの三分の二は齒莖の中に埋つてゐる。
結石　是は齒の根に着くもの。どうしても上から沈着したものとは思はれない。だから血液中から出たものといふ說になつてゐる。所が大變見分にくいもので、あると思つて切つて見るとなかつたり。無いと思つて拔いて見るとあつたりする
モデリングを取つて今度は石膏で齒型を拵らへ。その空き間卽ち齒の拔けた部分の恰形に應じて瀨戶物

の形で入齒を作る。

○「あの人はあんな凝つた服裝をしてゐるがちつとも厭味でない」
「そりや地味なものを着るからさ」
「着物の柄からばかりぢやありません。あの樣子がさうなんです。だから不思議に思ふのです」
「そりや自分の着物の事を忘れてゐるからさ」
「だつて自分が好き〔で〕拵へたものぢやありませんか」
「選擇や好惡はあるさ。けれどもそれを始終持つて廻つてゐないんだ」
「選擇や好惡があつてどうしてそれを忘れる事が出來ます」
「それさ。選擇や好惡は着物にあるんで着る人に存するのぢやない。だから人の顏を見て自分の着物と其人の着物とを比較しないのさ。卽ち彼對我の優劣を眼中に置いてゐないのさ。人を離れた着物といふ事になるからな」

○アスナラウ
「あいつはアスナラウが大嫌なんだが、所がまた運惡く今度のうちには其アナナラウ[原]がによきによき生へてゐるのさ」
「あんな氣六づかし屋には好い藥になつて結構だ」
「さうさ。左樣いへばそんなものかも知れない。然しいくらアスナラウが彼奴に厭な思ひをさせたつて、彼奴の氣六づかしさが減ずるといふ譯でもないんだからな。それよ〔り〕アスナラウの方で一層の事あ

いつの好な松とか竹とかに變化して遣る方が好いだらう。あいつの爲にもアスナの爲にも其方が仕合せだ」

○「新らしい芝居は分らない」

「新らしい芝居は分らない。言葉が分らないのかと思ふとさうでない。役者が悪いのだ。何故かといふ[原]舊い芝居を聽いても矢張り意味の解らない事をいふが夫で矢つ張り解るんだから」

「英語の芝居を見て何をいつてゐるか丸で解らなくつても夫でも劇は略解るさ」

此問答は二つとも論理を誤れり。一は解るべきアーヌングを有つてゐる上で解らないといふ結論を得、一は解らないといふ土臺の上に立つて解るといふ。二つの結論に達する方向は丸で反對である。だから前者の解らないといふ意味と後者の解るといふ意味とは事實引繰り返つてゐて、程度からいふと解らないといふ方が却つて解るといふよりも解つてゐる事になる。

○中老の男女を得て若返る

「あの人は近頃大分若返つたね」

「さう云へば一時は大いに悲觀してくすぼつてゐたが、近來は大分元氣がよくなつた樣だ。然し派出なネ[原]タイをしたり、無暗に着物を詮議したりするのはちと時代錯誤だな」

「そんな事に興味を持ち得る程に精神が刺戟に應じ易くなつたのだ」

「さう云へばあの年でとかいゝ年をしてとか云つて滑稽にばかり觀察するのも能くないね。つまり夫丈若くなつたんだから」

「若い女を得た快樂といふものは恐ろしい結果を持ち來すものだな」
「あまり快樂を貪つてゐるうちにどさりと來〔原〕くから險呑だ」
「そりや俗に女に殺されるとかいふ奴を眞面目に受けていふんだらうが、俗說は大いに間違つてゐる。あの元氣は精神的ばかりぢやない。生理的にも出て來たんだ。否生理的な元氣が精神に及ぼした點も大變多い」
「さうかな。何うして？。僕はさうは思はない。たとひ精神的には元氣をつけるにしても生理的には有害だらうと思ふ」
「所がそりや間違つてる。醫者は何ういふか知らんが、氣の利いた醫者なら僕に同意するだらうと思ふ。若い女と接觸するのは老人を殺すんぢやない　生かすんだ。其所には微妙な生理作用が行はれるに相違ない。血行運動が好くなるんだらう。さうしてその血行運動が凡ての內臟の作用を鼓舞するんだらう」

○Crato m'è il sonno, e più d'esser di sasso.
Sweet is sleep to me, but sweeter still to be of stone. — Inscriqtion on Michael Angelo's 'Night.'

○鑑賞と鑑定
鑑賞は信仰である。己に足りて外に待つ事なきものである。始から落付いてゐる。愛である。惚れるのである
鑑定は硏究である。何處迄行つても不滿足である。諸所を尋ねあるき、諸方へ持つて廻つて遂に落ち付

かない。猜疑である。探偵であるから安心の際限がないのである。

○ミツスルトー

The mistletoe was held in great reverence by the Druids. It was believed to be particularly and divinely healing: in fact, it was given this attribute for centuries. It had special significance as the cause of the death of Balder, the Norse Apollo, who was killed by an arrow made from its branches. Subsequently Balder was restored to life. the mistletoe tree was placed under the care of Friga, and from that time until it touched the earth was never again to be an instrument of evil.

The present custom of kissing under the mistletoe is the outcome of an old practice of the Druids. Persons of opposite sexes passed under the suspended bough and gave each other the kiss of love and peace in full assurance that, though it had caused Balder's death, it had lost all its power of doing harm since his restoration.

○子供

星野勘右衛門は天下の豪傑。三宅たく兵衛、田村宇平次

泥だらけの足で風呂場の口から這入つてくる。桶の中に足を入れやうとして叱られ、やつと足を洗ふや否や亜鉛花[原]澱粉のはけで足の上へ御白粉をつけて出て行く。

○飛行機

小田原の早川口で輕便鐵道の硝子窓越に見て見ると向うの空に飛行機が見える。それが見てゐるうちに傾いて來た。さうして誰が眼にもう墜落しさうに見えた時、彼は思はず大きな聲を出して「あゝつ」と云つた。すると其飛行機らしいものは飛行機の恰好をした凧であつた。

○工事場。二千坪、松三百本。

○ヤングマン。youthful spirit.

○出雲町　平民病院。南金六町から出雲橋を渡る。遞信博物舘、遞信構内郵便局。木挽町配電所右側（赤煉瓦）

曲る。河内屋。左農商務省　精養軒。橋向ふ野田屋。渡つて眞直に河岸を行く。右海軍省?・左香雪軒。角新喜樂。

就いて曲る。左側林病院。右本願寺其前を一寸出て右に曲る。橋を渡る。

前に立敎中學校。其東後ろ居留地

○河岸の船から薬を卸してゐる。馬に乘せる。非常に高く見える（四月八日）

○スミスの宙返り

午後二時頃家を出て七軒寺町の大通へ出ると往來が何時になく賑やかで丸で緣日のやうにぞろ〳〵してゐる。今日は外套も要らない暖かい日和なのと土曜に當るので斯んなに人が出るのかと思ふと、彼等の視線はみんな南の空に注がれてゐる。今日はスミスが青山の練兵場で曲乘飛行をやるといふ事を忘れてゐた

自分は漸く氣がついて、みんなの視る方を眺める果して向ふの電信柱の上に一臺の飛行器が飛んでゐた。
春の空が折から曇つて風のない空は烟るやうに柔かに見えた。機は其間を心持よさゝうに搖曳してゐた。やがて高い空の上でぐる〔り〕と大きな輪を描いて廻轉したと見ると、其機首は空に逆はないやうにやんわりと下から上の方に向いて故の位地に復した。夫から鳥の兩翼をひろげて、空を伸すやうに、又羽搏をしないでバランスを保つ時のやうに自然の勢で右左に搖曳するやうに見えた。すると又ぐるりと廻轉した。ぐるりといふ言葉は少し强過ぎるかも知れないやうに、なだらかな大きな圓を描いて、ふわりと飛首が上りつゝ又進みつゝ故の位地に復すのである。(凧のぐる〱轉るやうな性急なものでは決してなかつた。)
最後に機は眞逆さまになつて流星の樣な勢で落ちた。今迄ふわ〱漂ひながら舞ふ如く廻轉したり逆轉したりする有樣を眺めてゐた自分は此急速度の直線を眺めた時、おやと思つた。其時機は同じ速度で人家の下に隱れた。
「今のは落ちたんぢやないか」
「落ちたんだらうね。なんぼなんだつて、あゝ早くは降りられまい」
あの速度で家の後ろに隱れたあの後は何うなつたのだらう。最後を見屆けない時は心掛りなものである。
○笑談なら笑談でよし眞面目なら眞面目でよし。笑談とも眞面目ともつかない事をいふ男あり。之に徒らに其男の性質に曇りをかけるやうなものだから云はない方がいゝ。(鏡の曇り)
○藤の木。馬具師の庇の上に棚を釣つてある。其傍にサイカチの木があつてそれに藤の枝が纏つてゐる。

馬具屋の庇には志方講、三寶珠講といふ札、店の板の間には和倉繩、ブラシ、赤い

○夫婦相せめぐ　外其侮を防ぐ
○喧嘩、不快、リパルジョンが自然の偉大な力の前に畏縮すると同時に相手は今迄の相違を忘れて抱擁してゐる
○喧嘩。細君の病氣を起す。夫の看病。漸々兩者の接近。それが action にあらはるゝ時。細君にたゞ微笑してカレシングを受く。決して過去に溯つて難詰せず。夫はそれを愛すると同時に、何時でも又して遣られたといふ感じになる。
○ Life　露西亞の小說を讀んで自分と同じ事が書いてあるのに驚ろく。さうして只クリチカルの瞬間にうまく逃れたと逃れないとの相違である。といふ筋
○二人して一人の女を思ふ。一人は消極、sad, noble, shy, religious. 一人は active, social. 後者遂に女を得。前者女を得られて急に淋しさを强く感ずる。居たゝまれなくなる。life の meaning を疑ふ。遂に女を口說く。女（實は其人をひそかに愛してゐる事を發見して戰慄しながら）時期後れたるを諭す。男聽かず。生活の本當の意義を論ず。女は姦通か。自殺か。男を排斥するかの三方法を有つ。女自殺すると假定す。男惘然として自殺せんとして能はず。僧になる。又還俗す。或所で彼女の夫と會す。

○四月二十一日　季節物
×若い齒朶延びつくす

×彼岸櫻殆んど散り盡す
×小梅櫻。花咲く。白及び紅
×椿　花咲く
×ギボシ延びる。縞蘆のびる。
×九花蘭の花莖のびる。未開。
×いかり草花　花咲く
×かすみ草　地から芽を抽く
×小でまり　花咲く
×苗賣。朝顔　松葉牡丹、ダリや（原）の芽、及種　瓢簞（原）。
×芭蕉芽を吹く
×山吹花咲く。
×萩芽を吹く一寸
×紫陽花二寸
×蔦　ぴか〲光る葉を着く一寸五分四方位。
×百合の芽六七寸。但し活花は旣にあり。
×石榴未だ芽を吹かず

（一）尿

（一）糖尿病　（二）二十四時間

(三)食前膀胱を空虚。食後二時間

(二)誤解　日本及日本人。　それをaが引用

(三)芝居と輕蔑。劇を見てもいゝ氣にはなつてゐない。さうして役者どもを馬鹿にしてゐる。同時に色氣がある解脱しきれない人間。女に對しても

(四)他の人のエキスペンスで笑を贏ち得る事の倫理觀上の不快とのバランスを取つての考察

　屈辱を感ずるにあらず不德義を憤るなり公憤なり

(五)鴨居勘右衞門。　豚、御多福

四月二十三日記

(一)糖尿病。渡邊と談話の時、眞鍋に話して貰ふ。眞鍋から電話。大學の物理的治療室に至る。尿検査、糖分大分出るといふ。

×二日間蛋白性のものばかり食つて、二日目の二十四時間の尿を送る。結果二十四時の尿には糖分ナシトイフ。然し二十四時間で薄められてゐるから糖の尤も出る食後二時間の分を選んで試驗するといふ

×其翌日食事をする前膀胱を空虚にして置いて食後二時の尿、朝、晝、晩に分けて、取つて置いて翌朝(二十二日)送る

×二十三日朝眞鍋から電話で糖は矢張り出るが、前の半分に減じたが此前は二十四時間の尿を送つた後すぐ平生食物を取り、又試驗の爲めと聞いて食事を變更したのだから、もう一度試驗したい、且此食事でどの位糖が減じ又身體が保つか試驗しなければならないといふ。卽ち二十[原]五の尿を三回分二十五日朝に送る

事にする。（眞鍋に見て貰つてからあすの月曜が丁度一週間目である）
×二十六日眞鍋から電話。尿は幸にして糖なし。此上はどの位糖を食つて差支ないかの試驗をするから。土曜日（二十八？九？）に[原]早食事前に膀胱を空虛にして食パンの八分一を食ひ食後二時間目の尿を送れと云つてくる。
×二十九日夜眞鍋からの電話。尿には糖分ナシ。今度は麵麭半斤の八分一を朝、午、晩、三度食つて、（食前空虛にした膀胱にたまる食後二時間目の尿を三瓶よこせといふのである。三十日の尿を指揮通り取つて置いて一日[原]に送る事にする。
×五月二日早[原]眞鍋より電話　昨日の尿には異狀なし。午に麵麭半斤の四分一、晩に二分一を食つて食後二時間目の尿を今度はよこせといふ。
×三日夜眞鍋より電話もうパン半斤の四分一では糖分が出ないといふ。明日は三食共二分一を食ひ食後二時間目の尿をよこせといふ。
×五日夜の電話報告、朝は出る、午はなし晩は出る。それでパン半斤の二分では糖分出る。今度は飯を半ゼンで試驗するといふ。六日の午の尿を持たしてやる

五月十六日迄病氣。十六日起る。十七日眞鍋の電話。パン半斤の三分一で試驗。十八日夜電話デ報告二返は出ズ一返は糖出る。
×季節。五月四日、柘榴芽を吹く。葉外部茶シン薄青一面に光る。カナメも同じ。薄の芽二尺程になる。

床に牡丹同時に白水仙

○自然科學一般化　その法則を個性に適用する醫術の不完全
○科學の應用（工科）と文藝　個象より出立する。法則より出立する。ユニヴーサリチーの程度（變方）
○實社會に入つて修養すべし。修養してから活動すべし。何方でもい丶事だから、他を排斥する必要なし。たゞ個人に卽していふから議論になる。甲の心懸で無暗に實社會に突入されては困る。乙の心得で無暗に高踏されては困る。

○倫理的にして始めて藝術的なり。眞に藝術的なるものは必ず倫理的なり。
○女を犯したる人の翌日の心理の變化。退潮の有様。不關焉の心。從つて後悔の狀態。

五月二十八日

○糖分の檢査つゞき。五月二十八日（？）眞鍋より電話。午、晩、二十九日朝、の尿を例の如くパン三分一で試すといふ。二十九日送る。三十一日電話にて報告あり。午の分に出る。是は朝腦を使ふ仕事（小說一回を書く）の爲だらうとの疑。是から每週一回宛尿の檢査をやるといふ。午の分に出た糖分は前のより少量なる由。眞鍋の助手は研究のため自分の小便の表を作つてゐる由。

六月二日　子供と話

「お父さん箒星が出ると何か惡い事があるんでせう」

「昔はさうさ。人が何も知らないから。今は人が物事が解つて來たからそんな事はない」
「西洋では」
「西洋では昔からない」
「でもシーザーの死ぬ前の日に彗星が出たつていふぢやないの」
「うんシーザーの殺される前の日か。そりや羅馬の時代だからな」

「お父さま地面の下は水でせう」
「さうさ水だ井戸を堀ると水が出るからな」
「それぢやなぜ地面が落こちないの」
「そりやお前落ちないさ」
「だつて下が水なら落ちる譯ぢやないの」
「さう旨くは行かないよ」

「お父さま、此宅が軍艦だと好いな。お父さまは」
「お父さまはたゞの宅の方が好いね」
「何故」
「何故つて譯もないが」
「だつて地震の時宅なら潰れるぢやないの」
「ハヽァ軍艦なら潰れないか。こいつは氣が付かなかつたな」

六月初

柿の花、落ち。豆蔦の花（梅にからんだ）落つ。熊ん蜂が其　（形）を吸に來る

六月七日

（袁世凱の死

キッチナーの溺死

北海海戰の際クヰーンメリ號に觀戰武官として乘り込みたる下村[原]小佐の死

一時に傳へらる其他

タゴールが横山大觀の家に逗留の事。スミスが昨日の飛行、一昨夜の夜間飛行。原、犬養、加藤三人三浦邸會合の事

六月十十[原]五　薩摩上布（三十二圓）十ノ字絣。皆川より着

六月十六日（十七日）

大風。柿の（豆見たやうな）實落つ。栗の花。スミス墜落

六月十七日

×三笠絽）

×より三笠
×冷風紗
×青梅紗
×兩面紗
極暑夏羽織

○六月二十日頃。パン半斤ノ五分二にて試驗。報告　無糖分

六月二十六日　梅雨がしきりに降る。此間から入梅なれど去したる雨量もなし、或時は蒸暑し、五六日前より白地の浴衣を着、小供は氷水をのむ。今日はさすがに白地を着る氣なく。紬の單に白の襦絆を重ぬ。

六月二十三日頃。緣日　白百合、柘榴（ザクロ）の眞紅の花。紫陽花、ジエレニアム

六月二十六
二十七
豪雨。風。羽織
袷
を着てもよし

六月二十八日
二十八　陰　矢張寒し

○銅器に色をつけるもの、かりやすか、草の名　黄色になる
○上州で繭からザクリ（？）で絲をとる事。（手でとる事）。上手なものは七升位とる。器械よりわるし
（蒸汽）

葉物の刈込

ヒバ
カナメ
青桐　等　（五月六月梅雨中　一回
　　　　　（土曜[原]後九月　一回

松ハ　みどりの長く延びないうち、まづ五月

六月下旬季節もの　青鬼灯、所々ニ白き花

糖

（六月二十九日午後。晩。六月三十日朝、パン半斤二分ノ一で尿につき糖分の試驗　午後と朝ニ糖分ナシ。晩ニハ出た。）

六月三十日バンドマン行

六[原]月九日小宅の庭前
○鳳仙花　花（赤い）さく
○わすれな草。薄いら[原]エンダーカラーノ五瓣極小
○孔雀草、　黄八瓣の本[原]（黒赤）

○小櫻草
○われもこう
○葉鷄頭。長さ四寸程
○菫　三寸程　花あり濃紫
○新菊
○おいらん草
○おしろい草。まだ咲かず。八月さく
○百合
○カンナ（まだ咲かず）咲いたのもあり
○虎の尾　（五寸程）
○きりん草。

七月十一日　糖試験
午、晩、（十二日）朝　パン半斤二分一ニテ試驗

七月二十七日？（土用丑の日）前後
雨、寒。麻のシャツを浴衣の下に着る。

断片

——大正五年初夏頃——

一

〔『明暗』〕

小林さん　醫者

津田由雄
のぶ

繼（20）

50位　岡本精一　百合（14）

38　住　一（十）

眞弓

藤井　喜久
朝　眞事（まこと）
喜多

小林（きん）
お金

×吉川　正夫
吉川　奈津
直之助

津田の妹婿×堀

秀（ひで）

由子（よし）

庄太郎

津田の上役

佐々木

×嫁入の事

×金の事

×結婚に對する批評の事

×京都からの事

×病氣入院の事

×子供に會つて强請の事

津田
藤井夫婦 ｝二人對話

うき／＼する事、
まだ定まらぬ事

芝居へ行きたがる
病院へ一所に行きたがる
髪を刈れといふ

アテコスラレテ怒ルノハ、自分にサウ云フ句があるからだ。答曰ク、泥棒ヲシナケレバ泥棒扱ニサレテモ腹ハタ、ナイカ

一ハ後から脊中をどやす
二ハ其賠償として後から其脊中をさする

○ホゴス、ホゴサヌ事
○君は gen. case ヲ以テ p. case ヲ律セントスル。僕ハ p. カラ g. case ヲ割リ出サウトスル。

小山 男
吉川 女
吉川 男(原)
津田 延 延。
岡 娘 繼。
岡本 女 住。
岡本 男
精
△ △

繼
吉川
延

住
三好
岡本
奈津

二

○客路青山外行舟綠水前

○源水看花入幽林採蘭行

○月從山上落河入斗間橫

○無心到處禪

○林下僧無事江淸日復長

○花生曉夢迷蝴蝶望帝春心託杜鵑

○香消南國美人盡照入東風芳草多

○濃眠覺來鶯亂語驚殘好夢無尋處

（複本製本）

昭和四年十月一日印刷
昭和四年十月五日發行

漱石全集第十七卷

著作權者　夏目純一

編輯及發行　漱石全集刊行會
東京市神田區南神保町十六番地

右代表者　岩波茂雄

印刷者　井上源之丞
東京市本所區番場町四番地

印刷所　凸版印刷株式會社分工場
東京市本所區番場町四番地